
第二の人生はゲームらしいです～

てんびん座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第一の人生はゲームらしいです

【NZコード】

N1407W

【作者名】

てんびん座

【あらすじ】

私の主は人間でした。

しかし、下克上を繰り返してとうとう最高神に…！

やりましたね、教授！

え？他の最高神を黙らせるから転生してこい？

この作品は『これは第一の人生という名のゲームだ』の続編です。できれば前作を読んでください。キャラがわからないと思います。

下克上はされる方が悪い（前書き）

さりやくですけど続編書きました。

下克上はされる方が悪い

神界、それはあらゆる神が集う場所。

新旧問わず神はそこで自分の役割を果たす。

そこで今、前代未聞の事態が起こっていた。

それは…、

「貴様、我々を廃して上位にのし上がるつだなど…！
恥を知れ！！」

そう、神となりそう長くない新米が下克上を行つてゐるからである。
数多くの神は既にその者の踏み台となり、序列を落としていた。
神の世界は基本、年功序列で成り立つてゐる。

しかし神に寿命はない。よつて序列が変わることとは基本的に
ない。

稀に生まれながらにして強い力を持つ者もいるが、そうはないこと
である。

そして、そのどちらでもない異例イレギュラーの存在が現れた。

「ああ？ 役立たずが偉そうにしてんじゃねえよ。
むしろ、賢くて部下に恵まれた俺の踏み台になれたんだ。
逆に感謝してくれても良いんだぜ？」

我らが教授である。

白衣の姿に神々しさはあるでない。

それもそうだ。彼の力は全て下克上した他の神から奪い取つたもの
である。

しかも、戦っているのは彼に仕える天使たちだ。
彼は全く戦っていない。

「おのれ…！」

世界を司る神でありながらそのような振る舞い！
貴様はそれでも神か！…？」

「はつ、ヴァ～カ！

部下の成果は俺の物、俺の物は俺の物だ。
お前が何を言おうと負け犬の遠吠えにしか聞こえないな～？
オラ、年取つただけの老害は消えろ！」

そしてその神を氷の剣が切り裂いた。

「う～し、これで俺はさらに上位の神に昇格つてことだな。
流石は俺だ、手際が良い！」

「戦つてるのは基本的に私たちですけどね～」

「つーか、神になつてもやつてることまるで変わらないよな」

ルナたちも健在で、相変わらずベルツ家は平和なようだ。

すると、教授の目の前に見慣れた扉が現れた。
神として上の階層に移るための扉である。

三人はそれをくぐると、扉の先には二人の神がいた。
一人は長身で金髪碧眼の美青年。
もう一人は赤毛で深紅の眼の少女だ。

「おやあ？

これは最高神様たちではないですか？
私めに何か御用でしょうか？」

目の前の二人は神界でも最高クラスの二人である。

その身体から溢れる力は、並みの神ならば立つてゐる」とすらできないほどだ。

しかし、教授もルナもライアも全く動じない。

多くの神の力を奪ってきた三人には、それだけの『格』があるので。

「…まさか、実力だけで本当にここまで上がつてくる者がいるとはな。

そなたらのような者は初めてだ」

「左様。しかし、このままでは神界の秩序が乱れる。よつてこのようなことは今後は慎め」

「はあ？なんで、俺様がお前たちの命令に従つ必要があるんだよ？無能な連中を掃除してやつたんだ。礼の一言があつても良いんじゃねえの？」

そう、もはや彼の上には数えるほどしか上位の神はない。そして大半は狩られる運命にあるのだろう。それほどに教授の力は強大になっていた。

目の前の二人を除いては。

つまり、教授は短い期間で神界での三強になってしまったのだ。異例をとおりこして異常である。

「ぶつちやけやー、そろそろ決着つけようぜ。さりやん。

お前らが裏で「ソソソソ俺を潰そうとしていたのはわかつてんだよ。ここで決着をつけるのが一番平和な方法だろ?」

「ふむ、一理ある。

確かにこのまま無意味に時が過ぎるのは危険だ」

「では、どのように決める?

私たちが本気で争えば、あらゆる世界が滅ぶぞ」

一人も賛成のようだ。

しかし三人（一人は部下たち）が戦えば世界が本当に滅びかねない。

「ふん、その内容は既に決めてある」

その場の全員が教授に注目した。

「一昔前に流行った『転生者システム』を使う」

転生者。

それは人間を神が別世界に転生させ、その世界での生き様を観察して楽しむものだ。

神たちの間では娯楽として流行っていたが、教授が現れてからはやる者が激減した。

第一の教授が現れる可能性を恐れたためだ。

「ふむ、悪くはない。

確かにそれならば我らが争うことによる余波はないな

「私も賛成だ。

転生者を選ぶ眼を競うのも悪くない。
して、舞台となる世界はどこにするのだ？」

「俺が昇格する切欠となつた『魔法少女リリカルなのは』の世界だ。
力、知、理の全てが必要な世界だ、決戦の舞台として悪くはあるまい。

そこで自らが選んだ転生者を一人だけ送り、殺し合わせる。
最後に生き残つた転生者の主が勝者だ。
基本ルールは転生者システムを逸脱しない範囲とする。
異存は？」

「「ない」」

満場一致で結果は決まった。

そして二人は光に包まれると一瞬で消えた。

転生者となるべき人間を探しに行つたのだろう。

「俺たちも帰るぞ」

「はい」「おう」

そして三人も光に包まれると消えていった。

いや～、上手くいった上手くいった。

俺の勝ちは決まったようなもんだる、これは。

あ、皆さんハロ～。レン＝ベルツです。

今、世界を超えた神界征服をしています。

残りは一人だけなんだが、所詮は年寄りが二人。
簡単にホームグラウンドに入ってきたてくれた。

「それで、転生させる人を探しに行かないんですか～？」

「ルナ、やめとけ。
どうせまたセコイ手段を考えてるんだよ」

「外道の神だし」

「！」の前の決闘なんて毒を盛つてたわ

「そこに漬れるー憧れるーー！」

「でも、相手は最高神ですし」

「え、えっと、それは教授もです」

失礼なやつらだな。

俺の頭脳プレイをセコイだと？

「まあ良い。

それに、次の転生者はもう決めてある。
ルナ、転生者に関するルールを読み上げる

「はい、えつと。

『転生者は人間の魂から選ぶべし』

『その者が転生を拒否した場合の強制は禁ずる』

『特典は最高で三つまで、行き先の世界観を破壊せぬよう注意されだし』

『原則、神は世界に干渉してはならない』

主な内容はこんな感じです』

「そうだな。それが基本ルールだ。
だが、それには穴がある」

「「「「「「穴?」「」「」「」「」」」

「転生者にできるのは人間の魂だけだ。
つまり、人間ならば前科は問わないってことだ」

「はあ？それがどうかしたのかよ？」

「あ、そつか！」

「前世で魔導師だった人を送れば良いんだ！」

「アリシアは半分正解だな」

「そう、前世が魔導師ならば最初から強い。だがそれだけじゃない。」

「人間ならば誰でも良いんだよ。例えば、天使から人間に堕ちた存在でもな」

「…教授、まさか」

全員が理解した様子だ。
つまりはそういうことだ。

「お前ら、ジャンケンしろ。負けたやつに一人で転生してもううから」

下克上はされる方が悪い（後書き）

さあ、誰が転生するんでしょうか？

最高神は伊達じゃないーー（前書き）

教授に思つて「Jリは最高神にだつて思つてもや。

最高神は伊達じゃない！！

うーん？なんかきな臭いな…。

あ、皆さんグーテンターク。レン＝ベルツです。

さつさ他の最高神たちと細かいルールの取り決めをしました。

しかし、なんか怪しい。

俺が提案したルールを簡単に飲む。

まあ良い。

それで、決まつたルールだが、

『転生者の現地での年齢は同一とする』

『最低でも、無印、A・S、stsには直接関わること』

『転生者は、現地の者に転生者であることを知られてはならない』

『殺さなくても、転生者が降伏、もしくは勝手に死亡して敗北とする。』

ただし、降伏した転生者は転生前や転生者システムの記憶がなくなる

る

『転生者の肉体は転生する直前、もしくは死亡した直前のものとす

る』

『特典は三つに固定する。増やすのも減らすのも禁ずる』

一つ目と二つ目のルールは俺が決めた。

俺みたいに遙か昔から準備されたら流石に面倒だし、圧倒的に有利になるからだ。

二つ目もその保険みたいなものだ。

三つ目と四つ目は最高神どもと話し合った結果できた。

降伏した転生者は、転生に関する記憶を失うのも残りの転生者にとってはありがたいだろう。

五つ目のルールは他の最高神が提案してきたものだ。
訳がわからん。いつたい何がしたいんだ？

俺もそのルールを提案する気ではあつたが、わざわざ向こうから提案する理由がわからん。

…俺にも有利な条件だから別に良いが。

最後のルールは昔からある抜け道の一つだ。

これは満場一致で可決された。これがあると全員が困るからな。

しかし、何か引っかかる。

俺はどんでもない思い違いをしているんじゃないだろうか？

「で、結局は誰が転生することになつたんだ？」

会議を終えて戻つてみると、既にジャンケンは終わっていた。

え？ そんなにジャンケンに時間は掛からないだろ？
いやいや、こいつらのジャンケンは本当に長い。

だつて、相手が出す手を見て自分の手を変えるんだぜ?
腕を振り下ろす間に手の形が高速で変わりまくる。

前はそれで一時間もジャンケンをしてた。

「…ゼえ、ゼえ、は、はい、ゼはあ、私で、す~」

「うやらルナが負けたようだ。

相当本気でジャンケンをしたのう。相当本気でジャンケンをしたのだう。

全員が汗でびっしょりだ。息も荒い。

「よし、じゃあこれからお前に転生をしてもらう。
通例のとおり、お前には特典を選ぶ権利がある。
なお、転生先の身体は転生直前、もしくは死亡する直前のものにな
る」

これだけでルナは大きなアドバンテージがある。
下手な特典がなくても、これだけで最強クラスだ。

「特典に関して、俺は聞かれたことにしか答えない。
それもできるだけY e sかN oでだ。

さあ、お前の願いは何だ?」

sideルナ

特典。

それは第一の人生を走破するためのキーアイテムです。
よく考えなれば…。

「では、まずはデバイスをください。」

私のアルテミスをそのまままでです~」

「良いにだらう」

ふむ、これくらいならば制限に引つかからないようですね。

「それと、転生ではなくトロップになどできますか~?」

「…できるな。かなりギリギリのラインだが」

「なら、四歳くらいの年齢でトロップをさせてください~」

転生で異世界に移動するのは危険です。

周囲の環境とかを一々気にしなくてはならないですからね。誰々のファンだとか言ひのなら話は別ですが。

それに、三歳くらいいまでは転生した後で最も無意味な時間だと私は思います。

ダラダラしてこると勘が鈍りそうで恐いですし。

しかし、もう最後の特典ですか。

そろそろ能力を追加した方が良いですかね?
でも、稀少技能は原則で一人で一つですし…。
だったら、

「…………」

これが良いでしょう。

「良いだろ？。

特典は以上で良いな？」

「はーー」

うん、こんなものでしうね。

後は臨機応変のケースバイケースで何とかするしかありません。

「んじゃ、転生を開始する。

お前が負けるなんてことはまずねえとは思つが、油断はするな

「了解しましたー！」

教授の激励でやる気が漲つてきました！
必ず勝利してみせます！！

「じゃなー。

ここから俺らは見物してくるからよ

「負けて帰つたら殺す」

「ルナー、頑張れーーー！」

「ま、ほじほじに頑張りなわー

「応援してますね

「ふ、ファイトですっー！」

あ、皆のこと忘れてました。

完全に映画でも觀るような雰囲気ですね。
くつ、あそこで私がパーを出していれば……！

「それでは、行つてきま～す」

side out

side 赤毛の最高神

と、教授は考へているのだろう。

転生者システムを使っての決戦か。
発想は面白いし、歴史もある。

それに奴の得意な分野もあるのだろう。

しかし、古いだけに手の内も読みやすい。

教授のことだ。

手持ちの天使どもを使って勝利しようというのだろう。
前科を問わないというシステムくらい、私だってわかっている。
天使を人間に墮としてから転生。これが奴の作戦だろう。

ならば、こちらにも策はある。

目には目を、歯には歯を、魔導師には魔導師を、だ。

死ぬ前から強力な魔導師で、なおかつ敵の能力を知る者がいる。
これ以上の適役はいないだろう。

輪廻の輪から魂を取り出し、田の前に呼び出した。

「お前に復讐のチャンスをやる。」

更なる力をもつて復讐を成すならば、私は手を貸そう

「できるのか？そんなことが…」

「勿論だ」

「ふん、人間を操ることなど容易い。」

少しの甘言で簡単に釣れる。

さあ、愚かな元人間め。

私の転生者の前に無残に敗北するが良い！！

side out

s.i.d.e 金髪碧眼の最高神

と、考えていたのだらうな、あいつは。

「やつらが転生させる者などとくへ田畠はついてい。復讐で釣る作戦などは特にな」

そう、復讐者はおそらくあの者だらう。

ならば、そいつは原作キャラを悲しませぬことはできません。

「だからお前には原作キャラの身内に転生してもいい。
肉体を調整するのに特典は必要ないだろ？」
なんせ、その身体はあの者のコピーなのだからな」

「了解しました。

つまりは他の転生者を打倒すれば良いのですね？」

「やうだ。その後は好きに生きて良い。

その代わり、負けは許されんぞ？」

まあ、心配はいらないだろ？

この者は強力な魔導師であると同時に戦闘のエキスパートでもある。

体内に転生すれば原作キャラは味方についたも同然。
そして復讐の転生者は原作キャラの敵にはなれないだろ？

これで我的勝利は決まったようなものだな。

s i d e o u t

最高神は伊達じゃない！！（後書き）

奇策の対策の対策が出てきました。
まさかのあの人復活！？

同情しなくて良いから金をくれ！（前書き）

今回からはルナの視点で進みます。

同情しなくて良いから金をくれ！

…む、むむ？

あれ、私は何で寝てるんでしょう？

「あ、そういえばトリップしたんでしたね～」

あ、皆さんこりは。ルナ＝ベルツです。

今後は私が挨拶を担当しますので、どうぞよろしくお願ひします。

気がつくと私は見知らぬ森の中で寝ていました。

身体の様子を確認してみると、特典のとおり四歳ほどの中になつていました。

そして手の中には石が…。

「おお、アルテミス！」

お久しぶりですか～。元気でしたか～？」

『はい、お久しぶりですマスター』

アルテミスとは神界に行くときにお別れしてしまいましたからね。話をしたのはかなり久々です。

「それで、今はいつでここはどこですか～？」

『現在は新暦60年の春で、ここはリラードチルダ郊外の森林地帯です。

教授より事情は伺いましたので安心を』

とこゝことば、今は無印の五年前です。
私はちよつと四歳とこゝことですね。

しかし、これからじりじりましましょ「つか。

他の転生者を探すのは骨が折れそうです。
手つ取り早いのは海鳴に行くことですが……。

グウ～

するとお腹が鳴りました。

そういえばさつきから空腹です。

「……腹が減つては戦はできぬとも言こますし、食事にしましょ～」

『しかしマスター。

この辺りは無人地帯です。野生の動物以外に食料はありません』

。。。

「…………と、とつあえず人里まで行きましましょ～」

『しかしマスター。

資金はお持ちですか?』

「…………ありますね～」

そういうふうです！

私は今は無一文ではないですか！～！
ど、どうしよう～。

「…仕方ありませんね。

ここは昔やった手を使いましょう~」

昔やった手。

それはいたつて簡単です。
完全に入頬りですけど。

そこから私はとりあえず道路が通つてる場所まで移動しました。
この辺は無人地帯の近くなので、交通量がかなり少ないです。
しかし、皆無というわけではありません。
道路の脇で車を待ち構えます。

30分くらい待つと、ようやく車が来ました。トラックです。
助かりました~。正直、そろそろ空腹も限界だったので。

「すみません!止まつてください!」

道路の脇から身を乗り出すようにして手を振ります。
運転手がかなり嫌そうな顔をしているのがここからでも見えました。
私が何なのかわかったのでしょうか。しかしこっちも必死です。

すると、トラックが私の前で止まりました。
助手席の車窓から人が乗り出します。

「あん、何だ嬢ちゃん。ヒツチハイクか?」

「じょ…………!?」

お、落ち着きなさいルナ。

少女に見られても仕方ありません。

教授、だつて雌性体のつもりだつたと仰っていたでしょ。そなことよりも作戦を成功させなくては！

話を戻します。

そう、これが私の作戦。

その名も、『ヒッチハイクに乗じて食べ物を分けてもらう

「悪いな、今は満席なんだ。

他の車を当たつてくれ」

「いえいえ構いません〜。

どうせ皆さん、次の街までたどり着けませんから〜」

よつに見せかけて強盗をする作戦』です！

アルテミスを展開して一振り。

それで一瞬で運転席の人たちを全員凍らせました。

中の三人を運転席から放り出し、中にあつた食べ物を片つ端から食

べます。

つていうか、お酒のつまみみたいな物ばかりですね。
お腹は膨れるから別に良いですが。

十分くらいで食事を終えて、運転席から出ました。
さてと、

「どうしましょうか、この凍死体。
一応、食べ物の恩はありますし〜」

えっと、いひいう時は死体を十字に斬るんでしたっけ？

『マスター、それではただのバラバラ死体です。
十字を切るんですよ』

「うへん、まあ良いです。
ご馳走様でした、この恩は忘れません。
…たぶんですが」

これが見つかると面倒なので、とりあえず近くの森に転送しておきます。

これで証拠の隠滅は完了。

後は…、とりあえずクラナガンまで行きましょうか。
文明が恋しいです。

『マスター、それならばその車を使いましょう。
変身魔法で身体を大きくすれば運転できるでしょう。』

「そうですね〜。

それでは行きましょうか〜

変身魔法を使った私は、とりあえずそれでクラナガンに向かいました。

「とりあえずは二十代くらいになつていてるので、運転に支障はないですか？」

え？ 運転なんてできるのかって？

それくらいできます！ 私は前は二十代まで生きたんですよ！」

で、現在クラナガンに向かっているんですが……。

「失敗しましたね～」

『そうですね』

何を失敗したのかといふと、

「まさか車内に金品が全くないことは……」

『全員が持つたままだったのでしよう』

『お金がないのです。

どうやら財布とかは全員が持ち歩いていたようです。

「チツ、あの野郎じも……！」

身包み剥いでから捨てれば良かったです～」

こうなつたら現金の輸送車でも襲つてしましますか…。

『冗談でそんなことを考えていると、

『噂をすれば影ですね。

前方に停車している車がそうですよ』

「…マジですか~」

結構先ですが、本当に現金輸送車が停車していました。
道路の脇から人が出てきて何かを運び込んでいます。

「…」こんな所に何故に現金輸送車が？

つていうか、こんな所で停車している時点で訳ありですよね~

カーナビで確認しましたが、この辺りは無人地帯がしばらく広がつ
ているようです。

ここを通っている時点でもう怪しそ爆発ですね。

「……スルーの方向で」

『… そうですね』

そのまま横を通り過ぎようとしたしました。
面倒事はご免ですし、私自身が面倒事の塊またいなものですね。

すると、

「誰か、誰か助けて――――」

「…………」

おやじく小さい子供の悲鳴が…。

…へへ、じつじてミッドのトラックは静かに移動できるんですか…？
地球の騒音トラックを見習いなさい！

おかげで悲鳴…、じゃない！変な音が聞こえてしまつたじゃないですか！

『…マスター』

「…スルーで」

『しかしマスター。

追っ手がかかつてます』

「…うわあ～」

ミラーを覗くとトラックの後ろから魔導師たちが追つてきます。
人数は一人です。

「これは流石にスルーできなさそうですね～」

そのまま停車します。

すると追っ手の魔導師が運転席のドアをぶち破り、中に侵入してきました。

つて、何してくれてんですかーー！？

「…お前、やつらの声を聞いたな？」

「は？声？ナシノコトデショウカ～？」

とりあえずすつ呆けます。

「こ」はポジティブに考えましょ。

ひょっとすると見逃してくれたり…、

「悪いが、お前には「こ」で死んでもらひ

「…ですよね~」

しませんでした。最悪です。

その間にもう一人がエンジンを破壊してくださいました。

これでも「こ」のトラックは使えません。

「… とりあえず、十字に斬りましょうか~」

その後、一人を四分割してから輸送車に向かいました。

このまま飛行魔法でクラナガンまで行つても良いんですけど、管理局に見つかると面倒なので。

輸送車でさっきの一人を待っていた人がいたので土に還して、さらに森にも還します。

後ろのスペースに人みたいな何かがあつた気もしますが、私は何も見ていません。

三歳くらいの女の子が二人なんていませんでした！別に捨てませんでした！

こっちを見てなんていませんでした！！

「ふいー。

これでよつやく一件落着です。では、行きましょうか~」

「ま、待って! 置いていかないで! ! !

「…………（ゴクゴクゴク） ! ! !

一人が懇願し、もう一人はもの凄く頷いています。つていうか、服の裾を掴むのはやめてください。伸びるでしょうが! くつ、無視するのも段々ときつくなつてきましたね。

「えーと、ほら!

きつともうすぐ管理局が来ますから、その人たちに保護してもらつてください。

そうすればお家に帰れますから~」

面倒なのでとりあえずそう言います。

通報? 勿論してませんが?

「……嫌だよ。

こんな所に置いていかれたらまた連れてかれちゃう。それに、家なんてないもん」

「…………（ガクガクガク）」

知るかああああああーーと叫びたいのをグッと堪えます。ここで二人を連れて行つても良いことなんて何もないです。百害あって一利なしつてやつですね。

だいたい、誘拐だか何だか知りませんが…。

…ん？誘拐？

普通はこんなに小さな子供を誘拐しても良いことなんてないはず。
身代金が目的？それにしては扱いが雑すぎです。

しかも一人とも魔力量がかなり多い。歳の割にはですが。
それにさつきの家がない発言。

と「う」ことは…。

二人とも、ひょっとして人造魔導師でしょうか？
それとも管理外世界から誘拐されたとか？

…可能性は高いですね。

それにもしても、人造魔導師とかですか～。
一応、同族として助けてはあげたいですけどね～。
どうしましょうか？

「…はあ～。

わかりました、乗つてください～」

そういうことは人里に降りてからにしましょうか。
ひょっとしたら今後の事態に協力してもらえるかもしぬれませんしね。
どうせ帰る場所もないというなら保護した方が今後にとつては得でしょう。

自分に言い訳しながら二人を助手席に乗せます。
後部座席がない型なので仕方ありません。

「…あの、どうして連れて行ってくれるの？」

自分で言つておきながらそれを聞きますか？
ま、不安なんでしょうけど。

「」のまま置いていつて死なれても寝覚めが悪いだけです。
何なら降りますか～？」

二人は残像が見えそくながら速く首を振りました。
よろしく。

「では改めて、行きましょうか～」

「…あ、あの！あつがとうござります、お姉さん！…」

「…………（ノクノクノク）…」

「テメヒ、やつぱり降りる…」

『落ち着いてくださいマスター』

旅は道連れ世は情けってやつです

「う、うぐぐ、えぐつ、そ、ぞう、だつだん、でずが～」

なんて、なんて良い子たちなんでしょう！

思わず感動してしまいました。

こんなに感動したのは劇場版ド○えもんを観た時以来です！
ジャイアン最高です！！

あ、皆さんどうも。ルナ＝ベルツです。

今、クラナガンへ向かう途中のファミレスの駐車場です。
本当は中で食事をしたかったんですが、一人の衣服がボロボロなた
め入店できません。

なのでテイクアウトして車内で食べていたんですが…。

その時、片方の女の子が身の上をポツポツと話してくれました。

なんでも、一人は予想通り人造魔導師らしいです。
実験に耐えられなくなつたために脱走してきたとか。
しかし一人は研究所での親友らしく、一人で手を取り合つてきました
しいです。

それでわっさとうとう捕まつたんだとか。

自分が涙もらいというのは自覚していましたが、二人の脱走の話を
聞いていて不覚にも泣いてしました。

そこまで親友を大事に思つては…！！

こんな良い子たちが不幸になるだなんて、世の中間違つてます！
少し前に面倒とかほざいていた自分を爆殺してやりたいです！

「わかりました！

あなたたち一人は、私が、責任を持つて助けますから！
今後のことも任せてくれさい！

また誘拐されそうになつたら相手をバラバラ死体にしてやりますか
らね！！」

私は一人をひしひと抱きしめました。
え？甘いって？

それがどうしたあああ！！

『しかしマスター。

この一人を連れて行くには色々と問題が…』

「黙りなさい！！

ここで一人を見捨てるくらいなら私は死にます！」

そう言い切るくらい私は本気でした。
教授がいれば同じことを言つたはずです！

（いや、俺は別にそんなこと…）

言つたはずです…間違いありません！

『……………そうですか。

ならばこれからどうするのか、具体的なプランの提示を願います』

「…プランですか～」

そう言われると困ります。

つていうか、その案を考える前に一人を保護しましたから。

…はっ！

そういうえば教授から困ったときのためのアドバイスを受けているんでした！

困った時に思い出すよつこに転生する前に言われてます。

回想

「ルナ、とりあえず転生したら原作キャラを仲間にしin。前回と同じような作戦は駄目だ」

「はあ、何故ですか～？」

「今回はお互いを消し合いつ長期戦だ。

そんな時、転生者にとつて最も消しにくい相手はどんなやつだ？」

「…なるほど、管理局の後ろ盾がある相手ですね～？」

私は負けを認める気がない以上、殺すしかありません～。そんな状況で管理局は逆に邪魔でしうからね～。

それに転生は原作キャラ以外は味方を作りにくいですし。

管理局と一緒にいれば、原作キャラも味方にしやすいと～？」

「そういうことだ。

そして、これは相手もおそらくわかっているだらう。敵がどんな手を使ってくるかわからない以上、充分に注意しin」

回想終了

：ふむ、原作キャラの仲間ですか。

高町なのはとハ神はやは除外ですね。

海鳴にはもう転生者がいる可能性が高いです。

一番味方にしやすいシチュエーションは幼馴染か身内ですから。

クロノ執務官はどうでしょ？

それも微妙ですね。

絶対に味方にできるといつ状況を作るのは難しいです。

管理局は身動きを取りにくくしますし…。

他の人では無印どいろかA・Sにすら間に合いません。

となると…。

「プラン決定です。

進路は変更してアルトセイムに向かいます。

そこでフレシア＝テスター・サと接触しましょ？」

sideレン

はい、今レンって誰だよって思つた人、挙手〜。
いやさ、ぶっちゃけ俺も一瞬だけ思つた。
これからは教授にしてもらおう。

え、挨拶？

あれはルナに譲った。俺はもう引退だ。

現在、俺たちは全員でテレビを見ている。

映っているのは転生者の三人だ。

残りの一人を見た時は思わず度肝を抜かれたが。

「それにしても、さつそく殺人してるし。

ルナにしては過激な行動だな」

「は？ ルナらしいじゃねえかよ」

「想像通り

他の皆も頷いている。

えへ、俺だけ？

「そうそう、私は子供を拾つたのが意外だつたな～」

「確かにね。容赦なく捨てると思つてたわ」

ああ、それは確かに。

しかし、それも仕方ないだろう。あいつ涙もういからな～。
ジブリ作品の全てに涙するようなやつだし。
ゲ○戦記のどこで泣けるのか。謎だ。
ちなみに俺の好きな作品はも○の姫だ。

「でも、今後の方針は悪くないと思いますよっ」

「え、えっと、やつですね」

そう、俺たちが注目したのはそこだ。

海鳴に行かなかつたのは正解と言えるだらう。

なんせ、残りの転生者が集合してるんだからな。

「気をつけろよ、ルナ。

あいつら、もう合流して結託しているだ

ま、大丈夫だろう。

例えあの一人が組んでもルナには勝てまい。
どんな特典を持つていてもだ。

あの腐れ最高神どもを最高に警戒してやつたんだからな。

魔導師であるかぎり、いや、転生者であるかぎりルナには勝てん！

「なんせ、ルナの特典はありあるチートの中でも最凶だからな

side out

旅は道連れ世は情せつでやひづへ（後書き）

ルナは他にもク〇ヨンしんひゃんでも号泣します。

世の中、助け合いが大切ですよ

ミッドチルダ郊外アルトセイム地方。
そこには巨大な遺跡級もある『時の庭園』が鎮座していました。
時代的にはまだフェイトはいないはずです。
好都合ですね。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

今、私はアルトセイム地方にいます。
ここに来るまで少し時間が掛かりましたが、何とかたどり着きました。

「ルル、ナナ！行きますよ」

「お兄ちゃん、待つて！」

「…………（ステテテテ）！」

あ、そういうえば二人の紹介がまだでしたね。

さつきから私に返事をしたり、話しかけてくるのがルルです。
茶髪のポニーtailで、瞳は赤色の白人種です。

で、無言なのに感情表現が激しいという訳がわからないのがナナです。

水色の髪のストレートで、瞳も青色の同じく白人種。
表情がコロコロ変わるので無言なのは会話恐怖症？だかららしいです。念話も不可。

名前の由来？

私の名前を分解しただけですけど？

教授から頂いたお名前なので、結構私にとっては重要な名前です。
単純で悪かったです…。

二人ともお揃いの白いワンピースを着ています。
ナナはパークーのフードを被っていますが。

え、お金？

輸送車の人たちから身包み剥いだものですが？
ここに来るまでは何とかなりました。
もうほとんどの残つていませんけどね。

「なんでこんな遠くまで来たの？」

「…………（ハクハクハク）」

「それはですね~、私の未来に関わることだからですよ~」

車では中に入れないようなので車を降りています。
歩きで中に入りますが、どうやって来たことを知らせれば良いのでしょうか？

インターフォンとかはないみたいですし。
仕方ないですね。広域念話で話しかけてみますか。

【すみません。

プレシア＝テスター・ロジサさん、いらっしゃいますか～？】

庭園の全域まで届くよう広域念話を送ります。

「これで中にいれば聞こえるはずです。

「つう、頭がガンガンするう…」

「…………（クワソクワソ）！？」

あ、そういうえば一人が魔導師の卵だったのを忘れてました。
念話が頭に響いたようです。

【…何か用かしら？】

すると中から返事が返ってきました。
よし、これで良いです。

【单刀直入に言いますね～。

あなたのプロジェクトFですが、失敗しますよ～？】

すると頭上に莫大な魔力反応が…！?
咄嗟にルルとナナを抱き寄せます。

「アルテミス！」

『Rejection』

瞬間、頭上から落雷が落ちました。

防いでいなかつたら消し炭になつていきましたね、これは。

【いきなりですね～。

いくら癪に障つたからといって、これはないでしょ～？】

【…もう一度だけ聞くわ。何をしに来たの…？

私を馬鹿にするために来たのならば帰つて…】

ありやりや？

何か冷静になつてしましました。

挑発してバテさせる作戦だつたんですが。

仕方ないです。ここは普通に交渉といきますか。

【…今日は取引をしに参りました～】

【…取引？】

【そうですね～。

私もその分野について多少の知識があります～。

しかし、その研究ができるだけの設備も環境もありません～。
ですので、そのお手伝いをすると同時に設備を貸していただきたい
のです～】

はい、嘘八百です。

知識があるのは事実ですが、本音はフェイクを完成させるためです。

【あなたみたいな小娘が私の研究を手伝う?
馬鹿も休み休み言いなさい】

…」のクソ婆、ぶつ殺すぞ！？誰が小娘だ！？

ちゃんと二十代の身体だし俺様…、じゃない、私は男です！

くつ、段々と素が戻つてきますね…！

【…事実です～。

何なら私の研究成果をお渡ししましょ～つか～？】

そう言つてディスクをチラつかせます。
ここに来る途中でアルテミスに保存していたデータをコピーしてお
きました。

中にデータを放つておいて良かつたです。

今の彼女よりは進んだ技術が入っているのだけは保障できます。

【……入りなさい】

やたらと自信満々な私の態度に揺らいだのじょ。
中に入れてくださいました。

とりあえずは第一段階は成功ですね。

「ルル、ナナ、行きますよ～」

「ええつー…? もうやめようよ～」

「…………（「ククククク）…～」

そんな一人を引きずつて中に入ります。
しばらく進むと、傀儡兵が立っていました。

私たちの姿を見ると、誘導するように奥に進んでいきます。

それについていくと、居住エリアらしき所に着きました。
そこには満面の笑みを浮かべたプレシア＝テスター・ロッサが

「さつさとそのデータを渡しなさい。
話はそれからよ」

いるはずもなく、鬼の形相でした。
アルフ、あなたの鬼婆という表現は適切でしたね。
鬼婆じゃなければ山姥です。

そんなことは勿論口に出さずに彼女にデータを渡しました。
ここで待つようにと言い、彼女は奥に引っ込んでしまいます。

「…ねえ、もう帰ろうよー」

「…………（ガクガクガク）」

一人ともすっかり彼女にビビッてます。
ま、仕方ないですが。

数分ほど待つと、彼女が戻ってきました。
データをこちらに差し出します。

「それで、取引は成立ですか～？」

「…ええ、そうね。

確かにこの中身はとても参考になつたわ。
でも、一つだけ教えなさい。
どうやってここを…、いえ、私がプロジェクトFを進めていると知
つたの？」

「それをあなたが知る必要があるのですか？」
私は研究をしたい、あなたは技術を確立したい。
それ以外に何か必要ですか？」

「… そうね」

あ、危ねえええとこりでした！
それを聞かれたらどうしようかと冷や汗ものだつたんです。
上手く誤魔化せましたよね？

「ルナ＝ベルツです。」
しばらくお世話になります～」

そう言つて右手を差し出します。

「… プレシア＝テスター・ロッサよ」

そして彼女も右手を出します。

交渉成立です。

s.i.d.e 教授

うわ～、プレシアのやつ、ルナを小娘とか。
よく死ななかつたな。

「ルナのやつ絶対に『ぶつ殺すぞ！？』とか思つてるな、ありや」

「『クソ婆が…』とか思つてそいつ

「一瞬だけ頬が引きつってたしね」

「やつぱりお前らもやつと思つか。

「えへ、嘘だあ～」

「え？あのルナさんがそんなことを想つはずない…、ですよね？」

「れ、礼儀正しいですし」

あ、そうか。この三人はルナの礼儀正しいバージョンしか知らないのか。

じゃあそつ思つても仕方ないな。

「いやいや、ルナは本来はライアとアリスを足して二乗した感じだつたんだよ。

一人称は俺様、二言目には殺す、目つきも最悪だったしな

「…………」「」

三人が疑いの眼差しを向けてくる。
いや、本当だつて。

「俺の口調はルナの影響だぜ？」

あいつは下ネタ全開で最悪だつたけどな

「昔は一日に最低でも百回は殺すつて言つてた。

顔を合わせる度に死ねとか消えるとか

「でも二人とキャラが被るからって口調と態度を直したのよ。急にルナがニコニコしだした時はパニックになつたわよ？ どうどう気が狂つたのか！？ って」

そうそう、懐かしいな。

雰囲気的には超凶暴なヴィータって感じだった。

俺の言うことはちゃんと聞いたけど。

そのあいつがガキを一人も面倒を見るとか…。
なんか、興味半分心配半分なんだが。

本当に大丈夫か…？

side out

世の中、助け合いが大切ですよ～（後書き）

プレシアさんと結託！

これはフェイントフラグでしょうか？

仮の顔は二度までですが私は一度でも許しません

「あなたとは一度、どちらが上の立場なのかハッキリさせた方が良いみたいね」

「そうですね。いい加減、私もあなたのわがままに振り回されるのに疲れました」

この婆、絶対に殺す！！

あ、みなさんどうも。ルナ＝ベルツです。

今、プレシアさんと最高に険悪な雰囲気です。

お互いにデバイスを構えた戦闘体勢です。

何故こんなことになつたのかといふと、話は少し遡ります。

一ヶ月前、ついにフェイトが稼動を始めました。

私が助手になつて一年、正直デスマでしたがついにです！

おつと、今はまだアリシアでしたね。

しかし、最近になつてオリジナルとの差が顕著に現れ始めたようだ。
それで口論になつたんです。

その流れを簡単に説明すると、

「あなたのデータなんて何の役にも立たなかつたじゃない！」

「記憶だけで人格の完全再現なんてできませんよ～！」

それでもあなた一人の時よりも再現率は上がつたはずですよ～！」

「利き腕も、魔力資質も違うのよー！」

「そんなのは誤差の範囲ですー！」

「やつぱりあなたみたいな小娘に頼つたのが間違いだつたわー！」

「表出るやクソ婆がーー！」

つて感じです。

注文が細かすぎなんですよ、この人は。
そんなにアリシアが好きならば神界に来なさい、会えますから！

「お、お兄ちゃん？ ど、どうしたの？
二人とも凄く殺氣立つてるけど…」

「…………（ガクガクガク）」

「か、母さんもルナさんも落ち着いて…」

「「「うるさいーーー！」」

三人が止めに入りますが一蹴します。
この婆には礼儀つてやつを教えてやります。
あ、ちなみにフェイトが同い年の私をさん付けで呼んではるのは、私が変身した姿のまま一年を過ごしていたからです。
ルルとナナも私の本当の歳は知らないです。

「で、どうしますー？」

「こで殺り合つても良いですよー？」

「構わないわ。一撃で終わるもの。

大魔導師と呼ばれたこともある私に喧嘩を売る」との愚かさを教えてあげるわ

「はつ、年増の婆が偉そうに…。現役の私に勝てるとしても…？」

私たちの身体から溢れた魔力が電気と冷気に変換されます。
おかげで彼女の周囲は黒焦げ、私の周囲は凍り付けです。

「殺す！」「

瞬間、私たちの足元に魔方陣が展開されました。

なるべく早く、なるべく重い一撃で婆を殺します！

しかし、それは向こうも同じらしく攻撃の瞬間は同時でした。

「サンダースマッシュヤー！」「

「アイスジャベリン！」「

衝突した魔力が地面を抉り、余波で周囲の木々が吹き飛び、そのまま氷結します。

ルルたちは吹き飛ばされないよつに三人で抱き合つていました。

そして魔法が消滅します。

結果は互角。

チツ、私が成長過程だといつもあるのでしょうが、流石は大魔導師！

腐つても鰯つてことですか！

「やるわね。研究者をやめて局員にでもなつたりど？」

「そうですね、あなたが土下座して謝るなら考へても良いのですよ~？」

再び沈黙。そして術式展開。

今度はさらりと大技です！カキ氷にしてやります！

「お兄ちゃん！もつやめて！」

「…………（バタバタバタ）……」

「母さん、喧嘩は駄目だよ！…」

そこに三人が割り込んできました。

くつ、三人とも邪魔です！その婆を殺せないでしょ！が！

「退きなさい！さもないと三人で」と、「ゴホッ…」

その時、プレシアが吐血しました。盛大に。

そんな身体で魔法を使うからそつなるんですよ。

「勝負ありますね~。

これからは私に対する態度は改めるよ！」

「…くつ、私はまだ負けてな、…」「フッ！」

そのまま咳き込み気絶してしまいました。

よくもまあ、そんな状態でそんなことが言えますよね~。
とりあえず寝室まで運んであげます。

え?殺さないのかって?

フェイトに泣きながら頼まれたから殺せなかつたんですよ。

チツ!

その後、プレシアさんは一言も口を利いていません。

食事や掃除などの世話はこなしますが、お互に目も合わせません。
しかし、どうやら彼女はフェイトからアリシアと呼ばれていた記憶
を消したようです。

ルルとナナに釘を刺してました。

そんなある日、突然プレシアさんが使い魔と契約をしました。
なんでも、私に生活を支えられている状況に腹が立つたんだとか。
今後はフェイトの教育もするらしいですが…。
まあ、家事の分担ができるから別に良いですけど。

そういえば、

「そりそろルルとナナにも魔法を教えましょつかね?」

研究所で少しほは教わってるらしいですが。

「えつ、本当ー?」

「…………(キラキラキラ)ーー」

一人ともかなり喜んでます。

少し前まではあまり構つてあげられなかつたですから。
最近は家事以外にやることもないですし、良い機会でしょ。つ。

「ねえ、じゃあフロイトお姉ちゃんと一緒にでも良いー…?
一緒に勉強したいー!ー!」

「…………（ノクノクノク）ー。」

うーん、一緒にですか〜。

正直、二人には私の魔法を教えたかったんですけど。
あの系統、門外不出なんですよね〜。

まあ、基礎は同じ//ツド式ですね。
別に良いですか。

「じゃあ、リースに相談してみますね〜。
向い方がOKしてくれたらそうしましじょ〜か〜」

どづせです。

フェイトを魔改造でもしてみますか。

仮の顔は二度までですが私は一度でも許しません（後書き）

フェイト魔改造です。

リリ狩るマジ狩る頑張りますーー！！

はあ～。平和ですね～。

前世では今頃は訓練ばかりでしたからね～。

ああ、第一の人生つて幸せです。

あ、監視人にちは。ルナ＝ベルツです。
今は六歳です。

リニースが来てから、既に一年が経っています。
まだフェイトの魔改造はしてませんよ？

魔改造は基礎ができるないと崩壊しますから。

そもそも、プロジェクトFに見切りをつけたプレシアさんの方に私が何故いられるかというと、フェイトの生後の様子を見るという大義名分があるからです。

だからフェイトの魔改造をする権利は私には充分にあります。
初めからそのつもりでもありましたし。

今、私とリニースは三人の今後について話しています。
将来の意味ではなく訓練のことですよ？

「では、今後はこんな感じで行きましょうか」

「了解です～。

そういうえばフェイトの専用デバイスを作成してたんでしたよね～？」

「ああ、バルディッシュュですね。

はい、まだAIの作成段階ですが来年にはだいたい完成しそうです

「そうですか~。

何か協力できる」とがあったら言つてくださいね~」

A.Iから作ってるんですか。

それは凄いです。

普通はそんな面倒なことはせずに市販の物を買つてしまつて。

「リニース、ルナさん、お願いがあるんだけど…」

その時でした。

フェイトたち三人が部屋にきました。

それにもしても、控えめなフェイトがお願いとは珍しいですね。

「何ですか?」

「よつぼどの「じとじやなければ良いですよ~」

するとルルが目を輝かせて、

「私たちね、必殺技が欲しいの!~」

と言いました。

「必殺技、ですか?」

リニースも困り顔です。

そりや突然こんなことを言われれば困りますよね。

「うん。さつき見ていたアニメでね、主人公が必殺技で敵を倒すの

を見て……」

「それで私たちも欲しくなったんだ！必殺技！」

「…………（「ク「ク「ク）……」

アニメの影響ですか。

必殺技ねえ～。力がついてきた影響でもあるんでしょうナゾ……。

「ルナ、どうしますか？」

「その前に一つ聞きたいんですけど～」

三人を見回して言いました。

昔からずっと疑問だったことなので丁度いいです。

「必殺技って、単純に相手を『必』ず『殺』す『技』ですよね～？
それなら単純に射撃魔法に威力を込めれば良いのでは～？」

「　「　「　「　「　「　「　「

全員が沈黙しました。

え、え？違つんですか？

「や、そういえばそうだね…」

「で、でも別に殺したい訳じゃないし…」

「…………（グルグル）？」

「ルナ、その質問は大人気ないと思ひますよ？」

やつぱり違つんですか！？

昔から方舟の皆に浪漫がないとは言われていましたけど…。
でも必殺技って読んで字の「じ」とくじゃないんですか？

するとルルが

「えっと、殺さない必殺技を教えてくださいー！」

と言いました。

「…………はあ？」

殺さない必殺技？なんですかそれは？

矛盾でしうそれは。トンチの類ですか？

つていうか、冷静に考えたら非殺傷設定にすれば相手は死なないん
ですからそれで良いのでは？

「ルナ、子供の言つ必殺技というのは単純に大魔法のことですよ。

派手な魔法に憧れているんでしょう

派手ですか。

なんだ、そつならそつと最初からそつと言えば良いのに。
てつきり非殺傷不可能魔法を教えてほしいのかと思いました。
敵のリンクカー・コアだけを氷結させる魔法とか、血液を凍らせて爆散
させる魔法とか。

禁術なので困っていたんですが、それなり話は別です。

「そうですか~。

しかし、派手と言つても色々ありますし~」

「前にお兄ちゃんがフェイトお姉ちゃんのお母さんと喧嘩していた

時に使つていたやつ!

あれ凄くかっこよかつた!~!」

アイスジャベリンですか。

確かにあれは良い魔法ですが、

「ルルには無理ですね~。

あなたは炎熱の魔力変換持ちでしおう~?

氷結変換のナナなら練習しだいができるでしおうナビ

そう、ルルは炎熱でナナは氷結の魔力変換資質があるので。
ルルは剣を教えていて、ナナは普通に魔導師向きですね。

「そうですね~。

それじゃあ今度の魔法のテストで全員が合格できたら良いですよ~。
三人につづつ教えてあげます~」

「本当ーー?」

「やつた!」

「…………（喜びの舞）ーー!」

三人とも喜んでますね。

しかしナナ、何ですかその妙な踊りは……。

数日後、テストを行いました。
結果は勿論全員が合格です。

私の教え子ですよ?当然です。

「やつたー合格!」

「これで必殺技だあー!」

「…………（バタバタバタ）ーー!」

はしゃぎ過ぎです。

つていうか、必殺技といつても普通の砲撃魔法を教える予定ですが。
あ、ルルは近接技ですけど。

『マスター。提案があります』

ある日、訓練が終わった後にアルテニスに言われました。

「何でじょりか～？」

『やあひそり海鳴に偵察に行つてまぢりじょりか～？』

「偵察？転生者のですか～？」

なるほど。

確かにやうやうですね。

ルルたちまつニースに預ければ良いですし。

とこつわけで、来ちゃいました、海鳴に。

「うへん、久しづりですね～。

前の時は戦闘ばかりでゆつくつと観光できませんでしたからね～」

自然に囲まれていながら、中央にはビル群があります。
自然と人口が調和している良い街です。

「さて、これからどうしまじょりか～？」

転生者は全員が同年齢ですかね～？

つまり学校には行つてないはずですが～」

『とりあえず高町なのはの両親が経営しているという喫茶店に行つてみでは?』

それもそうですね。

ひょつとすると高町さんと一緒にいたりするかもしませんしね。
お腹が減つたからというのもありますが…。

そして移動しようとしたが、

「ねえ君、今一人？？」

ナンパされました。

「クソがツ、誰が彼女だ！ぶち殺すぞ！？
ベタベタ触りやがって、キモいんだよカス！」

『落ち着いてくださいマスター』

あの後も、道すがら数人の男性に絡まれました。
全員昏倒させて道の脇に転がしておきましたが…。
今の私は普通に男物の服を着ています。
それなのにこう何度もナンパされると…。

「…はあ、私ってやつぱり女みたいなんですね～？」

『そ、そんなことはありません！凛々しいお姿だと私は思いますよ！
あ、マスター！例の喫茶店が見えてきました！』

アルテミスが強引に話を切り上げました。
そうですね、今は切り替えない。

そして店内に入り、窓際の席に座りました。
時間が昼から少し遅いからでしょうか?
あまり人がいません。

カウンターには若い大学生くらいの男性が立っています。
とりあえず注文が決まったので呼びますか。

「すみません、注文良いですか？」

するとこちらにきました。

むむ、只者ではないですね。足運びが武人のそれです。

「はい、『注文は?』

「では『コーヒーとショートクリームで』」

前に教授がこのシュークリームは美味しいと言っていたので、それに挑戦しようと思います。

少し待つと注文の一品が運ばれてきました。
さっそく食べてみましたが、かなり美味しいです。
私がつくったのよりも美味しいですね。軽く敗北感。

すると、店に一人の女の子が入ってきました。
片方は見覚えがあります。高町さんです。
もう一人は…。

……え?

「ああ、なのはに星^{せい}」

その『星』と呼ばれた少女の姿に驚愕しました。
だって高町さんと瓜二つだったんですから。髪型はショートカット
ですが。

彼女が双子だなんて話は聞いたことがありません。

つまり、

【さつそく見つかりましたね、転生者】

【どうします？接触しますか？】

…どうしましょうか？

正直、相手の神が選んだ転生者です。
普通の人のはずはないでしょう。

つまり、今関わったらその場で戦闘になる可能性があります。
もう一人の転生者も気になりますし。

ま、少しだけ試してみますか…。

店内に他の客が数人いることを確認し、

全力で殺氣を振りります。

すると、案の定その少女はガタンと椅子から立ち上がり周囲を見回しました。

やはり素人ではないですね。高町さんはキヨトンとしています。
つていうか、なんでカウンターのお兄さんも店内を見回しているんですか。

なんですかこの店は？超人喫茶ですか？

しかし、今の反応で大体の力量は把握しました。
彼女は純粋な魔導師か、もしくは半人前です。
今のうちに潰しても良いでしょ？
私は残りのコーヒーを飲み干します。

瞬間、封鎖結界を発動しました。

ターゲットは魔力を持つ者で、高町さんだけを意図的に弾きます。すると、店内には私と星という少女だけになりました。彼女は一瞬だけ目を見開くと、元の無表情になつてこちらを見つめています。

「…あなたでしたか、先ほどの殺氣は」

「はい～、驚かせてすみません～」

お互に動きません。

情報の取り合いをするためです。

「それで、私に何の御用でしょつか？」

「聞くまでもないでしょつか？」

始末しに来ました～。もう一人の方はどうちらですか～？」

この少女を殺すのは訳ないでしょ。

一瞬で詰め寄つて首をスパンッです。

しかし、もう一人をまた地道に探すのも面倒です。

「さあ、どこでしょつか？」

知つていても教える」とはないですが

「そうですか～。

じゃ、死んでください～」

情報を話す気はないらしいです。

ならばさつさと殺した方が良いでしょ？

一瞬で近づいた私は、星さんに展開したアルテミスを振り下ろします。

しかしそれは難なく避けられ、店外に逃げられました。

「ありやじや～？何か変な避け方されましたね～」

『攻撃が完全に読まれてましたね』

まあ、そんなことを気にして仕方ないです。
星さんを追つて外に出ます。

すると、牽制でシユーター何発か撃つてきました。
全部斬りましたけど。

しかし、その間にさらに遠くに走っていきます。

あ、代金はテーブルに置いていったので食い逃げではありません。

「彼女、デバイスを持つてないみたいですね～」

『デバイスは、持つていても不思議ではない状況になつて初めてクリアされる特典です。』

彼女が現段階でデバイスを持っているのは不自然だと最高神たちが
判断したのでしきう』

なるほど、出自不明な私がデバイスを持つていても不自然じゃない
ってことですか。

ならば本当に今がチャンスですね。どうせ結界からは逃げられませ
ん。

走って追いますが、彼女の方が土地勘がありますね。
スイスイと道を曲がつていってなかなか追いつけません。

魔力を身体強化に全力で使っているみたいです。

ようやく追いつくと、そこには公園でした。

ああ、高町さんとフェイトが一緒に戦った海浜公園ですね。

「諦めました？」

なら、鬼ごっこのお仕舞いですね～」

「ええ、しかし諦めた訳ではありません

その時、背後から殺氣を感じました。

咄嗟にその場を飛び退くと、私が立っていた場所に白い魔力刃が叩きつけられました。
つて長つ！？

よく見たら数十メートルはあります。
フェイトのジエットザンバーと同じですね。

攻撃してきた少年は魔力刃を消すと、一歩前に歩み寄ってきました。
手には剣型デバイスが握られています。

「久しぶりだな。

本当は今の一撃で殺すつもりだったんだけどな。流石だぜ。
ま、じんなんで終わつたら転生しなおした意味がないけどな

憎悪の「もつた声で私に語りかけてきます。

体中から溢れる殺氣が今の言葉が本気であると証明していました。

「黙つてんじゃねえぞ！」

俺はお前を殺すためにまた転生してきたんだぜ？

何かい「ひ」とはないのかよ?」

その少年が私に叫びます。
しかし私に言えることはありません。

何故なら、

「…………誰でしたっけ？」

私は彼を知りませんから。

リリ狩るマジ狩る頑張りますーーー！（後書き）

復讐者（笑）、参上ーーー！

初対面の人にはまず挨拶を

「…………誰、だと？」

「あ、すみません～！初対面の方に誰は失礼ですよね～？
はじめまして、ルナ＝ベルツです～」

初対面は挨拶が基本。

対人関係を豊かにする基本でもあります。

「… テメエ、ふざけんな！…」

「え、なんで怒ってるんですか～？
見ず知らずのあなたに怒鳴られるいわれはないんですが～？」

近頃流行りのキレやすい若者ってやつでしょ～？
ゲームとかばっかりやつてるからそ～なるんですよ。

「…まさか、本当に覚えてないのか？」

「いや、だからあなたとは初対面ですってば～」

「俺だ、俺！」河内亮だ！！」

「…………はあ？ 河内さんですか～？」

つて誰でしたつけ？

「すみませんが記憶にありませんね～。
人違いでは～？」

そうですね。それが一番納得できます。
私を誰かと勘違いしてるんでしょう。

「ふざけやがって！

なら力ぬくで思い出をむかへやるーー！」

そう言って彼が斬りかかってきました。

一合、一合と斬り合つてみますが、なかなかの腕前です。
この歳でこれほどとは、驚嘆します。間違いなく一流です。

しかし、

「そんな短い手足で私と戦えると思つてるんですか～？」

斬りかかってきた彼を蹴り飛ばします。
変身魔法を使つている私とはリーチに差がありますからねんでよ。
子供を苛めてるみたいですけど。

転がっている彼に近づき、アルテミスを一閃！

しようとした瞬間に彼が「ひかりに手を翳しました。

何の意味が？

すると彼は「ヤリと笑い、

「食らいやがれ、AIC…！」

『Active Inertial Cancelor』

瞬間、私の腕が宙でガクンッと止まりました。
押しても引いても動きません。

何かに縫いとめられている？

「星、やれ！」

「ブラストファイアー！」

すると彼はその場を飛び退き、星さんが砲撃を放つてきました。
デバイスなしで砲撃ですか。

なるほど、彼は囮ということですね。

しかし甘いです！

『Rejection』

シールド防御を斜めに展開し、砲撃を受け止めるのではなく逸げます。

デバイス有りの全力の砲撃だったらできなかつたでしょうけど。

その間に私の腕を固定する魔法を、特典で解析します。
なるほど、そういう魔法ですか。

その後、すぐにそれを凍り付けにして解除し一人み向き直ります。

「なかなかの腕前ですね～。

しかし、それが本気というなら興醒めです～。
ここで仲良くジ・エンドですね～」

「誰が！

ジ・エンドなのはテメエだ！」

そう言つて彼は術式を展開しました。

ミッド式の魔方陣が彼の前に数個現れますが…。

…何も起こらない？

その時、

「「ゴッ、アー？」

私は見えない何かに殴り飛ばされました。

それも一発や二発ではありません。複数発の衝撃が私をぶちのめします。

痛みを気にする前に理解ができません。

今、いつたい何が起こったんですか？

攻撃されたという自覚がありませんでした。

不可視の攻撃？

「くつー！どうだよ、龍咆の威力は？
どんどん行くぞ！」

その場に留まるのは危険と判断した私は、その場を飛び退いてとにかく横に走ります。

正面から攻めても目的になるだけです。

私の移動した跡が、見えない攻撃によって次々と吹き飛びます。
この威力で連射もできるんですか！？

しかし、いくつか情報も得られました。

あれは直射弾の類で、おまけにそこまで射程が長くないようです。
さらに、ライアの目を借りて確認しましたが、あれは発生した効果
をぶつける物理攻撃でもあるみたいです。
魔力を確認できません。

ならば、

「面倒ですし、正面突破です〜」

『Sanctum Armor』

そして私はアリスの聖王の鎧を纏い、突進します。カラーは私モデルなので白です。

龍咆？そんなの聖王の鎧の前では無意味ですー全て弾きます！

「なんだとー？」

「退いてください」

驚愕して いる彼を突き飛ばし、星さん がショーテーを私の足元に放ちました。

おかげで前が見えませんが、

「構わず突撃です～！」

爆煙を突き抜け、彼女に突進します。
しかし、それは予想済みだつたらしく、

「ルベライト」

設置型のバインドに捕まつてしましました。
タイミングが絶妙です。いえ、絶妙すぎます。奇妙なくらいに。
おまけに関節を縫いとめられて いるので全く動けません。

「ナイスだ、星！」

頭上から声がしたかと思つと、さつきの白い魔力刃を纏つたデバイスを振りかぶつた彼がいました。
やばいです。避けきれません。

『Rejection』

アルテミスがシールドを張つてくれました。
しかし、

「そんなのが効くかよおおおおお…！」

魔力刃がシールドを紙のように斬り裂きました。
マジですか…？

一瞬で魔力を全力で放出し、バインドを力尽くで破壊します。
そして全力で回避！！

「死ねええええええええええ！」

「なんとおおおおおおおおお！」

首を刈り取ろうとしていた死の刃をなんとか回避しました！
少し掠りましたけど。

つていうか聖王の鎧も斬りましたよ、あの斬撃！？

【マスター、『』は撤退するべきかと】

【賛成です～。あの星さんの特典が気になります～。
それに、『』のまま手の内を晒すのは得策ではありませんしね～】

回避した瞬間に全力で飛び退き、そのまま海の向こうに全速力で飛翔しました。

背後から追撃を受けましたが関係ありません。聖王の鎧が完全に防ぎます。

そのまま一気に逃げ去った私は、充分に距離を離してから転送魔法で時の庭園に帰りました。

いや、今日は本当に死ぬかと思いましたね。

「チツ、逃げられたか！」

さつきの一撃で確実に殺したと思つたのにー。
あいつはやつぱり強い！

「仕方ありません。

私が闇の書の一部だつた間でもあれほどの強さの人間はそうはいませんでした。

むしろ、退けられたことを喜ぶべきでしょう」

星はそう言つが、やつぱり納得できない。

俺があいつらに捕まつた時の苦しみを知らないからそういうふるんだ
と思つてしまひ。

「次に会つたら殺す…。
絶対にだ！」

そう言つて踵をかえした。

復讐の意味もある。

しかし、今度こそなのはたちを守るという決意もある。
だから星とも協力した。

この星といつ少女も転生者だ。

前世はこの世界の闇の書の理のマテリアル『星光の殲滅者』^{シューテル・ザ・デストラクター}だ。

今はなのはの双子の妹で、初めて会つた三年前よりも随分人間らしくなつた。

昔は転生者を倒すための人形という感じだったが、今では家族を守るために俺と共に闘するほどだ。

神の連中は初めから俺と星を協力させる気だつたらしいが。

「教授、今度こそテメハの思い通りに任せねえ。
ルナをぶつ殺して今度は俺が勝つ！！」

side out

「ただいま戻りました～」

時の庭園にやっと着きました。

流石は管理外世界、ミッドチルダまで遠いの何の。

「お兄ちゃんお帰り～、つてあー—————ッ～～～」

「…………ッ（驚愕）……」

「……え、ルナさん…? どうしたの…?」

「ルナ、何かあつたんですか…?」

皆が私を出迎えるなり驚愕します。

え、え？ 何事ですか？

「……あ、お土産ですか～？」

すみません～、色々あつて買えなくて～

「そうじゅありませんよ～

髪、髪～」

「髪？」

手で確かめると腰まであつたストレートが肩までのショートカットになっていました。

ああ、最後の一撃でやられたんですね。

「あ、短くなつてますね～。

リース、後で整えてもらつて良いですか～？」

「そ、それは構いませんが…。

その、何があつたんですか？」

「いえいえ、少し戦闘があつただけですよ～。

危うく死に掛けましたが～」

「戦闘！？」

ルナさん、怪我したの！？」

「…………（あたふた）～？」

「いえ、大丈夫ですよ？
この通り、無傷です～」

髪も別にどうつてことないですし。

つていうか、私も切りたかつたですからね。

昔は教授たちの猛反発にあつてあの髪形でしたが、正直あれつて戦闘どころか日常生活でも邪魔だったので。

「お兄ちゃん

今まで黙っていたルルが私の名前を呼びました。
それだけなのに周囲の温度が数度下がった気がします。

「お兄ちゃんの綺麗な髪を切ったのって誰なの?
私のお兄ちゃんを傷つけるなんて許せないね?許せないよ。
絶対に許さない。殺してやる。

殺す、殺す、殺す殺す、殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
す殺す殺す殺す殺す殺す殺すスコロスコロスコロスコロスコロ
スコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロ
スコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロ
スコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロ

スコロスコロス

」

ひ、ひいいい！

ルルが壊れたあああああ！

目のハイライトを消して虚ろに殺すと連呼するルルに恐怖します。
他の皆もドン引きしてますよ！？

「る、ルル！落ち着いてください！

髪なんてまた伸ばせば良いんですよ～！

ほ、ほら、ルルのためにまた伸ばしますから～！！

それに敵の人は私が殺しますし、心配しなくても良いです～～～！

もう半泣きで頼みます。

こんな状態のルルが近くにいたらストレスで死にます。
お願ひですかからやめてください～！

「…………… そうだね～！」

お兄ちゃんって強いもんね！次に会つたら殺すんでしょ？」

「え、ええ、はい！勿論ですよ～！
ズタズタにしてやりますよ～！」

「困つたら私に言つてね！
いつでも助けてあげる！私、お兄ちゃんの力になれるよ～頑張る
ね！」

そう言つてルルは奥に走つていつてしましました。
ルルがいなくなつた場が沈黙します。

「…ナナ、ルルつて昔からあんな感じだつたんですか？」

「…………（ブンブンブン）…」

それじゃ あ私が預かつてからああなたつたんですか…。

ふと、あの子に背後から剣で串刺しにされて死ぬ光景が浮かびました。

そしてその死体を返り血に塗れたルルが愛おしげに抱きしめています。

「…………」

ま、まっさかね～～！

初対面の人にはまず挨拶を（後書き）

ルルが壊れました。

いえ、一つヤバイ段階に進化しました。

ペシートの命には責任を持たせしょー！

「せり、こわおかよ。じんじゅは～」

「…………（ペコ）」

「…変化なしだすね～」

「いつたごどうすれば…」

あ、監かんにんこちは。ルナ＝ベルツです。

私とナナが一人で何をして居るのかといつて、会話の練習です。
対人関係で挨拶が重要ということで、いい加減に会話恐怖症をなんとかしようと思つたわけです。
結果はこのとおりですが。

「せめて念話ができれば少しさ違つんですが～

「…………（しょせん）」

念話も会話の内なんですよね～。

これじゃあどうしようもないです。

最悪、プラカードに書いて意思表示でも良いんですが…。

その時でした。

「ルナさん！

大変なんです！すぐに来て！」

フェイトが鬼気迫った表情で部屋にきました。
大人しいフェイトがここまで騒ぐとは、とうとうフレシアさんが危
篤にでもなりましたか？

「何事ですか？」

「いいから早く！リースとルルもいるから！」

そしてフェイトに連れて行かれたのは庭先でした。
庭といつてもそこら辺の森とかと繋がってるんですが。
するとそこにはオレンジ色の子犬が…。

「あの犬！なんだか苦しそうなの！」

それに普段は群れでいる種類なのに一人だけで…！」

軽くその犬を診ると、どうやら病気みたいですね。
外傷がないのに息が凄く荒いので。

「あ～、何かの病気ですね。
つていうかこれは狼ですか？」

「だから群れから見捨てられたんでしょう。
残念ですが、もう…」

「え、そんな…。

じゃあこの子、死んじゃうの…？」

「ルナさん、リース！何とかならないの…？」

そう言わても…。

正直、動物の治療は専門外なんですが。

ん? オレンジ色の狼?

あつ、ひょっとしてこの狼ってアルフですか!?

あ、危なかったです。

危うく原作キヤラを殺すところでした。

「それなら使い魔にすれば良いのでは?」

「「使い魔?」」「…………(疑問)?」

「ルナ、それはフェイトたちにはまだ早いですよ!
もう少しリンカーノアが成長してからじゃないと!
負担が大きすぎます!」

そうなんですよね。

私も少し反対なんですが、まあ大丈夫でしょう。

「でも、それ以外に方法はないのでは?
私は使い魔の契約をする気はありませんし」

私の手にかかれば優秀な使い魔を生み出せるでしょうが、その分だけそちらに回す魔力が多くなるからしません。
それに前衛型の私に使い魔は必要ないですし。

「… やる。

リニース、ルナさん。私、この子と契約するー。」

「フュイトー！」

「そうですかー。

なら、契約内容を決めてくださいー」

そう、使い魔は契約内容のために主人に尽くします。
それが終わればお払い箱です。

だから使い魔は基本的に使い捨てなのです。

リニースが良い例ですね。

そんなこんなでフュイトは子犬と契約しました。
契約内容は『ずっと傍にいること』らしいです。
ほえー、一生ものですね。

アルフもそれに同意し、本契約は終了ー、なんですが。

「それじゃあ始めよっか！

チキチキ、フェイトの使い魔の名前を決めよう大会ーー！」

アルフの名前を決める戦いになりました。

リニースと私は傍観です。

最終的にはアルフに無理やりこでもしますが、面白そうなので。

「じゃ、まずはフェイトお姉ちゃん！なんて名前が良いのーー？」

「え、えっと、『アルフ』なんてどうかな？」

お、フェイトは原作通りに来ますか。
問題は残りの二人ですね。

「次はナナ！何が良いの？」

『ポチ』

ナナはホワイトボードで会話をしています。
つていうかその名前はないでしょう。昭和ですか。

「最後は私ね！」

私は『黄昏を貫く橙の閃光』が良いな！」

「つて、それはアニメの決め台詞のパクリでしょう～！」

だいたい厨一臭すぎですよ。

こんな名前で呼ばれたら恥ずかしそうでしょ～！」

「か、かつこいい～！」

しかし意外にもアルフの受けは良かつたんです。
ええ～、将来のことを少しは考えなさい。長いですし。

「…」これは『アルフ』で決定ですね～。
少し男っぽいですが～」

「ですね。ではアルフ、これからよろしくお願ひしますね

「う、うん、よろしく」

ルルとナナは残念そうですが。
あつ、丁度いいですね。

「」でナナの会話の訓練とこもれしそう。

「はい、ナナ～。

今からアルフの名前を呼んでください～

「シ～?」(ワンワンワン)――「

案の定、拍手しました。

でもいい加減に名前くらいには呼べるよ!うしなこと。

「アルフだって名前で呼んでほしいでしょ?う～?

「へ、うん、せっかく貰ったから…」

「ね～?せり、ナナ～、せ～の」

「…………(ブンブンブン)――」

「せ～の――」

「…………(ブンブンブン)――」

「せ～の――」

「…………(ブンブンブン)――」

「…………… 呼ばねえと殺す

「……………（ブンブ…、 パクパクパク）――」

「やべく頷いてくれました。

名前を呼ぶだけなんですか、深く考えなくても良いんですよ。
あれ？リースたちが引いてますけど、どうかしたんでしょう？
アルフも半泣きですし…。

「せ、せーの」

「……………あ…………、 るふ~」

初めて聞いたナナの声は、鈴を転がしたような綺麗な声でした。

「せ、せーの」

「せ、せーの、 できたじゃないですか~」

「合格です！」

人の名前を呼ぶなんて簡単でしょ~」

「…………ね、…………兄、ちやん?」

「はー、わつです~」

「うんうん、ちやんとできていますよ。

お姉ちやんとか言った田には弔るし上げましたが。

「やつにえぱずりと疑問だつたんですが、何故ルルたちはあなたを兄と呼ぶのですか?

女性なんですから普通はお姉さんでは?」

「…あ、私もずっと不思議だつたんだ」

「…………あ?」

「お兄ちやん落ち着いてー」

「…………(「ク「ク「ク)ー.」

ルルとナナが私を抑えている間にアルテミスが説明しました。
つていうか、一年近くも一緒に暮らしていくて知らなかつたんですか
!?

「えー? 男性だつたんですね!?」

「嘘！？全然そつは見えないのに！？」

「え、ルナって男の人なの！？」

「テメエら、ぶつ殺すぞ！？」

色々と友情とか家族愛とかが深まつた一日でした。

石橋は呪を壊してつり橋を造りましょ～！」

「ああ～、もうじき無印ですね～」

『ですね。いったいどのように動く御つもりですか？』

「その時になればわかりますよ～」

それにしても、リースがいなくなつてからもう一年になるんですね～。

おかげで家事が大変です。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。
無印までもう一年しかありません。

リースは『フェイトを一人前の魔導師にする』という契約を終えて
消滅しました。

原作とは違い、フェイトの正体を知ることはなく。
これが私にできる彼女への感謝の仕方です。

心残りは原作よりもずっと少なく避けたでしそう。

「フェイトは今は～？」

『プレシア＝テスタークッサの指示でアルフを連れて出かけています。
どこかの管理外世界のようです』

「そうですか～」

とうあえずは計画は順調です。

フェイトは原作よりも強くなっています。
魔改造とまでは行きませんでしたが。

奥の手としてルルとナナの一人もいますしね。
まあ、彼女たちが活躍するのはA's以降の予定ですけど。

「それで、彼の調査は済んだのですか～？」

『はい、完了しています。

どうやら母親が管理世界の出身のようです。

父親は現地の人間ですが、執務官になっています』

彼というのは河内さんのことです。

彼は転生者なのに既にデバイスを所持していました。

これではデバイス所持のルールに反します。

それで背後を洗つてみると母親がデバイスマイスターだったことが判明しました。

父親は管理局の元執務官で、既に殉職されているようです。
あの世界で魔力持ちとは珍しい。

しかも最悪なことに、彼の父親はリンディ＝ハラオウンの知人だそうです。

うーん、状況次第では不利なことになるでしょうか？

「ま、それでもなんとかしますけどね～。

最悪、力尽くで强行突破すれば良いですしね～」

それにしても、彼は何故か私に『執心なようですね。

そして星さんと協力しているといふことは原作キャラの味方をするつもりなのでしょう。

なかなかの正義っぷりですが…。

ククク、今回に限っては大失敗ですよ、それ。

管理局を最大に利用できるのが協力者だけの特権だと思わないでください。

無印ではそれを最大に味あわせてさしあげます！

s i d e 星

私は今、家族の旅行で温泉に来ています。

家族ぐるみでの旅行なので、アリサとすずか、それに亮の家族も来て います。

もつとも、彼の家族は亮と母親の一人しかいないのでですが。

温泉を皆で堪能した後、私と亮は近くの川まできました。

別に遊びにきた訳でも散歩をするために来た訳でもありません。

今回の旅行は調査が目的でもあります。

「I J I J で良いのですか？」

「ああ、間違いねえ。

一年後、ここでジュエルシードが発動する。
そしてフェイントとなのはが奪い合つ

「了解しました。

では、時を視ます」

そして私は特典を使用しました。

瞬間、私の頭に映像が流れ込んできます。

一日後

一週間後

一ヶ月後

半年後

一年後

この辺りですね。

流れ込む情報を見る速度を落とします。

くつ、流石に一年後は辛い……！

しかしその甲斐もあり、欲しかった時間に到達しました。
そしてその映像を、頭の中に再生します。

『

りやりや～？また会いましたね～。

最近はエンカウント率が高いです～』

『はっ！そりゃ、お前がここに来ることはわかつていたんだからなー。待ち伏せするのは当然だろ？』

『わかつていた…？またそれですか～。

あなたは私の心でも読めるんですか～、星さん？』

『どうでしょ～か？

ビビリにせよ、ここであなたを倒せば同じことになります』

『それもそうですね～。

ここであなたたち二人を倒せば同

『

それに、目的の情報は手に入りました

亮に今見た映像をそのまま伝えます。

すると、亮は私をそっちのけで思案顔になりました。

「…以前から気になっていたのですが、あなたにとつてあのルナという女性はそんなに重要なのですか？」

あなたが彼女について考えている時はまるで別人のようですよ

私は目に治療魔法を施しながら彼に尋ねます。

「当たり前だ。

あいつに復讐するために俺はまた転生してきたんだ。

今度こそあの女を殺す。それで俺はあいつに復讐すると同時に教授への復讐を果たすことにもなる。

あいつは俺の全てなんだよ」

そう話す彼は本当に普段とは別人のようでした。
彼の復讐心は思った以上に巨大なようです。

しかし、関係ありません。

「なんにせよ、早く旅館に戻りましょう。

母さんたちが心配します」

そう、私は私の家族や友人が無事ならばそれで良い。
それらの平穀が脅かされるなら、その元凶を排除するだけです。

私が家族を、皆を、なのはを守ります。

s i d e o u t

チートがすきないと友達が減りますよ？

「暗い公園ですね～。

少し中央から外れるだけでめつきり人が見えなくなりましたよ～」

そしてさつきから聞こえる獣のようなものの声。
これは九歳児にはきついでしょ～。

あ、皆さんこんばんは。ルナ＝ベルツです。
とうとう原作が始まりました。

現在、ユーノ＝スクライアがジュエルシードの暴走体を封印しそう
とされています。

あ、失敗した。

そのまま暴走体は逃げ去っていきました。
そして彼は変身魔法でフェレットになりました。

そして、彼の元には一つの宝石が残りました。

「やつぱりですか～」

原作では彼が持っているのはレイジングハートのみ。
しかし事前調査によると、彼は一つのデバイスを所持している」と
がわかつたのです。

一つ目のデバイスの名は『ルシフェリオン』。

聞いたことがないこの名を聞いてピンと来ました。

「これは星さんのデバイスです。

原作の直前まで待つてみましたが、彼女がデバイスを手に入れた気配はありませんでした。

つまり、あれが彼女の特典によるデバイス。

「彼女の力が未知数である以上、あのデバイスは邪魔ですね」

なので破壊します。

茂みから出てスクライアさんの所へ向かいます。
かなり消耗していますし、私に気づくことはないでしょう。
レイジングハートは少し押借してログを削除すれば良いのです。
これで私が犯人であるという証拠は残りません。

「テメエがそうするつてのはわかつてたぜ」

声が聞こえた瞬間、私はバインドとAICOで拘束されます。
そして、

「ガツ、アー？」

背後から剣で貫かれました。

「…あ、あなたは…！」

「よひ、久しぶりだな。

お前を「ひしてやるのをどれだけ待ち望んだか」

そのまま彼は剣をグリグリとかき回します。

なかなかの外道ですね。外道検定の五級を差し上げます。

「…亮」

「ああ、わかつてゐる。

こいつは人形の方だろ？」

それもばれてるんですか。

彼が言うとおり、私は本体ではありません。
本体は引越しで忙しいのでこの魔法で来ました。
リアルタイムで繋がっていますが。

「…」の魔法のことを知つてゐるなんて、何者ですか？」

「…まだ思い出せないのか」

背後に立たれているので表情は確認できませんが、不満そつなのは
わかります。

…まさか、

「あなたは、まさか…！？」

「よつやく想い出したって遅いんだよー」

そつとつて彼は剣に魔力を込めるとい、私が自爆するよりも速くこの身体の中にある魔力を霧散させました。
「これでは自爆できませんね。」

「次は殺す」

最後にそつ聞いて、本体との身体のリンクが切れました。

「…………」

「ルナさん、どうしたの？」

作業が止まっていたのでフロイトが声をかけてきました。
おつと、これはほつかりです。

「いえいえ、ちょっと気になることがあつて~」

「そつ?何かあつたら私たちに相談してね」

「それはお互い様ですよ~」

ま、転生者については現地人には言えないんですが。
つていうか、これはアウトなんでしょう?
まさかあの河内という少年が…、

私のストーカーだったとは…！！

それならば初対面の彼が私を知っていた理由もわかります。
きっと前世で私をストーキングしていたんですね！
転生してまで私を追つてくるとは…！末恐ろしいですね。

これが執念の成せる業ですか…！
恐れ入りました。

それよりも、

「私があそこに来ることをわかつてていた？」

あのストーカーさんはそう言つていました。
尾行ストーキングでしうか？それはないです、かなり注意はしてましたし。
推理したとか？ますますないですね。

今のところで最も有力な説は、原作の重要なポイントを全て回つて
いる、ですが…。

それでは『わかっている』とは言えないのでは？

「うへん、これは保留ですね～」

今後の動きによつてはわかるでしょう。
特典だとこうの可能性だつて高いんですね。
あれこれ考えたつて今は無駄です。

「お兄ちやん、じつちがつて～！」

「はこはこ～」

とつあえずはしきを終わらせなければ。

今回の引越しにはルルとナナも一緒です。

あんな婆の所に一人を残していくなんてできません。
久しぶりに帰つたら死体でした、なんてことになつてそつです。

ふつ、あの婆め～！

私が普段から世話をしてもやつてゐることのありがたさを思い知りなさい！

s i d e 教授

ち、チート臭え～！！

なんだよあのマテリアルもどきの能力！？

初見のやつは瞬殺じやねえかよオイ！いや、理論がわかつても普通は勝てんわ！

未来視？予知能力？そんなチャチな能力じやねえ。それは特典の一端の一端に過ぎない。

下手すればランクの差なんか簡単にひっくり返る能力じやねえか！下手すればランクの差なんか簡単にひっくり返る能力じやねえか！

！？

しかし手元に送られてきた資料によると、魔力の大量消費だけじゃなく肉体への負荷もプラスさせて保つてゐるらしい。寿命削つてまで使うのかよ。

ギリギリの裏技だな。

「おじおい、ルナ。

あの転生者はやばいぜ？お前でも倒すのは苦しいかもしだねぞ」

一対一でルナが負けるとは思わないが、敵は一人だ。
油断してるとやられる。

「そんなにやばい能力なのかよ？」

「まあ、チートの中では最高クラスだな。

オマケにあいつは砲撃魔導師だ。そのせいでスペックが反則を超えてバグチートの領域に達してる

「私より強い？」

「うーん、正面きつて倒せるかもしれないのはルナとイデア、ギリ

ギリでアリスだけじゃないか？

不意打ち有りならライアとキャロもいけるかもな。
アリシアは論外だ、出直して来い」

「なんか私だけひどい！」

だがこれは事実だ。アリシアなら向こうが本気なら一秒もかからない。

『タルタロス』以外の勝利方法が思いつかん。
とんだダークホースだな。

つていうか、河内のやつ忘れられてるしwww

本当に負け犬人生だな。何回生まれ変わっても負け犬は負け犬だ。

あいつはマテリアルもどきの本当の能力を知らない、確実に。
知つていれば初戦でもっと攻勢に出ていたはずだからな。

それがあの中で一番弱いだろうし。

前もそうだったな、あいつ。

敗北の神にでも好かれてるか、悪霊でも憑いてるんじゃないかな？

チートがすきないと友達が減りますよ？（後書き）

星の能力は予知能力だけではないようです。

ちなみに、ルナはゲーム版の方の存在を知りません。

あなたのプライバシーは私のもの、私のものは私のもの

「…アルテミス、私は夢でも見てるんでしょうつか？」

『これは現実ですよ、マスター』

「いえ、しかし、ええええええ」

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

現在、引っ越したマンションの掃除をしています。

フェイトとアルフはジュエルシーードの探索に、ルルとナナは自分の部屋の掃除をしているんですが…。

唐突ですが、皆さんには『パンドラの箱』といつものを存知ですか？

パンドーラーといつ女性がその箱を開くと、中から災いが飛び出で世界に災厄を齎したという話です。

なぜ私がこのような話をしたのかといつと、リビングのテーブルに置かれた日記帳が問題なんです。

日記の裏にルルの名前が書いてあったので渡そうとしたのですが、表紙に書かれた言葉を見て度肝を抜かれました。

『お兄ちゃん観察日記』

……………え？

私の、観察日記？

これは本当に見ても良いのでしょうか？いえ、大丈夫なのでしょうか？

中を覗くのはマナー違反ですし、何より恐怖心がわきました。

「と、とりあえず少しだけ」。

失礼します、ルル～」

そして早くも後悔しました。

○月 日

お兄ちゃん、五時に起床。

その後、ジャージに着がえた後、屋外にて剣の素振り。

今日着ているジャージは先週に買った新品で、その白い生地は彼にとってもよく似合う。

木剣を振る度に周囲に汗が煌めくその姿は神々しいものであり、彼がどれだけ美しいかが一目で理解できる。

この姿は写真として記録し、ブログにも上げておこうと思つ。この広い次元世界に数多く存在する同志たちのためにも。ああ、綺麗だよお兄ちゃん。人気者のお兄ちゃん。でもお兄ちゃんは私のもの私のもの私のもの私のも

思わずクラッつときました。

なんでそんな朝早くに起きてるんですか。

つていうかブログって何！？私の隠し撮り写真を載せてるんですか！？

それに同志って誰！？数多くつてどうこいつですか！？

「…あ、アルテミスうー」

『…マスター、それは一ページ田です。

ひょっとすると次のページからはまともかもしだせんよ』

半泣きで相棒に縋ると、全くありがたくないアドバイスをくれました。

後でブログを消去するのは確定として、確かにルルの日記を初見の印象で決めるのは早計かもしれませんね。

「そ、それでは次のページを…」

×四〇日

お兄ちゃんが昼寝をしている。

彼はあの愛くるしい容姿なのに反し、絶大な戦闘能力を誇っている。寝っていても迂闊に近寄れば気づかれる。

よつて家にあつた睡眠薬で無理やり眠らせた。これで彼はしばらくは目を覚まさない。何をしても。

試しに彼の頬を突いてみるが、可愛らしい寝息以外には何も反応し

ない。

これで寝顔の写真撮影はもううん、普段は触れないといふに触つても

「ひ、ひいいいいい！」

思わず悲鳴を上げた私を誰が責められるでしょうか？
ブレシアの婆め、薬品くらいちやんとしまつておきなさい！
つていうか、あの日に昼夜が異様に長引いたのはこれが原因ですか！？

なんかもつやだ。見たくないです。

これでまだ数ページだけなのにこの犯罪臭。

プライバシーとか個人情報の保護に真っ向から喧嘩を売っています。

「もうお仕舞いです！

これ以上は私の精神がもちません！」

『しかしマスター、まだ日記は残っています。
ここまで来たら全て確認しておいた方が良いのでは？』

む、それは一理ありますね。

しかし、それにはこれを読まなければなりません。
自分が細かに観察されていくこの日記を。

私はとりあえず深呼吸をしました。

心を落ち着けて、精神を平静に保つのです。

そして私はパンドラの箱を開きました。

月 日

今日は私の誕生日だ。

家族の皆が祝ってくれた。プレゼントも貰った。
お兄ちゃんは私のためにヘアゴムをくれた。
炎のような形をした飾りがあり、それはお兄ちゃんの手作りらしい。
このヘアゴムは私の一生の宝にすると決めた。

「…あれ? 意外と普通ですね~」

『ですね。

やはり普通の田記に途中で変更したのですね?』

それなら良いですけど。

田記をつけること自体は悪いことではありますしね。
多少は安心していましたが、

夜、誕生日だから一人きりで寝させてほしいとお願いするとOKし

てくれた。

お兄ちゃんの部屋は良い香りがする。

ああ、これがお兄ちゃんの部屋の香りか。

記憶に刻むのはもちろん、全身に循環させて深呼吸を

「段々と変態チックになつてきましたよ~。

本当に大丈夫でしょうか~」

『異性の部屋の臭いが気になつてしまつのは仕方ないのでは?
それよりも続きを』

深夜、お兄ちゃんはぐつすりと眠つている。

当然だ。例の睡眠薬を彼が寝る前に飲むホットミルクに混入した。

これで何をしてもバレはしない。

普段は一緒に寝ようとするとナナがついてくるが、今日はフロイト
お姉ちゃんと寝ている。

つまり、これから周囲に田を配る必要なく好きなことができる。

その時に服なんて邪魔な布はいらないよね?

私はお兄ちゃんの寝巻きに手を掛け

「ルル——！」

その田マンションに怒号が響き渡りました。

まったく、あんな恐ろしいブログが存在していたとは！
ルルを吊るし上げて吐かせようとしたが、全く口を割らなかつたのでPCのログを漁つてなんとか見つけました。

次元世界中は私の隠し撮り
消除はしたんですか隠は世界中
写真が出回つていきました。

その画像の枚数 なんど26枚! とんだに撮ってるんですか!
田記ももちろん捨てました。シユレッターで細切れです。

「ルル、言い残す」とはありますか~?」

お兄ちゃんの「ハルシ」を侵害しながら殺されるから才加
覚悟はできるもん！ 我が人生に悔いなし！

私が死んでも第一第二の私がお兄ちゃんを盗撮し続ける!」

「良い度胸だ、小娘！」

お前のその腐った脳から破壊してやるよー！」

「…………あせ、せ

『落ち着いてくださいマスター』

ナナとアルテミスが私を押し止めようとしますが、今度ばかりは許せません！

このガキ、コンクリに詰めて海に沈めてやるー。

【マスター、彼女を殺さなくても他の転生者を殺して神界に戻れば良いんですよ。

ここで手を血に染める必要はありません。

それに、教授の『家族を大切にせよ』という言葉に逆ひりおつもつですか？】

む、それはそうですね。

しかし、ここで許したらさうにルルが調子に乗る気がするんですが。……はあ、仕方ないですね。

「…わかりました～。今回だけは許します～。

ただし、次にこうしたことしたらタダじゃおきませんよ～？」

「私の業界では」」褒美で……、なんでもありますん

今ルルが妙なことを言いましたが、早口だつたので聞き逃しました。なんだつたんでしょうか？

「アルテミス、さつあはありがと。おかげで助かったよ」

『礼には及びません。

マスターを御するのは私の仕事です』

「でも、ブログと画像が消されちゃったね。
びひじょ。これじゃあ既に兄けやんのすばまじつけられな
い」

『心配なく。画像は全て私の中に保存しております。
ブログはまた作り直せば良いんです。
それに、これでマスターもじばらくは油断するでしょう』

「流石はアルテミス！」

お主もなかなか悪よのうへ

『いえいえ、お代官様ほどでは…』

『『全ては、世界中のルナ様信者たちのために…』

田口も問題はない。

あれは23代目観察田口だしね。

整理していく拍子に置きっぱなしにしてたみたい。
ちなみに今は31代目を使つてゐるよー。

私たち一人の戦いは終わらない！！

これからもお兄ちゃんの愛くるしい姿を広め続ける！－

でもね、お兄ちゃんの全てを知っているのは私だけなの。
うふふふふ、お兄ちゃん、あなたは私のものだよ。

sideout

「いつひい！」？

「……お、兄ちゃん? どう、し……たの?」

「いえ、なんだか悪寒が…」

あなたのプライバシーは私のも、私のものは私のもの（後書き）

アルテミス、まさかの同志！？

勝てば富軍、そして逃げるが勝ちです～！

「ほえ～、良い湯ですね～」

流石は温泉です。

日頃の疲れがビシビシと抜けていきます。

あ、皆さんこんにちは～。ルナ＝ベルツで～す。
現在、私は温泉に来て～います。

バスルームとはまた違つたこの感覚は最高です。

何故か入つた途端にガン見されましたが。

【ルル～、ナナ～、そっちの湯加減はどうですか～？】

【最っ高だよ～！！】

【…ル、ルが泳ぐ、から…、恥ずか、しい…】

あ～、いますよね、そういうガキ。

周りに凄く迷惑だからやめてほしいです。

そうそう、フェイトたちはジュエルシードの探索をして～います。

アルフは後で高町さんたちを見に来るらしいですが。

え？手伝わないのかつて？

実は私、フェイトたちに黙つて一人で探索をしてるんです。
だからフェイトたちは私が家事のためにこの世界までついてきたと
思つてます。

ルルとナナも同じです。

そして私はもうジューエルシードを一つ手に入れたので、もう探す必要はありません。

それに、ストーカーたちは私とフェイトが繋がっていることを知りません。

だから見つかってしてもノープロブレム！

よつて、今日は本当にただの旅行です。

さあ、今日は存分に覗ぐぞ！

と、思っていたんですが。

「…フェイト、ピンチですね」

現在、夜です。ルルとナナは寝ています。

私はフェイトの戦いつぶりを見に近くまで来ました。
そしてフェイトたちが高町さんたちと戦っています。
しかし数の差で負けている上に、アルフは強制転移で連れ去られて
しまいました。

つまり、一対三。オマケに敵のうち一人は格上。

負けたでしょ、これは。

なので遠距離から援護をしようとしたんですけど…、

【ま、ソソシても無駄だぜ、ルナー】

私の下に白色の砲撃が飛来しました。
何故ばれたし！？

咄嗟に飛び上ると、そこには星さんが待ち構えていました。
ショーターを大量に撃ってきます。

『Sanctum Armor』

ま、効きませんけどね。

「あいやりや～？また会いましたね～。
最近はエンカウント率が高いです～」

「はっ！そりゃ、お前がここに来ることはわかつていたんだからなー。
待ち伏せするのは当然だろ？」

「わかつていた…？またですか～。
あなたは私の心でも読めるんですか～、星さん？」

私は星さんに目を向けます。

見るからに戦闘ヴァ力のストーカーがそんな戦略的なことをすると
は思えません。

つまり、黒幕は彼女です。

「どうでしょうか？

どちにせよ、ソソシであなたを倒せば同じことでしょう

「それもそうですね~。

「ここであなたたち二人を倒せば同じです~」

【フロイト、今から私が派手に引きつけますからジュエルシードを持つて撤退を~】

【うん、わかった。

アルフにも言つておくね】

うんうん、気が利く子はお兄さん大好きです。
星さん的能力鑑定の時間でもありますが。
ルルにも見習つてほしいですね。

さて、それでは陽動を始めますか。

星さんの能力鑑定の時間でもあります
なので、

「ストーカーには退場していただきます~」

「…は?ストーカー?

それって俺のこ

「

「亮、後ろです~」

『Protection』

一瞬でした。

瞬く間に星さんがストーカーの背後に回り込み、シールドを展開しました。

そして彼の背後に設置したダガーが大爆発します。
完璧に防がれてしまいました。

つて、えー！？

ちょっと、何でその重いバリアジャケットでそんな高速機動ができるんですか！？

フェイトよりも速い！？

ますます彼女の能力がわからなくなりました。

私の予想では未来予知か読心術だったんですが。

それじゃあ攻撃が読まれた理由が説明できません。

加速能力？

空間移動？

同じ理由で却下。

二つの特典の併用？

しかし、彼女の特典はおそらく身内設定とデバイスのはず。
もう余りはありません。

な、謎です。

相手の行動を読みつつ高速移動？

そんなのが可能なんですか？

「来ないならば、こちらから参ります」

そして彼女はまたしても謎の高速移動をし、私の背後に瞬間移動しました。

そのまま砲撃をチャージして発射…、つて、え？

「プラスチックファイアー！」

『Rejection』

正面きつて砲撃をガードするのは下策なのですが、それしかできませんでした。

だつて、砲撃のチャージから発射までが0・4秒だったんですよー…。

普通じゃないです。絶対におかしいです。反則です。
フェイトと高町さんの良いトコだけを取ったような能力です。
ほり、ストーカーも果然としてますし。

そのまま私は吹き飛ばされ、地面に叩きつけられました。
聖王の鎧のおかげでそんなにダメージはありませんが。

「…ありえないですね~」

『まつたくです』

再び私が空に上ると、一人はそのまま待ち構えていました。
どうやらここで決着をつけん気のようですが。

「もう降参してはいかがですか？」

今のでも私は全力ではありません。

あなたほどの騎士ならば勝負は見えたはずです

ま、マジでー? どんだけですか!?

それと、私は分類で言うなら魔導騎士です。

しかし、フロイトはもう撤退したみたいですね。
これで陽動はもういらない訳なんですが…、

「このままでは逃げられそうもありませんね~。
高町さんもこっちに来てしまいましたしね」

仕方ないですね。

もう少し秘密にしておきたかったんですが。

「では、私の特典の一端をお見せしましょう~

瞬間、私はデバイスで殴り飛ばされました。

星さんは私が何をする気かわかつたみたいです。
やつぱり未来予知？

しかもそのまま私が殴り飛ばされた先に回り込み、再び殴り飛ばしました。

砲撃は使いません。私が0・4秒もあれば逃げられるとわかつていいみたいですね。

しかし、それは聖王の鎧の前では無意味です。
凄い威力なので少し痛いですが。

さて、それでは逃げますか。

「能力発動、『ライドインパルス』」

side亮

空中でルナを殴りまくっていた星が突然止まつた。
そしてそのまま超早撃ちで遠くに二発の砲撃を放つと、そのまま降
りてきた。

「…星、何が起きたんだよ…?
さつきの能力は何なんだ！？」

「それは答えることができません。

あれは私の切り札です。そう易々と人には教えられません」

「……チツ！」

わかった、それはもう良い。

で？ルナはどうしたんだ？あれだけ食らえば流石に…」

「……いえ、逃げられました。

途中で信じられないほど加速し、そのまま一気に。

あのフィールド防御をなんとか抜こうとしたのですが、間に合いませんでした」

「加速だと？それがあいつの能力か

あいつ、ユーナを散々馬鹿にしておいて、結局は同じ能力かよ。だが、加速ならば問題ない。俺の最後の特典と相性は最高だ。次なら確実に勝てる。

(……それだけではないと思いませんけどね)

「あ？ 何か言ったか？」

「いえ、特には……」

side out

逃走完了！

危なかつたです。

まさか距離を離したのに長距離砲撃をお見舞いしていくとは思いました。

「いや～、それにしても速いですね～。

流石はナンバーズ最速の能力ですね～。感覚加速まで付いているなんて便利ですね～」

『 いえ、おそらくは本家のよりも速いでしょう』

かもしだせんね。

なんせ無駄を省き、魔力を上乗せして加速力を増やしましたし。

「 さてと、それじゃあ旅館に戻りますか？」

私も少し眠いですしね」

フェイトはもう家に戻つているでしょう。
さつき連絡がありました。

『 しかしマスター、旅館はもう転生者が警戒しているのでは？』

「 問題ありません。」

見つからずに部屋に戻れば良いんですね〜

さて、部屋に戻りますか〜。

「 能力発動、『シルバーカーテン』」

そのチートをぶち殺す！！

うーん、わかりませんね～。
さりぱりです。

あ、皆さんには。ルナ＝ベルツです。

何を悩んでいるのかといつと、星さんの能力についてです。
相手の攻撃を先読みしつつ超高速での移動と攻撃…。
今のところ星さんの能力でわかっているのはこの三つですが…。

正直なところ、全くわかりません。

最初の一つならば読心術が未来予知、後の二つならば加速系、もしくは移動系の能力でしょう。

しかし、この二つがどうしてもイコールで繋がりません。

「アルテミスはどう思いますか～？」

『不明です。

現段階では情報が足りません』

「ですよね～」

そもそも、あれで全力ではないらしいですし。
いつたいどれほどの戦闘力があるのか、皆現当も付できません。

マズイですね~。

次の戦闘で見破れなければアウトです。
その次では管理局が介入してしまいますし。

よし、

「次の市街地での戦闘で正体を暴きます~。
出し惜しみはできる限りしないでね~」

side星

私たちは今、都市部でジューエルシードの探索をしています。

亮が言うには今日ここで発動するらしいです。

今回もあるのルナという女性（同じ年のはずだから少女？）が来るこ

とはわかつています。

断片的な情報しか手に入らないとはいえ、それは確実です。
あまり先のことだとそうなるのが弱点でもありますね。

「もう遅い時間ですね。

本来ならば帰宅しなければならない時間なのですが

早く発動しないでしょうか。

私の予知によればもう発動しても良いのですが。

【亮、そろそろ発動します。準備していくださ~】

しかし、彼からの返事はありません。

届いていないのでしょうか？

「今回こそはルナを倒す」と血憤げに話していたので、帰つてはないはずですが。

【亮、聞いているんですか?】

【残念ですが、聞いてません~。】

彼は今、どこかの次元世界を冒険します~】

念話が聞こえた瞬間に魔力流が発生し、ジュエルシードが発動しました。

咄嗟にユーノが結界を張ったので街に被害はないですが。

【さてと、ジュエルシードは高町さんたちに任せましょうか~
私たちは私たちでやることがあるでしょう~?】

【…亮をどうしたのですか?】

【戦闘になるとあなたが来そうだったので、静かにどこかの次元世界に転送しました~
今頃はその世界で迷つてるんじゃないでしょうか~】

なるほど。それは気づきませんでした。

体術だけではなく魔法の技量もかなりのものようですね。

亮には悪いですが、この辺りで決着をつけた方が良いかもしれません。

【では、始めましょうか~】

その声が聞こえる前に私は半歩引きます。

すると私の身体ストレスを狙撃が撃ち抜きました。

【そうですね。

いえ、これで終わりにしましょう】

side out

む、やつぱり避けられましたか。

ライアの転送魔法を利用した狙撃を真似てみたのですが。

「アルテミス、連射しますよ~」

『Silent Owl』

あらゆる角度から星さんを狙撃してみますが、全発を回避されました。

そう、回避です。

どうやら私の矢の効果まで察知されているみたいですね。
しかし、ここで能力の可能性の一つが消えました。

読心術ならば私の思考を読んでいることになります。

しかし、彼女は一向に私の居場所にたどり着きません。
これで彼女の異様な回避能力は予知能力に決定です。

さあ、これで後はあの高速移動だけです！

あつちり解析してあげますから、存分に使ってください！」

「アイスダガー、一斉攻撃です～！」

彼女の周囲にアイスダガーを数十個転送しました。
しかし、星さんの顔に焦りはありません。
やはり予知されていましたか。

『Ice Detonation』

構わずに一斉に爆破。
ビルが数棟吹き飛びました。

しかし、私にはそんなことは田に映りませんでした。
何故ならば、

「…空間移動？え、え？」

星さんの移動は確実に捕らえました。
ライアの目を使っていたんです。どんなに速くても追いります。
その結果、あれは転送魔法の類の能力だとわかりました。
だって位置が突然変わって移動途中がなかつたんですから。
そして、それは完璧に私の特典で解析しました。

それなのに何故私がこんなに驚いているのかといふと、

「な、なんですか、あの魔法は！？」

あんな魔法がこの世界に存在して良いんですか！？」

解析の結果、あの魔法は時間魔法と空間魔法の複合であるといふ

とがわかりました。

あ、そこー。時間魔法って何だよとか思つてますね？

流石にジ○ジヨみたいなことはできませんが、物質の時間遅延や時間停止はある程度は普及しています。ロストロギアの封印に使われている封印魔法などがこれに該当しますね。

はい、ここで問題です。

時間魔法 + 空間魔法はなんでしょうか？

正解は、

「次回に続きます～」

真実はいつも一つと云ふのは偏見です！

答えはわかりましたか？

正直、私は出題者でありながら未だに答えを疑っています。
これは転生者ルールに反するのでは？

あ、挨拶が遅れました。ルナ＝ベルツです。
それでは、張り切つて答えを言つていきましょ～！

side星

私、高町星は苛立っていました。
さつきから狙撃ばかりで一向に敵の姿が見えないからです。
一応エリニアサーチで探してはいるのですが、狙撃を撃たれ続けるために集中できません。

【いい加減に出てきてはいかがですか？】

出でくるはずはないと知っていても、つい言つてしまします。
このままでは最悪、狙撃で轟り殺しにされてしまうでしょう。このままならばですが。

（使つべきでしょうか？あれを…）

あれを使えば確実に勝てる自信があるし、すぐに見つけることもできるでしょう。

その代わり、数年はこの特典を使えないくらいにダメージを負うで

しうりが。

するとい、

【やうですね～。

このままでは埒が明かないですしほ】

意外なことに素直に出てきました。

目的はわかりませんが、これは好機です。

このまま一気に勝負を…！

『戦つ前に、答え合わせをして良いですか～？』

その言葉を言われるヴィジョンが浮かび、思わず動きを止めてしまいました。

答え、まさか…！？

「…その様子だと、私が言ひ」と予知できたみたいですね～。
反応と現実のタイムラグから、5秒といったところですか～」

くつ、しまった。情報を貰ってしまった。
相手のペースに乗せられてはいけない！

「…なんのことですか？」

そもそも、そんなことを私が聞く必要は

「平行世界間を移動してるんですよね～、それ

「…………」

「ま、聞かなくても結構ですよ～？
私が勝手に話しますから～」

「まずいですね。これは迂闊に動けません。
敵が予想した私の能力は、おそらく完全に当たっています。
最悪、対策を立てられているかも…。」

「あなたの能力、それは自分がいる四次元的な距離から五秒以内の
時を流れる平行世界を自在に行き来するものです。」
つまり、あなたは私が初めて会った星さんであつて星さんではあり
ませんね～？」

移動する前とは99・99999以下エンドレスだけ同じですが、
別の平行世界からやつてきた別人。
それがあなたの能力ですよね～？」

「…………」

「未来予知は五秒後を進む世界から知識を移動させていたんですね～？」

そして、あの瞬間移動は過去か未来の五秒以内に自分が移動してい
た可能性がある世界に移動するんでしょう～？」

「…………」

「今までずっとタネを考え続けていたんですが、これは流石に誰も

思いつきませんよね~。

皆、あなたが一つの能力を使っているように思っていますって~。
それがまさか、そんな反則チートを使っているとはね~。
つていうか、戦術の幅が無限に広がるなんて反則です~。
あくまで、可能性があれば良いんですから~」

「98点といったところですね。

私の能力をほぼ理解していますが、完全正解ではありません。

……それにしても、おかしい。

私はさつきから彼女に攻撃を仕掛けようとしています。

なのに、どうして反撃に合づ光景しか予知できない……！？

「うふふふふ、わかりますよ~？

さつきから攻撃を仕掛けようとしてますよね~？でも無駄です~。

既にあなたの能力は完全に攻略しました~。

あなたはもう私に翻り殺しにされるしかないんですよ~」

「……なるほど。

いらっしゃもわかつたことがあります」

どうやら彼女の能力は解析系のようですね。
見ただけで相手の魔法を解析する。そして、それを自分でも扱える
ようになる。

それに、あの『聖王の鎧』……。

亮が言つことは、あれは嘗ての彼女の仲間の能力であつたらしいです。

「これらの特徴からわかる」とは、

「アルファスティックマ
複写眼、もしくは写輪眼ですか？」

確かに、両方とも見ただけで他人の魔法を「ペル」するとか…。
前者ならば暴走の予兆がないのは不思議ですが」

「……なんでこの世界出身のあなたがその一つを知ってるんですか～！？」

あれ、この世界にもありましたっけ～？」

「ありませんよ。

転生する前に少し勉強しただけです」

NAOHTOは少し長かったですが。

それにもしても、やはり反撃を受ける光景しか浮かばない。
おかしい、どうすれば、どうすれば良い…！
ぐつ、ijiせやはり退くべきで…。

……………んん？

「…まあ、どうにかしてあなたの勝ちはあります～

「……………」

「…どうかしましたか～？」

状況が絶望的すぎて言葉もありません

「…騙しましたね？」

side out

星さんがそう叫び的同时に、砲撃を数十発、同時に撃つてきました。
つて、数十発！？

「多っ！？」

咄嗟に避けようとしたが、気がつくと四方八方をバインドが囲
んでいました。

あ、これ死んだかも…。

そして直撃。

爆音が結界中に響き渡りました。

「…死ぬかと思いました」

『よく死にませんでしたね』

私もそう思います。アリスの最強防御があつて良かった。
『ケルベロス』って凄いですね。対私用に作つただけのことはあります。

それにもしても星さん、確かに前回のは本気じゃなかつたんですね。
手加減されていたんでしょうか～。もしくは何かリスクがあるとか?

「やはりそうですか。おかしいと思つたんです。

どんな攻撃方法を使つても反撃してくるなんて普通はありません。
それに、撤退しようとしたのに反撃される光景が浮かびました。
何か、思考を誘導する魔法を使つていましたね?」

…ば、ばれたあああ！？

はい、そうです。

あんな反則能力に対抗する方法なんて思いつきませんでした。

今ので騙されてくれればな、つて感じでハッタリきました。

くつ、アリシアめ！あなたの能力は全然役に立ちませんでしたよー。
もっと使える魔法を開発しなさい！

(え、私のせいなの！?)

これだから幻術馬鹿は！

クロスレンジも碌にできなくせに最強なんて片腹痛いんですよー。
出直してきなさい、この二下ー！

(さりにボロクソ言われた！？)

あのアホ金髪め！

そんなんだから方舟の馬鹿クイーンって呼ばれんだよー。
九九もできねえくらい馬鹿のくせによー。

(馬鹿クイーンって何！？それに九九くらいでできるよー！？)

わて、これからどうしましようか。

星さんはかなり怒ってるみたいですし。
見逃してくれたりはー、

「私を口ケにしてくださったお礼です。
これから、私にでき得る限りの全力であなたを殺します」

無理そうです（涙）
誰か助けてー！

「お見せじましょう、私の特典の真髓を。
せめて一秒はもつてくださいね？」

そして私は改めて思い知りました。
彼女の特典は反則です。

『Parallel Theater』

星さんの『デバイス ルシフリオン』の電子音が響きます。

それが私には死刑執行の合図に聞こえました。

： 私、死ぬんでしょうか（涙）

真実はいつも一通りのは偏見です！（後書き）

次回、星が本気を見せます！

裏切り、裏技、不戦勝が私の三原則！！

s i d e o t h e r

「え、え～と、帰つて良いですか（涙）」

「却下です」

ルナの泣き言は一刀両断された。

しかし、ルナと同じ立場に立つた者ならば同じことを思つだらう。なにせ状況が状況だ。

「…星さんの能力って、平行世界の移動ですよね～？
てっきり私はちょっと過去をやり直せたり、少し未来が見えるくらいの能力だと思ってました～」

しかし、星の力はその遙か上を行つていた。

それはルナの前にいる八人の星の姿が証明している。

「まさか、他の平行世界の自分を呼び出すことができるとは～。
絶対に能力制限を破つてますよね～？」

そう、星の奥の手とはこれだつた。

平行世界に存在する自分をこの世界に呼び出す。

しかも全員が元の星と全く同じ実力なのだ。いきなり敵の戦力が八倍になれば卑怯だと思うだろ？

「これが私の全力、『パラレルシアター』。

主演は私、脚本も脇役も観客も私の殺戮劇です。もちろん最後はバツドエンドですが」

瞬間、八人の星の姿が搔き消えた。

四方八方に散った星は、一人一人が数十発の砲撃を放つてくる。その合計は数百発に相当する。全方位からの面の攻撃だ。

「どないせえっちゅうねん！？」

『Ride Impulse』

ルナも負けじと加速による回避を試みるが、流石に分が悪い。数発の砲撃を受けてビルに叩きつけられる。

たかが数発だが、一発一発が並みの魔導師を一撃で墜とす必殺の魔法だ。

流石のルナも限界ギリギリである。

「…」れで能力のレベルが落ちないなんて絶対に変ですよ。
何かリスクか制限があるはずなんですが〜

星の能力を完全に解析したルナだからこそ言える。あれは普通じゃない。絶対に何かカラクリがある。

『マスター、彼女の魔法を使用してみてはいかがでしょう？』

「無理です。さつき試しに使いましたけど、三秒先の未来予知が限界でした。」

世界間の移動なんて夢物語です。」

そもそも、星とルナでは体質からして違うと言ひ。人間が魚の体の構造を理解してもエラ呼吸ができるのと一緒に。完全なコピーというのが不可能らしい。

「でも、あの魔法の弱点は見つけました。所詮は未来の自分の知識しか手に入らないんですよ。五秒後の自分が知らないことはわからないんですね。」

『？』

「あはは、わかりにくかつたですか？」

つまり、気がついたら死んでいたって状態にすれば良いんですよ。」

しかし、それでは確実とは言いがたいですね。特典に頼りすぎていて危険です。

…あつ、そうだ。

よく考えれば、わざわざ彼女と戦う必要なんてないじゃないですか。彼女の、最っ高の足手まといを使えば…。

『… フェイト、聞こえます～？』

side out

side 星

彼女を砲撃で吹き飛ばしたのは良いのですが、砲撃の数が多くて見失つてしましました。

この辺りは要改良ですね。

「………… グツ、ゲホッ！」

すると突然苦しくなり、咳き込んでしまいました。

口に手を当てるど、その手には少量ですが血が付着しています。

「魔法を数分維持しただけでこれですか…」

この『世界移動魔法』は絶大な力を得ることができます。その代償として身体に相当の負担がかかり、ここまで大規模な魔法をこのまま使えば数年は戦えなくなるでしょう。

「… 関係ないです。

ここで彼女を倒せばそれで終わりです」

そして彼女の捜索に戻らうとしました。
しかし、

「… ツ！？」

「これは、魔力反応ですか？」

五秒後に莫大な魔力が一つのビルから溢れるのを察知しました。
それは、

「あそこですか」

瞬間、全員の集中砲火がそのビルを襲います。
一瞬にしてビルは周囲のビルごと吹き飛び、跡にはクレーターしか残つていません。

「…なかなかの強敵でしたが、最期はあっけなかつたですね。
ともかく、これで他の転生者を打倒するという目的は終了です」

亮とは別に戦う必要はないと神に言われています。
つまり、これで私は自由になつたということです。
私は未来視をやめて、よつやく戦闘態勢を解きました。
周囲にいた平行世界の私も消えていきます。

「亮には悪いですが、これで

【はいはーい、それでは一方的な脅迫を開始しまーす！】

「
なつ！？」

突然聞こえてきた念話に、私は耳を疑いました。
彼女は確実に殺したはず！？それなのに、どうして…！?
未来視を再び使い、私は攻撃に備えました。

しかし、もう先程までのように戦うこととはできません。

思つた以上に『パラレルシアター』は身体に負担をかけていたようです。

身体が重い…。

「お～お～、星さん、お疲れのようですね～？」

【残念、さつきのは私の人形です～。
私はコツソリ脱出してたんですね～】

すると、目の前に彼女が現れました。
フェイドとその使い魔も一緒です。

氣絶したなのはを連れて。

「なのは！？」

「動いたら殺す」

ルナと一緒に現れたフェイドが、なのはの首元に魔力刃を押し付けます。

それだけで私は動けなくなりました。

「…どうして！？」

なのはがあなたに大敗するなんて…！」

原作と違う！

それにユーノもいたはずです。

それで私に助けを求める間もなくやられるなんじが…！

それにどうして彼女がルナと一緒にいるのです！

まさか、初めからグルだつた？

「確かにこの子は強かつた。

でも、私の方が強かつた。ただそれだけだよ」

「アタシたちを舐めんじゃないよー！」

そんな馬鹿な…！？

彼女たちの強さが原作と違つ…？

「ふふふ、私の生徒は優秀でしょー？

飲み込みも早くて、教える側としても楽しかったですー」

そこでようやく私は理解しました。

フェイドを裏から操つていたのはプレシア＝テスタークロッサではなくルナであるということを。

「それで、肝心の脅迫ですが〜。

とりあえずは持つて居るジュエルシードを全部いただきます〜？」

【もちろんこれは建前ですよ〜？

本当の要求は、この戦いからの脱落です〜】

会話をしながらルナは念話で話しかけてきました。
くつ、卑怯な…！

今、私は全力で未来をシミュレーションしています。

砲撃の雨、背後からの強襲、他にも数パターン。

しかし、どれをやってもルナがなのはの首を刎ねてから吹き飛ぶという光景にしかなりません。

何か、何か手は…！

「返答はどうですか？」

【無駄ですよ～。

私は0・1秒あれば高町さんの首を刎ねられます】

その言葉に私は絶望しました。

それ以上速くなんて、どうやっても間に合いません。

「…わかりました。

私が持つジュエルシードをお渡しします

【だから、どうか見逃してください…！

お願いです…！】

「そうですか～。でも、それって本当ですか～？
渡すふりをして不意打ち～とかしちゃうですか～？」

【わかつてないですね～。

正直、私にはもう勝利する方法なんてないんですね～。
だから本当は高町さんを道連れに爆死する気だつたんですよ～？
せめて今後に響く最期が良いな～って】

その言葉に私は戦慄します。

なのはを道連れに爆死？そんなこと……！

【絶対にやせません！】

【でしょ～？

ですから、あなたの為を思つて、諦めていた勝負にわざわざ勝つてあげようと思つたんです。

あ～、本当はもう勝ちなんて諦めていたんですけどね～？
第一の人生もこれまでか～、残念だな～、つて思つていたんですよ～？】

「…！」

【ほらほら～、早く私に負けを証明してくださいよ～。

そつすれば諦めていた勝利を私が手に入れる代わりにあなたの大切な家族を返して差し上げますから～】

。 。 。

「…お願いします。

もう私の負けです…！ですから、なのはを返してください…！」

私はできる限りの気持ちを込めて、彼女に頼みました。
頭を下げる以外にできる」となんて私にはありません。

悔しい…！

こんな卑怯な手で敗北することになるなんて…！

しかし、

「頭を下げるくらくなら誰にだつてできます～」

【脱落が許されるのは、心の底から敗北を認めた時だけですよ～？
まだ諦めていないみたいですね～】

「…そんな！？」

【では、私はどうすれば良いのですか…？】

もづ、これ以上の敗北の証など…。
しかしルナは簡単だと言いました。

「【跪いて私の靴を舐めていただけます～？】

side out

side亮

俺が戻ってきた時、全ては終わっていた。

結界は既に残つておらず、街は喧騒を取り戻していた。

【星、なのは、ユーノ！

返事しろー無事かー?】

必死で三人を探し回ると、とあるビルの屋上で氣絶している三人を見つけた。

どうやらルナに敗北したらしい。

見た感じ、三人とも怪我はないようだが…。

「おい、おい三人とも!起きろ!」

すると、星が一番に目を覚ました。

「星、大丈夫か!?」

「…はい、大丈夫です」

星は軽く自分の身体を確かめた。
どうやら本当に大丈夫らしい。

そして、俺はさつそく星に状況を聞こうとした。
特典を使っても倒せなかつたのか、と。

しかし、

「星、お前とく

ツ!?」

話せなかつた。

特典という単語がどうやっても。

喉から声が出ない。

必死に声を出そうとするが、全く『特典』から先を話せない。

(どうこいつことだよ、これは！？)

すると、星の足元にメモ帳の切れ端を見つけた。
そこにはメッセージが書かれている。

宛先は俺、差出人は…、

「…ルナ！？」

それを拾い上げ、急いで目を通す。
そこにはこうつ書かれていた。

『ストーカーさんへ

星さんは脱落しました～（^○^）／
いや～、これで残りはあなた一人ですね～（笑）
ザマミロ～www

ルナより』

星が脱落した。

その事実を俺は信じることができなかつた。

しかし、認めるしかなかつた。

転生者についての情報、つまり特典について話せなかつたのだ。
つまり、星はもうこの世界の人間だ。
前世の記憶なんて欠片も残つていない。

もう、俺の真の味方は誰もいなかつた。

s i d e o u t

ルールとマナーを守って楽しく外道をしましょー。

「ククククク、にゅーはつはつはつはつは！」

愉快痛快、こんなに楽しいのは久しぶりです！

あ、皆さんこんちは！ルナ＝ベルツです！

なぜ私がこんなに機嫌が良いのかといつと、久しぶりに他人を陥れたという快感に酔っているからです。

いや～、なんだかんだ言って私も方舟の一員なんですね～。こう、人が悔しそうにしているのを見るとゾクゾクするといつか。私ってSなんですかね～？

「やついえ、そろそろ管理局が介入してくるんですよね～？」

『予定では今日の戦闘です』

なるほどなるほど～。

つまり、今日が勝負といふことですね～。

「ククク

確か、ストーカーとハラオウン家は知り合いでしたね～。

つまり、彼はここで一気に戦力を増強すると同時に管理局を味方につけるつもりです～』

しかあ～し！

そうは問屋が卸しません！

今日の戦闘が決定打になるのはそちらの方です！

「ふふふ、せいぜい墓穴を掘つてください～。

掘削作業があなたの仕事ですよ～。生き埋めにしてあげます～」

そういえば、今日はフレシアの婆にフロイトが報告に行くとか言つてましたね。

どうしましたか、放つておくれのもアレですしね～。

「フロイト～、こませんか～？」

するとリビングからフロイトが走つてきました。
「ひ、廊下を走つてはいけません。

「なに、ルナさん？」

「今日つて庭園に帰るんですね～？」

「うそ、そうだよ。

後で母さんにお土産を買つていこうと思つてるんだ

…うわ～。この顔…。

完全にあの婆を信用しきつてますね～。

大丈夫でしょうか～？

「フロイト、またフレシアさんが虐待紛いなことをしてたら逃げなさいね～。

自分で働かないあの人そんなん資格はないんですから～」

「…でも、それは私が悪いから」

あちやー、こりゃ黙田ですね。

こいつ、ただのマザゴンじゃないー。よく訓練されたマザゴンだよー。

【アルフー、聞こえますー?】

【なんだい?】

【あの婆が鞭打ちでも始めた時には、フェイトの意思を無視してでも連れ帰つてくださいねー。】

私が許しますー】

【…あいよ。

アタシもあれはやつすきだと思つてたんだ】

ふうー、これで一安心です。

side亮

いつもと変わらない学校からの帰り。

なのはと星と分かれて帰る普段通りの道だ。だが、変わつてしまつたことだつてある。

もひ、星は俺の味方じやない。

星がいなければ、俺は完全に後手にしか回れなことじやないことに気づいた。

星がいなければ、もうフォローをしてくれるやつがいないことに気づいた。

星がいなれば、俺は…。

「駄目だ！ネガティブになるなー！」

そうだ、次の戦いで決着をつければ終わる！
ルナの能力は加速だ。ならば俺の特典にかなうはずがない！

「そうだ、今田はクロノたちも来る。

これであいつらは完全にチェックメイトだ」

リンディさんとクロノとは古くからの交流がある。
親父が本局の執務官だったからだ。

それで、年に一度くらいのペースで会つてもいる。
最悪、無印を乗り切ればあいつは袋の鼠だ。
世界中があいつの敵なんだからな。

すると、

「…ッ！？」

「これは、ジュエルシードかー！？」

ジュエルシードの反応があつた。

今日で終わりにしてやるよ、色々となー！

【亮君、ジュエルシードだよー】

【私たちはこれから向かいます。

あなたも急いでください】

【わかった。

俺もすぐに向かう】

ルナ、今日でケリだ！

「カリバーン、セットアップ！」

『Standby, ready, setup』

そして俺が暴走の現場に着くと、そこではもう戦闘が始まっていた。なのはと星、フェイトの三人が暴走体と戦っている。

「…ルナはどこだ？」

辺りを見回すが、どこにもいない。

今日は来ていなか？

『マスター、上です！』

「なに！？」

真上を見上げると、太陽に隠れて影が少し見えた。
それは段々と大きくなり、

「氷華一閃！！」

ルナが襲撃してきた。俺はそれを咄嗟にかわす。
基本、あいつの攻撃を受け止めるのは危険だ。

バリアは凍らされるし、剣は絡め取られる。つまり、避けるしかない。

「へへ、とうとう来たかよ。

今日で全部を終わりにしてやるー！」

「そうですか〜。

でも、私も負けるわけにはいかないのです〜」

そう言ってルナは斬りかかってきた。

俺も零落白夜を展開して応戦する。

お互に鍔迫り合いをするようなことはしない。

どちらの剣も、触れるだけで一撃必殺のものなのだ。

全ての斬撃をかわし、その隙を逃さない。

「…やりますね〜。

まさかこんなに高度な戦いができるとは〜。

素直に感心しました〜」

「そりやかよ！

だったら俺の本気を見せてやるー！」

行くぞ、カリバーン！

「トランザムー！」

『TRANS - AM』

彼の魔力が全身から噴き出し、その身体が魔力光で白く染まりました。

感じられる魔力も激増し、リミットブレイクよりも能力を引き出しているようです。

だからこそ私は言いました。

「それは作品が違へつ……」

思わず叫んだ私は悪くないと想います。
だってトランザムですよ……トランザム！

もひとつ統一感を出しちゃうよ……

どんだけロボ系が好きなんですか、あなたは……
節操がないですね～。

「それがどうした！

これでお前の加速対策は万全だ！
その他の能力も上がっているんだぜ？
負けるわけがねえ！」

そう言って彼は突っ込んできました。

うわ～、面倒です～。

『Ride Impulse』

私も加速し、彼の速度に合わせました。
う～ん、確かに速いんですけどね～。

まあ、今回の戦いでは有効かもしません～。

『マスター、どうなれこますか？』

「私の答えは決まってますよ～？」

「彼がどんなことをしようとも、もう管理局が来ますしね～」

なので私は、

正々堂々、全力全開で、

「弱々しく負けでみせます～！」

side亮

俺がルナに突撃すると、あいつは加速の能力を使って応戦してきた。
しかし、トランザムの中は馬力が違う。

剣を打ち合つてみてわかつた。

「IJの勝負、勝てる!」

すると、

【本当にそうですか~?】

ルナが念話で話しかけてきた。

高速戦闘において、戦闘中に直接話すのは舌を噛みかねない。
だから俺も念話で応えた。

【当たり前だ!

お前もわかっただろ?

トランザムの最中は速さ以外の能力も上がるんだよ!
もうお前に勝ち目なんてねえ!】

【そりでしょか~?

それにしてもその言葉、昨日の星さんも言っていた気がします~。
あの負け犬さんのね~】

【星を馬鹿にするな!】

俺は頭に血が上り、零落白夜を全開にしてあいつに斬りかかる。
すると、今まで避け続けていたあいつが受け止めた。
馬鹿め!受けきれるはずがないだろうが!

予想通りルナは吹き飛ばされ、使っていた変身魔法も解けた。
どうやら零落白夜に無効化されたらしい。

その表情は今まで見たことがないくらい弱々しいもので、俺は勝利

を確信した。

【はつ、デカイ口を利いた割にはたいしたことなかつたな！】

これで復讐ができる。

大和の、コーナーの、ホクトの、星の仇が討てる！

【ふ、ふう～ん、ふくく、そ�ですか～。

じや、ちやつちやと終わらせればどうですか～？ふすす～】

表情とは違ったその挑発的な態度に、俺の理性は吹き飛んだ。

そして俺は、

「死ねええええ！」

零落白夜を振り下ろした。

しかし、

「ストップだ！」

その声が聞こえた瞬間、俺はバインドに捕まっていた。
この魔力光は、クロノか！？

「亮、君は何をやつている！今のは殺傷設定だつただろ？
僕が止めていなければ殺していたぞ！」

その言葉に俺はハツとなつた。
そうだ、俺は何を…。

「う、うわ～ん、助けて執務官さ～ん！」

すると突然ルナが動き出し、クロノの後ろに隠れた。
は？どういうことだ？

「君は、あの金髪の子の仲間か？」

「そ、そうです。」

あの子に攻撃しようとしていた彼を見つけたから氣絶させようとした
たら、彼が突然殺そうとしてきて～！」

【傍から見ればそうなりますよね～？】

ルナが泣きながらクロノに訴える。

同時に念話で俺に話しかけてきた。何のつもりだ？

「それはこちらでも確認した。」

突然彼が殺傷設定で攻撃を始めたのもだ

そしてクロノがこちらを責めるように見てきた。
どうか…あいつの狙いは…！」

「わ、私はずっと非殺傷設定だったのを良いこと、彼が無理やり
～！」

「う、うひひ、殺されるって思いました～」

【本当にですよ～？】

私はずっと手加減していたんですから～】

「わかった。一先ず、君にも同行を願う。

状況を説明してくれるならば君の安全は保障する

「あ、ありがとうございます～」

【私を殺したければどうぞ～？】

その時は全力で逃げるだけです～。

まあ～？管理局に～？逆らつてまで～？殺したいならですか～？】

「て、テメ～！」

俺は怒りを抑えるしかなかつた。

そうだ、全部あいつの言うとおりだ。

傍から見れば危険なのは圧倒的に俺で、あいつは保護されるべき人間だ。

貴重な情報源もある。

完全に嵌められた！

管理局の到着を待っていたのは、あいつの方だったんだ！

「ど、どうしてそんなに睨むんですか～？」

【あなたに睨まれる覚えは…、あー!】

すると、ルナが（念話で）声を上げた。

「あの、何ですか～？」

【あなた、キングオブ負け犬の河内さんじゃないですか～。キヤロのサンダバックになつて死んだ～（笑）

あまりに情けない面だつたんで忘れてました～】

「いっ…！」

「そ、そんなに睨まれても困ります～。
ジユエルシードは逃げたフェイトが持つているので～」

【私の中では、負け犬＝あなたんですよ～。
うわ～、どうでもいいこと思い出しちゃいました～】

「…テメエ！」

すると、クロノが間に入ってきた。

「亮、やめないか！

君と彼女の間に何があつたかは知らないが

「

「初対面ですよ～？」

「この街に来てから初めて会いました～」

【そりでしょ～？
転生者の河内さん～？】

こいつとの因縁を話すには、どうしても転生者システムを話すしかない。
だが、それはルールに反するから不可能だ。

ルールを逆手に取られた俺になす術はなかった。
もひ、俺にはこいつと戦う方法すら残されていなかつたんだ。

【ふすす これからしばらくお世話になりますね～？
危険人物の負け犬河内さん～？】

side out

あつがとつて素敵な言葉だよなー（前書き）

今日は珍しく教授がメインです。
ひょっとすると今後に影響するかも…。

ありがとうって素敵な言葉だよな！

うーん、流石は管理局の次元航行艦。メカメカしくて私好みの内装です。これで変形とかしたら田舎なんですが〜。

あ、監視にこなには。ルナ＝ベルツです。

現在、私はクロノ執務官に連行されアースラにいます。このまま牢屋へガシャーンとかを予想していたのですが、意外にも艦長の下へ連れて行かれるらしいです。そこには高町姉妹とスクライアさんもいらっしゃるとか。バインドで両手を拘束してデバイスを没収しているとはいえ、少し無用心すぎるのでは？

「どうやらわたくし思つてゐるのは負け犬ストーカーだけのようですが。わたくしからジロジロといひを睨んできます。

そしてじぱりく通路を歩き、とある扉の前でクロノさんは止まりました。

「いいだ。

艦長、重要な参考人を連れてきました」

そして扉が開くと、

【うわ～、なんという似非ジャパン…】

【それは艦長には言わないでやつてくれ】

盆栽、羊羹、茶釜に番傘と来ました。
これを似非と呼ばずになんと呼ぶと?

「あらあら、どうぞ一人とも座つてちょうどい」

艦長がそつ言つので座らつとしたのですが。

「正座ですか」。

ますます似非臭いです。

そして座つたのですが。その、配置が。
艦長さんたちから見て、

私　　ストーカー　星さん　高町さん　スクライアさん

つて感じになりました。

なんか、私だけが疎外感バリバリです。

私が一步寄ると、必ずストーカーがこっちを睨みます。

なんなんですか?

私はただ羊羹をいただきたいだけなのに。

あ、でも両手を拘束されているからどの道食べられませんね。

私がどうやって羊羹を食べようか悩んでくると、

「…い、おい君、聞いているのか?」

「ほえ?」

執務官さんに声をかけられました。

あ、よひやくロストロギアがどうとかの話が終わつたみたいで
す。

「あ、すみません～。聞いてませんでした～」

「まつたぐ。君の事情聴取をすると書つてあるんだ。
まずは名前と出身世界を」

「はいはい～。

名前はルナ＝ベルツ、出身世界は……」

よく考えると、私の出身世界ってどこなんですかね？

前世は方舟ですから次元空間ですし、今回はトリップですし。

「どうかしたのか？」

「…いえ、たぶんミッドチルダなんじゃないですかね～。
物心ついた頃には一人旅をしていましたので～」

「一人旅？家族はどうしたんだ？」

「いませんよ～、そんなの。

あえて言つならば」「バイスですね～」

「…そつか。

悪いことを聞いたな。謝罪する

「…？」

「いえ、お嬢になさいや～

……え?

「なんで私は謝罪されたんですか?」

「ルナちゃん…だよね?」

あの子、フロイトちゃんとはどうしての関係なの?」

「……………やん、だと?」

「……………」

「ルナちゃん?」

「…いえ、なんでもありません。」

私は彼女の家庭教師みたいなものでして」

「そうなんだ。」

それじゃあ、どうしてフロイトちゃんが戦う理由とかもルナちゃん
は知つて

「

そこで高町さんが黙りました。

それどころか、部屋全体の雰囲気が悪くなっています。

星さんはなぜか私を見ようとしません。全力で田を逸らしています。

「…どうかしましたか?」

私は高町さんに声をかけただけなんです。

それなのに彼女は半泣きで首を振っています。

「あ、あの、ルナさん、何か、私つて気に障る」と、を言いました、か？」

高町さんが震えながら敬語で聞いてきました。
はて？ 気に障る？

「別に何も？」

強いて言つなら、私は男子なので『ちゃん』付けで呼んでほしくないですね」

「えつ！？ 男子！？」

そんなに可愛「何か言いましたか？」… いえ、なんでもないです」

はて？ 一瞬ですが執務官さんが戦闘体勢になつていていたような。星さんも高町さんの手を握つて震えています。
あれ～？ 私に関する記憶も消えたはずなんですが～？

すると、今まで無言だったストーカーが、

「お、お前、男だったのか！？」

嘘だろ絶対！ 男の娘なんてのが現実にいるわけ

」

「男の娘って言つんじゃねえ！」

反射的にシャイニングウェザードを炸裂させた私は悪くないと思います。

足が自由だったのが悪いんです。

s.i.d.e 教授

俺は今、最高神クラスの者のみが参加できる会議にいる。会議といっても、俺を含めて三人しかいないが。

「… で？」

わざわざ呼び出した理由はなんだ？
くだらない用なら俺は帰るぞ」

そう言いつつも、内容などわかっている。
どうせセカンドチャンスが闇討ちだろ。

「… 我々にはもう勝ち目がない。
よつて、このゲームはここで終了だ」

へえ〜。

潔く負けを認めたか。

「おいおい、まだ転生者は一人残っているぜ？
そいつに期待しとけば良いだろ？」

「… 私の転生者ではあなたの天使には勝てん。
不本意だが、一度言つたことを取り下げるのは神にあるまじき」と
だ。

ならば、潔く身を引くのが筋だろ？

ふ〜ん、潔くねえ。

「つまりねえな

「なに？」

「つまらないって言つたんだよ。
ここは俺にチャンスを譲つか、闇討ちしても神の座を手に入れる
ところだろ？
なに勝手に諦めてんだよ」

凄まじく不快だ。

あれだ、ゲームの終盤でもう勝てないからいつフマミコンのコンセントを引き抜かれた時の感覚に似てる。
お互いに勝敗はわかつていいが、釈然としない。

「よつて、俺が勝手にお前達にチャンスをやる。
これで負けても俺は文句は言わねえ。
どうだ、乗るか？」

「 「…………」「

お～お～、悩んでるな～。

プライドと世界の平和を天秤にかけているんだね～。
馬鹿だね～。俺だったら躊躇なく再戦するぜ？

プライドってのは勝利するためにあるんだよ。「負けても良い勝負
をしたから満足だ」とか「フェアプレー精神で頑張った」とかは、
俺から言わせれば負け犬の遠吠えだ。

そこが俺ら『ベルツ』とお前らの差なんだよ。

「…わかった。

ではもう一人だけ転生者を「はい、ストップ」…なんだ？」

おいおい、それはないんじゃねえの？

「チャンスをやるとは言つたが、これは俺の純然たる好意からだ。
それを当然のように受け取るのが神なのか？ だつたら見下げ果てた
ぜ」

「…なにが言いたい？」

「貴様が私たちに勝手に渡したのだろう！
まさか、それに礼を言えと言つのか！？」

「そうだ。人に助けてもらつたら感謝するのが礼儀だろ？
ああ、神にそれを言つなんて釈迦に説法だつたな。
それくらいわかつて当然だ」

くくく、果然としている一人を見ていると次々と外道なことが思い

つべ。

『三回回ひハコソヒ言ふ』とか、『私は豚ですと言ふ』とか。

「…………感謝する」

「…………」

金髪の青年の神は感謝の言葉を述べたが、赤毛の少女の神は一向に何も言わない。

ここでもプライドが邪魔しているらしい。

本当に馬鹿だな。これは勝つための代償なんだぜ？

つまり、必要経費だ。

割り切れよ、最高神さん？

「おじおい、最高神は感謝の言葉も知らないのか？
なら俺が教えてやるよ」

そして俺はそいつに近づき、

「土下座して、ありがとうございましたって言つてみだよ」

無理難題を吹つかけてみた。

「……貴様、図に乗るのも大概にしるー。」

「それはこっちの台詞だ。

お前が頭を下げるだけで世界の平和が守れるかもしれないんだぜ？
お前の頭がどれだけ高価なのは知らねえが、プライドなんて安い
もんだろ？」

くくく、楽しいな
わあ、どうする？

「せうか、そこまで嫌なら別に良い。
世界は俺が譲り受けれるぜい。ああ、どうしようかな。
色んな世界で治療不可能な疫病を蔓延させつか？いやいや、天変
地異も悪くないな」

そうして背を向けた俺に、

「…待て。ま、待つて、ぐださい」

か細い少女の声が響いた。
振り返ると、その顔を羞恥に染め、悔しそうに震える最高神の姿があ
つた。

「なんだ？

俺はこれから忙しくなるんだが」「

すると、そいつはそのままの場で頭を地に付けた。

「わ、私たちに機会をくれたって、か、感謝しています…。
あ、ありがとうございました…！」

「うわ～お、本当に言つたよ。

半ば諦めていたんだが…。

かあ～、正義の神様は辛いね～。

「ほこほこ、よく言えました～。

そこまで感謝されたら俺もやる気になっちゃうな」「

だ、駄目だ。まだ笑うな。堪えるんだ。
やばい、やっぱ無理かもしねー。

「それじゃ、お前達一人に転生者を一人やるつ。
今から参加するのは厳しいだろ？から、介入はA-sからとする。
それと、魂は俺が選ばせてもらつぜ。安心しろ、原作キャラの仲間
になろうとするだろう人間を選ぶからな。
これが条件だ」

「わかった」

「…異議なし」

そして俺は死亡した人間のリストから一人を選び出した。
こいつならば面白い展開になりそうだな。

そして、そいつを目の前に呼び出す。

いたつて平凡な男が目の前に現れた。
さて、最初が肝心だからな。きつちり転生してもらわないと。
拒否されたら転生させられん。

イメージは某QBさんで。あの人（？）は俺の心の師匠だ。

「くくく、せいぜい楽しませてくれよ？」

黒報は寝て待つけど田が洗えて眠れません

s.i.d.e ハフイト

ルナさんが捕まつた。あの強いルナさんが。
その事実に私たちは驚愕

「うさ、 計画通り（一矢つ）」

「上手く捕まつたみたいだね」

「する」とはなく、 計画が思つたとおりに進んだことを喜
んでいた。

事の発端は数日前のことだった。

ルルとナナを含めた全員を集めたルナさんが、

「私、自首しようつと思つたです~」

そう言つたのが最初だった。

初めは全員が何を言つているのかわからなかつたけど、段々と理解
が追いついてきた。

それはつまり、私たけや母さんを裏切ることだ。

「ちよつとルナ！ なに言つてんのやーー？」

まさか、アタシらを裏切るつもりかい！？

「まさか～。良いですか～アルフ。

冷静に考えて、もうじき時空管理局が出張つてきます～。
ロストロギアがばら撒かれたんですよ～？
スクライアが通報しているはずですよ～」

それは、確かに。
でも、

「母さんの願いは諦めない」

そう、それは絶対にだ。

管理局と戦つことになつても私は諦めない。

「はあ～、わかつてませんね～。
自首するのは私だけですよ～」

「ルナさんだけ？」

「はい、そうです～。
フェイドがフレシアさんの望みを叶えたにしろ途中で失敗するにし
ろ、最後は管理局に捕まります～。
わかりますね～？」

「そんな」とはない！

ルナさんに出会わなかつたらきっとやつていただなかつ。
でも、今の私ならば理解できる。世界は、時空管理局はそんなに甘くない。

私よりも強い人はたくさんいるし、きっと最後は捕まってしまうだ
う。

「ですから先に私が捕まつておいて、向こう少のことを説明し
ておけば良いんですよ。」

そうすれば情状酌量の余地有りと判断されやすくなります～」

つまり負けるのは前提だけ、その後のことを考えてのことだとい
うことらしい。

確かに、それならば。

「いやだよ！」

お兄ちゃんと会えなくなっちゃうなんてやだー！」

「…………やー！」

けど、ルルとナナは猛反対した。

気持ちはわかる。私も母さんがそんな立場になつたら同じことを言
うだろ？

「あのね～、根性の別れになる訳じゃないんですよ～。
長くても一ヶ月くらいです～」

「でも嫌なのー！」

「…………（ノクノクノク）ー。」

そんなやり取りがしばらくあつたけど、最後は一人とも納得してく
れた。

「それじゃあフェイト、アルフ。私は管理局が来たら自首するので
」。

ルルとナナのことをお願いしますね~」

「うん、わかった」

「二人の『ご飯とかはアタシがなんとかするからや。遠慮なく捕まつてきな」

といふことがあつた。

きつと今は管理局の次元航行艦の中だらう。上手くやつてると良いけど…。

side out

「ふあ~、暇ですね~」

アルテミスもいませんし、完全に一人です。流石に四日も閉じ込められていれば暇になります。

ああ~、誰か話し相手が欲しい。

あ、皆さんどうも。ルナ＝ベルツです。

現在、護送室で軟禁状態です。自首したとはいえ私は紛れもない犯罪者。

しかも次元レベルの大犯罪。当然の扱いです。
別にそれは良いんですが、話し相手がないので退屈です。

あ、そうねー。

事件についてはプレシアさんの指示でやつていいところ」とや、彼女の戦闘スタイルくらいしか教えていません。
拠点はダミーを教えてありますし、人造魔導師などの云々は当然話してくださいませ~。

だつて私に不利なことですし。

「あ、あの~、ルナちゃん、君、起きてる?」

すると、何故か高町さんが訪ねてきました。
後ろには星さんが。

ちなみに、私は自首したといつのもあり面会は自由です。

「ありやりや~? いつたいぢ~したんですか~?
何か私に用でも~?」

「ううん、ちよつとお話をしたいな~って思つて。
フヨイトちゃんとは少し話したけど、あなたとは全然話したことがないでしょ?」

そういえばそうですね。

前世を含めて彼女とは会話をした覚えがありません。
しかし、いったい何を話せば?

「そうですか~。ではどうい~

「...えりかって?」

「何か話したいことがあって来たんでしょ」「？」

「そう言わると何を話せば良いかわからなくなつたよ」「」
高町さんは惱んでいます。

「……」「ん、じゃあ自己紹介！」

私、高町なのは！なのはって呼んでね？」

「これはこれは～。改めまして、ルナ＝ベルツです～。
気軽にルナとお呼びください～。

それと、これでも性別は男なので、女呼ばわりしたら殺します～」

「……」「ん、氣をつける」

殺すのところで星さんが肩をビクッと震わせました。
そ、そんなに怯えなくとも…。

「それでルナちゃん、君はフュイトナさんの家庭教師なんだよね？
でもルナちゃん、君ってあの子と同じ年くらいでしょ？」

「おー、今だけで何回『ちやん』って言こやつになつた？
言いつ直していいからギリギリで許すが。

「そうですね～。

私とあの子は同じ年ですよ～、たぶん。
でも私は変身魔法で歳を誤魔化して働いていたので、フュイトたち
は私の実年齢を知らないと思います～」

ルルとナナもそなんですよね～。

あつちの姿の方が便利だところのもあって、元の姿に戻ったのは数年ぶりです。

「働く？お父さんとお母さんは？」

「いませんね～。

あ、でも兄妹みたいなのはいましたよ～？」

「…といひで、さつきからなぜ星さんはビクビクしてこるので？

アルフとフュイトには一通りの家事を教えてあるので大丈夫でしょうが。

「…といひで、さつきからなぜ星さんはビクビクしてこるので？
気になつて仕方ないんですね～」

星さんはさつきからなのはやんの後ろで震えていました。
私が目を合わせようとすると逃げますし。

「あ、ごめんね。

星ちゃん、理由はわからないけどルナちゃん、君が怖いからして。
会つと震えが止まらないんだって」

「…もうですか～」

うわ～、本能レベルで恐怖を刻み込んでしまいましたか？
転生者として戦つた記憶が消えたのに私が怖いとか。

「うん、本当にごめんね？」

でも星ちゃんを嫌わないであげてね、ルナちゃん、君」

「わかりました」。

「それと、もうルナちゃんで良いです」

なんだか一々イケつぐのが馬鹿らしくなりました。
もつ良いや～。

「うん、ルナちゃん！」

「…あの、すみません」

嬉しそうに言つなのはせんと申し訳なさそうに言つて黙れん。
対照的な一人ですね～、姉妹なのに。

そして一人は護送室を出て行つたのですが…。

「また暇ですね～」

こつなつたら見張りをつけても良いので自由行動の許可を無理やり
にでも貰いましょうか？

うん、明日にでも艦長さんに相談してみましょ～。

「スゲーです！」

「これが管理局の次元航行艦ですか～！」

『なるほど、確かに凄いですね』

「あまりはしゃがないでくれ。

周りからの視線が痛い」

これが騒がずに入れられますか！

管理局の次元航行艦の内部なんて滅多に見れません！

前世では墜とすのが専門で乗る暇なんてなかったですし。

あ、皆さんこちは。ルナ＝ベルツです。

とつとう時間制限付きですが、自由行動の許可がでました。
常にクロノ執務官が見張りに付いてますが。

「護送室に閉じ込められること一々田間！

よつやく出歩けるようになつたんですよ～？

はしゃぎますつて。ああ～、娑婆の空氣つておいしいです～

「…それは悪かったと思つている。

けど、昨日ようやくジュエルシーードを全部確認したんだ。
それまでは出歩ことはできなかつた」

そう、昨日ついにジュエルシーードが全部見つかったのだそうです。
とこう」とは、海上での戦いは昨日だったんですね。

見逃してしまいました。

「それにしても、君の生徒は随分と無茶をするな。
あんな大規模な魔法を使った後で、ジュエルシードを六つも封印し
ようだなんて」

「お恥ずかしい限りです~。

纏めてやるんじゃなくて管理局が封印に来るのを待ち伏せれば良かつたのに~。

封印が終わつたところを闇討ちです~！」

「…いや、それは僕達が困るんだが」

『マスター、慎んでください』

そうそうアルテミスなんですが、一昨日よしあく返還されました。
フレームは展開できないように抑えられているし、魔法の補助もできないようにされているらしいです。
ま、そうじやなきや返しませんよね~。
ログの方も見られる心配はありません。
貴、教授以外には記憶データを弄ることができないよつてロックされたらしいので。

『クロノ君、大変だよ~。』

すると、通信担当のエイミーさんが突然割り込んできました。
モニター越しですが、かなり焦っているのがわかります。

「エイミー、どうしたんだ？」

「トイレですか～？」

『違うよ～。

フェイエトちゃんの使い魔が見つかったんだよ～。
それも怪我をして～。』

「アルフが～？」

ああ～、そういえばそんなこともありますね～。
フレシアの婆の虐待にどうどうブツツンしましたか。
『それで彼女はルナちゃんと話をしたがっているから。
クロノ君、そのまま一人で私の所に来て』

「了解した」

「はあ～い

そんな感じでアルフと話すことになつたんですが。

「アルフ～、怪我はどうですか～？」

『ルナ、ごめん。

フェイエトをあいつから守れなかつたよ

「大丈夫ですか～。そこまで期待してませんから～。
どうせあの人のことだから、私がいない間にこれ幸いと鞭の雨でし

ょう～？」

『ああ。くそつ、あの鬼婆！

フュイトを、娘を何だと思つてんだ!』

忌々しい人形と思つてゐるでしょ'うね`。

普段は私が邪魔していませんし、『』で田頃の鬱憤を晴らしてゐんでしょう。

「あ、そうです。

ルルとナナは元氣ですか~?」

『ああ、二人は大丈夫さ。アンタがいなくて寂しかったけどね』

「…そうですか~」

『それに、フュイトもあの子達を『』なきやつて辛そうで。見てられないよ』

「申し訳ないです~」

な、なんか思つた以上に負担をかけていたみたいですね。

その後、話は着々と進み、なのはせんがフュイトの相手をするみたいです。

つて、正氣ですか!?

「あの~、クロノ執務官。

なのはせんではフュイトには敵わないと思つのですが~

だつて私の弟子ですよ?

原作のフュイトよりも強いです。

「そうかもしれない。

でも、それでプレシア＝テスター・ロッサが動けば良い」

なるほど、そういうことですか～。

確かに関係ないですね～。

あ、そうだ。

「なら私も見学して良いですか～？」

「とこ～うわけで、やつてきました海鳴～！」

「うるせえー朝から大声出すな！」

ああ、すみません。

久々に自然の空気を吸つたのでテンションが上がつてしまつて。

現在、海鳴海浜公園にいます。

原作と違つて私と負け犬、星さんがいますけど。

「ところで、本当にフェイトに一対一で挑むんですか～？
正直、無謀を通り越して失笑物なんですが～、ふふふ

「それはひどくない！？」

でも、フロイトちゃんとちやんと話をしたいんだ。

友達になりたいっていう返事も、まだ聞いてないしね

「…友達ですか～」

確かにあの子ってほつちですかね～。

根暗だしネガティブだし。

私のおかげで多少は変わりましたが。

「あ、あの子、アンタ、ルナ、だよね？」

するとアルフがおずおずと話しかけてきました。
あ、そういうばこっちの姿は初めてでしたね。

「わうですよ～。」Jリチが本当の姿です～。

今まで騙していくと職にありつけなかつたので～

年齢偽装をしないと職にありつけなかつたので～

「アンタ、性別だけじゃなくて年齢まで誤魔化してたのかいー！？」

「ふふふ、面白いことを言いますね～？

私は性別を誤魔化したことにはありませんよ～？

「いだだだだだー！」、「あああああー！」

わかればよろしい。

アイアンクローを解いてあげましょ～。

「…なのは、気をつけて」

星さんは心配そうです。

普通はそうですね。今まで三人がかりで戦っていたんですし。

「うん。気をつけるね」

するとなのはさんは徐に、

「出でわい、フュイトちゃん」

と呼びかけます。

すると、背後の電灯の上にフュイトがいました。
その下には何故かルルとナナも。

何故か三人とも呆然としています。

【フュイト?

これはどういうことですか?】

【どうしてルルとナナがいるんです?】

【…】めんなさい、ひょっとしてルナさんですか?】

…ちつ、一々説明しないといけないんですか。
面倒ですね。

そんなこんなで最終決戦は始まりました。
説明はとても面倒でしたが。

「へえ、なのはさんも思ったより戦えてますね。
まだまだですけど。あ、掠つた」

フェイトの斬撃がなのはさんのバリアジャケットに掠りました。
つていうか、そもそもお互いに相性が悪すぎなんですね。
固定砲撃タイプのなのはさんと、超機動近接タイプのフェイト。
うーん、真逆すぎて完全に技量の戦いになりますね。

というより、フェイトは鞭打ちのダメージが残つてますね。
普段よりも動きが若干鈍いです。

それにしても、

「二人とも、いい加減に離れてください」

「やだ！」

「い……や……！」

わっさからルルとナナが私に引っ付いて離れません。
このままアースラまで付いてくるつもりでしょうか?
別に私は良いですが。

つていうか、

「火力のない戦いですね。」

もつと砲撃を撃ち合つ白熱したものを予想していたのですが

ぶつかけショボイ。

「…あの戦いがですか？
私には高度な戦いに見えますが」

すると、今まで私に近づいても「なかつた星さんが噛み付いていました。

えへ、だつて事実ですし。

前世での戦闘と言つたら牽制で砲撃が出てくる世界でした。
山を吹き飛ばす魔法とかが出てきたりもするんですよ？

「お前らを基準にすんな。
9歳にしちゃあ良い実力だわ」

9歳ね～。

まあ、私を基準にするのは確かにアレかもしませんが。

すると、

「お～？あれは」

フェイトがバインドでなのはさんを拘束し、呪文の詠唱に入りました。

あれを使つもりみたいですね。

見るからにヤバイとわかるその魔法に、なのはさんは一歩も引きません。

サポートを入れよつとするスクライアさんの言葉すら跳ね除けます。

「なのは、危険です！」

「大丈夫だ。

なのはの防御の強度ならなんとかなる

およよ？負け犬さんは冷静ですね。

あ、原作知識ですか。

【ふふふ、ところがギッショーンってやつです～】

【…どうこうことだ？】

私の念話に負け犬さんが振り向きました。
その顔には、既に焦りの色が浮かんでいます。

【フュイトは私の弟子ですよ～？

原作なんかよりも強化されてるとは思わないんですか～？】

【なに！？

まさか、テメエ！】

ククク、驚いてる驚いてる

そう、フォトンランサー フアランクスシフトなんてもう古いのです！

スフィア38基による毎秒7発の攻撃を4秒？
確かにそれは有効な攻撃かもしだせません。

しかし、この世に完璧な魔法などありません。

でも、それは裏を返せばまだ魔法は進化でれるといふことなんです。
つまり、

【進化したファランクスシフトを御覧あれ～】

「ユーノ、今すぐなのは止めろー。」

「え、どうしたの、急に

「いいから早へー。」

ククク、もう遅いです。

「フォトンランサー、テストロイシフトー！」

そのトリガーワードと共に、空中のフォトンスフィアの数が激増します。

38が76に、76が152基になりました。

あそこまで魔力を消費した状態では、普通はあんなにスフィアは出せません。

それに制御に割くリソースも並ではないです。

「デストロイー！？」

「法兰クスじゃねえのかよーー。」

「ククク、これぞ私がフェイトのために考案、作成、完成させた大魔法『フォトンランサー・テストロイシフト』です！」

この魔法のためにバルディッシュの処理能力に強化を重ね、ついに先日完成させたのです！」

思わず叫びながら決めポーズをとっていました。

しかし、後悔はしていません。

それくらいのできばえだったんですから！

「ちょ、ちょっとルナ！」

あれはどういうことだい！？

フェイトの切り札はファランクスシフトのはずだろ！」

「ふふ～ん、その情報は古いのです！」

あれこそがフェイトの現在の切り札、ファランクスみたいなチャチな魔法じゃないですよ～！

なんと、あれは集束系の魔法なのです～！」

「集束系だと～？」

負け犬が驚くのも無理はないですね。

だってそれはなのはさんのスター・ライト・ブレイカーと同じなのですから。

しか～し！

なのはさんにできてフェイトにできない技術などありません！

確かになのはさんは適正が高いため、魔法を知つて一ヶ月程で使えるようになりました。

フェイトにそこまで高い適正はありませんでしたが、長年に亘つてじっくり教えれば充分に使用可能です。

そして、足りない魔力は周囲から集める！その発想は方舟では常識！

「ふははは～！」

フェイト、その新米砲撃魔導師に格の違いを見せ付けてやりなさい～！」

その言葉が聞こえるはずはないのに、私にはフェイトに届いているという確信がありました。

フェイトはこちらに少し微笑むと、

「撃ち崩せ、ファイア！」

魔法を発射しました。

その威力は絶大。ファランクスとは比較にもなりません。

なんせ、毎秒10発の攻撃を17秒間も掃射させるという鬼畜魔法です。

その合計弾数、なんと25840発！1064発のファランクスとは桁が違つんです！

欠点は消耗具合が馬鹿みたってことですね。仮にも集束魔法、身体にも悪いですし。

そのぶん、マジで必殺の威力を誇っています。殺傷設定だつたら肉片も残りません。

「「「「なのは～！」」」

「フェイトお姉ちゃん、すう～い！」

「……し、死……んだ？」

「まさか～。

あれは非殺傷設定ですよ～？」

ククク、どうですか！

流石のなのはさんもこれは防ぎきれないでしょ～！

「テメエ、これでフェイトが捕まらなかつたらどうすんだ！」
この事件が解決しないかもしけねえんだぞ！」

すると突然負け犬が掴みかかつてきました。

確かにそうですね。これでフェイトが勝てばジュエルシードが全て
プレシアの婆の手に渡るかもしれません。
しかし、

「それがどうかしたんですか～？」

そう、どうでもいい。

この世界は物語の世界であり、その物語がどうなると知ったこと
ではありません。

私は、私の大切なものが無事ならばそれで良いんです。

「あなたはまだハッピーエンドなんかを期待してたんですか～？
私を倒せばそれが実現するとでも～？」

「甘えですよ～、厨二病患者」

本当にそれを願っていたならば、なのはさんをせりて強くすれば良かったんです。

「え、スクライアに乗り込んでジュエルシードを護衛しても良い。無印が起こること自体を回避するべきだったんです。」

「それができないから、あなたは負け犬なんですよ。待ちの姿勢で私に勝とうだなんて馬鹿ですか～？」

「テメエー！」

「そもそも、何故あなたはまた転生してきたのですか～？今までの言葉から察するに、私への復讐でしょうか～？だったら、脇目も振らずに修行するなり復讐を実行するなりすれば良いじゃありませんか～。」

それすらできないあなたにビビリう言われる筋合いはありません～」

「！」の野郎…！』

ふふ～ん

負け犬の遠吠えとは正にこのこと～

しかし、

【大丈夫だよ】

その声を聞いて、私は腰が抜けるかと思いました。
まだ意識がある…つてことは…。

海上を見ると、ボロボロになつたなのはさんがいました。
バリアジャケットの上着は既にパージされていて、見るからに満身

創痍です。

自分が何を言ったのかわからないくらいびっくりしました。
なんで飛んでんですか！？

すると、今度はなのはさんの方も魔力を集束し始めました。まだ集束ができるくらいに元気なんですか！？

【フロイト、撃たせるな！
チャージしてゐる間にぶつ殺せ！】

思わず昔の口調が出てくるくらいこに私は動搖していました。
フロイトも今のでかなり消耗しています。
もつをつたと終わらせないと負け確定です。

私の言葉にハツとしたフェイトは、全速力でなのはさんを墜とそうと飛翔しました。

「げげ～！？」

フェイトがバインドに捕まりました。

その間にも、どんどんと集束された魔力は大きくなつていきます。

フェイトが使つた分、集まる魔力にロスがあるみたいですが、それでも一撃で墜ちる威力です。

紙装甲のフェイトに耐えられる訳がありません。

そのまま、

「スター ライトブレイカー！！」

はい、フェイト撃墜。

こ、これが主人公補正の恐ろしさですか！？
身をもつて実感しました！

そのまま海中にフェイトは沈んでいつてしましましたが、なのはさんが救出してくださいました。
ああ～、でもこれで原作入りは確定つてことですか～。

上空で魔力が渦巻き始めました。

勝猫の嘲笑（後書き）

次回かその次の無印は終了です。

また超展開になるかもしません。

負け犬神家の一族（前書き）

やつぱり超展開はなしにしました。

あれをやると、凄まじく今後が難しくなりそうだったので。

期待してくださった方々、「めんなさい」。

負け犬神家の一族

空が突然陰ったと思うと、莫大な魔力が集中し始めました。
どひやらフレシアの婆がキレたみたいですね。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

現在、なのはさんとフェイトの決闘が終わり、婆が次元跳躍魔法で攻撃をしてきました。

身体に鞭打つてまで頑張りますね～。

【ほり～、助けに行かなくて良いんですか～？】

「…チツ！」

私の言葉に負け犬が動きました。

二人の下に急ぎ、シールドを張っています。

そして雷撃。

「「きやああああああ～！」」

ルルとナナの悲鳴が聞こえましたが、雷撃の凄まじい音にかき消されます。

負け犬は一人をキチンと守りましたが、ジュエルシードは持つて行かれたらしいです。

いえ、わざと見逃したのでしょうか？

まあ、どひやらにしても私の無印での役目は終わりです。

放つておけば負け犬と管理局が勝手に解決してくれるでしょう。

「ルル、ナナ、行きましょう。」

今は管理局の次元航行艦にいた方が安全です〜」

そして、負け犬たちとアースラに戻りました。
フェイ特はなんとか無事といった感じです。

しかし、魔力がかなり減っていたので一応私の魔力を渡して回復させておきました。

バルディッシュもボロボロです。あの婆、容赦ないですね〜。

しかし、これが私の唯一にして最大のミスでした。
この時したことが、後の計画の全てを破壊することになるとは、夢にも思わなかつたんです。

「なんぢやつて

暇なので計画頓挫フラグを立てみました。

しかし、実際もう私の安住計画は成功したも同然です。

後は負け犬が我慢できずに襲い掛かってきたところを正当防衛で叩きのめします。

過剰防衛になるまで殺りますが。

【ふふ～ん 全てが私の計画通り
これで私は管理局預かりとなります～。
ご協力いただき、ありがとうございました～】

【…】のゲス野郎が！

テメエはフェイトの家族みたいなもんなんだろ！？
だつたらこれから起じることを止めようと思わねえのかよ！
プレシアの言葉で、いつたいどれだけフェイトが傷つくと思つてや
がる！】

【はい～、全く思いません～。
それに、これでフェイトは晴れて情状酌量の余地有りと判断される
んですよ～。
喜びこそすれ、止める必要性は感じませんね～？】

だつてプレシアの婆の自供でこの事件の全容が明らかになるんです。
そして、あの婆は私が研究に携わっていたことを言いません。

既にそんな記憶はないのですから。

無印が始まる前に、既に私が助手だったという記憶は消してあります。

病人相手に大した手間は必要ありません。

彼女は、私のことをフェイトの世話係のための居候というふうに認

識しているはずです。

つまり、傍から見れば人数が少し増えただけの無印といふことになります。

そこに矛盾は存在しません。パーフェクトです。

そして、これで私たちの立場は完全に『守られる者』というものになります。

これで私にはこの『転生者の戦い』にも勝ちを約束されたも同然です。

なんせフェイトと一緒にいるかぎり原作に関わるのも決定なんですから。

そして、原作キャラに味方をする限り私を殺すことはできません。そんなことをすれば原作キャラの皆さんが私の味方です。

最も邪魔な星さんは既に脱落させました。

さらに、負け犬の彼にはもう合法的に私と戦う理由すらないんですね。

そして、

「「「「「「「ツー？」」「」「」「」「」」

モニターにアリシアの死体が映し出されました。

そして始まるプレシアの婆の自供。

ク、クク、クククク…！わ、笑つてはいけません！
ここで笑つては全てが水の泡です！

そう思いつつも、全てが上手くいくとの面白やけ口からプロシous
ユと息が漏れます。

や、ヤバイです！涎が…！

そして明かされる事件の全容。

プロジェクトF、フェイトの出生。

は、早く話しあえてください！
ポーカーフェイスも限界ですよー！

そしてフェイトに降りかかる罵倒。

人形、失敗作、その言葉がフェイトに突き刺さる。

そして、

「良いこと教えてあげるわ、フェイト。

あなたを造り出してからずっとねえ、私はあなたが…」

だ、駄目です、もう止まりません！
頬の筋肉が制御できない！さっきからヒクヒクと動いています。

「大嫌いだったのよ！…」

そしてフェイトが崩れ落ちる。
床に落ちたバルディッシュは砕け散り、それはまるでフェイトの心
のようだ。

一方、私はとくとく、

【ふ、あはははははははははははは
ひ、ひい～！駄目、笑い死ぬ！
聞きましたか、負け犬さん！これで私の完全勝利です～！
や～い、負け犬負け犬～】

念話で盛大に負け犬を罵っていました。

そうでもしないと表情が崩れて大笑いしていったでしようから。

後で聞くと、その時の私は唇をかみ締め目に涙を溜めていて、とて
も痛々しい姿だったらしいです。

フェイトのことを自分のことのように悲しんでいるのだと。

実際は表情が崩れないように歯を食いしばっていただけですし、涙は笑いが抑え切れなかつた結果なのですが。

その後は原作通りです。

フェイトは見事に立ち直り、フレシアの婆は虚数空間に真っ逆さま。これにてPT事件、もしくはジュエルシード事件も終了！
フェイトはなのはさんと友達になり、無事に無印は終了です。

ククク、計画通り！

負け犬神家の一族（後書き）

「」のままじゅ終わりせませんよ。

超展開を削った分、ただじゅおきません！

バ○マンではあつませんが、邪道な王道バトルを目指します！

後は野となれ大和撫子

それは突然のことでした。

私はアースラで眠つていたんです。

夕食を食べて、歯も磨いて、ルルとナナとフュイトにおやすみも言いました。

それなのに、

「どうして神界にいるんですかね～？」

あ、皆さんこんばんは？ルナ＝ベルツです。

寝ていたと思つたら神界に戻つていきました。
何故か隣には負け犬もいます。

「…テメエ、これは何だ！」

「知りませんよ。

「私だつてさつきまで寝ていたんですから～」

しかし信用された様子はありません。
そんなに疑り深いと禿げますよ？

すると、

「ルナは何も知らねえさ。

なんせ、俺が勝手にお前らを呼んだんだからな

光と共に教授が田の前に現れました。

恐れながら、全く似合いません。爆発を背景にした方がしつくりります。

「テメエは、教授！」

「おうおひ、久しぶりだな？」

相変わらずの負け犬臭で安心したぜ」

「誰が負け犬だ！」

「え？ あなた以外にいるわけないじゃないですか？」

なに当然のことと言つていいんですか、この人は。

「それで、今日はどうしたんですか？」

ひょっとして、負け犬さんのボスが諦めましたか？」

「はあ！？」

そんな訳ねえだろ！ 俺はまだ「半分正解だ」……なに…？」

「お前の実力じゃルナを倒せねえつてあいつらはギブしてきたぞ。あのマテリアルもどきが負けた時点でな」

「…まさか、俺はこのまま終わりだってのか…？」

「いや、それじゃあ俺がつまらないからな。

特別に一回だけチャンスをやつた」

「チャンスですか～？
具体的にはどのような～？」

「もう一人、転生者を追加する」

「「ツ～？」」

も、もう一人！？」

星さんみたいなのがまたですか～？」

「そいつはA-sから介入する。

ポジションは当然、原作キャラの味方ポジションだ

「…何故そんなことをするんだ？」

それじゃあ俺に有利なだけだ。お前のことだし、そいつはよっぽど
の役立たずか？」

「いや、それは大丈夫だ。

お前の上司も、もう一人も納得した上で転生させた

なら本当に敵ですね。

A-sからはゆっくりできると思つていたんですが。

「俺からの連絡は以上だ。

今日はこれを伝えるためだけに呼んだ。

意識だけ呼んだから、身体は向こうで寝てるだろ

「…あの～、質問良いですか～？」

「なんだ？」

これだけは聞いておかなければ。
今後を左右するかもしませんし。

「その人は教授が選んだんですか～？
それとも他の方が～？」

「俺だ」

胸を張つて答えられました。
はい、面倒になるの確定です。

絶対に『面白そうなやつを送つてやる』とか考へてる顔ですもん。
そのまま私と負け犬は神界を出ました。
気がつくと、私はベッドで寝ていました。
もう朝の時刻です。

「ふあああ～。

なんか、変な夢を見ました」

『おはよづ～ござります、マスター。
起きぬけからどうしたのですか？』

「いえ～、教授が夢に出てきたんですよ～。
それで、転生者を追加するとか言つてたんですよ～」

『マスター、それは夢ではありません。
私にもメッセージが届いていました』

…やつぱりですか。

つまりはまた面倒なことに。

「はあ～、憂鬱です～」

「ルナ、ちょっと良いか？」

午後、私は割り当てられた部屋で魔法の講義をしていました。相手はルルとナナです。ホワイトボードを借りて二人に説明します。

二人の手元には教科書だつてあります。もちろん私の自作です。私たち『ベルツ』が使う魔法体系『亞流ベルカ式』はとても難しい魔法です。

なんせ、事前に古代ベルカ式アンシジョンとミリジドチルダ式の両方を使えないといけないんです。

私は刷り込みがあつたおかげで簡単にできましたが、二人は本当に一から覚えないといけません。だからこうして私が直に教えていたんですが、そこにクロノ執務官が訪ねてきました。

「どうなさつたのですか～？」

「いや、フヒイトの裁判に必要なことがあつてな。少し聞きたいことがあつたんだ」

ああ、なるほど。

それなりにじで話す訳にはこさせんよ。

「わかりました。

ルル、ナナ、授業はここまでです。
後は復習をして終わりで良いですよ~」

「や、やっと終わった~」

「……私、は…たの、し…かつたよ?」

ビリヤー・ルルは根っからの騎士派みたいですね。
将来は筋になりそうで怖いです。

そして私はクロノ執務官に連れられ、取調室のような部屋に来ました。

表には見張りの魔導師さんがいます。
たかが話をするだけなのに大げさですね~。

「それで、何が聞きたいのですか~?」

「ああ、まずは

」

そして一三の質問をされ、それを返します。

普段のフュイトの生活、プレシアのフュイトへの態度などです。

「こんなものだな。協力に感謝する。
もう楽してくれて良いよ~」

「ですか~。

それにも大変ですね~、執務官って~

「ああ、だがやりがいのある仕事だと思つていて。
そつそく、もう一つ良いか？」

「なんですか～？」

「先日、君たちの証言を元にアルトセイムを捜査した。
その時にプレシア＝テスタークロッサの使い魔『リース』の遺書と思わ
れるものが発見された」

「遺書？ リースですか～？」

「ああ、時の庭園があつた場所の近くに建てられていた小屋にな。
それと一緒に彼女の日記のようなものも見つけてな」

「日記？ そんなものをつけていたんですか。
差し詰め、フェイトの成長記録でしきうか？」

「そこに書いてあつたよ。

君がフェイトに魔法を教えている様子や、

プレシア＝テスタークロッサの研究の助手だったことがね

刹那、私にバインドがかけられました。
取調室の扉が開き、武装局員が数人突入してきます。
どうやら外も固められているらしいです。

「ま、マジですか～！？」

「残念だが事実だ。

君のことが事細かに書かれていたよ。
戦闘能力がオーバーだというのは驚いたが、これではもう逃げられないだろう」

「リースラッシュラッシュラッシュラッシュ！」

余計なことをしてくれましたね！

おかげで捕まってしまいましたよ！

「さて、それじゃあ詳しい話を聞かせてもらおうか

そしてクロノ執務官は悠然と話しかけてきました。
そのまま手錠のようなリミッターを私につけようとしますが、

「すみません、私には話すことはないので～

咄嗟に私は聖王の鎧を発動させました。

そして、

「能力発動『振動破碎』！」

私を縛っていたバインドを一気に破壊しました。

原作のスバル・ナカジマは四肢の末端からしか使えなかつたようですが、私はその能力を魔力で作動させているため比較的に場所の自由ができます。

全身のどこからでも発動が可能です。

聖王の鎧を纏つたのは、これは生身で使えば自分の身体にもダメージが来るからです。

鎧の周囲で魔力を振動させることによって、私の身体に反動^{ダメージ}は通りません。

「では、失礼します~」

そのまま右足を振り上げ、床に叩きつけました。
すると床が爆散、一つ下の階に出ました。

流石に床をぶち抜くのは予想外だつたらしく、出た先の通路に人はいませんでした。

さてさて、面倒なことになりましたね~。
最悪、このまま逮捕されてA'sに参加できず脱落なんてことになりますかねません。

「能力発動『シルバー・カーテン』」

そのままアルテミスにかつたロックの解除にかかります。
シルバー・カーテンは幻影を生み出すだけの能力ではありません。
このように機械などに侵入して荒らしまわることもできるのです。
それと同時に、ルルたち四人に念話を送つておきましょうか。

【ルル、ナナ、フェイト、アルフ、聞こえますか~?
突然ですが、私はしばらく旅に出ます~。】

【後のことばクロノ執務官の言つことに従つてくださいね~】

【ど、どうしたのお兄ちゃん!~】

【え……、え?】

【旅つてどうじゅうこと!-?】

私たちには連れて行つてくれないの!-?】

【急にどうしちまつたんだい!-?】

四人同時に念話を送つてくるので頭にガンガン響きます。
ええい、作業に集中できないでしきょうが!
こうしてゐる間にも後ろから攻撃が來てるんですよ!

【詳しいことはクロノ執務官が教えてくださいます。
たぶん大体合つてると思つので、その時に聞いてください!-】

背後からはクロノ執務官たちが追つてきます。
おかげでシューターの雨が私に当たり続けていて走りにくいで
全部聖王の鎧で防げるんですけどね。砲撃でも来ない限り大丈夫
です。

しかし全力疾走しながら念話の相手をし、おまけにロックの解除をする日が来ようとは。
どこの怪盗の三世みたいで、やらされていいる本人は全く面白くありませんが。

『マスター、解除が完了しました。
バリアジャケットの展開、魔法の補助、並びにフレームの展開が可能です』

「はいはい、じゃあさつと逃げましょー」

近くの角を曲がると、正面からも局員が向かってきます。
だがしかし、少し遅かったですね。

「アルテミス、壁を～！」

『Ice Wall』

そのまま前後の通路を氷の壁で塞ぎます。
これで数十秒はもつはず！

「転送～！」

そのまま私は近くの世界に移動しました。

【サラダバ～！つてやつです～】

sideクロノ

【サラダバ～！つてやつです～】

念話が届くと同時に魔力反応があつた。
これはまさか、転送魔法を使われた！？

「ハイハイ～！」

『大丈夫～ちゃんと追えてる～。
でもこのままじゃ逃げられちゃうよ～。』

「くつ、急いで転送ポートの準備を！
転送魔法使える局員は何人いる！」

すると、数人が手を上げた。

「よし、エイミィー！
僕達のデバイスに座標を送つてくれ！
このまま追跡する！」

『オッケイ！
座標を送るから、個人で追える人は急いで！
残りは転送ポートへ！』

『クロノ、ルナさんはオーバースランクの魔導師の可能性があります。

応援が来るまでは無茶をしないように』

「了解です、艦長」

ルナが逃げたのは『第89管理外世界』、無人で文化レベルはゼロ。
咄嗟に近くの世界に逃げ込んだといったところか。
周囲は密林と大河以外に何も見当たらない。

「全員、手分けをして探そう。
ルナは必ず近くに潜んでいるはずだ。
二人で組んでそれぞれで」

刹那、一人の局員が吹き飛んだ。

そのまま近くの大樹に激突して動かなくなる。

「ツ、全員散開しろ！」

そのまま全員が散り散りに動く。
幸か不幸かさつきの攻撃は非殺傷設定の魔法だつたらしく、吹き飛
んだ局員に怪我はない。
氣絶してるだけだ。

「エイミィ、ルナがどこにいるのか探してくれ！
それと、負傷した局員の回収を！」

『了解！』

すると、再び攻撃が開始された。
どうやら狙撃でこちらを全滅させる気らしい。
おまけに、その狙撃は四方八方から来るため発射地点を割り出せな
い。

間違いなくルナの仕業だろう。
彼は莫大な魔力があるにもかかわらず決して力押しをしない。
それはここ数日の会話でわかっている。

【ぐ、クロノ執務か】

【こひらひツド！狙われて】

そして、一人、また一人と狙撃の餌食となっていく。

その狙撃は恐るしこほどに正確だ。

「ハイミマ、まだわからないのか！」

『もうちょっと……、わかつた！

そこから三時の方向、距離は1400！』

「了解！」

そのまま残りの三人と森の中を全速力で移動する。

空から攻めないのは狙い撃ちにされるのを防ぐためだ。

それにこの辺りは密林なため、樹が障害物になつて狙撃は困難なはず！

すると、残りの距離が700メートルを切つたところで狙撃が止んだ。

諦めたということはないだろ？

そんなことをしなくとも、彼ならクロスレンジで戦いこくる。

『た、大変大変！

クロノ君、ルナちゃんが召喚魔法をしてるよー。』

「なにー？」

召喚魔法だとー？

そんなこともできるのか、ルナは！

召喚魔法は厄介なものになると広域殲滅魔法に匹敵する戦力になる。

「くへ、この距離じゃ召喚に間に合わない！

『ハイハイ、ルナは何を召喚した！』

竜種などならば最悪だ。

若年竜でもこの戦力では厳しい。

『……ルナちゃん、召喚成功！

呼び出したのは……、は？』

そこでハイハイの言葉が止まった。
なんだ、何を召喚した！

「ハイハイー！」

『……ツー、コメン！

えつと、召喚したのは……』

「何だ！まさか竜種か！？」

「ハイ、その……、兔、だと思ひ」

「…………は？」

思わず聞き返す。

兔？あの白くて耳の長い？

『うん、でも体長が4メートルくらいある……って、嘘！？』

「どうした！？」

『召喚獣、砲撃体勢！

発射予想地点、そこだよ！』

『クロノ、退避しなさい！』

「ツ、全員！」を退避し

瞬間、白銀の光が密林に満ちた。

s i d e o u t

』

後は野となれ大和撫子（後書き）

現在、逆お気に入りユーチャー百人突破記念として番外編の作成を考えています。

詳しくは私のページの活動報告をチェック！

お前みたいなのがいるからホームレスになるんだ！消えろ！

「…「わあ～、やりますがおした～」

さつきまではこの辺りは密林の亜熱帯気候だったのに、今は辺り一面銀世界です。

樹は凍りつき、吐く息は真っ白になってしまいました。

あ、皆わんこんにちは～。ルナ＝ベルツです。

クロノ執務官が追つてきたので返り討ちにするついでに、新しい切り札の威力実験をしようと思つたのですが…。
これはヒドイ。

「う～ん、死んではいないみたいですね～。

まあ、非殺傷で撃つたんですね、当然と言えば当然なんですが～」

通常、召喚獣や召喚竜に非殺傷の攻撃なんてできません。
そのため、対人に使うには召喚師がブレスなどが非殺傷になるように変換しなければなりません。
物理攻撃はさすがに無理ですが。

「それにして大したものですね～、ジュジュは～」

「クウ～」

そつそつ、この巨大な白ウサギの紹介をしなければいけませんね。
この子は以前、召喚獣が欲しいな～と思い契約したのです。
せっかくキャラの召喚魔法が使えるのに、それを腐らせるなんても

つたないので。

それで私と相性が良むやつで尚且つ強いとなると、やうやくこません。

しかし危険度はヴォルテールや白天王の一つ下といつたほどレベルの生物なので、私の召喚獣として不足はありません。

ちなみにジュジューのは愛称で、本名はジュディスです。

昔の哲学者の名前からとつました。

あつ、ウル〇ススとかは関係ないですよ！

モン〇ンは面白いとは思いますが、あんなにジュジューは不細工ではありますん！

もつと原型の兎に近い感じです！

確かに牙が生えていたり爪がすごく鋭かつたりはしますが。あ、耳は後ろに流れるように寝かせられています。

これもチャームポイントの一つですね。

そんなことを考えながら私がジュジューを撫でていると、

「つとつとつと～？」

生き残りがいましたか～」

動いている魔力反応を発見しました。

念のためにライアの田で見張っていましたが、ビリやら本当に生き残りがいたようです。

別に殺したわけではないので生きているのは当たり前ですが。それに、これはどうやらクロノ執務官のようです。

【クロノ執務官へ、動かないほうが良いですか～？

非殺傷設定とはいえ、食らい過ぎると身体に悪いですしね】

返答は砲撃魔法でした。

それなりに距離が離れていたので、ジュジュに乗って回避します。

『Ice Avenue』

魔法で足元に氷の道を作り出し、その上をジュジュが滑るように移動します。

これはスバル＝ナカジマの『ウイングロード』を応用した魔法なのですが、私には移動方法がないので手に余っていたのです。いや～、ものは使いようですね～。

え？ ますますウルク〇スみたいですって？

つるせいです！ 便利なんだから良いじゃないですか！

【慣れない長距離砲撃なんとしても無駄ですよ～。

】】】で見逃してくたされば

【それはできない！】

そのままこちらに一気に接近してきました。

別にそのまま狙撃で撃ち落としても良かつたんですが、ジュジュに乗つて移動している状態では上手く狙えないで逃げに徹しました。

【もう～、あなたじや私に勝てないのはわかつたでしょう～？
いい加減に諦めて、アースラに帰つてはいかがですか～？】

そのままアイスダガーを周囲に展開して彼を撃ち落とそうとしましたが、誘導性のある魔力弾で全て破壊されました。

流石は技巧派魔導師、技量がすごい。

このまま追いかけては負けない自信はあります、少々面倒ですね。
ならば、

「速攻で終わらせてあげます」

s.i.d.eクロノ

あの召喚獣、見た目に反して思った以上に速い。
そしてそれに乗って攻撃されると、完全に追いつけない。
このままではジリ貧だ。

「ヒイミィ、こちらクロノ！

応援はまだ到着しないのか！？」

『クロノ君、無事だつたあー！

応援はすぐは無理！さつきから場所を移動しすぎてて座標を固定できぬ！

もう少し一箇所で戦つて

』

その時、突然ルナの召喚獣が高度を上げたと思うと、ジェットロースターのように一回転して僕の後ろに回りこんできた。
しまった、後ろを取られた！

しかし、よく見ると召喚獣にルナが乗っていない。
どこに行つた？

「上ですね~」

声が聞こえたと思うと、頭のすぐ上でルナがデバイスを振りかぶっていた。

あの一回転の時に飛び降りていたのか！？

「氷華一閃！」

「なめるな！」

『Protection』

バリアを開いて防ぐとしたが、

「バリアなんて無駄ですよ～」

バリアはルナのデバイスに触れた瞬間に凍りつき、一瞬で砕け散った。

そのまま白刃が迫る。

なんとかS2Uの柄の部分で受け止めたが、そのまま地面まで吹き飛ばされ、叩きつけられた。

「ぐつ、くそ！

本当にオーバーSはあるな。

ジュエルシード事件の時は実力を隠していたのか

魔法の技術もそうだが、戦い方も上手い。亮も確かに実力はあるが、ルナは天才的だ。この歳にしては異常と言つても良い。

くそ、応援が来るまで無茶はしないつもりだったが、最悪それまですらもたない。

場所もかなり移動してしまった。

到着までは時間が掛かるだろ？。それまでは

ウウウウウウ！

ん？何の音だ？

何かの鳴き声のような…。

そう思つた瞬間、僕はそこを飛び退いていた。

次の瞬間、ルナの召喚獣が周囲の樹を巻き込みながらそこを押しつぶす。

ただの『のしかかり』だ。それだけで地面が陥没する。

「！」の、化け物め！

『Blaze Cannon』

召喚獣に砲撃を撃ち込むが、驚くべき跳躍力で避けられた。
そのまま上空の道に飛び乗られる。

「くそ、腐つてもウサギといつーとかー

……？ルナはどこだ？」

『クロノ君、上…』

「なに！？」

空を見上げると、巨大な魔力の塊が鎮座していた。

なのはのスター ライトブレイカー並みに巨大だ。

「暗き闇夜に 導きの光を」

魔法の詠唱が響き、魔力が一層輝きを増した。
まさか、集束魔法だと！？

ええい、どいつもこいつも！

最近の九歳児は化け物ばかりか！？

『クロノ君！』『クロノ！』

「すみません、任務失敗です」

くそ、この借りはいつか返すぞ…！

「月の欠片よ 降り注げ」

『Lunacy Fragment』

そして魔力の塊は膨れ上がり、この辺り一帯に無差別に砲撃を撒き散らした。

気絶する前に見えたのは、魔力の塊から何条も降り注ぐ砲撃の嵐だった。

「なんだと！？ルナが脱走した！？」

それを聞いて最初は驚愕したが、よく考えればチャンスだと思った。だつてそつだろ？これで俺は堂々とルナと戦える。

A-sを前にして、不安事項が消えたんだ。
それも、他でもないルナ自身の手によつて。

ようやく俺にも運が向いてきたみたいだぜ。

A-sになれば味方も増えるし、それが終わればヴォルケンリッターという戦力も増える。

前の戦いの敗因は敵の実力もあるが、一番の原因是敵が複数いたことだ。

ライア、アリス、イデア、アリシア、キャロ、リリスとか言つ融合騎、そして教授。

そいつらが完璧な連携で攻めてきたんだ。敗因はそれだろ？

しかし、今回は違つ。

あいつは完全に一人で、その状態で戦闘に参加を強制されている。いくらあいつでも神が定めたルールを破ることはできない。

「クハハハハ、ルナア！

今回こそは俺が勝たせてもらうぜ！

お前らが大嫌いな『仲間の力』を見せつけてやるよぉ！

A'sこそこそは俺の勝ちだ！

ズタズタに切り刻んで殺してやる！

side out

お前みたいなのがいるからホームレスになるんだー消えろー！（後書き）

さあ、どうやってルナをA-sに介入させよつかな。

幸せは～歩こ～りない、だ～けひ走つて逃げて～～～（前書き）

今日は少し短いです。

幸せは～歩こない、だけれど走つて逃げて～

「あ～た～らし～い、あつちが～来た～、わ～ぼ～のあ～せ～だ」

「どんだけ音痴やねん！」

朝、台所でラジオ体操のソングを歌いながら朝食の準備をしていると、家主さんからの厳しきシッ ロ!! が破裂しました。

「朝から元氣ですね～。

そんなに興奮してると早死にしちゃあよ～？」

「誰のせこで興奮してると懲りとるこや～！」

「… ～勝手に興奮してると懲りとるこや～？」

「んなわけなこやひー。」

「じゃあ何なんですか～？

…あ、ひょっとしてあの田じゅか～、すみませ～」

「おひさんか、アンタはー。」

本当に元氣ですね、この似非関西弁タヌキは。

あ、歯をくむせよつゝ」やります。ルナ＝ベルツです。
現在は五円の終盤、私は居候をしています。

「せこせこ～、家主さんガシッ ロ!! 女さなのは理解しましたから、

そろそろ席につこうくださいね~」

「…なんで私が負けた気分になるんやろ。それより、いい加減に名前で呼んで~な。

家主命令やで、ちやんと書ひ「」とおきなやこ~。」

はい、この家主さんですが、皆さんが想像した通りの人です。その如も…

「綾崎はやてさんでしたっけ~?」

「わやうわー私は借金なんてあらへんで!」

「冗談ですよ~、ハ神はやてでしょ~?」

短氣ですね~。そんなんだからいつまで経つてもハ神はやてなんですよ~。

本当にこつまで経つてもハ神はやてなんですから~

「私の存在が否定された!~?」

「わやう、そんなどうでもいい話は置こといて、朝食にしましょうか~」

「どうでもよくないわ~!」

現在、私はハ神家に居候しています。
はやは私はこのことを外国からホームステイに来た少年だと思っています。
知り合いのおじさんからの紹介ですし、怪しまれることはありませんでしたが。

つまり、私が言いたいのは、

「 真実つて残酷ですよね～。」

残酷すぎて惚れ惚れしてしまいます～」

私は、ギル＝グレアムに彼女の凍結封印を依頼されでいいここと
いうことです。

数日前のことです。

私はミッドチルダの喫茶店にいました。

「はあ～、これからどうしましようか～」

資金は問題ありません。

助手だつた間にコツコツ貯めておいたので。

しかし、これからどう動こうか決めかねていました。

「 いつそのこと～sに少しだけ介入して、そのままどこかに逃亡
つていう手もありますけどね～。」

関わったのは事実なんですか～」

『 しかし、それでは敗北はなくとも勝利もありません。
新たな転生者も現れるのです。』『 』

「 少し良いか？」

すると、私が座っていた席に見知らぬ青年がやつてきました。
そのまま私に向かい合つ席に座り込みます。

「何か御用ですか～？」

他の席にも空きはありますよ～？」

「いや、お前に話があつてきた、ルナ＝ベルツ

：私の名前を知つてゐる？

新しい転生者？だとしたら殺しますが。
ま、少し様子見ですね。

それにして、どこかで聞いたような声ですね。

「そうですか～」

それで、今日はどういったご用件で～？
内容と報酬によつてはお受けしますよ～」

「その前に、お前は氷結魔法が得意だと聞いた。
それは本当か？」

「事実です～」

私が氷結魔法が得意だと知つて依頼に來た？
あ～、なんか読めてきました。

「…」これは他言無用だ。

情報が漏れればお前を始末する

「了解しました。

それで、肝心な依頼内容は～？」

「…………闇の書の凍結封印だ」

はい、ビンゴ～。大当たりで～す。

つてことは、この青年はギル＝グレアムの使い魔ですね。
えっと、リーゼ＝ロッテとリーゼ＝アリアでしたか？

うわ～お、何もしなくてもA-sに介入するのが決定してしまいましたよ。

げに恐ろしきは人の力つてやつですね。

つて感じで私は現在、ハ神家に送り込まれています。
今の私の仕事は彼女の見張り兼護衛つてところです。

ギル＝グレアムですが、私が依頼を引き受けると同時に正体を明か
してきました。

なんでも彼女と生活していれば自然とわかるかららしいです。
まあ、確かにやがてが手紙を送っているのを見ましたが。

本来はリーゼたちが私の役目をやつしているというですが、今は『チコランダル』の製作に全力を注ぎたいらしく、私に全てを任せきました。

しかし完全に私を信用している訳ではなく、私が何か妙なことをすれば直ちに管理局に私の情報を渡すと言つてきました。

なるほど、確かにこの海鳴には負け犬になのはさんと星さん、スクライアさんも時々いますしね。

私を抑えるには充分と踏んだのでしょ~。

ちなみに報酬は資金はもちろんのこと、じぱらぐの海鳴での安全な生活（笑）らしいです。

なぜ（笑）が付くのかといふと、素顔のままじや表に出れば負け犬たちに見つかるからです。

つまり、自然と私ははやてと一緒に家で大人しくしているしかなくなります。

面倒ですね~。

「はあ~」

「どうしたん?」

ため息吐くと幸せが逃げるで

「はっ、幸せとは自分で掴み取るものですよ~！」

逃げた分は取り返せば良いんですよ~！」

「ほえ~、そんな顔して男らしい」と言ひ方やな~。
見直したで~」

「あつはつは~！」

「ひつやークソ狸さんは朝食がいらないらしいですね。もーひー、ダイエットでもしているんですか~？」

「すみません！

男の中の男のルナさんは余計な言葉でした！」

「わかればよろしくです~」

ククク、はやてを弄るのって楽しいですね~。
ここまでの『弄られオーラ』を見たのはライア以来です。
ツツ「ミミが速いのも良いですね。

さて、少し真面目な話をしましょ。

闇の書が覚醒し、ヴァルケンリッターが現れるまであと一週間ほどです。

確かあればはやての誕生日でしたよね。つまりは6／4です。
それから守護騎士たちとの生活が始まるんですが、そこに私という
他人^{イレギュラー}が入り込むことになります。

はやてには一年ほどこちらにいると言っているので問題はありませんが。

問題は、A・Sの終盤まで私が魔導師であることを明かす気はない
といつーことです。

これは私の意志でもあり、依頼内容もあります。

闇の書を封印した後はさっさと消えるというのが依頼内容です。
私自身も、ことを上手く運ぶためにバレたくはありません。

難しいことになりそうですが、なんとかなるでしょ。

最悪、新しい転生者を確認したら逃げても良いんですね。

難しいことになりそうですが、なんとかなるでしょ。

最悪、新しい転生者を確認したら逃げても良いんですね。

「まあ、ボチボチ行きましょうか～」

超大型ハリケーンの前の静けさ

「ああ～、肩が凝ります～」

疲れます。ひたすらに。

あ、皆そぞろ。ルナ＝ベルツです。

なぜ私がこんなに疲れているのかといつと、ライアの目こと『プロヴィデンス・ヴィジョン』を使つたまま生活しているからです。負け犬や新しい転生者がはやてに接触する可能性があるので見張つているんですが…。

こんなに疲れるとほ。寝てる時は使ってませんが。

それにもしても、あと四時間で日付が変わります。

今日の日付は6／3です。つまり、もうじき闇の書が覚醒します。

なので、

「はやて～、私はもう寝ますね～」

「えらく早いな～。

深夜アニメでも観るんか？

「そんなもんです～」

さつと寝ましょ。

どうせヴォルケンリッターが現れるのは確定しますし、出てから起きれば良いんです。

それに、いい加減疲れたので早く寝たいんです。

「おやすみなさい」

s.i.d.eシグナム

新しい主は、今までの主とは随分と違っていた。

私達が起動して初めて見た主は、目を回して氣絶された姿だった。

「ど、どうしてよー」

「とりあえず、医療設備のある場所に連れて行くべきだひつ

シャマルが慌てるが、ザファイーラが冷静に奢める。

「では、私が運ぼう。失礼します、主」

そのまま主を抱えて病院を探そうと部屋を出ると、

「ふあーあ、バタバタと喧しいですね~。

今が何時だと思ってるんですか~」

謎の少女が隣の部屋から出てきた。

寝ぼけているのだろう、白い寝巻きで枕を抱えたままだ。

すると彼女はまずヴィータを見て、次に私、気絶した主、シャマルの順に見回し、ザファイーラを見て視線が止まった。そのままザファイーラを見つめ、視線を逸らさない。

【おー、ここつづけの主の家族とかじやねえのか?】

【かもしけんな。同じ家に住んでいるのだ。

顔は似てないが可能性はある】

【さうね、一応事情を説明した方が。

それに病院の場所も教えてもらえるかもしねー】

【無用な混乱を避けるために話しかけようとした。
すると彼女は落ち着いた態度で、

「最近の泥棒はコスプレチックですね~。

でも男性のケモノ耳は流行らないと思いますよ~?】

そう言つてきた。

どうやら私達を泥棒と判断したらしい。

「ま、待つてください!

私達はヴォルケンリッターと言つて彼女の守護騎士

」

「泥棒は皆言つたですよ、『自分ははやつてない!違つんだ!』って
つて

ほり、警察を呼んできますから~」

「ちょー!話を聞いてくださいー!」

その後、シャマルの必死な説得もあり、通報だけはされずに済んだ。

彼女に理解してもらいつのにはかなり時間がかかっただけ行っておく。

結局、主はただ驚いて気絶しただけだとわかつたため病院には行かず、その場で事情を説明することになった。

「は～、魔法か～」

主が感嘆の声を上げる。

この世界には魔法文明が存在していないらしい。
それならそういう反応するのも無理ないだろう。

「良かつたですね～、はやで。

これで似非関西弁タヌキの他に魔法少女（笑）という称号も手に入りましたよ～」

「（笑）つて何やねん！」

「…主、先程から気になっていたのですが、そちらの方は…」

「ああ、ルナちゃんか。

この子はな、家に居候している外国人さんや」

「ちゃんつて言つな。

…「ホン、改めまして、ルナ＝ベルツです。」

一応お互いに客人という立場ですし、ルナと呼んでくださいね～」

最初の印象は華奢で触れれば折れてしまいそうな細い身体。

腰に届きそうな美しい銀髪に吸い込まれそうな蒼い瞳。

間違いなく街を歩けば十人いれば十人が振り返るような、絶世の美女といつたものだつた。

このルナが私たちの今後に大きく関わつてくるなど、この時は想像もしなかつた。

だが、ルナならばこう言つだらう。

自業自得だ、と。

side out

長いものに巻かれて窒息して死んでしまった（前書き）

新たな転生者、登場！

長いものに巻かれて窒息して死んでください

「今日は～良い天氣～、そ～らは、青くて～ - - -」

「その歌は危険や！」

今日も相変わらず素早いツッコミをくれました。
しかし、確かにこの歌は危ないですね。今度フェイトに歌わせたい
ですけど。

あ、皆さんこひちは。ルナ＝ベルツです。

現在、私はやはては病院の帰りです。一緒にシャマルもいます。
これから図書館に寄つてから夕飯の材料を買って帰る予定です。

本当はこのまま帰りたいんですけどね。

だつて負け犬に見つかるかもしれないじゃないですか。
はやての前で変身魔法を使うわけにもいかないですしね。
ですから、今は髪型をサイドテールにして伊達メガネをかけていま
す。

はやてたちには『誰?』って言われるくらいだったので、変装とし
ては上々でしょう。

その後でスカートを穿かされそうになつたので、少しOHANAS
HHしましたが。

といふか、それまで守護騎士のほぼ全員が私を女だと思つていたら
しいです。

ザフイーラは臭いでわかつたらしいですが。

流石は盾の守護獣！今日のご飯はあなただけ豪勢にしてあげますか
らね

それと、図書館に物凄い魔力を持つた人もいますし…。

「それにしても、はやてが本好きといつこのには驚きました。あ、本だけが友達ってことですか、すみません～」

「ちよー・マジレスせんとこでー。」

「でも大丈夫です～。」

はやて、あなたはもう一人じゃありますよ～

「…そりやな。私はもう、一人やない！」

「やうですょ～！

愛と勇気だつて友達です～！」

「やうやー・愛と勇気…………って、私はアン○ンマンかー。」

「ふつ、ナイスツッパ!!です～。」

シャマルもこれくらいになれば合格ですよ～。精進してくださーね～

「え、私もなのー?」

「だつて守護騎士でのツツコミがあなたの仕事なんですよ～？ザツフイーと一緒にツツコミに生きるんでしょう～？」

サポートなんですから、ツツコミのスキルは必須ですよ～」

「… もう良じです」

そんなこんなで図書館にやつてきました。

それにもしても、さつきから図書館の中をつるついている巨大な魔力反応。

負け犬ではありません。もつとデカイです。正直、私よりも。こんなに大きい魔力を見たのはキャロ以来です。

これは、本当に来ましたね。

え、何がかつて？

新しい転生者がですよ。

すぐ近くにいるようなので、私はキヨロキヨロと辺りを見回しました。

はやはては読みたい本を探しに本棚の方に行ってしまいました。

シャルマルは私と一緒に隅に控えています。

すると、

「……ん?んん!？」

視界の隅に、明らかに変な人がいました。

服装は普通です。別に変な行動をしている訳ではありません。しかし、その人は明らかに異質でした。

その人は、本棚で本を取ろうとしているはやてに近づいていました。

「はい、これで良いかな？」

爽やかな笑顔ではやてに本を渡しました。

「あ、ありがとうございます……す？」

お礼を言いかけたはやても途中で呆然としてしまいました。
でも、仕方ないと言えば仕方ないでしきょう。
だつてその人、

イケメンで銀髪で赤と金のオッドアイだつたんですか？

「いや、当然のこととしたまでだよ」

そして再び笑顔をキラン。

「げ、ゲホッ、ゴホッ、ゴホホッ！」

なんだそれは！私を笑い殺すつもりですか！？

銀髪のイケメンwwwオッドアイwwwき、キランwww

ふ、腹筋が！腹筋が爆発しそうです！

図書館で大爆笑なんてルールに反しますが、そんなことを言つてい

る場合、じゃありません。

「、こんな笑いの化身みたいな人とA・Sでは戦うということですか！？」

無理！絶対に無理！笑いのせいで顔を見ただけでもう動けない！

「、ルナちゃん、大丈夫！？」

シャマルが心配してくれますが、呼吸困難に陥っている私は返事ができません。

ジェスチャーで大丈夫と伝えるのが精一杯でした。

「ふふふ、他にも欲しい本はあるかい？」

君みたいな可愛いお嬢さんの頼みならば何でも聞くよ

か、可愛いお嬢さんwww

もうやめてください！笑いを抑えるのも限界が…！

「ルナちゃん、本当に大丈夫？」

「エホツ、エホツ、だ、だいじょう

」

「遠慮しなくても良いよ。僕は暇だつたしね。

それに、レディーを助けるのは紳士として当然だ」

れ、レディーwww紳士ツwww

「ゲホツ、ゲホツ、ガホツ！

す、すみませんシャマル、先に帰つても良いですか？」

もう駄目です。

あんな『僕が思いついた完璧な主人公』みたいなのが見ていたら死にます。

肺が悲鳴を上げているし、面白すぎて頭も痛いです。

返事も聞かず、私は図書館を出ました。

そのまま走つて帰宅します。

そうしないと道端で大爆笑してしまいそうだったので。

「教授、以前負け犬を厨二病と仰っていましたよね～？
でも、上には上がいましたよ～」

s.i.d.e 新たな転生者

ふふふ、ファーストコンタクトは上々だらう。
はやてはもう、僕に惚れ始めている！

ああ、自己紹介がまだだつたね。

僕の名前はジークフリート＝ノ＝神凪、転生者だ。

僕がなぜ転生したのかつて？

それを説明するには少し前の話をしなければならないな。

僕は、俺は死んだ。

トラックに撥ねられて死んだんだ。

俺はとりえもなく、容姿も普通。

少しオタクだつたかもしれないが、それでも充分普通だつたのに。
何でだよ…。俺が何か悪いことでもやつたのかよ。ちくしょう。

そして、俺は何もない真つ白の空間を漂つていた。

このまま消えるのかと半ば諦めていた時、それは起つた。

突然、田の前が真つ暗になつたかと思つと、神殿のような場所で突
つ立つっていた。

そして、田の前には白衣を着た眼鏡の男と、赤毛の少女に金髪碧眼
の美青年がいた。

「やあやあ、おめでとうーお前は選ばれたのさー。」

そう言つて白衣の男が両腕を広げた。
選ばれた?どうこうことだ?

「まあ、突然選ばれたと言われても混乱するだけだろうしな。
順を追つて説明してやる。

まず初めに、俺様たちは神だ」

「…………は?」

「は?じゃねえよ。

神様がいるんだぜ?何か言つ?とはねえのかよ?」

紙、髪、神!?

神だと!…?じゃあまさか、

「これってまさか、転生させてくれるっていうアレか！？
二次創作でお決まりの！？」

「そうだ」

「じゃあ何でお前は偉そなんだよ！
アレだろ、どうせ書類に飲み物溢したせいで俺が死んだとかなんだ
ろ！」

「じゃあ、何か言ひことがあるのはお前らだうが！」

俺は酔っていた。

どこかの世界で俺TJEEEEEをしたりハーレムを築いたり。
そんなお決まりのパターンだと高を括っていたんだ。

だが、田の前の神はそんな常識を軽々と破壊してくれた。

「ククク、お前面白いな。そんな訳ないだろ？」

「…………え？」

すると、眼鏡の神は邪悪な笑みを浮かべこっちに歩み寄ってきた。
その田はまるで、虫を見るような田だった。

「前提からして間違つてんだよ、お前は。

何で神の俺様が、お前が間違つて死んだからって謝る必要があるん
だよ。

神からすれば人間なんてティッシュペーパーよりも役に立たないん
だぜ？」

そんな命が一つや一つ吹っ飛んだからって一々構つて暇はねえんだよ」

「ヤニヤと笑いながら言い放った。
知つたことじやないと。

「それに、今回は俺様の好意で特別に転生させてやるって言つてんだけ?」

良いか?お前の無意味で無価値でクズみたいな命を俺様が有効活用してやるんだよ。

テメエに拒否権があると思つてんのか?一応あるぞ?
文句があるなら言え。その時はテメエを地獄に叩き落として他の奴を呼ぶだけだ

違つた。こいつは俺が考へていた神とはまるで違つた。
人間を本当にクズとしか思つていない。

「だが、俺様に従うならば願いを叶えてやるつ。
俺TUREEでもハーレムでも主人公アンチでも好きにすれば良い

い

それは命令であり脅迫だった。

だが、同時に一つの光明にも見えた。

「お、俺は何をしたら良いんですか?」

あまりの恐怖に、思わず敬語を使つていた。

これは正面から話をしたやつにしかわからない感情だと思つ。まるで、心をズタズタにされた上で踏み碎かれたような感じになるのだ。

「ククク、それで良いんだよ人間。

お前らみたいな下等なゴミはそれが正しい態度だ。

…おつと、話が逸れたな

そう言つと、神は転生のルールを説明し始めた。
行き先は『魔法少女リリカルなのは』の世界だということ。
他にも転生者がいるということや、そいつと戦うということ。
向こうには強力な仲間がいるということ。

「つまり、俺は補欠つてことですか？」

「そうだ。んじゃ、さっそくだが特典を決める」

『特典』、俗に言つチートのことだが、この世界では行き過ぎたものは却下されるらしい。

だから、無限の剣製などは使えない。

「なら、魔力ランクをS S Sにするとかは…」

「可能だ。一つ目はそれで良いな？」

俺は頷く。

ぶっちゃけ、あの世界は魔力量が全てだと俺は思つ。
だから魔力が多い、それだけで俺の勝ちは決まったようなものだ。

魔力 > 技術 > デバイス

これが俺の中での強さに必要なものの序列だ。

それに、向こうには強力な味方がいるらしい。

そして相手は一人、もう俺の魔力があるだけで勝ちは確定だろう。

よし、ならば後はハーレムを作るための準備だな！

「一いつ耳は、俺を銀髪でオッドアイのイケメンにしてくれー！」

「…わ、わかった。

お、オッドアイの色は赤と金で良いか？』

「おお、それ最高！」

わかってるじゃないか、神様も！
よし、ならば最後はあれだ！

「最後の願い、俺にニコポとナナーポの能力をくれー！」

「ツツツツツツクククク！

い、良いぞ。わかった。その一耳はセシートとして送つてやる

よしあー。これでハーレム作りの準備は万全だぜ！

強くてかっこよくてニコポ持ち、これで作れないハーレムなんかね
え！

幸いにも、味方になる転生者はハーレムとかには興味がないらしい。
つまり、俺はヒロイン達を独占できるという訳だ。

「お、お前はA-sからの参戦になる。
原作ブレイクでも何でも好きにして良い。

精々、死なないよつに頑張れ～」

そして俺は光に包まれ、『魔法少女リリカルなのは』の世界に送られた。

ククク、待つてろよ、なのは、フヒイト、はやで！
ハーレムを作つて俺の、いや、僕のものにしてやるー。

という訳さ。

ニコポの能力を以つてすればざつとこんなもの。

戦いなんてもう一人の転生者にやらせておけば良い。

その間に、僕はハーレムを築いてヒロイン全員をおとしてやるー。

side out

side教授

「ぶつははははははははは！」

ハーレムwwニコポwwヒロインを独占ww
最強だ、あらゆる意味で最強だ、あいつ！」

「貴様、どうぞ」とだ！

「これでは参戦させた意味がないであらつー！」

すると、赤毛少女の神が怒鳴った。

ま、気持ちはわからないでもないがな。
あんなの、見るからに役立たずだし。

だがな、

「おじおい、俺は何か悪いことをしたか？
ルールの説明に不備があつたか？勢力の説明を怠つたか？
違つよな？あいつはわかつた上でハーレムを作つて言つたんだぜ
？」

そう、俺は何も悪くない。

確かに原作キャラの仲間になる魂を選ぶとは言つたが、歴戦の猛者の魂を選ぶとは言つてない。

簡単にY esと答えたお前らが悪いんだよ。

それに、あの馬鹿も悪い。

状況を説明してやつたのにハーレムなんて甘えじとを言つてゐるんだからな。

これが『Y UH-TORH』といつやつか…。

「それによ、案外いけるかもしけねえぜ？魔力はS U S Iもあるんだし。

デバイスも持たずに行くと聞いた時には笑いつになつたが」

「べべべ、じこつ…！」

ククク、怒れ怒れ。

もう一人の神は既に半分諦めているみたいだぞ？

さてと、あいつが今後どんなことをしてくれるのか、本当に楽しみだ。だが気をつけろよ、ルナ。

案外、そういうやつほど状況を自覚すればしぶといもんだぜ？

「ナキラニのやうになな。

side out

男の娘は辛いよ

「…………はあ、死にたいです~」

どひじて私がこんな目に…。

私、何か悪いことをしたでしょつか?

あ、皆さんどひも。ルナ＝ベルツです。

ただいま夕飯の買い物中です。一緒にシグナムもいます。

「すまんな。だが、これも主の命だ」

「嘘吐きなさい、あなたもノリノリだったでしょ~?」

ああ、周囲からの視線が痛いです。

穴があつたら入りたいてこうじうことなんですね。

なぜ私がこんなに落ち込んでいるのかを説明するには、数時間前の話をしなければなりません。

そう、私は騙されたんです。あのクソ狸に…。

「誕生日プレゼントですか~?」

「そや、まだ貰つてなかつたやう?」

六月の終盤、あと一週間もしないで七月になると、この辺りの時期に、はやてが終わった誕生日の貰物をねだつてきました。

「えへ、でも今更な感じぢやないですか~?」

「それもやうなんやナゾな。

ほひ、ルナちゃん約束してくれたやう~あれを

「…………あれですか~?」

何でしょ~うか?

何か言つた氣もしますが、よく覚えてません。

「ほひ、私の言ひ方とを一つだけ聞いてくれるつてこひやつせ

「……あ~」

そういえばそんなのもありましたね~。

はやての誕生日の前日、あまり外出ができる状況でもなかつた私は『はやての言ひ方とを一つだけ聞く』ところ訳わからぬ命令権みたいなものを約束させられました。

「…もう時効で良いんぢやないですか~?」

どうせろくな願い事じやないんでしょ~しほ

「それはあかん!

こんな面白やうなことを見過すなんて私にはできくん!」

「ほり、既に変なテンションですじ。

するとはやはては守護騎士の旨を呼び出し、私に向かわせるかを話し合いました。

「家事を一日代わりにいつか？」

「あかん、それじゃあ普通すまざー。」

「じゃあアイス買つてこむせるとか。もうひとルナの白腹で

「それもええけど、なんか味気ないな～。
シャマルとザフィーラはなんかないんか？」

「こえ、特には」

「はーはー！」

「私にとひておきの案がありまーす！」

すると、シャマルがテンション高めに拳手しました。
うへえ～、嫌な予感しかしません。

「はやてちんーほり、この前買つたあれです！」

「……あれかーなるほり、その手があつたやんかー！」

「えー…マジでやるのかよー？」

「ルナが怒り狂つ姿が田に浮かぶのですが…」

「シグナム、一人でルナを抑えるぞ」

なんか、どんどん雲行きが怪しくなつてきました。
これは逃げた方が良いのかも…。

私が悩んでいた間にシャマルは血塗くと走つて戻り、そのままある
ものを持ってリビングに戻つてきました。
それは…、

「うへ、それはゴスロリじゃねえですか！？」

そり、ゴスロリです。しかも水銀〇のヒソツヘリナ。
ドレスのようなその服はアリスを思い出せます。

「…………ま、まさかこれ着るつて言つんですか～？」

「そやで～。

サイズはピッタリのはずやから、このままこじで着て～な。
その格好で今日一日を過ぐす。これが私のお願いや」

「…撤回しないと殺す」

瞬間、部屋に殺氣が充満し、守護騎士の顔がはやてをむかひ立つた位

置についた。

そんな中、せやは平氣な顔をしてこちらを眺めています。

「そんなに黒ゴスが嫌なんか~？」

それなら白バージョンもあるで~あと和ゴスとかも」

「わ~この問題ではあつませんね~。

私が女顔なのは認めますが、女装なんて男の恥です~。
断固拒絶させていただきます~」

まつたく、何を考えているんですか。
こんなの断るに決まっているじゃないですか。

「そか、それは残念やな。でも良く考えてみ?

ルナちゃんは自分が言つてることをわかつてるんかな~?」

はやてが普段はしなこよつないやつとした笑みを浮かべました。
…なんですか、なんでそんなに余裕なんですか!?

「わ~ことですか~?

女装はしない、それは確定です~」

「それならルナちゃんは既に男やない…~」

「……………は？」

意味がわかりません。

なぜ女装をしないことが男ではないことと繋がるんですか？

普通は逆では？

「ルナちゃん、あなたは約束したはずや。『できる限つの」とはする『』って。

ルナちゃんは服を着る」ともできんのか？」

「そんなはずないでしょ」へ？

ですから、私は男として

」

「へえ～。

ルナちゃんが『』ってのは、自分からした約束も守れないん
か？」

「え、え？ いえ、ですから

」

「ルナちゃん、男に『』はないんだで？」

……………しまつた！

「」で私が約束を破れば男の風上にもおけないとか言われます。かと書いて「スローリを着れば私の男性としての威厳はなくなつたも同然！

つまり、逃げ道がない！

「そうだな。男たるもの、約束を違えるのは許されん」

「おいおいルナ、お前は男だろ？なら約束は守れよ！」

「もうやめなさい。」

すまん

み
咲
方
も
し
な
し
！

孤立無援、四面楚歌、絕体絕命です！

「ルナちゃん、ルナちゃんの『心』は男なんか？」

そしてはやでが私に、黒バスを差し出してもました。

「ここから、どうあっても私にこれを着せたいらしいです。

いや、しかし、でも……！

「ルナちゃん、男を見せやあああああああああああああ！」

そして私はゴスロリを着ました。

その結果、

11

八神家の笑いものにされました。

ザフイーラが申し訳なさそうにこちらを見ているのが逆に辛かつた
です。

へへ、もつ我慢できません！

今日は一日、部屋に閉じこもつて

「あ、ルナちゃん~。

今日はルナちゃんが買い物当番の日やからな。
ちゃんと行かないとあかんで、その服でな~」

「あなたは鬼ですか！？』

ところの訳で、現在に至ります。

服装？もちろん水○燈ですが、なにか？
はやて曰く、『田の色以外はクリソツヤで！おばかさんつて罵つ
てえなー』らしいです。

一応言つてあげると泣いてお礼を言つてきました。正直、気持ち悪
かつたです。

その後で買い物に行くことになつたのですが、見張りとしてシグナ
ムを行なせてきました。

途中で着替えないようにひとことさせるためらじーです。チツ、鋭い！

「さてと、買い物はもう終わりです~。

このまままつすぐ、まつすぐに一家に帰りましょうか~

「わかった。私としてはもう少しその格好のお前を見ていたかった
がな。

お前がそんなに落ち着きがないのは初めて見た』

「なら今度、水着で町内を一周してみると良いですよ～。
きっと私の気持ちがわかりますから～」

そんな感じで帰路についたのですが、

「ねえ君、可愛いね。それは○銀燈のコスプレかい?
とても似合っているよ」

つい先日に聞いた声が聞こえました。
どうやら私に話しかけているみたいですね。

「…………はあ～、今日は厄日ですね～」

振り返ると、先日の厨二病末期患者がいました。

普段ならば顔を見ただけで大爆笑していたしが、この時はテ
ンションが下がりに下がっていたので大丈夫でした。

「それはどうも、ありがとうございます。
では、私たちは急いでいるので～」

「まあまあ、そんなに急がなくても良いくらいやないか?
話でもどうだい?」

【転生者同士、話したいこともあるんだ】

すると、厨二さんが念話で話しかけてきました。

『転生者』という単語が入っていたので、私のみに向けられたもの
のようです。

「…………はあ～、わかりました～。」

シグナム、先に帰つていてください。荷物は後で私が持つて帰ります～」

「…いや、私が持つて帰ろう。その格好のせめてもの侘びだそのまま私を置いて急いで帰つていきました。

…はやてに知らせる気ですね、あれは。

ひょっとするどどこから覗く気なかもしません。

「では、どこかに移動しましょつか～」

sideジーグフリート

僕と○銀燈のコスプレをした彼女は、近くの喫茶店に移動した。本当は翠屋に行きたかったが、彼女がここ遠いから嫌だと言つたためだ。

僕が彼女を見つけたのは偶然だった。

家庭の事情で引っ越してきた（という設定）の僕は、まだ海鳴の地理を良く知らない。

だから原作キャラを探すついでに街に出てきたんだ。

すると、少し先のスーパーにピンク色のポーテールが見えるじゃないか。

シグナムを発見した僕はさっそく声をかけようとしたが、一緒にいた少女を見て思わず息が止まつた。

それ以外に言い表せなかつた。

黒いゴスロリ風のドレスを身に纏つた姿は神々しくすらあつた。
あんなキャラは原作にはいない。かといってモブにしては美しすぎ
る。

だから僕は彼女が転生者であると悟つた。そして、同時に彼女を僕
のハーレムに欲しいとも思った。

幸い、僕にはニコボもナデボもこの完璧な顔もある。
ククク、必ず彼女を手に入れてやる！

「それじゃあ、自己紹介をしようか。

僕の名前はジークフリート＝＝＝神凪つていうんだ、よろしくね」

ここで二コボを発動させつつスマイル。

ふふふ、これでとりあえずは安心だ。

あの眼鏡の神が言うには、二人の転生者のうちの一人は原作アンチ
を平氣でやるようなやつらしい。

こんな可愛い女の子がそうだとは思えないが、念には念をとい
つだ。

僕の二コボの前では、あらゆる女の子は僕の笑みの奴隸になる。
これで彼女が危険な方の転生者だったとしても、僕のものになると
いうわけだ。

「じ、じーくふりーと？ かんなぎ？」

「へ、へえ～、なんだか壮大な名前ですね～」

すると、彼女がさつそくソワソワし始めた。

「コボが効いてきたみたいだな。

「それで、君の名前は？」

「あ、申し送れました～。

私はルナ＝ベルツと申します～」

そして回りつつこちらに笑いかけてきた。

若干だが笑顔が引きつっている気がしたが、勘違いだろ？

「それで、私に何の用ですか～？」こちらの状況は知っているんですね～？

私があなたを速攻で殺すとは考えなかつたんですか～？

「ふふふ、君みたいな可愛い女の子がそんな物騒なことを言つてはいけないよ？

それに、そんな忠告をしてくれる時点で君が危険な方の転生者じゃないといつ証を」

彼女は唖然とした顔で黙り込んでしまつた。

ふつ、僕の名推理に驚愕してしまつたようだね。

(ば、馬鹿だ、ウルトラ馬鹿がいる…)

「ん？ 何か言つたかい？ 聞こえなかつたんだけど」

「い、いえいえ～！ なるほど、その考えはありませんでした～！」

『迷』推理ですね～！ 恐れ入りました～！

そこまでの自信があるとは、あなたも相当な特典を貰つたんでしょうね～」

「ははは、名推理だなんてそんなことないさ。

それに、僕はただ魔力をS S Sランクにしてもらつただけだよ。まあ、これだけの魔力があれば大抵の敵には勝てるだろうけどね」

「…………えっと、それだけですか～？」

「それだけって？」

「ほり、特典は三つまででしょ～？」

「ああ、他の特典は秘密さ。

でも、S S Sランクの魔力さえあればもう一人の転生者くらいは簡単に倒せるよ」

「……え、え？あの、失礼ですがデバイスは～？」

「そんなのどうにでもなるよ。

ほら、主人公には自然と力が備わるものなんだから」

「…………その発想はありませんでした～」

またもヤルナ（既に脳内では呼び捨て）は啞然としている。
ふつ、僕が頼りになるから見とれているんだろう。

「それで、もう一人の転生者はどんなやつなんだい？
剣型のデバイスを使うといふことくらいしか聞いていないんだけど

「え？ああ、もう一人の転生者ですか～。

その通りです～、主にミッドチルダ式を使う少年です～」

「……男か」

なるほど、味方になる転生者は原作キャラとくつつくとはないと
言っていたのは理解できる。

なんせルナ（本人は呼び捨てにされていることを知らない）は女の子だ。

くつつくことがないのも当然だろう。

逆に、もう一人は誰かとくつつく可能性があると聞いている。
つまり、もう一人は俺と同じ目的である可能性が高い。

「そうか…。今までは女の子一人でたいへんだったかもしれないけれど、これからは僕がいる。
二人で頑張っていこう！」

そう言って、僕はルナ（ジークの中では既に定着）の手を取った。
そして安心させるように笑いかける。

「わ、わかりました～！わかりましたから手を離してください～！」

ルナはそう言って無理やり手を払った。
ふふふ、照れてる照れてる。

「あ、え～と、そうです～！

そろそろはやて帰らないとはやてが心配するので、もう帰りますね～！」

そう言って彼女はそそくさと喫茶店を出て行ってしまった。
ニコポの威力は昨日のはやてとの接触で確認済みだ。

これからどんどん好感度を上げていけば、いずれ彼女も僕のもの。
ふふふ、あーっはっはっはっはっはー！

sideout

際立つ馬鹿さ！ 驚きのサセを！ そして何よりあのウサセ！

「まあ、まあ、無む事じに済ました……」「うふ、鳥肌が立ちます」

何度も殺そうと思ったか数え切れません。

努めて冷静は持した一歩りですかとさまで上手く隠せたが…
笑顔が引き攣つっていたような気もしますし、声を荒らげてしまつた
かも…。

彼を上手く騙してこちらに引き込めねばと考えてお話ししましたが、結果は明らかです。

話になりません。

なにあの馬鹿推理？デバイスすらなしで転生？おまけに主人公とか

イタすぎだつつの！

度を超えた厨一病は逆に哀れです。笑えもしません。

しかし、それは負け犬も同じはずです。

彼が上手く負け犬を引っ搔き回してくれれば、簡単にA-Sで負け犬に勝利できるでしょう。

つまり、厨一を上手く使つのがA-sでの勝利の鍵ですね。そつするにまでは厨一と何度も接触する必要があるので…。

「これは想像以上にハードですね~」

幸い、ケータイのメアドと電話番号は教えてもらえたので余りのは簡単です。

私は持つていないので買つ必要があつますが、

「……………が、頑張るぞ~~~~~！…」

結論、気合でなんとかするんです！

冷静な思考を捨てて、無心で相手をするれば良いんですね！

そう、あんな精神鑑定に行つた方が良いやつの言葉なんて聞き流しましょ~！

やれるぞ、私！！！

そつ自己暗示をかけてなんとか帰宅しました。

はやてに『アートはどうやつた~?』と聞かれました。

訂正、あの厨一は死体も残さず殺す。

男の娘は辛いよ（後書き）

ジークワールド、炸裂！ルナは9999ポイントのダメージを受けた！

ちなみに、はやては水銀党です。

ルナ＝ベルツの憂鬱

澄み渡る空、小鳥の鳴き声、八神家の皆の笑顔、そして、

「ははは、はやはは面白い子だな。そつだ、一緒にゲームでもしようか」

いつの間にか我が家の一員みたいになつてこる厨二。

…どうしたいうなつた！？

あ、皆さんこんちは。ルナ＝ベルツです。

今日は水〇燈じやありませんよ？普通の普段着です。

時は既に十月の頭、これまで色々とくだらないことがありましたが、長くなるので割愛します。

その間に彼、厨二は何度も八神家を訪れてきました。
そして気がついたらこんなことに…。

「あの、はやて～？この間こいつんなにひき、ジークちゃんと仲良くなつたのですか～？」

「ん～？なに言つてるんや、ルナちゃんは～？

買い物とかの途中で良く金づからに決まつてるやう～。

それに、あれや……、ジークさんつてかっこええや～……

「……………は？」

な、何を言つてるんですか、この子は…？

あがががつこいこ～？どう見てもただの馬鹿でしょ～…？

精神科にでも行つた方が……………精神科？

まさか！

「シグナムシグナム～！
ジークさんってどう思いますか～？」

「な、なに、ジークか！？」

いやそだな別ごども思つてなどいなこぞーっ。」

「い、いっせですか！？」

「お、おージーク！
アイスあるからよ、その、一緒に食わねえか？」

「あうねー一緒に食べましょ」ジーク君ー・まうまう座つてー。」

セツニヒトセリげなく自分の隣に誘導するシャマル。

ええ～。

「え、ザフイーラはどう思いますか～？」

ぼそぼそとザフイーラに話しかけます。

本当は念話を使いたいのですが、八神家は私が魔法を使えないと思っていてるので却下です。

「…正直に言えば、あまり好ましいやつとは思えんな。

主やシグナムたちに不埒な視線を向けているのも良く見る」

あれ？ザフイーラは普通です。女性限定で厨二が好かれている？

でも、あんな変人をはやてが好きになるでしょうか？
はやてはしつかりしてますし、人を見る目はあるでしょう。
つまり、

「……洗脳攻撃……」

しかし、魔法を使つているより今は見えません。魔力も感じません
しね。

つまりこの、体质系の特典ですか？

厨二、変態、気障、洗脳。

これらの要素から考えられる」とは、

「一いつポ、もししくはナーテポですか？」

しかし、それなら私にもおそらく使つているのでしょうか。
厨二は私が男だと知らないはずですし、ショットガソリンアートに誘つ
てきますから。

しかし私は相変わらず厨二がキモイと思つていますーそしてザフィ
ーラも彼を好ましく思つていません。

つまり、男には通用しないのではないのでしょうか？

「ザフィーラ、何かあつたらあいつをぶつ飛ばしてやつてください
ね。」

その時は私も加わりますから～

「……心得た」

危ない危ない、厨二が馬鹿で助かりました。

これが性別に関係ないタイプの能力だった場合、今までやられた可能性があります。

それにして恐ろしい能力ですね『ニコボ』。ラノベとかで見た時は、『はいはい、ハーレムを目指すんですねわかります』みたいに思つていましたが、実際に目の当たりにするとかなりヤバイ能力です。

誰にも気づかれないうちに女性限定とはいえ赤の他人すら味方にしちまうその隠密性。

ただ相手に笑いかける、頭をなでるという動作以外に必要ないという簡易性。

そして、もう解除は難しいだろ？と思えるほどの洗脳の強力さ。

おそらく敵だらうとあの能力の前では奴隸に成り下がるのでしょうか。ハーレム？モテモテ主人公？そんなチャチなことに使うなんて馬鹿としか言いようがありません。

その気になれば世界を牛耳れますよ。

恐るべし、厨二……………！

そういうえば、彼は負け犬が通っている『私立聖祥大学付属小学校』に通い始めたんでしたね。

負け犬と接触したという話は聞きましたが、私のことは話さないでくれたらしいです。

そして、彼にはあまり近づかないようにしてるとか…。騙されてる

騙されてる

おっと、話が逸れましたね。

つまるところ私が何を言いたいのかといふと、

【アルテミス、明日、私立聖祥大学付属小学校に潜入します】

【あの厨二病患者の学校にですか?】

【ええ、確かめることができました】

なのはせん達も洗脳されてる可能性があるということです。

翌日、私は私立聖祥大学付属小学校にいました。

変身魔法を使い、同じ年くらいの女子の姿をしています。制服はバリアジャケットで再現してみました。

髪型は黒髪のおかっぱで、眼鏡もかけるといつ徹底ぶりです。これで地味子の完成。

大人の姿をしないのは、子供の方が風景に溶け込みやすいと思つたからです。

え?なぜ女子なのかって?

半ズボンを穿きたくないからですが何か?

だつて恥ずかしいじゃないですか!!それならスカートの方がマシです!

教授には『訳わからん』と昔に言われましたが。なぜわからないのですか?

…また話が逸れましたね。

とにかく、今回の目的はなのはさん達の日常に迫るためのものです。大人が近くにいては気が散ると思ったので、今回は生徒の姿で潜り込むことにしました。

何より怪しいですね。

「アルテミス、見た目はどうですか～？」

『問題ありません』

「よし、準備完了です～！では、行きましょうか～」

『Yes, my master』

狙いは昼休みです。

その時間は昼食をとるはずなので、仲の良いグループなどに自然と分かれます。

つまり、厨二への好感度が高いならなのはさんは一緒に食事をしているはずです。

すると案の定です。

なのはさんは星さんと他に一人、そして負け犬と厨二を誘つて屋上へ行つてしましました。

どうやらそこで食べるらしいですね。

屋上に出ると、ベンチで仲良く……仲良く？昼食を食べる六人がいました。

なぜ疑問そうなのかといつと、席が明らかにおかしかったからです。ベンチは三人用を二つ使っています。それなのに、

なのは 厨二 金髪 カチューシャ

星 負け犬

つて感じになつています。

おーおい、三人用を四人で使つてるよ…。

そんなに厨二が好きかよお前ら。マジドセンス悪いやつばつかだな
…。

うわ、厨二と弁当の中身を交換してみマジキメエ…。

……はつ！ついつい本音が出てしました。

いけないいけない、クールにならないと！

そのまま私は厨二のベンチの隣のに座りました。負け犬のとは反対側のベンチです。

一応、弁当は持つてきてるので食べながら話に耳を傾けます。
すると不思議なことに気がつきました。

星さんが会話に混ざりついしない？

負け犬とは楽しそうに会話をしています。表情はあまり動いていませんが。

なのはさんや金髪が話しかけてもちゃんと会話が成立しています。
なのに、厨二が話しかけた時だけは素早く会話を終わらせるかなのはさん達に振っています。

それはまるで、厨二のことを見越しているみたいで…。

まさか、厨二の『一二二』が通じていない？

初めはまさかと思いましたが、観察すれば観察するほどやうとしか思えません。

負け犬に通じないのはわかつていましたが、星さんにも通じないのは予想外です。

女性であるところだけが『二二九』の対象ではないところとでしょうか？

「…保留ですね~」

【やうですね、現段階では情報が少なすぎます】

そのまま私は弁当を閉じて屋上を立ち去りました。

そして放課後、私は翠屋でシュークリームを食べていました。

もちろん姿はさつきのままです。バリアジャケットを解除して私服に着替えてます。

なぜ私がここにいるのかといふと、金髪さんが『放課後に翠屋へ行くわよ！』と宣言するのを聞いたからです。

しばらく待つと例の六人がやってきました。やはり星さんは厨二と距離を取っているような…。

そして六人はなのはさんに良く似た栗毛のお姉さんに注文を…。

……んん？

あれ、おかしいですね？

今、厨二はお姉さんにあのスマイル（笑）を使ったのにお姉さんに反応はありません。

本当にただのスマイルだつた?でもなのはさん達は見とれています。星さんと負け犬は反応なしですが。

「…またです、また効果なしの人が出できました。いつたいどんな法則があるのか未だに良くわかりません。

しばらく観察していましたが、結局それ以上の情報は得られませんでした。

う~ん、心配だな~。本当に厄介な能力ですね『ニコボ』って。知らない間にst'sの主戦力のほとんどを支配下に置いてますよ。そういう意味では負け犬以上に面倒な敵ですね。

はあ~、A'sが始まつたらルルとナナも彼と会うんでしょ~うね~。グレアムさんから聞いた話によれば、一人はリンディ=ハラオウンが預かっているらしいです。

つまりそれはA'sで海鳴に来る可能性が高いということです…。

「…ルルとナナが心配ですね~。

あの二人、亞流ベルカ式を教えているので情報が駄々漏れです~」

ああ~、憂鬱ですね~。

饅頭よりも無能な味方が一番怖い（前書き）

今回、少し超展開気味かもしだれません。
先に謝りておきます、ごめんなさい！

饅頭よりも無能な味方が一番怖い

sideジーク

現在は十月の中盤、もうじきシグナムたちが魔力の蒐集を始める頃だ。

僕は今、八神家の庭で寛いでいる。隣ではヴィータが僕に寄り添つて寝ている。

すっかり僕のものになつていて僕の言つことをよく聞いてくれる。

それにもしても、おかしい。ルナと出会つて既に二ヶ月、なのにルナが一向にデレる気配がない。

家に行けばちゃんと歓迎はしてくれる。しかし、その反応は友人にに対するものであって、恋人などとは少し違う気がする。ルナは二コポが効きにくい体质なのだろうか？

「まあ、それももうすぐ終わりさ。

優しいルナのことだから、きっとA-sが心配で疲れているんだろう。

ふふふ、待つていなよ。もうすぐ僕がなんとかするからね」

そして僕は、膝で寝ている一匹の猫を撫でた。

side out

…………おかしいです。

現在は十一月の初め、それなのに全く守護騎士の皆が動き出す気配
がありません。

どこかで何かが狂つたんでしょうか？

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

最近すっかり寒くなつてきました。もつ半分は冬ですね。

それなのに皆は各自で出かけています。私も一緒に行きたかったんですけど…。

つて、そんなことはどうでもいいんです！

本題に戻りましょう。

別に、多少なら守護騎士の皆の活動が遅れても問題はありません。
最悪の場合、厨二の魔力を死ぬまで蒐集すれば良いんですね。それで
遅れば充分に取り戻せます。

問題なのは、最近はグレアムさんとも連絡が取れないことです。

向こうからの連絡が最後に来たのは十月の中盤。

それ以降はこちらからの連絡にも出るこつがありません。リーゼた
ちも来ませんし。

忙しいから出られないというのはありません。私が教えてもらつた
のは、グレアムさん本人に直通する完全プライベートの方法です。
多少忙しくても本人に直通するなら氣づかないということはないで
しょう。

つまり、

「出られない状況なのか、もしくは私を切り捨てたかですね~」

『後者である可能性は低いと思われます。

向こうにとつてマスターは充分に利用価値があるでしょう。闇の書に対する切り札であるマスターを切り捨てるメリットがありますせん』

「ですよね。それなら今頃、私は追われる身になつてゐるでしょうし〜」

『では、負け犬が何かしたのでしょうか? 彼ならば原作知識を利用していくことも考えられますか?』

「可能性としては低いと思ひますよ〜?』

負け犬は『闇の書についての情報はどうやって手に入れた?』と聞かれれば答えられない立場です〜。

家には一回も来てないですし、『厨』が言つたのはハ神家と負け犬が接触した様子はないらしいですしね〜』

そうなると消去法で原因は厨〜とこ〜とになるのですが…。

「ないです〜』

『ですね』

あのウルトラ馬鹿にそんな巧妙な作戦が立てられるとは思えません。

私に気づかれずに作戦をする?そんな馬鹿な。

守護騎士たちも何も言つてしませんし、心配のしそぎでしょうか?』

すると、ケータイが振動し始めました。着信です。

相手は……、グレアムさん?』

「はい、もしもし〜?』

『ルナ君、久しぶりだね。私だよ』

「本当にですよ。長い間連絡が取れないので心配していました。
今までどうしていたんですか～？リーゼたちも最近は来ませんし～」

『…そのことなんだがね』

突然グレアムさんの声が厳しくなりました。

ひょっとして本当にトラブル発生ですか？

『闇の書、いや、夜天の書の凍結封印は中止する』

「……………はい？」

理解不能です。あまりの急展開に頭が追いつきません。
封印を、中止？それに夜天の書？なぜその名前が？

「ちょ～突然そんなことを言われても困ります～！
何か問題でもあつたんですか～！？」

『すまないが、詳しいことは言えない。

ただ一つ言えるのは、君との契約は破棄するということだ』

「破棄！？それじゃあまさか…！？」

『ああ、その通りだ。』の通信を終えた後、私は自首する。
そこで私は全てを話す。今までやつてきたことも、君のことわ
つてんのか！？』

「このクソ爺！テメエ、自分が何をしようとしてんのか本当にわか
つてんのか！？」

『もちろんだ。全てわかっている。
だが、私の目的はあくまで闇の書の脅威を取り除くことだ。
そのために何も知らない少女を見殺しにするのは間違っている。
そう言われてね。闇の書についての田途も立った今、私にできるこ
とは「これぐらいだら」』

闇の書の脅威を取り除く田途が立つた！？
あのイカレ魔導書をどうにかする方法を見つけたと言うんですか！？
おまけに誰かの入れ知恵のようです。まさか本当に負け犬が…！？

「クソが！後悔するぞ…！」

そのまま私は通話を終了させます。

するとそのまま直後、そのまま私に電話が掛かってきました。

クソッ、誰ですかこの忙しい時に！
相手を確かめもせず、私は通話を繋げました。

「もしもし、今忙しいんです～！話なら後にして

』

『その様子だと、もうギル＝グレアム提督から連絡があつたみたいだね』

相手は厨二でした。それも何か訳知りな態度です。

……おいでまさか。

「も、もしかして今回の騒動はあなたが……？」

『その通りさ！幸いにも、リーゼたちが僕に自分から事情を話してくれてね。だから僕が二人を説得してグレアム提督に会わせてもらつたんだよ。その後グレアム提督とはやてたちを直接会わせてね。結果は大成功！もつA-Sは心配しなくても良いよ……わざと提督は自分の罪を認めてくれた』

「…………（唖然）」

『君は提督に凍結封印の依頼をされていたらしいけど、それははやてを守るために行動だつたんだろう？流石だね、ルナ』

「…………（呆然）」

『これで闇の書については管理局が手伝ってくれる。なーに、皆の力を合わせればきっと何とかなるぞ！ルナもそう思つだろ？？』

「…………え、えっと、ちょっと待つてください～」

状況を整理しましょう。

まず、おそらく厨二はリーゼたちを一コボで落としたのでしょうか。
そこから推測するに、

「あなたはリーゼが偶然話してくれたおかげで、魔法と闇の書について知った。

それによって魔法関係者という『設定』を手に入れました。そしてリーゼ経由で私の仕事について知った。
これで良いですか？」

『ああ、間違いないよ。流石にこの間まで一般人だった僕がグレアム提督と知り合うのは不可能だ。

突然出てきても頭がおかしいと思われるだろうしね。でも、自分の使い魔が証人なら話は別だ』

お前は普段からおかしいだろうが。その言葉をグッと飲み込みます。それにして恐るべし、ニコボ…！女性ならば使い魔だろうと関係なしですか。

おまけに多少は無茶な理論でも女性相手ならば『僕信じてくれ！』
で説得できるんですよね、あれは。

「そしてリーゼたちを味方につけたあなたは、グレアムさんに闇の書の凍結封印をやめるように説得した。

その結果グレアムさんは折れ、自分の罪を認めたってことですか？」

『察しが良くて助かるよ。そう、その通りさ。

その後、はやてたちをグレアム提督と直接会わせてね。結果は大成功さ。

提督は謝罪して、はやてたちはそれを赦した。これで完全にハッピ

—Hัน드레』

…つまり、闇の書はグレアムさんが自首すればすぐここでも管理局に回収されます。

そして皆で対策を考え、それで最後は皆ハッピーー・そんな完璧な計画を立てた俺に皆はコロリ。

あれれ？ いつの間にかハーレム完成じゃん！

これが厨二の考えたことみたいですね。

「…どうして私に知らせてくださいなかつたんですか～？」

『君を驚かせたかったのさー！ それに、余計な心配をさせたくなかつたんだよ。

最近、君は疲れていたみたいだつたからね。きっとA-sについて一人で悩んでいたんだと思つたんだ。だから僕からのデータの誘いを断つていたんだろう？ もう心配はいらないよー！』

「……そうですか～」

確定、こいつはほんもののはかだ！

ハーレムのためにA-sを潰しやがった！

さらば言つながら、まだ闇の書をどうにかする田途も立つてねえし… 力を合わせればどうなかなると本当に思つてんのかー…？

『ふふふ、どうだいルナ？ 安心し

』

「黙れ」の厨二病末期野郎」

そのまま私はケータイを握りつぶしました。破片が床に散らばります。

これでGALSなどによる私の追跡はできません。

「なるほど～、はやてたちが全員いないのはグレアム提督に会いに行つたからですか～」

『そうですね』

「これでA・Sが自然に起じるといつ可能性は消えましたね～」

『そうですね』

「きっと随分前からはやは厨二の案を知っていたんでしょうね～。じやないと、いきなりグレアムさんと話し合ひなんてできませんよ～」

『そうですね』

そのまま私は自室に戻りました。

そして扉を閉めて、深く、本当に深く深呼吸しました。

「すう～、はあ～、すう～、はあ～」

そして、

全力で叫びました。ご近所迷惑でしょうが、もう関係ありません。もうここにはいられない。

「クソが！あの野郎、余計な」とをしゃがつて。」

私は手際よく荷物をリュックに詰め込みます。緊急のために持ち物は少なめにしてあるので、荷造りは五分ほどで終わりました。

「厨」は私が危険な方の転生者だと気づかずにつきを進めたんでしょ。

『厨一はマスターにメロメロでしたからね』

まったく、本当に余計なことをしてくれました。
百害あって一利なしです。

「ねむへひへ、闇の書はせてが本局に持つて行つてしまつたでしょ。」

話し合つた後でそのまま身柄を確保が理想ですから、

『ねむらくやうじゅうじょう。しかし、それではA-sが…』

「やうなんですよね～」

もつ原作通りのA-sが起るることは一〇〇パーセントないでしょう。

つまりは無効試合、介入しなくてそのままDKとこうパターンになりました。

これで介入しないから脱落という心配は消えましたが…。

「これだと最悪settすら消え失せますよ～。本局が滅ぶ可能性も出てきましたし～。

あ～と厨二は何も考えずにやったんでしょうけど～～

『それではどうなるのですか？』そのまま逃亡するのが最も安全な策だと思われますが

それはそつなんですが…。

う～ん、これは想定していた中で最悪の手段を取るしかないですね。このままで今後の予定が全て崩れます。それは何としても避けたい。

よって、

「私自身がA-sを起こすしかないですね～」

宿命のライバル（笑）

管理局本局、通称『海』。

ここには数多くのロストロギアが保管されており、中には一級捜索指定だったものや危険度が極めて高いものも封印されています。その多くはどこか別の世界に移されてしまうのですが、移す先が決まっていないものはここに一時的に保管されます。

つ、ま、り、

「本局の奥に闇の書は封印されているはずですね～」

『その可能性は高いでしょう』

あ、皆さんこんちは。ルナ＝ベルツです。

現在、私は本局にある一室にいます。侵入しました。

本来は本局は転送魔法をジャミングするシステムが備わっているのですが、さつきサイバー攻撃を仕掛けた混乱に乗じて潜入しました。本当にシルバー・カーテンつて便利ですね。結局、軽い悪戯程度の攻撃だったのですぐに混乱は收まりましたが。

さて、本題ですが。

闇の書の事件はまだ解決していません。むしろこれから起ころうの事件です。

それならば他の世界に移すはずはありません。

かと言つてはやてに持たせておくのは論外です。それでは最悪、内部で闇の書を使われるという可能性もあるのですから。

ならば本局の遺失物保管庫に厳重封印されているはずです。

そこ以外に闇の書を置ける場所などありません。

「さてと、スパイ大作戦ですね～」

『Liar's Mask』

そした私は局員に化けました。

変装のモデルはクロノ執務官です。 あの人、友達とか少なさそうですが話しかけられにくいでしょう。

そのまま最深部へレッツゴー！

怪しまれないという意味では最強ですね、ライアーズマスクは、顔だけではなく骨格やスキヤン検査すらも誤魔化せるなんて、しかし、

「おい君！君の階級じゃあこの先には行けないだろ？」

途中でこの人の階級では進めないところが出てきました。
チツ、せっかく局員証まで偽装したのにここまでが限界ですか。

「ほら、許可証があるならそれを出しなさい」

「いえ、僕は少しこの先に用があるだけで」

「許可証もなしにここを通す訳には行かない」

「… そうですか、それならば

ないので押し通ります』

一瞬でアルテミスを展開し、そのまま一閃。見張りの人を両断します。

これで邪魔者は消えました。

『能力発動『シルバー・カーテン』』

そのまま扉の電子錠にアルテミスを突き立ててシステムに侵入、電子ロックをこじ開けました。

ふふん 私のサイバー攻撃に対しても今は備えていたようですが、内側からのハッキングには対処していなかつたみたいですね。

『マスター、今のハッキングで管制室に異常が探知されたと思われます』

『わかつてますよ。ですからこうするんです』

扉の内側に入り、電子錠をロックし直します。

この時、解除のパスワードなどを完全に書き換え扉をロックしました。

これで扉の解除には少しですが時間が掛かるはず。

『侵入者、侵入者、局員は所定の位置へ集まつてください』

『…これは急がないとですね』

もつ変装の必要はないのでライアーズマスクを解除します。

そのまま奥へ侵入。途中の扉は同じようにじ開け、邪魔者は全員殺しました。

そしてようやくついた最下層。ようやくと書つてもまだばれてからまだ8分しか経つてしませんが。

「ここですね。まるで倉庫ですか。

うわ～、一級レベルのロストロゴギアが満載ですか～」

『マスター、時間がありません』

わかってますよ～。それでも圧巻なんですから仕方ないじゃないですか。

え～と、闇の書闇の書は～。

「あつた」

闇の書はっけ～ん！封印をぶち破り、そのまま回収しました。これで後は帰るだけですね。

『マスター、B213の収納場所を』覗くださ～』

「どうしたんですか～？」

言われたとおりに見ると、

「おお～。これはジユノルシードではないですか～！」

なんどジユエルシードを発見しました。まだ場所を移されてなかつたんですね。

これも何かの縁、12個をそのまま貰いました。

「ふう～、良い拾い物をしました～」

実は私も一つだけ隠し持っているんですけどね。
見つかると面倒なので別の場所に保管してあります。
これで私が所持しているジユエルシードは13個、軽く世界を滅ぼせる量です。

「さてと、嬉しい誤算もありましたが、そろそろ本当に退散しましちゃつか～。
このままでは囮まれますしね～」

幸い、転送魔法のジャミングはまだ解除されていません。
これで一瞬で周囲を囮まれるという心配はなくなつたのですが、私自身も脱出できません。

『マスター、どうなれこますか?』

「簡単です～。

中で転送できないなら、外で転送すれば良いじゃない！作戦で行きましょ～～！」

side亮

時空管理局本局は、前代未聞の騒動に見舞われていた。

遺失物保管庫の最奥に侵入されたのだ。おまけに扉は内側からロックされ、転送のジャミングを解除すれば外に逃げられるためにそれもできない。

「クソッ、どうしてこんなこと!」

「亮、落ち着いてください」

今日、俺が本局に来たのはジークのやつが表彰されると聞いたからだ。

あいつは俺が知らない間にA-sの問題を全て自分で解決したらしい。なぜか俺のことを毛嫌いするから全く知らなかつたが。今日の表彰も星に知らされるまでは全く知らなかつた。

なのははジークに会いに行つたためここにはいないが、星は残つたために俺と一緒にいる。

しかし、表彰式まで一時間といつとこりでアラームが鳴り響いた。

『侵入者、侵入者、局員は所定の位置へ集まってください』

そのアラームに、周囲の局員はもちろん、俺も驚愕した。本局に侵入するといつことはかなり難しい。不可能と言つても過言ではない。

そして何より逃げることができないのだ。

ここに侵入するなど、自爆目的か捕まりたいかのどちらかとしか思えない。

そり、相手があいつでなければ。

「映像、出ます!」

すると、近くのモニター全てに内部の映像が出た。
そこに映っていたのは、

「ルナ、だと！？」

さらに驚いたのは、脇に抱えているものだ。
それ気づくと、周囲からも驚きの声が漏れた。

「おい、あれって闇の書じゃないか？」

「…確かに、言われてみれば」

そう、闇の書だ。それで俺は悟った。

あいつはA-Sを自分の手で起こす氣だ！

【あ～、テスティス。

皆さん聞こえますか～？】

すると、本局中に無差別念話が届いた。

何のつもりだ？

【これより、砲撃魔法による『壁抜き』を実行します。

物理破壊設定なので、流れ弾にご注意を～】

そしてモニターの中のルナが近くの壁の方を向いて『バイスを引いて

変形させた。

そのまま魔力を圧縮していく。

『発射方向より被害を計算！』

直撃地点……出来ました！」の地点にいる方は避難してください！」

そしてモニターに映し出された場所は、

— 1 —

被害予想の中にこの図画が入っていた。

このままで直撃だ。周囲の人々が我先にと逃げ出す。

しかし、これだけの人と一緒に逃げようとすれば普段以上に時間がかかる。

sideout

Nice shoot

「ありがとう」「やあこやか~。」

まあ力一回り、沙を傷つけるから当然でさか

そのまま壁に開いた大穴から外に向かつて一直線。

Silver Canyon

白い砲撃がそれを遮りました。

見覚えのあるその魔力光に、思わず足が止まります。

「…うわ～、なんてタイミングの悪い」

『宿命のライバル（笑）とは戦場で会つ運命なのでは？』

最悪のタイミングです。

それに、良く見ると砲撃はこの区画から先に届いていません。零落白天で打ち消されたようです。

「あなたは本当に私の邪魔をするのが好きなんですね～」

「はつ、当たり前だろ？ そのために俺はここまで強くなつたんだぜ」

「ふふふ、弱い犬ほどよく吠えますね～」

「なら、その弱い犬に負けるお前はさらにも弱いな」

……言つよくなりましたね。

辺りを見回すと、まだ避難できていない人も多くいます。

その中に星さんがいました。バリアジャケットを纏い油断なくこちらを見つめ、デバイスを構えています。

避難のカバーに回つたようです。

なるほど、これは使える。

「そろそろ私もあなたのストーカー行為に疲れました～。
なので、この辺りで決着をつけましょ～か～？」

「俺はこれからそのつもりだ。今日で全てを終わらにしてやるよ～」

そして、戦いの火蓋は切つて落とされました。

馬鹿は死んでもなおうなー（前書き）

そつこえーば一週間前、活動報告で特別編をやるといつ話があつまつた。

後書きにてその発表をします。

馬鹿は死んでもなおらない

一触即発、まさにそんな空氣でした。

肌がピリピリと焼けるようで、呼吸の乱れすらも隙となる。つい、ここはもう戦場なのです！

そして砲撃で崩れた壁の瓦礫が崩れ、それが合図のよつて私たちは飛び出そうとしました。

その時です。

「行きま『やめるんだ…』……あなたは空氣を読みなせ…いいいい…！」

せっかく良い雰囲気だつたのに聞き覚えのあるウザボイスが割り込んできました。

本当に空氣を読んでくださいよ。今、完全にバトルパートだつたでしょ？！

「はあー、何の用ですか～ジークや～ん」

今までの空氣は霧散し、白けた空気が漂います。

それを断ち切るように私は後ろの馬鹿に振り返つて尋ねました。

「ルナ、いつたいどうしてこんなことをするんだ。
もう戦う必要なんてないんだよ。ほら、剣を収めて闇の書を返してくれ」

……こいつ、まだ気が付いていないんですか？
うわ～、馬鹿だ～、馬鹿の世界代表きた～。

「おいジーク！なに言つてんだよ！
こいつが闇の書を返すはずがな「君は黙つていたまえ！」……おい！
！」

「ルナ、彼のことは心配しなくても良いよ。
君のことは僕が全力で守る！もう彼に怯えて力を求める必要なんて
ないんだ」

「…………」

「君のためなら僕は何でもするよ。
それが僕の君への愛の形なんだ！…」

「…………」

「ルナ、僕は君が好きだ！愛してる！
だから君が悲しい思いをして戦うことなんてないようにする！…」

「…………」

「君は僕の全てだ！君がいないと僕は死んでしまう！…
だから、戻ってくるんだ！僕やはやてたちと過ごした、あの日々に
！」

「…………」

もう、ゴールしても良いよね？

い』でした。

思考回路がズタズタになりそうです。内臓が悲鳴を上げてます。
もうキモイとかウザイを通り越して『凄い』・マジで笑い死ぬから
これ！

これでコイツは真剣なんだよな。

マジでお前は前世で何を学んだんだよ、他人の笑わし方か？

「はあ、はあ、はあ、いや、存分に笑わせてもらつたわ。

お前、笑いの世界に入れよ。俺こんなにウケたのは初めてだし

ついつい素で言つてしまつ。

もうキャラ作りとかして余裕がない。呼吸は乱れて髪もボサボサ
だ。

「 る、ルナ？ どうしたんだい？」

「いやいや、どうかしてるのはテメェの脳みそだろ？

なんであんな電波じみた愛の告白ができるんだよ。蛆でも湧いてん
じゃねえか？」

厨一は状況について行けないのか、呆然としている。

まあ、『俺』と『私』の差は凄いからな。我ながら別人だ。

「よし、存分に笑わせてもらつた礼だ！面白いことをしてやる。
お前、確か俺のためなら何でもしてくれるんだりお？」

「…ひつー」

俺がニヤリと笑うと厨一は悲鳴を上げて尻餅をついた。

失礼なやつだな、「コイツは。

しかしその悲鳴で我に返ったのだろう。負け犬が襲い掛かってきた。
星も危険な空気を感じ取ったのか、砲撃を撃つてきた。

「邪魔だ、能力発動『零落白夜』 &『ツインブレイズ』」

鞘を取り出し、鞘と刀身を媒介にツインブレイズで魔力刃を作る。
そしてその魔力刃を零落白夜に変更。

これで砲撃を打ち消し、負け犬の攻撃を受け止めた。

「テメー、どうして零ら「うるせえ、後にしろ」…ぐほあ！」

そのまま負け犬を星に向かって蹴り飛ばす。ぶつかつた一人は勢い
を殺しきれずに壁に叩きつけられた。

そして何事もなかつたかのように厨二に向き直る。

「喜べ、お前を闇の書の蒐集対象第一号にしてやる。
死ぬまで吸つてやるから覚悟しろよお？」

「し、死！？ そんな、嫌だ！」

「ククク、嫌かあ～？ でもなあ～、お前は俺にい～、愛をお～、誓
つちゃつたわけだしい～？」

男ならよお～、自分が言つたことには責任持たないとなあ～？」

そして俺は、闇の書を開いた。

厨二の胸元からリンカーコアが出て青色に輝く。しかし、その光はどんどんと弱くなつていく。

「せりせり、10、20、40、はは、まだまだ溜まるぜ!」

そのまま机へ一文字を落とれず吸い続いた。

「ディバインバスター！」

「チツ！來たか」

蒐集を中止し、砲撃を回避する。

されには武装隊が図画を取り囲んでいた。

「よお～、高町～。愛しの彼を助けに来たつてかあ～？」

「ニヤニヤ、マイシテ歎のせぬ口がわたりしゃべりしてある。思わず普段の口調がぶつ飛んだわ。

もうクサイのなんのって、お前も聞いてれば良かつたのによお～」

後で負け犬たちに聞いとけ。

せつと引くから。いや、二口食らつた「イツなら羨ましがるか？

「ルナ＝ベルツ、君は完全に包囲されている！大人しく武装を解除し、速やかに投降しなさい！」

「ああ～ん？ 嫌だつたら？」

「君を逮捕する！」

君は現在確認されているだけでも殺人、公務執行妨害、器物破損、殺人未遂、暴行罪、無許可での攻撃魔法の使用、本局への不法侵入、ロストロギアの不法所持、他にも数多くの犯罪を犯している！警告に従えば、まだ罪は軽くなる！武装を解除しなさい！

武装隊のおっさんが俺に投降を促してくれる。

だがしかし、

「なんで俺がザコのお前らに従う必要があるわけえ？
気に入らねえなら力尽くで來い！」

そして足元の厨二の頭を踏みつけた。

それでなのはの限界は来たようだ。砲撃を放つてきた。
だから、

「おいら厨二ー出番だー！」

厨二の髪を掴み、目の前に放り出した。
もちろん砲撃は厨二に命中し、俺に迫ってくる。

『Rejection』

しかし俺は防御を発動、普段は絶対にしないが砲撃を正面から防い

だ。

するどいとなるか？簡単だ。

厨一は砲撃で俺の方に吹き飛ばされるが、俺はシールドでそれを防ぐ。

その結果、厨一は俺の防御となのはの砲撃に挟まれて想像を絶するようなダメージが。

非殺傷設定で良かったな～、おかげで魔力ダメージだけで済むぞ。

「ジーク君！？」

「おいおい高町～、味方を撃っちゃ駄目だろ～？
クヒヒヒ、まあ、こいつが身を挺して俺を守ってくれちゃったのが悪いんだけどな～？」

しかし、どうしたもんかねえ～。

厨一の肉壁（強制）のおかげで向こうは攻撃を躊躇してはいるが、それも時間の問題だ。

だが、壁を破りとすれば隙ができる。どうしようかねえ。

…お、良いくと思ついた！

「おい高町～お前、コイツが好きか？」

そして俺は氣絶した厨一の髪を引っ張り前に繋す。

「ふえ！？私は好きとかそんなんじゃ～」

「そつか～、好きじゃないか～。

ならよ、「コイツは死んじゃつても良いよな～？」

そしてアルテミスを首元に押し付ける。

もう勘の良いやつなら俺が何をさせようとしてるかわかつたよな～？

「なつ～！？」

「ん～？ 嫌か～？ ならよお～、

お前がそこの壁をぶち抜いて外への脱出口を作つてくれよ」

その言葉に全員が絶句した。

そうだろ～、なにせ人質の命と犯人の無事を天秤に掛けろと言つのだ。

こんなの惨すぎる。俺は大好きだが。

「ほら～、早く～。

やらないなら「コイツを殺しちゃつさ～？」

そしてアルテミスを振り上げる。

「ま、待つて！ お願いだからジーク君を殺さないで～！」

「それはお前しだいだな～？」

カウントダウン入りま～す！ 10、9、8、7、6、5 「わかった、

やるよ！……じゃあ早くな～？

お兄さん短気なんですよね～。遅いとサクッと殺つちやうが～？」

そしてその数秒後、砲撃が本局の壁を撃ち抜いた。

side other

11月13日、時空管理局本局は前代未聞の事態に陥った。たつた一名の侵入者の手によって遺失物保管庫の最奥に侵入されただけでなく、そのまま逃走を許してしまつ。

この事件による死者は41名。保管庫に向かつ途中に殺された者、砲撃に巻き込まれて死亡した者など。

その後、犯人は逃走。ロストロギア『闇の書』そして『ジュエルシード』12個を奪取される。

足取りは不明。依然逃走中。

以上のことが、今回の犯人ルナ＝ベルツをU級次元犯罪者とする。

side out

馬鹿は死んでもなおらない（後書き）

特別番外の発表！

実はこれを読んでる友人に、

『星がいるのに闇の欠片事件をやつたらどうなるんだろうな』
と言われたので、それを書くことにしました。A・S編が終わつたら
書こうと思います。オリジナルマテリアルを出すつもりなのでどうぞ』期待を！

正直者が馬鹿を見る～と本気で思う人って正直ですよね～

「蒐集」

『Sammeln』

「ぐつはああああああああああああ

周囲には闇の書のページが捲れる音と悲鳴だけが響き渡ります。
今日の成果は18ページ、いまいちですね。

あ、皆さんこんちは。ルナ＝ベルツです。

先日はお見苦しい光景をお見せしました、すみません。

管理局を襲撃してから既に一週間、集まつたページは216ページです。

そろそろ300ページくらいあれば良かつたんですけどね。人手が足りない上に蒐集を始めた時期が遅かったのでこんなものです。

「はあ～、厨一が四人くらいれば良かつたんですけどね～」

『あれほどの魔力を持つ生物はそっぽいませんからね』

おまけに管理局が私を探し回つていてウザイの何の。

うーん、やはり死ぬまで魔力を蒐集したのがいけなかつたんでしょうか？

「それにしても、守護騎士たちはよく一ヶ月くらいで666ページも集めましたね～。

やはり四人とは効率が違います～

最悪、ジュエルシードで一気にチャージといつのも有つと言えば有りなんですが…。

「あれって危ないんですね～」

『 そうですね。あのエネルギー結晶体から魔力を引き出せば、際限なく魔力を放出するでしょうね～』

「でも、その後が面倒なんですね～」

暴走でもされたら封印しなおさなくてはなりません。
それは面倒です。失敗の可能性だつてありますし。

「やっぱり海の局員狩りが一番効率が良いんですね～。
魔力はそこにあるのに弱いですしね～」

しかし、それには大きな問題があります。

局員を狩ると他の局員が集まるので蒐集をしにくいんです。

エース級の魔導師が来ればもう蒐集しながら戦闘なんてできません。

「はあ～、いうなつたらチマチマ集めるしかないですわ～」

『 そうですね』

はあ～、そろそろモチベーションの維持のために原作キャラでも襲いましょうかね。

ここで一気に稼ぐのも良いでしょ～。

「んん？一気に稼ぐ？」

「…アルテミス、さつそくですが作戦変更です～」

『何か妙案でも？』

「ええ、最高の作戦を思いつきました～。

上手くいけば、これで100ページ近くは余裕で稼げるはずですよ～」

そして私は転送魔法を使いました。

これは場所を選ぶ必要がありますからね。

『どうやら向かわれるのですか？』

「//シドチルダの首都『クラナガン』です～」

side亮

「クソッ、ルナのやつー！」

「落ち着け、亮」

「やつですよ、亮。焦っても何も変わりません

クロノと星が諫めるが、それくらいでは納まらない。
思わず壁を殴りつける。

ルナが本局を襲撃してから今日で十日、依然ルナは捕まらない。

原作のヴォルケンリッターのように拠点がないから足取りを追うので精一杯だ。

ある時は管理外世界で、またある時はミシドチルダで堂々と蒐集するなど、場所に規則性がまるでないのだ。

そんな状況に歯痒くなり、俺と星、そしてなのはは嘱託魔導師として協力を申し出た。

しかし、それでも状況が変わることはなかつた。

「確かにルナの動向を追うのは至難の技だ。だが、まるで足取りを追う方法がない訳じやない」

「…どうしたことだ？」

「何か策でもあるのですか？」

すると、クロノはモニターを空中に出した。

そこに映っているのは今までの被害者や襲われた生物のリストだ。

「ルナはとても合理的で計算高い。そして何より効率の良さを重視する。

このリストを見れば良くわかるだろ？」

「…なるほど。確かにそうですね」

それで俺たちは気づいた。

襲われているのは高い魔力を持つ魔導師と生物だけだ。それを一気に狩っている。

チマチマと集めてはいるが、相手を選んでいるのだ。

「そしてこれまでのデータから察するに、ルナは人間が相手ならばAランク以下の相手をほとんど狩っていない。だからターゲットも必ずと限られてくる」

「なるほどな。確かにそれなら『話の途中で「メンターでも緊急事態だよ!』…どうしたんだよ?』

『ルナちゃんが出たんだよ! それもミッドにてー...』

「なに!?」

クロノが思わず聞き返す。俺や星も耳を疑つた。

別にミッドに現れたのが問題じゃない。ルナを捕捉できたことが意外だつたからだ。

急いでブリッジに行くと、そこには既になのはとジークがいた。本当はジークは安静にしているべきなのだが、無理を言つてついてきたのだ。

もう自分が蒐集される心配はないのだから一緒に調べさせてくれと言つて。

「ジーク、お前大丈夫なのか?」

「心配ないさ。それよりルナだ」

そしてジークはモニターを睨みつける。もうジークとの誤解は解けた。そして、お互にルナに復讐するため協力すると誓つた。

ルナが仕出かしたことで唯一感謝していることだ。

モニターを見ると、ミッドの街の上空を移動するルナが映っていた。何かを探してこらるのが、眼下の街を見回している。

「これはどーだ?」

「クラナガンだよ

その言葉に俺たちは絶句する。

地上本部があるといいで堂々とするなど信じられなかつた。

「地上本部は何してるんだよー田と鼻の先にS級犯罪者がいるつてんのよー。」

「さつきから逮捕に向かつてゐる。でも、悉く返り討ひ討はれてゐる

クソッ、ここからじやあどう頑張つても間に合はない。

今、アースラは地球の軌道上にいる。ここからじやあミッドに行くまでに時間が掛かりすぎる。

すると、ルナが徐に移動をやめた。

そのまま巨大な魔方陣を開拓する。その術式は、

「ベルカ式!~?」

「ハイミィーーあれば古代か!~?それとも……」

「解析中!~!れは……ビンゴー^{Hンジョン}古代ベルカだよー。」

「…………まさか！」

すると、モニターのルナに変化が表れた。

魔方陣が輝きを増したと思うと、そこに莫大な魔力が集まっていく。そして、ルナに接近しようとすると局員がどんどんと落下していった。他のモニターに映っている映像を見ると、クラナガンの住民たちがバタバタと倒れていった。

「これは、クラナガンの人間のリンクカードを無差別に蒐集しているのか！？」

クロノの言葉にブリッジの全員が絶句した。

あそこには魔導師ではない人間だつて大勢いる。ただ魔力が多いだけの人や、魔力が少ない人だつているんだ。

「こんなのは、酷すぎるよ」

なのはが思わずといった様子で呟くが、全員がそれに同意した。

こんな無差別に魔力を蒐集すれば確かにページは溜まるだろう。だが、下手すれば大量に死者が出るようなことができるなんてまともじゃない。

そして数分後、満足がいったのかルナが蒐集を終わらせた。

この蒐集で半径数百メートルにいた人間の魔力が根こそぎ持つていかれたから、かなりの魔力をを集められたのだろう。

そのままルナは転送魔法で消えていった。

翌日、ミッドの新聞はどれもこの事件についてが一面を飾っていた。
『クラナガンを襲つた悲劇』『管理局の怠慢』『悪魔の子、ミッド
を襲う』など、ルナが起こした事件は相当『テカく報道された。
これで老若男女を問わず、あそこにいたリンク・カーコアを持つ人間の
魔力が根こそぎ奪われたらしい。

死者は百名を超え、数百人が病院に搬送された。

だが、これはA-sの、後に『闇の書事件』と呼ばれ、『氷殺のル
ナ』と呼ばれる大犯罪者が起こしたもののは始まりにしかすぎなかつ
た。それを俺は思い知ることになる。

side out

いや～、集まつた集まつた！
今回はぼろ儲けでした！

「これで一気にページを稼げましたね～
もう369ページに到達しましたよ～！あと優秀な魔導師を6、7
人狩れば完成です～！」

『そうですね。しかし、これで管理局もなりふり構わず捕まえに来
るでしょう。

ストライカー級の魔導師も来るかもしません。ご注意ください』

「そりなんですよね～。

こうなつたら、原作キャラを狩りまくるのも有りですね～』

そうなると、やはりあの人人が良いですね。
大して強くないです、何より魔力が多いです。

「ふふふ、舞台は海鳴に移りますよ。皆さん、気を抜いたら死んじゃうので気をつけてくださいね」

予告ですよ～ * 特別編の予告です

ルナ＝ベルツが起こした世紀の大事件、『闇の書事件』。幾つもの次元世界を巻き込んだこの騒動は、数人の少年少女の手によつて終結させられた。

そして訪れた平穏、世界は静けさを取り戻した。

が、しかし。

散らばつた闇の書の破片、そして現れる闇の書の残滓。それは『闇の書事件』が起こる以前の彼らを模していた。しかし、成長した彼らの前に過去の彼らは敵わない。

そして、そのどれとも違つ異質な存在。
闇の書の復活、碎け得ぬ闇を求める三体の構成素体。マテリアル
それは転生者の知るどん存在とも違つていた。

一つは前世からの因縁を持つ少年の姿を。

「最強！天才！お姉さん完璧イイイイイイー！…！」

一つは前世の銃使いの少年の姿を。

「闇の書のマテリアルとして、この程度ができなくてどうしますか」

一つは前世の漆黒の聖なる鎧を持つ少女の姿を。

「キヤハハ！頭が高いのよゴミクズーひれ伏しなさいーー！」

因縁の三人の姿をとるマテリアル。
果たして少年たちの運命は。

『第一の人生はゲームらしいです～』特別編。

『闇の欠片事件』

A-s終了後に掲載…どうお楽しみに…！

予告ですよ～ * 特別編の予告です（後書き）

とつあえず、忘れないように書いておきました。

誰がオリジナルマテリアルが一人だと言いましたか？
総入れ替えです！！

鳴かぬなら 泣かせてあげます ホトトギス

s i d e フ ハ イ ツ

現在は11月の21日、私は本局の隔離施設にいた。仮にも私は裁判中なので、どこかに拘束しておかないといけないらしい。

とは言つても、この前に嘱託魔導師になつたから行動の制限はほとんど取れているけど。

ここには私の他にアルフとルル、それとナナもいる。ルルとナナは事件に直接は関係してなかつたけど、裁判の証人としてはうつてつけだということで裁判に協力してもらつていて。本当はここじゃなくて別の場所で寝泊りする予定だったんだけど、二人の私の傍が良いという強い希望でここで一緒に生活している。

そんなある日、こんなニュースが放送された。

『さて、次のニュースです。先日クラナガンで大量殺人、及び魔力搾取という前代未聞の大事件が起こりました。犯人のルナ＝ベルツ容疑者は逃走中、足取りは依然として掴めていません』

そしてテレビにルナさんの顔写真が出た。これはクラナガンで撮られたものらしい。

大量の魔力がルナの横に浮いている本に吸い込まれていく。

「 「 「 「」」」

その映像を見て、私たち四人は沈黙した。

何を言つてゐのかわからない。ルナさんが、大量殺人？

「……なに、これ」

「「いやあ、どうじう」とだい！」

「ナナ！お兄ちゃんがテレビに出てるよ！録画！録画しないと…！」

「ルル…、これ、良いこ…と、じゃ、な…い」

こんなのが間違いに違いない。

ルナさんは確かに厳しいしサディストだけど、人殺しなんかをやる
ような人じゃない。

でも、クロノに聞かされた真実。
ルナさんがF計画に携わっていたという話を思い出すとどうしても
疑いを捨てきれない。

別にルナさんが母さんと一緒に私を騙していたことに怒つてはいな
い。

母さんと違つて、私のためを思つて黙つていたんだと思うから。
その証拠に、ルルとナナが言うには、二人を人造魔導師と知つてい
ながら育てると言つていたらしいし、私のこともアリシアの失敗作
じやなくて『フェイト』テスタロッサとして扱つてくれていたと
言つ。

それだけで私には充分だ。

『そして時空管理局の発表により、容疑者は時空管理局本局より『
第一級捜索指定ロストロギア』を強奪してはいたということがわかり
ました。これにより、多数の死者、及び怪我人が出ました』

「　　」

「本局を襲撃！？一人で！？すつゞり！」

純粋に驚いているのはルルだけだ。ルル以外はもう声も出ない。一週間くらい前に本局で何か騒動があったのは知っていたけど、まさかあれが…？

「……フェイトお、どうするんだい？」

「クロノに話を聞く」

「で、でも、教えて、くれるかなあ…？」

一人で騒ぐルルを放つておいて、三人でどうするかの会議をする。確かに、ロストロギア絡みのことをホイホイと教えてくれる可能性は低い。

でも、

「とりあえずは聞いてみた方が良いと思う。少なくとも、今よりは情報が集まると思うし」

「…あいよ」

「ん…、そう、だね」

「ああーー！コースが終わっちゃつ！録画できてないよーー！」

「ルル、つるさいー！」

それからリンパティさんに連絡すると、明日、クロノと話をできることがになった。

それにはこの事件の関係者の人も来るらしい。

翌日、私は三人を連れて面会用の別室に来ていた。

他人がいる所でできる話じゃないから、ということらしい。

そしてそこでじばらく待つと、クロノとリンパティさん、それと知らない男の子が来た。

この人が関係者？

「フロイトさん、お久しぶりね」

「はい、こんにちは。クロノも久しぶり

「ああ。とは言つても、裁判の打ち合せとかで顔を合わせているけどね」

「そうだね。それで、そっちの人は？」

そして私はもう一人の彼を見た。

ルナさんよりもテカテカした銀髪に赤色と金色のオッドアイ。薄く微笑してこっちを見ている。

「おつと、紹介が遅れたな。彼がこの事件の関係者、ジークフリート＝＝神凪だ。

この事件を未然に防ぐことに尽力してくれたんだけどね。

君も知つてゐるところ、ルナがそれを自らの手で起こしてしまつた。ジーク、彼女がフェイトだ。隣が使い魔のアルフ、その一人がルルとナナだ」

「クロノ、起こつてしまつたことは仕方ないさ。問題はこれからどうするかだよ。

そして、君が「エイド」元気だよ、サさんだね？」
クロノやなのはから良くな話は聞いているよ。どうぞよろしく。
アルフに…、ルルちゃんとナナちやんだね？三人もよろしくね」

あ、うん。ほんとやれやれ

彼、ジークがニコリと笑いかけてくる。だけど、正直少しだけ気持ち悪い。

〔ねえねえ三人とも、なんかあの人キモくない?〕

【る、ルル…！しつれい！】

【そ、うだよルル、初対面の人にそういうことは言っちゃ駄目だからね？】

【……え！？な、なんだいフェイト！？】

【…どうかしたの？アルフ、ひょつとして調子でも悪いの？】

【なんでもないよーほら、話を聞かないとー】

【……へうん、そうだね】

そしてクロノから話を聞いたけど、結局話してくれたのはニュースで放送されていたことと大差なかつた。そして確定したのは、ルナさんが本当に人殺しをしたということくらいだつた。

「…………そつか

「ルナのやつ、なに考えてるんだい！」

「うーん、世界征服でもする気なのかなー？」

「あ、りえる……かも」

否定できないところが怖い。

ルナさんはやると言つたらやる。そしてそれを実行できる力も頭脳もある。

最悪、『道づれです～！』とか言ひて自爆しかねない。

「…………クロノ、私の裁判つてもうすぐ終わるよね？」

「ああ、そうだが？…………まさか」

「うん、それが終わつたら私にも事件の手伝いをさせてほしいんだ

ルナさんが何を考えているのか。

それを知らなくちゃいけない。あの子の、なのはのよひ、何度も

「危険だ！ルナは君が相手でも容赦しないかもしれないぞ！」

「良いじゃないかクロノ。

確か彼女はA A A +、下手すればSランクほどの実力があるんだろう?

戦力としてはちょっと欲しい

すると、今まで黙っていたジークさんが助け舟を出してくれた。
なぜか視線が厭らしく感じるけど、気のせいだらう。

その後、ジークさんの説得のおかげで私もアースラクルーの一員として捜査の協力にあたることになった。
ルナさんには敵わないかもしけない。
でも、皆の力を合わせればきっと何とかなる。

「私が、ルナさんを止めるよ」

s i d e o u t

「ふああ～、眠いです～」

『いいで寝ないでくださいよ。

寝たらそのまま一生目が覚めませんからね』

「わかつてますよ～」

でも、既に徹夜も二日目。この未成熟な身体にはキツイです。
早く大人になりたい。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

徹夜してます。めっちゃ疲れましたし眠いです。

私が今、何をしているのかと言つと、

ジュエルシードを使った大魔法の準備をしています。

どんな魔法なのかはまだ秘密です。

数週間後には三つくらい完成する予定ですけどね。

「アルテミス～、何個完成してましたっけ～」

『現在、調整が終わっているジュエルシードは一つです。

現在調整しているものが終われば三つ、それでようやく稼動可能な個体が一体だけ完成します』

「道のりは長いですね～。

途中で失敗すれば周囲の次元」とドッカーン～ですしね～

『しかし、成功すれば一気に魔力が集まります

「わかつてますよ～。

とりあえず、この調整が終わったら一体を稼動させて寝ます～。魔力の蒐集はそれに任せれば良いですし～

前世で教授がジュエルシードを解析していたので、既に使い方はわかっています。

これで一気に魔力をチャージ！とかは使い方が違うので難しいですが、きちんとした使い方をすれば相当役に立ちます。

フレシアはこれを次元震を起すためだけに使っていましたが。

「本当に馬鹿ですよね~。

これって、上手く使えば死者の擬似的な蘇生だってできるのに~」

『普通はそんなことはしませんよ。

教授だつて驚いていたでしょ? かく言つ私も古代の技術には驚かされます』

それもそうですね。

さてと、もうすぐこのジュエルシードの調整も終わります。それを使って一気に戦力を増強です!

「ククク、鳴かぬなら、泣かせてあげます、ホトトギス~」

これが私のモットーです。

できないことは多少は強引でも押し通します。

さあ、本番はこれからですよ~!~

ヒーローは遅れてやつてへるー悪は時代の最先端を行くー

s.i.d.e亮

ここ数日、ルナは全く動きを見せない。

被害が全く見つからないからだ。静けさが不気味で仕方がない。

現在1~1月29日、フェイテの裁判が終わって捜査に加わるまであと三日。

それはルナもわかっているだろ?。それなのにここまで動きがないと、諦めたのか?という希望も出てくる。

俺は全然そつは思わないが。

「ルナちゃん、もう諦めて逃げちゃったんじゃ……」

「そうかもしけないね。流石に管理局の地上と海の両方を敵に回したんじゃ、いくらルナでも……」

「いや、それはねえ。

あいつなら確実に『はつ、管理局へ?笑わせてくれますね~!』みたいな感じに思うはずだ。無茶な」とでも強引に切り抜ける。それがあいつだ

「……良くわかりますね」

実際、あいつはそんな風に思つているだらつ。できないことはしない、それが『ベルツ』の連中だ。逆に、やること全てに成功させる自信があるということもある。

「あいつのやることに関しては、常に最悪の事態を考えるべきだ。ルナは必ずその斜め上のことをやらかす」

「「「「……確かに」」」

おわりく、全員の頭の中に高笑いしているルナが思い浮かんだどうもつ油断はしねえ。

すると、

「皆、大変だよー。」

「ルナか！？」

エイミィが大声を上げると同時に、空中にモニターが出る。その映像には巨大生物から魔力を蒐集するルナの姿があつた。

「直ちに向かうー。武装局員たちの準備をー！」

「クロノ、俺たちはどうすれば良いー！」

「君たちは僕と後から行くぞ。」

先行した局員たちが結界を張つた後に突入だ

「「「「了解ー！」」」

「良いか？何らかの理由で逸れても、必ず一人一組で動くんだ。組むのは、星と亮、なのはとユーノだ」

「クロノ、僕はどうするんだい？」

ジークがクロノに尋ねる。アホかお前は…。

「ジーク、デバイスもねえお前が出ても足手まといだらうが。
お前はこいつから見学だ」

「そんな！？僕には△△△ランクの魔力があるんだぞ！
足手まといになんてなるはずない！それに、デバイスがないならコ
ーノだつて…！」

「では、君はどれほどの魔法が使えるんだ？」

「それは……」

「ユーノはデバイスがなしでも戦えるほどの優秀な結界魔導師だ。
君はまだ魔法を知つてから一ヶ月も経つていない素人だ。焦る気持
ちはわかるが落ち着け」

「…………わかったよ」

クロノの説得に渋々ジークが頷いた。

おいおい、本当に魔力さえあれば戦えると思つてたのかよ…。
教授の野郎、やっぱ役立たずを送つてきやがった。

ルナに気づかれないように、転送は少し距離をおいた場所にされた。

既に武装隊が周囲を取り囲み、結界を張る準備をしてている。俺たちはさつきの組に別れ、別方向から襲撃する手筈になつていてる。

【全員、配置についたな？結界が張られると同時に攻撃する。なのはと星、一人で最初に砲撃を。その隙に僕と亮で突撃する】

【うん、わかった】

【（い）武運を】

そして、結界が張られた。

【今だ！】

「ブラストファイアー！」

星が放つた深紅の砲撃がルナに発射された。
別方向からはなのはのディバインバスターも撃たれている。

「じゃあ、行つてくれるー！」

「気をつけて……」

そのままルナに向かつて突撃した。

既に零落白夜を展開している。これで一気に、

「ぶつ飛ばす！」

一気に接近した俺は、土煙から出てきたルナにカリバーンを叩きつけた。

するとルナは紙一重で避けたが、そつちにはクロノが撃つたスティンガーレイが待っている。

これで少しば足止めができるはず。

聖王の鎧を開しても、その隙に俺が斬る！

そう思っていたのに、

「はつ、俺様を相手に手数で勝負かよ？ 勝ち田ゼロだなあお前ら」「

そして、全ての攻撃を撃ち落とした。
銃型のデバイスを使って。

「なに！？君のデバイスは剣だったはず！クソッ、まだ他の形態があつたのか！」

違う、そんな簡単なことじゃない。

あの黒い銃型デバイス、そしてあの射撃の腕に口調。
まさか…！？

「さあ？どうだろうな。

ハツキリ言えるのは、テメHらはHにHでジ・HンDってことだあー！」

そのままルナ（？）は銃を「一」に増やし迎撃してきた。
そこまで氣づく。

「おい、お前の魔力光は白じゃなかつたのかよ…！
どうして『赤い』んだ！？」

それは明らかにルナの魔力光じゃなかつた。

通常、魔導師は魔力光を変えることはできない。魔力光はいわば視覚化した魔力パターンであり、それを変えるということは外科的な手術を行つても不可能だ。万が一変えることができても、それは薄っすらと変わる程度であり後遺症も出る。

そんなことをするのはよほどの馬鹿だ。そして、ルナはそんな非効率的なことはしない。

「はつはあ！ 敵に素直に情報を渡す悪役は漫画とアニメの中だけだ
ヴァカ！」

そんなに知りたきゃ力尽くで何とかするんだなあ！」

『Load Carteridge』

そしてルナ（？）がカートリッジを「発ロードする。
まずい、何か来る！

「クロノ！」

「わかつて「いねえなあ、全然よおー」なにー？」

気がつくと、俺たちはバインドに捕まっていた。
押しても引いてもビクともしない。

クソッ、腕を押さえられたら零落白夜じや斬れない！

「オラア、死に晒せ！」

『R a p i d C a n n o n』

そしてあいつは一発同時に砲撃を放った。一発は俺、もう一発はクロノを襲う。

これはおそらく殺傷設定だろ？ 防ぎきれるか！？

『R o u n d S h i e l d』

しかし、その赤い砲撃を深紅のシールドが防いだ。クロノの方は翡翠のシールドが見える。ユーノか！

「くつ、亮！ 無事ですか！？」

「ああ、なんとかな」

「それは何よりです。

それにもあの砲撃、チャージが短いのに私やなのはのと同程度の威力はあります…」

「…カートリッジシステムだ」

「カートリッジ…？」

すると、俺たちが無事なのに気づいたあいつが一いつと口角を吊り上げる。

普段のルナなら絶対にしない表情だ。

「ははつ、見慣れねえ顔もいるな。

そいつが高町の姉の……なんだつたつけ？」

『星殿です、ボス』

「おおー！それだそれ！」

星を見慣れないだと？

どういこじだ…、あいつは何度も会つてゐるはずだ。
やつぱり、そうなのか？

「お前、ルナじやねえだろ…？」

「は？何を言つてゐんですか？あればどう見てもルナでしょう？」

「そうだ亮、ルナじやないなら誰だと言つんだ？」

「…それは

「

すると、突然ルナの偽者に桃色のバインドが掛けられた。
なのはか！？

「ぐおー…やつべつー捕まつちまつたー！」

そのまま遠くで莫大な魔力の集束を感じた。
これは、スターライトブレイカーか！？

【ジーク君を踏んだり、魔力を奪つたり、絶対に許さないんだから
！】

そしてスター・ライトブレイカーが発射された。

俺たち四人は一斉にその場から退避するが、偽者は拘束されているから逃げられない。

「やつぱりあれはルナじゃない！

ルナならバインドを凍らせて一瞬で脱出できるー！」

「……！ 確かに…」

そう言つてゐる間にも全速力で退避する俺たち。クソッ、なのはのやつ！ 俺たちのことも考えろよー。

【おいおいおいおい！ 俺様をこの程度でビリビリとかできるとか思つてるんですかあ！ ？

甘すぎだヴォケ！ ！】

すると、偽者の前に巨大な魔方陣が展開された。その色は砲撃と同じ毒々しい赤色で、

【これがライア様の真骨頂だあー！ 田ん玉に焼き付けろー！】

スターライトブレイカーを吸い込んだ。

s
i
d
e
o
u
t

ヒーローは遅れてやつてくるー悪は時代の最先端を行くー（後書き）

はい、懐かしのあの人人が登場！

ルナの身体でライアって書いていて相当変な感じがしました。

どんでん返しは悪の必須スキルです

s i d e 亮

「そんな、スターライトブレイカーが……！」

星が思わずと言つたように呟く。

それはこの場の、いや、これを見ているアースラの人たちも同じだらう。

あのスター・ライト・ブレイカーが吸収されているんだ。

現在、あの魔法の威力を上回る魔法は俺たちにはない。それをあんな簡単に防がれた。

驚くなと言う方が無理だらう。

しかし、その中で俺だけが別のこと驚愕していた。
もう聞くこともないと思つていたあの名前。

「ライア、だと……本当に、ライアなのか！？」

「亮、知つているのですか？」

星の質問に答えられる余裕はない。

あれが本当にライアならば、それは最悪なんでものじやない。

『ベルツ』が、教授たちがこの世界に復活したということになる。

アリスが、イデアが、アリシアが、キャロが、教授が！この世界に！

【はーっはーっはーっはーお楽しみはーこれからだぜーーー】

そつ念話が響くと同時に、ライアの頭上に巨大な魔方陣が展開された。

何をする気だ！？

【食らえ高町！スター・ライトお、ブーレイカあー、返しいいーー】

するとその魔方陣から、なのはのスター・ライトブレイカーが発射された。

それはそのままなのはの方に向かい、地表が爆散した。魔力の残滓が空氣中に飛び散り、ドームのよつに広がる。

「「「「なのはーーーーー」」」

直撃だ！例え当たつてなくともあの威力じゃ！

「エイミーさん！なのははーなのはは無事なんですかー！？」

星が必死にエイミーに尋ねる。

クソッ、どうなつてやがる！何だよ、『スター・ライトブレイカー返し』つて！

【はんつー歯】たえのねえ、この程度かよ！】

『なのはちゃん発見！…大変！魔力を蒐集されてる…』

「そんな！」

ライアがいた場所を振り返ると、もうそこには何も残っていない。いつの間に移動した！？

「畜生が！エイミイさん…なのはがいるところを出しててくれ！カリバーン！トランザムだ！」

『TRANS - AM』

そのまま一気にはの下へと直行する。すると、なのはを見つけた。確かに蒐集されている。なのはは既にかなりの量の魔力を吸われているらしく、かなり衰弱した様子だ。

「ライアああああああああああ！」

「来たかよ！ザ・剣士！」

俺がカリバーンで斬りかかると、ライアはその場を飛び退いた。咄嗟になのはを庇うような位置に立つ。

「なのは、大丈夫か！？なのは！」

しかし、なのはからの返事はない。
早くアースラに連れて帰らないとマズイ！

「クソッ、どうじでお前が！」元一

「親切に教えるかつて言つてんだろ？」

俺たちは外道の『ベルツ』だぜ？ 親切な時点で追放ものだつた

そしてやつは含むように笑い、

「そんで、外道な俺様が次に何をするかわかるよな？」

『Rapid Bullet Hundred Shift』

やつのデバイスが電子音を奏でると、背後に無数の魔力弾が形成された。

一瞬で展開したといつて、既に発射体勢になつている。

「俺様の本業は超早撃ちだ。こればかりは方舟でも最強だったんだぜ？」

『Fire』

そしてそれらが一斉になのはに向かつて発射された。

クロノと星、ユーノはまだ来れていない。つまり、なのはを守るのは俺しかいない。

「あああああああああああああ！」

『Silver Shield』

零落白夜を盾のように展開し、俺は防御の体勢をとった。

幸いにも、あいつの攻撃は全て純粹魔力による魔力弾。零落白夜が

あれば防ぎられる。

そしてライアの魔力弾の雨が俺たちに降り注いだ。

「はつ、どうしたんだよーお前の攻撃なんか全然効いてねえぜ！」

このままならば大丈夫だ。

消耗は激しいが、このまま防いでいればすぐに星たちが来る！

そして、雨が止んだ。

「フローデ

『再装填します』

しかし、ライアの早撃ちは俺の想像以上だった。

カートリッジを一発だけ炸裂させると、魔力弾は全て元通りになつた。

「……マジかよ」

「効いてねえなら効くまで撃つだけだ」

『Fire』

そして俺は再び魔力弾の雨に苛まれた。

side out

「 い、オイ、起きろヴォケ！」

「 いつたああああああいーー！」

誰ですか、私を足蹴にしたのはーぶち殺しますよー？

あ、皆さんおはよつゝぞります。ルナ＝ベルツです。
現在、何者かによつて頭を蹴られて悶絶しています。気配がないの
で気づきませんでした。

「 つて、ライアですか。

何ですかー？何かトラブルでも起こったんですかー？

「 魔力を集めてきたんだよ。これで良いか？」

彼が懐から何か出したかと思うと、それは魔力でした。
ふむ、

「 なかなか集まつたじやないですかー。

巨大生物で肩慣らしさせるつもりでしたけど、さつく魔導師も狩
つたんですかー？」

「 ああ、ザコ剣士と高町だ。

ザ「剣士はかなり消耗していたからあまり収穫はなかつたけどな」

「…………うわ～お、いきなりのビッグネームですね～」

まあ、獲れた魔力に罪はないのでそのまま蒐集しますが。
さて、どれくらい溜まつたかな～？

「おお、なかなかですね～。

423ページまで溜まりましたよ～！」

「最終ページは666だったか？ようやく三分の一かよ」

いえいえ、当初の予定に比べればだいぶ早いですよ。
今回ライアが一人の魔力を狩ってきたのは嬉しい誤算でしたね。

「んで？もう一つの方は完成してるのかよ？」

「ん～、ボチボチですね～。一つだけ調整が終わってます～」

「つまり、残ったジュエルシードはあと九つ。
三体は作れるじゃねえかよ」

「そうですね～。でも、もう一体くらいで終了する気ですよ～。
いい加減、私も蒐集に加わらないと～」

「12月に入る頃には一休田も出来上がるって訳か。もうそれで勝
ちは確定したも同然じゃねえか？」

「かもしだれませんね～。でも、今回の戦闘あなたの秘密もバレた
でしょ～し～。

そうなつたらどの道私がフォローする」とになりますから、勝負はまだわかりません~」

そのために予備としてジュエルシードをひとつおくるです。弱点を突かれればライアたけば一撃で終わりです。

「んあ~一わてと、作業再開ですね~」

「んじや、俺はまた行つてくるぜ~」

そしてライアは窓から飛び去つてきました。

え? 私がいる場所?

フュイトたちと住んでいたマンションですね~。

あの部屋は既に解約されていたのですが、同じ部屋を再び借りました。

逃げ出した犯人が同じ所に戻るのは考えにくいつ心理を逆手に取つた作戦です。

「それじゃあ、そろそろ休憩も終わりですね~」

『 そうですね。』

それにしても驚かされました。まさか本当に『他人の再生』を実現させるとは

「まつたくですね~。昔、教授にレクチャーしてもらいながら田の前で見ましたけど、あの時は開いた口が塞がりませんでした。どうか、なんでそんな複雑なことができるんですか~!~?って感じ

でしたし。流石は技術チートです。

あれを見ていなかつたら私にも『真似』できませんよ。特典様々です」

ここに皆さんにも説明しましょう！

ぶつちやけ、あのライアは本物ではありません！ジュエルシードを使つて再現した疑似人格と疑似リンクカードです。

そもそもジュエルシードの本来の使い方が、データを入力して他の生物や物質を完全再現する、いわば再生機なのです。絶滅しそうな動物をこれで増やして交尾させたり、新しい機械を再現したりといつた使い方をするもので、エネルギーはあくまで再生したものを動かすための動力。

「だからジュエルシードは暴走したんですよ。なんせ、設定がアバウトすぎたんですから～」

例えば猫が巨大化した事件。

大きくなるならば体積は？質量は？どこをどれだけの割合大きくするの？

それらの膨大なデータを詳しく思い浮かべれば想像通りの姿になれたでしょう。

まあ、所詮は猫なので無理でしょうが。

「つまり、設定をメツチャ詳しく打ち込めば打ち込むほどその理想の姿、生物に近づくんです～」

私が今してるのは、そのデータの打ち込み作業です。ちなみに、なぜライアにジュエルシードを三個も使つてているのかと言ふと、

「思考、つまり脳の代わりに一個、リンクーコアの再現に一個、デバイス『ベロボーグ』の再現に一個といつ割合です~」

あくまで私が設定したものなので、思考は私が『ライアならこう考
えるだらうな~』という想像を元に設定しました。正直、これが一
番大変でした。リンクーコアは魔力パターンを完璧に打ち込んだの
で完全再現です。デバイスも設計図などを完璧に頭に浮かべて設定
したので完璧です。

そして皆さんが気になつてゐるであろうあの身体ですが、

「それは私の氷の人形を媒介にしたからです~」
アイスマスター

ジュエルシードは依り代、つまり元となる身体や憑依する相手がい
ないとメッシュヤ弱くなるので、その対策を兼ねています。
実際にあの身体をよく見ると、額とデバイスにそれぞれジュエルシ
ードが付いています。それをダイレクトの破壊、もしくは封印され
れば流石にイチコロですが。

それと、あくまで私の魔法を依り代にしているので、稀少技能レアスキルも再
現できていません。今の偽ライアは目が良くて魔力が多い射撃魔導
師です。本人のポテンシャルでカバーしていますが。

「そんなこんなで、意外と弱点の多い偽ライアの説明でした~。
ご静聴ありがとうございました~」

ああ~、肩が凝る~。

これあと数日は続けないといけないなんて。

「自分で蒐集に行つた方が楽だったかもしねませんね～」

『なにを今更』

本当はもう一休作つたら終わりにしたいのはこれが理由でもあります。

調整中の中断は許されないので、ずっと付きつ切りで調整し続けなければいけません。途中で無理やり中断すればジュエルシードは暴走、そのまま次元震へ一直線です。

不眠不休の作業が続きます。

「まあ、戦力が多いに越したことはありませんが～」

『戦力と言えば、風の噂によると管理局はヴォルケンリッターを戦線に投入するつもりだとか』

「…それは洒落になりませんね～」

st'sの主戦力が揃い踏みじゃないですか！

数日後にはフェイトの裁判も終わってしまいますし。

「よ～し～眠いですが気合を入れふあ～むこやむこや……」

『マスター！マスター！！』

「…はつ…あ、危ないといひました！」

…氣を取り直して、氣合を入れていきましょ～う～。』

『…心配で仕方ありません』

正義は英語で書つてジャステイスです

s i d e 亮

「ふえ、フロイト＝テスターッサです！
よろしくお願ひします！」

「アルフだよ。よろしく」

今日は12月3日、昨日フロイトの裁判が終わり今日から捜査に参加することになった。
一緒にアルフもいる。

現在、俺たちの状況はあまり良くない。
ルナたちは既にかなりの魔力を蒐集しているらしい。この間まで静かだったのが嘘のように今は活発に動いている。主に確認できているのはライアだけだが。
さらに俺やなのはの魔力も蒐集されたため、リインフォースが使える魔法が増えてしまった。

「はいはーい！それじゃあこの前の戦闘でわかったことを含めた、
今の状況を説明するね！」

すると空中にモニターが現れ、ルナの姿をしたライアが映し出された。
この前の戦闘を記録したものだ。

「それじゃあまず、このルナちゃんなんだけど

「調べた結果、あれは間違いなくルナ本人ではないことがわかつた」と
するとエイミーさんがパネルを操作し、画面を拡大した。
そこに映っていたのは、

「ジュエルシード…！？」

そう、ライアの額とデバイスにジュエルシードが埋め込まれていた。
これはどういうことだ！？

「彼、ライアと名乗る人物は、プログラム生命体に極めて近い存在
であると確認できた」

「プログラム生命体？」

なのはが首を傾げる。

まあ、わからなくともしようがないけどな。

「つまり、使い魔とも違う疑似生命、つてどこかな？」

それでもなのはは良くならしい。

「簡単に言つなら、人の形をした魔法つてことだよ。
意思を持つて、人間の構造とそつ変わらない。魔法で人を作つたつ
て感じ」

「へえ～、ユーノ君つて物知りなんだね」

なのはが感心したという感じで頷いた。

確かに今のはわかりやすかつたな。やっぱリコーコーは頭が良い。

「話を戻すぞ。

このライアという人物はジュエルシードで再現されてる。リンクバー・コア、脳、デバイス、全てだ。ジュエルシードをここまで上手く利用できるとはな。恐れ入った

「逆に言えば、彼はジュエルシードの暴走体と同じ方法で対処できるんだよ」

「同じって言いつて、封印とかかい？」

「やつやつ

「なるほど。意外と簡単に倒せそうだね。

亮も零落白夜を使えば一撃で倒せるんだろうって。

「んな簡単に行くかよ。相手はあのライアだ。ポテンシャルだけでも十分な化け物なあいつを簡単に倒せねぇよ」

すると全員が二つちに注目した。

ああ、そうか。

「… そういうえば、亮は本物の彼に会ったことがあるようでしたね」

「なに！？ 亮、それは本当か！」

「ああ、本当だ。いつ、どいで会ったのかは言えねえけど…」

「… 何か理由があるみたいだな。

まあ、今は良い。彼について教えてほしい」

「…わかった。ます

」

そして俺はライアについて話せることを全て話した。
狙撃の腕、得意な魔法、戦い方から魔法体系、Sオーバーの仲間が
いることまで、知っていることを全てだ。

もちろん仲間の名前はルールのせいで言えなかつたが。そりやそう
か。アリシアとかキャロの名前は今後に響くからな。

「なるほど、知れば知るほど化け物だな。

おまけに、君の言ひ彼の仲間が出てくれば軽く戦争ができるわ」

「やつだ、だから時間を『えず』に

」

その時、
アラーム 警報が鳴り響いた。

「…嘘

」

エイミィさんは呆然とした様子だ。
パネルを叩く手も止まっている。

「…

「……ッ、『じめん-ジユエルシードの発動を確認！発動地点、海鳴
の海上！』

「 「 「 「 ジュエルシードーー?」 」 」

「 映像、出るよー。」

そしてモニターに現れたのは荒れ狂う海だった。

雷が轟き、海が渦巻く。自然現象ではありえないような荒れ方だ。
そして、画面の隅にルナ、もしくはライアがいた。
あいつはその光景を見ているだけで、止めようとも避難しようとも
しない。

「あいつ、ジュエルシードの暴走で俺たちを誘き出す気かー?」

「クソツ、卑劣な!」

「しかし、私たちは誘いに乗らざるを得ません

そう、おそらくあいつはそれが狙いだろ?。
そして封印が終わって疲弊した俺たちをまとめて叩き、ジュエルシ
ードを奪つてそのまま逃げる気だ。異だとわかつていっても行かざる
を得ない。

「 … 行くしかないか

side out

「あ～めあ～めふ～れふ～れ、母さんや～」

『この状況でよくそんな歌が歌えますね』

「えへ、だつてずっとこの光景じゃ、気が滅入るでしょう~？久々に外に出たんですし、気分良くなきたいじゃないですか~」

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

現在、海鳴の海で大嵐を引き起こしてみました。ずぶ濡れです。

「結界は張つてありますし、暴走させたジュエルシードは万一の場合に備えて一つだけです~。後は待つだけですよ~」

『しかし、来るでしょうか？こんなあからさまな罠に』

「来ます~」

私は確信を持つて言いました。

こればかりは100%と言い切れるくらいに自信があります。

「困つてる人を見捨てない、悪い人は捕まえる、それが正義を語る人たちの美点であり欠点ですから~」

そして、転送魔法の魔力を察知しました。

弟子が駆逐を超えるなんて百年早いです~!（前書き）

今日、これが投稿されている頃には私はオーストラリアにいるでしょう。
うう、海外研修なんて行く価値あるの?京都とか沖縄で良いじゃん!
!

弟子が歸郷を超えるなんて五年早いです~！

「お~、来ましたね~」

『田』で確認しましたが、いつものメンバー+フロイトとアルフです。

予想通り、一手に別れて攻めるつもりのようだ。

封印組は星さん、なのはさん、スクライアさんのようですが、まあ、たかが一つのジュエルシードですしね。あの三人でも十分でしょ~。

あ、皆さんどうも。ルナ＝ベルツです。

現在、管理局に真っ向から喧嘩売っています。

「まあ、やつ簡単に封印はわせませんけど~」

『BOW FORM』

アルテミスを弓に変形させると、そのまま矢を翻えて狙いを定めました。

狙いは、

「なのはさんです~」

『Silent Owl』

ククク、防御が硬いなのはさんでもこの魔法は防げませんよ。もう蒐集を終えたなのはさんは用はありません。早々に退場して

いただきます！

しかし、それは射線上に割り込んできたフェイトに叩き落とされました。

チツ、魔力刃を展開せずにバルティッシュのフレームで直に破壊されましたか。それでは貫通できません。

「そういえば、この魔法はフェイトに見せたことがありますね~」

「うん、だからその魔法は私には効かない」

そして私は周囲を取り囲みました。

別に四対一でも負ける気は微塵もしませんが、面倒というのは事実です。

ここにいるのは全員AAAランクくらいの連中ばかりですし。

「へっ、今日はライアのやつはないのかよ」

「今はいませんよ~? そのうち来るかもしれませんけどね~」

その言葉に負け犬の顔が強張りました。

どんだけライアに来てほしくないんですか。

でも、

「…あ、来たみたいですね~」

瞬間、赤色の砲撃が負け犬を襲いました。

しかし流石はベテラン。突然の奇襲を零落白夜で切り裂きました。

「お見事～

思わずパチパチと拍手をしていました。

いや、流石は私の宿命のライバル（笑）兼ストーカーですね。

すると、ライアが私の横に来るなり文句を言つてきました。

「お見事～、じゃねえよウオケ！

お前が変なこと言わなければ当たつてたつーの」

「や～い、負け惜しみ～」

「うむせ～一風穴あけんが～」

「はいはい～、そのセコツはピンク髪のツインテールのみに許されるものですよ～」

「ネタじゃねえよ～～」

ああ～、懐かしいですね、」の感じ。

イジりやすいです～。

「まあ、遊びはここまでにしましょ～。

そろそろあちらも焦れてきたようですね～」

言い終わるかどつかといつタイミングで負け犬が斬りかかってきたしました。

しつかり零落白夜も使っています。

「んじや、散開で～」

「チツ、わかつた」

二人で同時に避けると、そのまま別行動になりました。

『ベルツ』においては個人の戦闘能力が高すぎるため、連携なんかせずに個人が思い思いに戦つた方がやりやすいのです。なので、これからは完全に好きに戦うということです。

ライアは近場の敵を狩つていく作戦でしょうね。

え、私ですか？私はちゃんと狙いがありますよ？

まだ闇の書に蒐集されていなくて、尚且つ弱くて魔力がある人物。

『Ride Impulse』

そこから一気に加速し、その人に接近します。

向こうはようやく私に気づいたようですが、もう遅いです。

「私の狙いは最初からあなたですよ～？スクライアさん～」

「クッ！」

彼はシールドを展開してきましたが、私の前で防御魔法なんて紙よりも役に立ちません。

「氷華一閃！」

一瞬でシールドを切り裂いた私は、そのままスクライアさんに襲い掛かりました。

はい、一丁上が

『Scythe Slash』

「はああああああ！」

「危なああい！！」

フェイトが追いついてきました。

咄嗟にアルテミスでガードしましたが、真横から攻撃されたので勢いを殺しきれずに吹き飛ばされました。

吹き飛ばされながらも状況を確認すると、

「引き裂け、アークセイバー！」

容赦なく追撃も来ます。

こいつ、実は私を殺す気なんぢゃないですか！？非殺傷設定ですけど。

「邪魔しないでください～！」

『Rejection』

あ、防御魔法で防いじゃいましたけど、確かフェイトの戦い方の定石だと…、

『Saber Blast』

ほら爆発した～！

これは私の爆発の魔法を見てフェイトが覚えた魔法です。くく、相手に使われると厄介なことこの上ないです。視界は塞がれるし地味に痛いですし。

「でも、爆煙で視界が塞がるのはフェイトも同じです～！
私にはライアの『田』があるのでノープロブレ.....え？」

視覚を『田』に切り替えると、爆煙の向こうにいると思われるFH
イトからかなりの魔力が放出されるのが見えます。

『Thunder Rage』

「やつばーー！」

爆煙ごと広域攻撃魔法で吹っ飛ばすつもりです！
もう展開が終わってる！？

「アルテミス！鎧を～！！」

『Sanctum Armor』

「続いてシールド展開～！」

『Load Cartridge · Hard Rejection』

「ああ、来なさい！」

「サンダーレイジ！」

そして、視界があまりの光の強さに真っ白になりました。

セイバー・ブラストの爆煙が一瞬で吹き飛び、ルナさんが張つたらし
い防御魔法にサンダー・レイジが直撃した。
かなりの魔力を込めて撃つたから、これで少しほダメージが通つた
はず。

「フヨイト、助かつたよ。

これだけの魔法が当たれば、いくら彼でも

「

「しつ！油断しないで……確実に倒したって確認してからじゃない
と安心はできないよ」

「そんなオーバーな」

ユーノは倒したと思つてゐけど、それは早計だと思つ。
ルナさんがこんなに簡単に倒せるならば、とつぐんに管理局に捕まつ
ている。

すると、

「うんうん～ 油断しないその姿勢、流石は私の弟子です～」

やけに「機嫌な様子のルナさんが現れた。

フィールド防御を纏つていて、さつきの攻撃があまり通じていな
ことがわかる。

「何度もヒヤッとする場面もありましたよ～。

成長しましたね～。あの必殺技に憧れていた小娘とは思えません～」

「それは小さい時の話です！」

……ルナさん、どうして闇の書を完成させようとするの？
あんなもの、完成させても暴走するだけで力なんて得られないんだ
よ？」

「知ります。でも、これは必要なことなんですよ。
私に義務付けられた宿命さだめと言つても過言ではありますん」

「そんなこと……」

【ユーノ、今の内にはの所へ。ルナさんは私が抑えるから……】

【……うん、わかった。気をつけて】

そしてゆうくうとユーノが遠ざかるとすると、

「あ、そうそう。

スクライアさんの魔力を頂かないとい

そう、『後ろ』から聞こえた。

振り返ると、そこには二人目のルナさんがいた。
バインドでユーノを拘束し、彼の胸元に手を翳す。
「ぐあっ！？」

「魔力もらい～」

「ユーノ！？」

ユーノを助けようとするど、

「私に背中を向けるなんて余裕ですね～？」

正面のルナさんが襲い掛かってきた。

咄嗟にアルテミスをバルティッシュで受け止める。

「クッ、これが亮の言つていた…！」

「そう、アイスアバターです」

「ぐあああああああああ！」

そうしてゐる間にもユーノの魔力は蒐集されていく。

「！」

「はいはい～、熱くならない～」

『Freeze』

するとアルテミスの刀身が凍結し、バルティッシュに凍り付いた。しまった！

「はい、お～仕舞い。

フェイトの知り合いなので、殺しませんよ～？」

声に首だけで振り返ると、そこには魔力をかなり吸われて衰弱したユーノがいた。

「適当に転送しておきます～」と言つてユーノはビックに転送され

た。

そして彼はこちairoに向き直り、

「次はあなたの番ですよ～」

そう言つて近づいてきた。

私は逃げようとしたけど、バルティッシュが捕まつてゐるから動けない。

最悪、バルティッシュを置いて逃げる…！

「逃がしません～」

『Active Inertial Cancellor』

しかし、動こうとした時にはもつ捕まつていた。
バインディングに捕まつてゐるわけでもないのに身体が動かない。
手足が空中に縫い付けられているようだ。

「まあ、あなたは頑張つたと思いますよ～？
相手が悪かつただけです～」

そして人形の方のルナさんが私に手を翳し、

「それじゃ、魔力をもら
　　」

魔力を蒐集しようとした瞬間、白銀の刃に消し飛ばされた。

「フヒイト、無事か…？」

『Silver Blade』

離れた場所から亮の声が聞こえる。
どりやら魔力刃を伸ばして攻撃したらしい。

「あ～もうー本当に負け犬は私の邪魔ばっかりしますね～！
つていうか、奪った魔力をまだ闇の書に蒐集させていないんですよ
～！？一緒に消し飛ばされたじゃないですか～！」

そしてルナさんの意識が亮に逸れた。
チャンスだ！

『Photon Lancer』

「ファイア！」

「ほく？…………あいやああああああああああ～！」

ゼロ距離でフォトンランサーを発射し、なんとかルナさんから距離
をとる。
バルティッシュももう回収した。これで仕切りなおしだ。

「じゃの～一調子に乗ってんじゃねえですよ～！」

どりやら今のが相当頭にきたらしく。
アイスターを連射してきた。

【亮、アルフたちは？】

【ああ、ライアの相手をしてる。】
もつ封印は終わった。もうすぐ他の部隊から応援も来る。それまで
【耐えるぞ】

回避行動をとりながら私は状況の確認をする。
どうやら思つたよりも順調らしい。

「よし、このまま頑張ろう！」

『Yes, sir』

猫に小判は与えても大判は渡さないのが人間です（前書き）

先日、オーストラリアから帰つてきました。
しかし、帰宅早々に風邪をうつされてしまい投稿が遅れました。
しばらくペースが遅くなるのでご容赦を。

猫に小判は与えても大判は渡さないのが人間です

「！」の～一当たりなさい～！～！」

「くつ！そんな簡単な攻撃に当たるかよ！」

負け犬が笑いながら悪態をついてきました。
ま、そうでしょうね～。適時に撃つてますから。

あ、皆さんこりんこりんには。ルナ＝ベルツです。
さつきからアイスダガーを連射して『時間稼ぎ』をしています。

【ライア～、そつちはどうですか～？】

【問題ねえ。順調だ】

それはなにより。

今回はジュエルシードを一個も犠牲にした超豪華な作戦なんですか
ら、成功してもらわなくては困ります。

とはいって、

『Scythe Slash』

『Silver Blade』

「わっとと、危ない～」

この二人の連携は面倒くさすぎです。

両方とも似たような戦闘タイプだからか、連携がとても上手いです。どちらかが危ないならばもう一方が援護し、砲撃のチャージ時間すら補い合っています。

今日、初めて連携をしたとは思えません。

なので、

「これは惜を思い出しますね～。ほら、私があなたたちを襲撃した時の～。

フェイトさんは……名前が出てこないので犬死さんで～。
あれと同じ戦い方だつたでしょ～？びっくりするくらい同じ状況ですね～」

「テメエ！～」

挑発すると案の定。負け犬は連携を崩し、私に突進してきました。
ククク、やつぱり前世の話は彼の弱点ですね。

「亮ー？」

フェイトがそれを補おうと彼に向かつてきました。
完全に足手まといですね。

「うおおおおおおおーー！」

『Silver Blade』

デバイスに零落白夜を纏わせ、隙だらけの大振り。

普段ならば避けてカウンターと行くところなんですが、

「いつまでも零落白夜が通じると思わないことです～」
そんなもの

『Ice Sheet』

「こまかえて受け止めるーー！」

side亮

俺の目の前には、信じられない光景があった。
魔力攻撃においては無敵で、通常の攻撃でもその消耗に見合つただ
けの威力の零落白夜。

それが受け止められた。

「なん、だと……ーー？」

「ふふーん そんなにその必殺技を防がれたのが信じられませんか
ーー？」

刃を弾き、ルナが俺から距離をとった。
そして自慢げにデバイスの刀身を見せ付ける。

「これぞー長年に亘って私が研究し続けた、『零落白夜殺し』です
ーー。」

そもそも、あなたの零落白夜は以前私に防がれているのを忘れたのですかー？」

そう言われてハツとする。

確かに、前世で俺は零落白天を防がれている。

「でも、それならばどつして今までその魔法を使わなかつたんだよ！？」

「簡単です。あの魔法はリリス……専用の融合騎がいないと発動ができないんです。難易度が死ぬほど高いのです。しかし！それも過去の話！私はあの魔法を劣化、もとい簡略化しついに先日完成させたのです！！」

……なるほど。

つまり、あの魔法、『アイスベール』を刀身のみに使って発動させているのか。

「これであなたの必殺技は封じました！
へへへん！もうあなたに勝ち目なんてないんですよー！」

そのまま言ひや否や、ルナは俺に襲い掛かってきた。

【亮、動かないでそのままジッとして】

すると、フュイトから念話が届いた。

そういえば、さっきからフュイトの姿が見えない。いつの間に。

「ふふ～ん 魔力を蒐集したあなたにもう用はありません～。
ここで退場していただきます～！」

そしてルナは俺にその氷刃を振り上げ、

「サンダーフォール！！」

上空から飛来した雷に撃ち抜かれた。

side out

「……………痛い」

フェイトのサンダーフォールによつて海に叩き落されました。 ぶか
ぶか浮いてます。

バリアジャケットはプスプスと焼け焦げているし、目がチカチカし
ます。

咄嗟に防御しようとしたのですが、アイスシースの使用中はほとん
どのリソースをそつちに回しているので飛行魔法くらいしか使えな
いんです。

「アルテミス、ダメージは如何ほど〜？」

『先ほどの攻撃で残存魔力は4割まで削られました』

……大ダメージですね。

我が弟子ながら、正気を失つた味方を囮に使うとは…。
おまけに、少しでも操作をミスついたら負け犬にも当たつてしま
たよ？

【ルナ、生きてるかあ？】

ライアから念話です。

心配したといつより嘲笑いにきたといった感じですか～。

【生きてますね～。】の季節に海水浴することになりましたけど～。
はあ～、弟子の成長を肌で感じました～】

【ケケケ。弟子にしてやられるたあ、大した師匠だなあオイ】

【「わわわこどす～！」】

しかし、】のままではいけませんね。

『時間稼ぎ』もほどほどにしておかないと、私たちが撃墜されます。

【ライア、そろそろ撤退で～】

【あ～？弟子に敗走か～？】

【…いい加減にしないと殺しますよ～？】

【お～、怖え怖え】

すると、容赦なく海にサンダーレイジが撃ち込まれます。

このままだと感電させられるので、慌てて海から飛び出しました。

「……フェイト、実はあなたって私が嫌いですか～？」

訓練は厳し目だったと思いますけど、】にまで恨まれているとは～

「違うよ。ルナさんは私に色々なことを教えてくれた。

戦い方から戦闘の心構えまで、それこそたくさん。その中にあつた
んだよ。

『敵に容赦はするな』って

「……弟子が順調に育つてくれて何よりです～」

これは、私のせいなのでしょうか？

『白業自得です』

「黙らうしゃい～！」

ええい、まだまだ弟子に追い抜かれるほど柔ではありますん！
師匠の威儀を見せ付けてやります！

「アルテミス！…！」

『Sword Form? ザード』

カートリッジを一発ロードし、アルテミスが形状を変え始めます。
今までの西洋剣とは違い、今度は幅広で2メートル程の長さの大剣
になりました。

バルディッシュのザンバーフォームの実体剣バージョンみたいなも
のです。

真っ白ですけど。

【おい、テメ、何だそりや！？

そんな形態見たことねえ】

【ライア～、今からとてつもなく危険な魔法を使います～。
勝手に逃げるか避けるかしてくださいね～？】

【……お前、まさかキレイ

【キレイですよ～？】

そしてアルテミスを振り上げ、振り下ろします。
うん、大丈夫。いける！！

「何する氣か知らねえが！やらせるかよー！」

『Silver Blade Extension』

負け犬が魔力刃を伸ばして攻撃してきますが、今度は受けずに回避します。

今まで通りだとここでフェイドが、

「サンダースマッシュヤー！」

砲撃が来るんですよね。

そこそこ良い連携ですが、もう私には通じません。
私はアルテミスを思い切り振り上げ、

「よいしじょおおおおおおおおおおおおおーーー！」

砲撃を叩き切りました。

ふふ～ん これがソードフォーム？の力です！

この形態の使用時は、パワーブーストをアルテミスが自動で行ってくれます。

機動力を捨てた、完全パワー型です。

「まだまだこれからですけどね～？」

『Load Cartridge』

カートリッジを三発ロード、今日はカートリッジ使いまくりですね。
後で作り直さないと。

そんなことを考えているとアルテミスの刀身が淡い白色に光り始め
ました。

ふふふ、田に物見せてやります！

「超絶必殺！！」

そして私はその場でアルテミスを腰だめに振りかぶり、

「凍牙一閃！！」

全力で横薙ぎに振り払いました。

瞬間、刀身の光が爆発的に伸び始めました。一瞬で20メートル以上になつた光はそれでも止まらず、そのまま伸び続けます。
それは私が張つた結界に触れると一瞬で凍りづけにしてぶち破り、
海面に触れれば氷海に変貌させました。

「ああああああああああ、れ！！」

『ブースト全開』

ブーストの出力を上げ、光が振り回される速度が一瞬で音速に到達します。

手足がめつさ痛いですが、そんなのは後です！

「死に晒しやああああああああああああああ！」

勝った！！

死亡フラグに注意を

前回のあらすじ

私の必殺技が炸裂！

フェイントと負け犬は凍りづけに！？
勝った！！

以上！！

そんな感じです。

あ、みなさんどうも。ルナ＝ベルツです。

二人に新必殺技が炸裂し、細かい氷の破片が舞い上がりました。
爆煙のように広がったそれはフェイントと負け犬を覆い隠し、状況が
まったくわかりません。

「……やりましたか～？」

『ええ、おそらく』

どれだけ待つても一人が攻撃してくる気配はありません。
これはもしかして本当に……？

「ククククク、ふふふふふ、はーっはーはーはーはー！
とうとうあの負け犬を蹴散らしてやりましたよ～！やつたぜ～！」

「まあ、なかなか楽しめましたけどね~。
まあ、これからじっくりと殺せばそれで良いのです。

ついでにフュイトの魔力も頂きましょ~つか?

「まあ、なかなか楽しめましたけどね~。
さてとそれじゃあさつそく

「誰をやつたつて?」

背後からの声に、思わずギョシとします。

急いで振り返ると、そこには無傷の負け犬とフュイトが。

「そんな馬鹿な!?

あれを食らって生きているはずが……――」

凍牙一閃はアイスシースを伸ばして攻撃する技です。

いくら魔法を無効化する零落由夜でも防ぎきれるはずがありません!

「確かにスゲエ魔法だった。

けどな、トランザムを使った状態の俺ならばギリギリ防ぎきれる程度だつたんだよ」

「ルナさん、もう諦めて。

今のがルナさんの切り札でしょう? もう私たちの勝ちだよ……」

「そんな、そんなはずが……!」

そ、そうです！まだこっちにはライアがいます！一人でなら

「

「残念だが、それは無理だ」

すると、ライアが相手をしていたはずのクロノ執務官がやつてきました。

一緒になのはさんには星さん、アルフもいます。

「彼ならばさつき転送魔法を使って離脱した。

おそらく、さつきの攻撃の巻き添えを食らひうのを恐れたんだね。もつ、君は一人だ」

「そ、そんな……！」

確かにいつまで経つてもライアは私の援護に来ません。本当に逃げたみたいですね。

さらば、

『クロノ君、やつと繋がった！』

「ハイミィか。結界の影響で通信が妨害されていましたが、さつき君が破ってくれたんだったな」

『すぐに応援を送るからね！』

そして周囲に魔方陣が展開されると、アースラに配備されている武装局員が三十人ほど転送されてきました。

どうやら、他の部隊からの応援は間に合わなかつたみたいですね。

「これでわかつただろう。もう逃げる」とはできない。

大人しく武装を解除して投降するんだ」

そして私はバインドで雁字搦めにされ、手足を動かすことさえままならなくなってしまいました。

くう、これでは逃げられません…！

「動くことも反撃することもできず、仲間ももういない。
こんな状況では流石の君でもどうすることもできないだろ？
ルナ＝ベルツ、君を逮捕する」

クロノ執務官の言葉に、私は思わず俯いてしました。
そして私はゆっくりと顔を上げて、

「何を言つてゐんですか～？」

満面の笑みで言い放ちました。

「まだ私のバトルフェイズは終了していませんよ～？」

瞬間、今まで伸びたままだった光の刃がグニヤリと曲がり、一人の武装局員をバリアジャケットごと凍結させました。

「なつー!?」「どうなつているんだー!?」「何だこれはー!?

局員たちが慌てる中、私は容赦なく攻撃を加えます。あ、もちろん脳内では魔王のバトルパートのBGMが流れていますよ?

「ドロ～！モンスターカード！」

「ぐあああー！」

「ドロ～！モンスターカード！」

「ぎあああー！」

「ドロ～！モンスターカード！」

「ぐはああー！」

刃は次々と局員を絡め取り、そのたびに悲鳴が一瞬だけ響きます。なぜ一瞬なのかといふと、すぐに氷の塊になつて海に落ちていくからです。

「うふふふふふふふふふふふふ
だ～れが『凍牙一閃』を刃を伸ばすだけの単純な技だと言つたので
すか～?」

といふか、そんな簡単に私が死亡フラグを乱用するとでも?
甘いですね～、ショートケーキに角砂糖をジェンガのように積み立

てて「一ラをかけた謎の物質よりも甘いです！」

これはむしろ、シグナムの『飛竜一閃』に近い技なのです！太さが全然違いますが。

パワー重視の形態だとどうしても小手先の技が苦手になるので、それを補うために作り出した超三次元的な攻撃！逃げても追い続け、防御魔法の上からでも相手を凍りづけにする！

「ならば、術者を直接狙えぱ…！」

すると、クロノ執務官と高町姉妹が攻撃を仕掛けできました。誘導弾から砲撃まで兩あられですが、

「ドロ～！モンスターカード！」

その掛け声で全ての魔法は『凍牙一閃』に巻き込まれ、一瞬で凍りづけになってしまいます。

しかもそのままでは終わらず三人とついでにアルフを巻き込み、全員凍りづけにしてしまいました。

「なのはー星！アルフ！」

「畜生ー！テメエ、騙すなんて卑怯だぞー！」

「ふふ～ん まんまと罠に引っかかつたあなたたちが馬鹿なんですよ～。

犯罪者の言ひことをあつたり信じるなんて、それでも同員ですか？」

フェイトは器用に避けて、負け犬は零落白夜で弾きながら私に接近

してきます。

良く見ると、二人以外は全滅したようです。他に人が見当たりません。

ん。

そしてついに一人が私のところに到着しました。

流石に私は伸びきった魔力刃を消し、一人の攻撃に備えます。

「食らえ！！」「これで！！」

そしてフェイトは魔力刃を、負け犬は零落白夜を私に叩きつけようとします。

しかし、私は一人の攻撃を刀身の腹の部分で受け止め、

「^{トランプ}罠発動～！『聖 るバリア ミラー オース』！！」

瞬間、未だに淡く光っていた刀身が再び輝きました。
そして爆発するように光が一人を包み込み、

「はい！氷像二つ、一丁あがり～！」

二人は凍りづけになつて落下していました。

本来ならば殺傷設定でこの魔法を使い、凍りづけになつた敵」と爆発させるのが定石なのですが、

「まあ、今回は魔力を奪わなければいけませんしね～。

勘弁してあげます～」

『か、勘違いしないでよ！別に弟子の成長が楽しみな訳じゃないんだからね！ってやつですねわかります』

「……勝手にシノアリしてないでくださいよ～」

「ど、まあそんな感じで魔力を蒐集してきました～」

「…………お～。お、お疲れ～？」

わっさは思わずルナを見捨てて逃げ帰ったが、ルナは全く怒った様子を見せない。

それどころか、普段通りの態度で接してきやがる。それどころか、この前買ってきた「タツ」で蜜柑なんか食つてるし。ちなみに俺も入ってるが。

…………これは、もしかして怒つていいないんじゃね！？

ならば好都合！

このままなかつたことにして

「あ、やうこえぱ～！

ライアって、わっさ私を見捨てて逃げましたよね～？」

ギクッ～！

「あ、あ～？そ、そういやあやつだつたな～。
いや～、そんな状況でも一人で何とかするなんてルナさんマジパネ
エッス！」

「そんなん、褒めても何も出ませんよ～？」
……そ、何一つね

「…？」

ボソボソとルナが何か言つたようだが、小さすぎて聞こえなかつた。
何だ？

「ただいま」

「あ、おかえりなさい」

すると、そこに『アリス』が帰つてきた。トコトコと寄つてきて、
そのままコタツに足を突つ込む。

……つい…！

「なんでアリスがいるんだよーー？」

普段通りの「アスロリ」、普段通りの無愛想や、普段通りの眠そうな面、
普段通りすがるがルナの顔でやつてゐるから違和感が半端ない。

「お~ルナーーいつの間にアリスを『再現』したんだよーー？」
いるなりこんで今日の戦闘に参加せりやあ良かつたじゃねえかー！」

「あ~、つむせこですね~あなたは。
ちやんと説明しますから黙つてください~」

「静かにしないと殺す」

「うつ、二人から不機嫌オーラを全開で向けられた…。
『ベルツ』の長男長女の言葉に流石の俺も黙らざるをえない。

「さてと、それじゃあ今回の作戦の裏側を説明します〜。
今回の作戦は表向き、ジュエルシードを使って私たちが管理局を誘
き出すといったものですよ〜」

そうだ、俺はそう説明された。

途中でルナがスクライアと弟子の魔力を蒐集するから時間稼ぎをし
ろと。

「しかしその実、今回はあまり魔力の蒐集を目的にはしてませんで
した〜」

「はあ？じゃあ何でジュエルシードを一個も使うなんて馬鹿みたい
なことしたんだよ？大損も良いところだろ」

おまけに両方とも回収されちまつたし。

アリスに使ったのも入れば八個の消費、残りは五つだ。

「今回、アリスには別行動をとつてもらつたんですね〜」

「別行動？」

「そう、魔力の蒐集」

そこまで聞いてピンと来た。

ルナの野郎……。

「俺らは困だつたつてことかよ」

「そうです～。今回、アリスには応援に駆けつけた部隊を狩つても
らいました～」

「質が悪いからあまり集まらなかつたけど」

「十分です～。今回の目的は魔力の蒐集よりも、潰した部隊の数で
すから～」

「それならそこそこ…」

小隊を七つ、中隊を五つ、大隊も一つだけ潰した

「……………スッゲ

流石は対集団型、殲滅はお手の物つてか。

俺たち『ベルツ』の人造魔導師にはそれぞれコンセプトがあり、全員がそれに則つて製作されている。

オールラウンド型のルナ。集団殲滅のアリス。支援、迎撃の俺。突撃のイデア。
万能型のルナ。集団殲滅のアリス。支援、迎撃の俺。突撃のイデア。
拷問、攪乱、潜入のアリシア。キヤロは実験目的だな。
教授？あれは頭ブレインだろ。リリスはその補佐だ。

「それで、現在は何ページですか～？」

「488ページ」

「おいおい、そんだけ狩つてたつたそれだけかよ。

ショツベ～なあオイ。確か昨日の時点で450くらいはあつただろ
～が

「うむせい。大半は蒐集する前に回収されたから仕方ない。
それに一匹を蒐集している間に他のが連れて行かれる。効率が悪い」

「まあまあ、フェイトたちから蒐集した魔力でそれは取り返せます
～」

そしてルナはアリスから闇の書を受け取り魔力を蒐集させた。
バラバラとページが捲れ、魔力が蒐集されていく。
「りやあ今日で全部埋まつたか？」

しかし、

「……ん～、残念～。ちょっと足りませんね～」

「ん、後ちょっと」

「かあ～、メンド臭え～」

632ページ。

あとたつたの34ページだ。だが、たつたそれだけを埋めるために
動くつてのがメンド臭え。

「お～お～、どうすんだよ～？もう原作キャラはあらかた狩つただ
ろ～？」

つまり、地道に狩るしかねえじゃ～ん

「面倒」

「そ、そんなことを言われても～」

「守護騎士どもは本局で厳重な監視下におかれでんぢろ～？ 小物を大量に狩るか、大物のモブを探すしかねえし」

「今日で応援に来そうな近隣の部隊はあらかた潰した。しばらく待たない」とザコすら來ない」

「……乱獲しそぎましたね～」

まったくだ。

巨大生物どもを狩つていたら管理局が寄つてくるだけで大して蒐集もできない。

八方塞だ。

「噂によれば管理局がヴォルケンリッターを投入する『かもしれない』らしいです～。もし本当だとしてもいつからかはわかりませんが～」

「地上を攻めるのは？」

「無理ですね～。地上部隊は『次に来たら全戦力を使ってでも逮捕してやる！～』とレジアス中将が息巻いているらしいですから～。最悪、袋叩きにあつて蒐集どころではありません～」

「なら本局は……つて、そりゃ無理か

「ですね～」

少し前にルナが単騎で攻略したらしきしな。

防衛レベルも跳ね上がっているだらう。自滅覚悟なり話は別だが。

「どうするかねえ~」

「どうしようもない。向こうが痺れを切らすのを待つべき

「それもうううですね~」

「こしようっと言つてルナは『タシから出で行つた。

「ああ~どう行くんだよ?..」

「夕飯の買出しですよ~。今日は頑張りましたし、豪華にステキと行きましょ~!..」

「おお~マジか!~?

「流石はルナ、良くわかってる」

「そう来なぐっちゃな!..

今日はそこそこ戦つたし、これくらいは当然だろ!..

ちなみに、ジュエルシードで身体を構成されている俺たちは本来は食事を必要としない。

だが、味覚を楽しむという意味では食事は重要なんだぜ? 娯楽だ娯楽。

「ふふふふふ、楽しみにしていてくださいね~。

アリス『だけ』

「… オイ、今聞き捨てならねえことを聞いたんだが」

流石にルナを呼び止める。

アリスだけ? なんで『だけ』を強調してんだよ!?

「まつたくもー。味方を見捨てて逃げるような野郎に食わす飯なん
てあるはずないでしょ? あなたは麦茶でも飲んでなさい!」

「オイ! ! 流石にそれはねえだろ! !

マジでスンマセンシタ! ! だから俺にも肉を! !

「肉? 何を言つてるんですか? ?

そしてルナは玄関のドアを掴み、

「テメエに食わす夕飯はねえ」

晩飯の全品抜きを宣言してドアを閉めた。

悪魔め……! !

「自業自得。でも、土下座して『肉を分けてくださいお姉様』って
言いながら一時間拵み通すなら

「

「わけてくれるのかー!?

「一口の刃矢の、くらりかいた肉汁をあざつても良こ」

「セノシーフ

訂正、悪魔じもぬ………

sideout

「無するなよー絶対に無するなよー…マジで無するなよー?」

「…………暇ですね~」

「暇だな~」

「ணணண」

皆さんこりんにちは。暇なルナ＝ベルツです。
あれから一週間、特に活動もせずに引きこもりっています。
蒐集もほとんど行つていないので本当に何もやつてません。コタツ
で暖をとっています。

「最近は図書が一つの世界に必ず一小隊はいるみたいですからね~。
狩りにも狩れません」

「わらわらと集まつてぐるしな~」

「ணணண」

それにもしても、アリスは本当に幸せそうに寝ていますね~。
前に『私の安眠法は108式ある(キリスト)』とか言つてましたし、
本当に寝るのに妥協しません。

「ルナ~、何か一発逆転の方法とかねえのか~?」

「そんな方法があったらとつて使ってますよ~。
まあ、強いて言つとしたら……」

「したじゅ~」

「守護騎士が動き回つてくれて、それにピンポイントで接触できれば良いんですけどね~」

「うわ~、希望的観測すぎるだろ、それは」

「もしくは……」

「もしくは?」

「管理局が私たちを見つけて、攻勢に出でくるとか~」

「…………いや、それはこいつがマズイだな」

「うなんですよ~。」

でも、現状では動きにくすぎて仕方がないというのが事実です。集まつてきてもその場で闇の書が完成するならばそれで良いんですけど、それには結構な量の魔力が必要です。なのはさんクラスは要ります。

「あ~、平和つて退屈だ~」

「あれです、『来るなよ、絶対に来るなよー』とか言つていればあつさり来てしまつたりして~」

「ダチョウ俱 部か」

「でも定番でしょ~?」

「ほらほら、言つてみてくださいよ~」

「俺かよ……。」

あ、クルナヨ、ゼッタイークルナ

バリイイイイイイイイイイン！！

ライアが棒読みでの有名なネタをやつていると、マンションに張っていた隠蔽結界が外部から破られました。

「……何？結界が壊れたみたいだけど？」

Г Г

痛い沈黙が部屋を包む中、アリスがのつそりと起き上がりま
す。どうか、いまさらですけどコタツで寝ると風邪を引きますからや
めましょうね？

「ら、ライアのネタのせいですよ～！」

「俺のせいかよ！？」そもそも発端はテメエが振ってきたんだろうが

! ?

「眠い」

こんな非常時だといふのにチーマワークはバラバラです。ああ、こんなことをしていける場合ぢやないのに～～！～

【ルナ＝ベルツ、並びにライア＝ベルツにアリス＝ベルツー・君たち
は完全に包囲されている！】

武装を解除して投降しろ！－10秒だけ待つ！それまでに投降の意思
を確認できない場合、武力をもつて君たちを逮捕する！－】

「「短つ！？」」

クロノ執務官のものと思われる念話にて、思わずツッコみを入れまし
た。

じゅ、10秒？トイレの途中だったら酷いことになつていきましたよ
！？

「私も入つてゐる」

「そりゃあ、大隊を潰せば嫌でも逮捕されるだろ！」

「管理局がへボいのが悪い」

それには同感ですが、そうしてこいつらにも時間は過ぎて行つてる
んですよ！？

まあ、答えは決まつてますが。

【時間だ！返答がないため、投降の意思がないものと判断する！】

「横暴だな～」

「嫌いじゃない」

「対象が私たちじゃなければですけどね～」

【総員、撃てええええ！】

side亮

俺を含めた数百人規模の魔導師たちの魔法が、一斉にマンションに突き刺さった。

なのはやフェイト、星たちはカートリッジを装備してきたため、今日は前までは火力が違う。

そもそも、なぜ俺たちがこの場所を突き止めることができたのかといふと、発端は数日前のフェイトの言葉からだつた。

「ルナさんたちの隠れている場所だけど、海鳴が怪しいと思つ」

その言葉に最初こそ皆は否定的だったが、俺は納得していた。なるほど、その発想はなかつた。

「ありえるな。ルナのことだから『逃げ出した犯人が同じ所に戻るのは考えにくいという心理を逆手に取つた作戦です』とか言つてそうだ」

「……す』いね。本当に言いそつだよ、それ」

伊達に長い付き合いでじゃねえからな。

口こぼれ出さねえが。

それで手始めにフロイトの住んでいたマンションを調べてみれば、

「…………こきなつビンゴだよ。マンションの周辺に隠蔽結界を確

認

「本当か！？」

それから数日間そこを監視すると、ダミーではなく本物のアジトだ
ということもわかった。ルナが買い物に出かけるのを発見したから
だ。

「灯台下暗じとまよへ言つたものだな」

「クロノ、これからどうするんだ？」

なのはたちの要望で、既にカートリッジシステムの装備は終わって
いる。

原作とは違い、破損がなかつたために早く改修ができるからだ。も
ちろん俺のカリバーンも装備している。いつでも出撃は可能だ。

「まずは近隣の部隊を招集し、戦力を整える。

今回はルナと同レベルの魔導師があと一人もいるんだ。用心に越し
たことはない」

というクロノの言葉で、各部隊から急遽応援が駆けつけた。
その数、なんと200人を越える。アースラのメンバーを加えれば

250人には届く。

「この人数でも不安は残る。なんせ、相手はオーバーサが三人だ。油断はするな！」

そして現在、作戦は開始された。

今の一斉攻撃には俺とのは、フェイト、星は参加していない。
俺たちは切り札らしいから、大きいのを後から撃ち込む係なんだとか。

【四人とも、今だ！！】

【】【】【了解！！】】】】

どうやら出番らしい。

「三人とも行くぞ！」

そしてあらかじめチャージしておいた魔法を発動する。

これがフェイトの『プラズマサンバー・ブレイカー』を参考にして編み出したおれの新技！

カートリッジを全発使った本気の攻撃だ！

「白銀一閃、シルバーセイバー

」

「スター ライト

」

「ルシフェリオン

」

「プラズマザンバー

」

「「「「ブレイカー！…！」」」

そして一斉に最大威力の砲撃が発射され、マンションは粉々に

【調子に乗るな】

ならなかつた。

突然、マンションの前に四枚のシールドが形成された。一枚だけは白いからルナのものだらう。それが俺の砲撃を、残りは黒いシールドが個々に砲撃を防ぎきつた。

「なに！？」「そんな！？」「信じられません…！」「硬い…！」

【ルナたちにすら『無敵要塞』と称された私の防御を破れる？】

side out

「あ、あつぶない……！」

「冷や汗が出たぜ…」

「ザコ剣士は相性が悪い」

リアル弾幕やら収束砲撃やらを撃ち込まれ、正直なところ寿命が縮みました。

「どうすんだよ? こりゃあ明らかに不利だろ」

「もうなんですよね~」

そつ言いつつも、外の状況を必死に確認します。
こうこう時に『田』って凄まじく便利です。

……むむーー

「……ライア、良い報せと悪い報せのどちらから聞きたいですか? ?」

「ああ? ジャあ良い報せだ」

「なら悪い報せから。敵の総数は263人、Aランク越えの魔力も
チラホラいます~」

「… オイ、俺の意見を聞く意味あったのか?」

「ついでにもう一つ。

敵は転送妨害の結界を張っているので、お得意の『トランスマッシュ
ヨンシールド』は使えませんよ~」

「オイ！俺の戦力の三割が死滅したぞー？」

「良い報せは、相手の中にヴォルケンズを発見しました～」

「……それって良い報せなのか？」

ますます戦力的に敗北が近づいた気がするんだが…」

ですね～。

今の状況をわかりやすく説明すると、マグ ットコーティングした
ガン ムガア・オア・クーに単機で突撃すると回じくらいう不利
です。つまりとこり、

「蒐集も脱出も絶望的ですね～」

「こりゃあ無理だろ」

「分の悪いゲームは嫌いじゃない」

悪すぎて無理ゲーの域に達してますけどね。
ああ～、嫌になっちゃいます。

……………あ。

「シグナムとヴィータ、それとザフィーラが突入してきました～。
あ、それに追随してフェイトたちも来ます～」

「はい死んだ～！もう勝ち田ゼロ～！へつー！」は俺が時間を稼ぐ
！お前たちは逃げろ～！
つつ～死亡フラグがあつたよな。ルナ、今度はお前がや

「おお～！マジですか～！
さっすがライア！後は任せましたよ～！」

「華々しく死ねば？」

「オイ！真に受けんな！冗談だ！…」

「またまた～！恥ずかしがる必要はありませんよ～！
わわ、どうぞ前に～…」

「ふざけんな！テメエが行けこの野郎！」

「ならば一人で行けば良い。私は脱出するから

「逃がすか！テメエも道づれだ！」

「私を置いてあの世へ行きなさい～！」

「黙れ！テメエも連れて行かんな～！」

そつこじしている間にもフロイトたちは迫ってきます。
あああ～！どうしたら～…！

……………あ～～！

「二人とも、妙案を思いつきました～」

「「あ？」」

「一人が怪訝そうな顔でこちらを見てきました。
そりやそうですよね。本当に突然なんですから。

「そのためには、一人がどうしても必要です」

「……………言つてみろ」

「まともな案じゃなければ殺す」

「一人には、死んでもらわなければなりません～」

真っ赤なああ誓いいいいはの動画でも弾幕が凄いです

s.i.d e ライア

「…………正氣の沙汰じゃねえな」

「効率的にはまともだけど、精神が病んでいるとしか思えない」

「でも、これくらいしか生き残る方法はありません～」

そりやそうだがよ。

うわ～、テメヒの血は何色だよ？赤いのが信じらんねえ。

「わ～ったよ。それで行くぞ」

「ん、異論はない」

「それじゃあ決行で～」

「「「解」」

そしてルナはデバイスを開け、むききの弾幕の流れ弾で酷いことになつてベランダから外に出て行った。

「う～し、それじゃあ俺たちも急ぐか

「ん、わかつた」

そして俺たちは闇の書を開き、

『Sammeln』

自分たちの魔力を蒐集させた。

side out

『マスター、この策が本当に成功すると思いませんか？』

「成功確立は良くて二割って感じですね。むしろ、大失敗する可能性の方が高いです」

ちなみに、ただの失敗は私が普通に捕まるか殺されることです。『大』失敗の意味は……まあ、その時にでも。

あ、皆さんこんには。ルナ＝ベルツです。
今から生死を賭けた大作戦を行つところです。マジで死にますよ、
大失敗すれば。

『正直に申し上げますと、私はこの作戦は無謀だと思います。成功するなんて奇跡を起こすようなものです』

「ふつふつふ」

思わず笑ってしまいました。

奇跡ですか。面白いことを言っていますね、この子は。

『……何か秘策でもあるのですか?』

「いゝえ?でも、奇跡といつ葉は大好きです。それは即ち『運』でしょ?』

それならば、奇跡なんてものは至極簡単です。

「『運も実力の内』!つまり、その奇跡は私の『実力』です!!」

そして私は飛行魔法で一気にベランダから飛び立ち、連中に突撃しました。

sideフロイト

私は今、守護騎士の皆や亮たちとマンショニに突入しようとしている。

この状況とあの防御力から見るに、ルナさんはきっと籠城しようと/orするだろ。しかし、その間に広域殲滅魔法を使わなければこちらは瞬殺だ。それは絶対に避けたい。

しかし、予想に反してルナさんは堂々と私たちの前に姿を晒した。

「ひふみ……八人ですか。ということは、スクライアさんとアルフとシャマルは転送妨害と封鎖結界の維持に回っているんですね~」

こちらの人数を知りながらこの余裕。何かの作戦?

「ルナ、君ならばこの状況を理解できるだろ？ 大人しく他の一人と投降するんだ」

「クロノの言うとおりだぜ。この人数が相手でここまで準備をされたら、いくらお前でも逃げ切れねえ」

そう言いつつも、亮は全く油断していない。むしろ、断つたりすぐにも襲い掛かるとしているのがわかる。

「んん～、そ、うなんすよね～。流石の私でもこの大人数では逃げ切れません～。困った困った～」

そして、本当に困ったように笑う。

「正直、私もこの状況は流石に絶望的だと思っているんですよ～？ つていうか、どうして拠点がわかつたのですか～？」

「フュイトちゃんが気づいたんだよ。ルナちゃんなら元の場所に戻つてくるって」

「…………さ、流石は我が弟子？」

『思考が読まれるのは予想外でしたね』

「まったくです～。フェイトって、ルルみたいに私のストーカーでもしていたんですか～？」

「し、してません！～！」

「どうか、ルル！～それは犯罪だよ！

「それにしても、シグナムたちを戦線に投入するとはね～。管理局も相当に切羽詰つてきたのが窺えます～。自分たちが無能なばかりにね～？」

「……ルナ、それは違う。主を含め、私たちは自分の意思でお前と戦うことを決めた。お前は最初から夜天の書を狙っていたのだろう。だからこそ、これは私たちが決着をつけなばならない！」

「ぶん殴ってでもはやてのところに連れ帰つてやるーー！」

「……ルナ、ここまでだ。お前ほどの騎士ならばわかるはずだ」

守護騎士の皆がルナを説得するも、やつぱりルナは困ったように笑うばかり。投降する素振りは見せない。

「あなたたちの意思つて…………どうせ、ジークに言われたからでしょう～？そんな安い言葉、聞く耳持ちません～。それに、ここまでの大犯罪を犯しておいて、今さら投降してどうするんですか～？どうせ私は一生牢獄ですよ～？」

「それでも、罪は償わなくてはなりません。

犯した罪は消えなくとも、それが咎人にできる唯一のことです」

「星の言つ通りだよ。ルナさんが犯した罪は重い。でも、それでも償わなきゃいけない」

「戯言ですね～。私が懺悔しようと後悔しようと、過去は変わりません～。それならば、私は未来を少しでも面白おかしく生きるだけです～」

その言葉に、私はルナさんの生き様、悪く言えば本性を見た気がした。過去のせいだ立ち止まる」ことを許さず、常に未来に目を向けていく。

ルナさんにとっての過去とは、未来を生きるための糧でしかないのだろう。

しかし、ルナに来て、私の勘は最高レベルで警報を鳴らした。絶対におかしい。ルナさんが戦闘中にこんなに話すことそのものがおかしい。

そして私の脳裏に、過去にルナさんが教えてくれた教訓が甦った。

『良いですか、フェイト。

明らかに相手の方が不利な状況で相手がペラペラと余計な話を始めたら、それは

「時間稼ぎ！？」

『以心伝心ですね』

やつぱり！！

「皆、これは罠だ！ルナさんのこれは時間稼ぎ！たぶん本命は中の一人！！」

「何の」とですかああああああキイイイイイツク！！」

「ぐふうううううつーーー？」

すると突然ルナさんが加速し、クロノに盛大なドロップキックをかました。しかも、蹴った部分のバリアジヤケットが凍結している。いきなりの攻撃にクロノは反応できず、錐揉みしながら吹き飛んでしまった。

「クロノ！？」

「お一人様ご案内～！」

『Ice Detonation』

そして未だ吹き飛んでいるクロノが爆発した。
そのまま気を失ったようで、地面に自由落下している。

「先手必勝～！…つまりは後手必敗です～！…後手に回った彼が悪いのです～！」

「それはいくらなんでも無茶苦茶だよー？」

幸いにも、地面に激突する前に他の局員に救助された。
どうやら非殺傷設定だったらしく、遠田からだけクロノに怪我は見当たらない。

良かつた。

でも、今ではつきりした。

残りの一人、もしくは二人がしていることがルナさんの切り札！

それがなくなれば私たちの勝ちだ…そつじやなきや こんなに攻勢に出たりしない。

【全員、聞いて。一人でも良いから残りの一人のところに行くべきだと思う。ルナさんが一人でここを守つてることは、たぶん中の二人は無防備つてことだから】

「……私の勘では、フェイドが何か余計なことを言つてそうですね。なので、ここからはマジで手加減なしですよ。本気で行きます！」

そしてルナさんは、

「フルドライブ！『レジョンンドモード』……！」

『Hagane』

私すらも見たことがない、フルドライブを発動させた。亮がフルドライブを一度だけ見たことがあると言つていたけど、聞いていたのと違う。現に亮も驚いていた。亮が言つていたのは、バリアジャケットが変わらないはずなのに……！？

「バリアジャケット、バージョン『イデア』……！」

『Hagane form』

「大剣を～！」

『Sword Form?』

瞬間、今までのロングバーートのようなバリアジャケットが光に包まれ、純白だが重装甲の鎧に変形した。明らかに防御力を重視していく、高速戦闘に向いていない。それにあのデバイスの形態、パワー勝負で来る気だらうか？

「皆、見た目に騙されるな！あれは高速せんと

」

『Lightning Road』

「スパークムーヴー！」

パンツと放電時の火花のような音がしたと思つと、ルナさんは一瞬で亮の背後に移動していた。『神速』、その言葉が頭に浮かぶ。

『Load Cartridge』

「紫電一閃！！」

普段とは違い、刀身に電気変換した魔力を乗せての斬撃だ。あんな高速機動なのに破壊力も重視しているなんて……！？

『TRANS-AM』

「舐めんなーー！」

しかし亮はルナさんが移動を開始した瞬間にトランザムを発動させ、刃が振り下ろされる前にその場を脱出した。そして、そのままルナさんの背後に高速で回りこみ、零落白夜を発動させたカリバーンを振り下ろす。

「遅いですー！」

『Lycanthic Road』

しかし、再びルナさんは高速移動して亮の背後に回り込む。

「なんのー！」

しかし、これも亮はルナさんが移動した瞬間に高速で背後に……
あれ？ これつて「いたち」いつこじゅや？

「遅いですー！」

「なんのー！」

「遅いですー！」

「なんのー！」

「遅いですー！」

「なんのー！」

「遅いですー！」

「なんのー！」

「遅いですー！」

「なんのー！」

「遅いです～！」

「なんの～！」

「遅いです～！」

「なんの～！」

「遅いです～！…………と見せかけて～！」

ルナさんは今度は剣を振り下ろさずに背後を振り払った。しかしそこには亮はない。

「ど、どこに！？」

「終わりだあああああ～！！」

『Silver Blade』

タイミングを読んでいたのか、それとも偶然か、亮はルナさんの頭上にいた。そのまま一撃必殺の攻撃をルナさんに振り下ろす。しかしルナさんに刃が触れた瞬間、その姿が消え失せた。これは、『幻術』！？

「なに！？」

「超隙ありです～！」

瞬間、ルナさんが亮の背後から突然現れ、大剣を振り下ろした。

「やらせん！」

しかし、二人の間に守護獣のザフイーラが割り込み、シールドを張つて亮を救う。

どうやら今の攻防の間にヴィータとシグナムはマンションに向かつたらしい。姿が見えない。

「ザフイーラ…? ここは……！」

『烈火の将と鉄槌の騎士の姿が見えません』

「追いますよ～！」

「行かせん！～」 「行かせるかよ！～」

すると二人は猛攻撃を始めた。

移動の隙を与えないためだろう。三人とも接近しすぎていて援護ができない。

【星、なのは、フェイト！ここは俺たちが何とかする！
三人はライアとアリスを頼む！】

すると亮から念話が届いた。

確かにあの二人はオーバーらしいし、援護に向かつた方が良いかも知れない。

あっちが本命の可能性が高いし。

「星、なのは、行こ～！」

「しかし……」

「亮くんならきっと大丈夫だよ。それに、ザフィーラさんだってついてる」

「…………わかりました。亮、ご武運を……」

そして三人でシグナムたちを追つてマンションに急いだ。
しかしそう近くまで来ると、シグナムとヴィータが大急ぎでマンションから飛び出していく。

「二人とも、どうし

「テスター！ 退け！」

「デカイのが来んぞ！」

その言葉で理解した私たちはその場で急停止し、焦らずに防御魔法を展開した。

急がず焦らず、けれども正確に。ルナさんの教えの一つだ。

「バルディッシュ！」

『Defensor Plus

念のためにカートリッジを使って防御魔法を発動する。

星となのはも防御魔法を発動させ、シグナムたちも私たちの近くに来るなり障壁を張った。

瞬間、マンションが内側から爆散して、

【お前たちは全員殺す】

百発にとどくほどの量の誘導型の砲撃が視界を覆つた。

s i d e o u t

芸術は『超』大爆発です！――

海鳴の上空では、普通の人間はおろか一流の騎士すらも真っ青な超高速戦闘が繰り広げられていました。白い稻妻と閃光は激突と離脱を繰り返しながらも、決してマンショソから離れようとしません。

「一対一とか、それでもあなたたちは騎士ですか？ プライドとかないんですか？」

「うるせえ！ 犯罪者に言われたくねえんだよ！」

一合、二合、三合と負け犬と打ち合つていると、隙を突くようにザフイーラが殴りかかってきます。ええい！ 追いつけないくらいの高速戦闘なのについてこれるのは流石と言つたところですね。

「テメエ、いつたい何考えてやがる！ もう勝ち目はねえ！ 謹めろ！」

「諦めたらそこで試合終了です！ 1%でも可能性があるならば、私は諦めません！」

「少年漫画の主人公がテメエは！」

まあ、なんだかんだ言つて諦めていないのは事実ですが。

本当はこのまま時間稼ぎをして、ライアとアリスが闇の書を完成させてくれるのが理想です。そう簡単にはいかないでしょうが。

あ、皆さんこんにちは。ルナ＝ベルツです。

現在、負け犬＆ザフイーラと高速戦闘中です。速いです。

「つていうか、前から思つていきましたけどトランザムは作品が違うじゃないですか～！もっと統一するべきです～～！」

「うるせえー勝ちや良いんだよ！」

うわ、美的感覚が欠片もないです。そんなんだから負け犬なんですよ、あなたは。

すると、マンションから巨大な魔力反応を感じました。
魔力のパターンから言って……アリス？

【お前たちは全員殺す】

無差別念話が届くと同時に、マンションの一室が内側から爆散、無数の誘導砲撃が発射されました。

……つて、あの無差別魔法ですか！？

『マスター！』

「振り切ります～！」

負け犬との打ち合いを中止し、アルテミスをあえて大振りで薙ぎ払つて追い払います。ザフィーラはまだ私たちに追いついていません。

『Lightning Road』

そして一気に移動、とにかく移動です。
さつきの念話からして明らかに殺傷設定でしょうし、あそこにいれば消し炭にされます。

私が移動した直後、砲撃は全てが意志を持つているかのような動きで散開しました。そして、あの場で戦闘をしていた魔導師、いえ、結界内にいる全ての魔導師を自動で狙つて攻撃を始めました。

もちろん、そのターゲットには私も含まれている訳で、

「迷惑極まりないんですが～！？」

『一発ですが接近してきます』

「はいはい～」

近づいてきた砲撃を一刀両断、切り伏せました。

これでとりあえずは安心です。近場にいたら集中砲火に遭つところでした。

【アリス、何のつもりですか～？『ダーインスレイヴ』を使うのは個人戦の時だけにしてくださいよ～】

するとしばらくの沈黙の後、

【……ライアが殺された】

思わずその言葉に絶句します。

殺された？いえ、あれは本物ではないので死んだではありません。つまりそれは、ジュエルシードを封印されたということです。

【……何個持つて行かれましたか～？】

【一いつ。蒐集している時だつたから自分の身を守るので精一杯だった】

【……闇の書は～？】

【まだ完成してない。あと三ページくらいなの】

……それは困りましたね。

闇の書の蒐集は一人につき一回、つまりはアリスの魔力は使えないということです。ここになつて、ここまで来て面倒な……！
後で戦闘に参加してもらうためにダメージを減らそうと、蒐集をなるべくゆっくりやらせたのが裏目に出来ましたか。

『L·i·n·g·u·i·s·t· n·o·n· R·o·a·d』

一人弾幕砲撃が止むのを見計らい、一気にアリスの下へ移動しました。ここでアリスまで殺られれば確実に捕まえられるので、かなり急ぎます。

「アリス～！」

「よつやく來た。はい、闇の書」

そして私が来るなり闇の書を投げ寄越してきました。

ちょ～それ仮にも一級搜索指定のものですから丁重に扱ってください。

「おつとと一危ないです～。

まあ何にせよ、あとはこれに私の魔力を蒐集させねば

「

「やあ、おはよう。

すると、ベランダから負け犬が突進してきました。

「お、重い～！！

結果、受けきれずに吹き飛ばされ、壁に叩きつけられました。そりやそうですよね。大剣を持ち上げるのでさえギリギリでしたし。

でも、

一捕らえよ、凍てつく足枷！」

Freeling Fetter

ただでまさりません！

負け犬の足元で魔方陣が展開され、そのまま彼を捕らえようとします。

しかし、それに遅早く気づいた彼は一瞬でそこから離脱し、私たちから距離をとってしまった。

隙ありです！！

「蒐集」！！！」

可能な限りの速さで魔力を闇の書に叩き込みます。

一ページ目が捲れる。

負け犬が気づいて突進してくる。

二ページ目が捲れる。

負け犬がデバイスを振り下ろす。

そして、最後のページが捲れ

「やられねええええええええええええええ！」

ませんでした。

あと四行というところで私は負け犬に斬り飛ばされ、アルテミスがバリアジャケットをページ、上着が吹き飛びました。そのまま私はアリスの足元まで床を転がります。

「えほつ、えほつ、無念です～」

『マスター、これでもう魔力を蒐集させることができません』

「……ですね。それにすぐにフェイトたちも来るでしょうし、このままでは……」

「負ける」

そして私はゆっくり立ち上がりります。

万事休すですね、これは。

こちらには、もう打てる手がありません。本当に駄目ですね、ゲームオーバーです。

私の魔力はもう蒐集に使ってしまいましたし。蒐集に使えるのは一人一回までですから、もう一度蒐集するというのは不可能です。

なので、

「はあ～、今回は私の大敗です～。完敗です～。大敗北です～」

非常に遺憾ですが、素直に負けを認めます。
このたたかい
A・Sは私の負けです。

「……どうこうもりだよ。

テメエ、今度は何を企んでやがる！？」

「本気ですよ～。今回は厨一やあなたの大活躍で負けました～」

すると、フェイトたちがベランダから部屋に入ってきた。
「これで完全に時間切れです。

「……ルナさん、もうあなたの負けです。一人とも、武装を解除して投降してください」

「ルナ、もうどうにもなりませんよ～」

「だから剣を収めて！」

フェイトと高町姉妹がデバイスを突きつけてきました。
チェックが掛かりましたね。

なので私はアルテミスを待機状態に戻します。

「アリス～」

「……わかった」

するとアリスも両手を上げ、降参の意思を示しました。
すかさず私たちはバインドで後ろ手に拘束されます。

「……まず、闇の書を渡せ」

負け犬が警戒しつつも近づいてきたので、私は闇の書を床に放り出して数歩下がります。

負け犬は恐る恐るそれに近寄り、拾うと同時に後ろに下がりました。

「……間違いねえ、本物だ」

「……ルナさん、あなたを大規模騒乱罪、及びロストロゴギアの不法所持などの罪で逮捕します」

それでフェイトたちもよつやく安心したのか、私とアリスを確保しよつと近づいてきました。

なので私は、

「せういえば、私つてビルの爆破解体をするのが夢だつたんですね」

マンション中にあらかじめ仕掛けたアイスダガーを爆破しました。

side亮

轟音が鳴り響き、建物がいきなり40度は傾いた。

突然の異常に俺たちは反応できず、そのまま壁際まで転がり落ちてしまう。

「クソッ、やつぱり諦める気なんかねえじゃんかよ！」

派手に建物が揺れる中、ルナとアリスは咄嗟に飛行魔法を使つたら

しへ、揺れをものともせずにスイスイとベランダから出て行った。

すると突然の浮遊感。

ビルが沈むように崩壊していくのだと全員が気づいた。

「全員、脱出するぞー。」

そのまま一気に窓を田指して飛行した。走って移動なんてとてもできない。

しかしその時、俺の視界にどんなものが映った。

それは、窓枠に突き刺さった数本の氷のダガーで、

「ツー?皆、止まれ!..」

それら全てが一斉に爆発した。

爆風で俺たちは吹き飛ばされ、再び部屋の中に戻つてしまつ。そうしている間にもマンションは倒壊を続けていて、このままでは闇の書」とペシャンコだ。

「亮、手を!..」

すると、フロイトが手を差し出してきた。

どうやら彼女と守護騎士の二人は既に体勢を立て直したらしく、なのはと星を抱えて脱出しようとしている。

俺は咄嗟に手を出し、フロイトの腕を掴んだ。

瞬間、いきなりの加速によつてマンションから飛び出した。

背後ではマンションが倒壊し、瓦礫の山となつてゐる。危機一髪だ。

「クソッ、ルナのやつ…蒐集できないとわかった途端にこれがよー。」

【ええ、そうですが何か~?】

すると、ルナから突然の念話だ。
どうやら俺以外のやつにも聞かせているらしく、なのはたちも辺りを見回してルナたちを探している。

「負けを認めたんじゃねえのかよーあれは出鱈田かー。」

【出鱈田とは失敬なー。ちゃんと負けを認めていますよー。
はあー、慣れない電気変換の魔法まで使って勝てないとは……。
正直、あなたたちの力を舐めていましたねー】

すると、俺たちの頭上、それも結界のギリギリと思えるくらいの距離から、莫大な魔力を感じた。波打つよつなこの感覚は……まさか!?

『皆、生きてるー。生きてたら返事をして!』

すると、空間モニターが開きエイミィさんが通信をしてきた。
どうやらかなり心配してくれたらしく、顔色が悪い。

「もちろん生きていますよ。全員無事です。そんなことより、この魔力はいったい?」

『そりだつた!皆、今すぐそこを離れて!ルナちゃんが残りのジュエルシードを全部使って何かしてるー。』

「「「「ジュエルシードでー?」「」」

「テメエ、ルナ！何するつもりだー！？」

【内緒です～。あ、そうです！クイズをしましょー！問題です。

私の手元には現在、アリスに使用中のものを含めて十個のジュエルシードがあります～。これらを共鳴、暴走寸前の状態にしたとして、そこに強い衝撃を引いたらどうなるでしょうか～？】

その内容に、俺たちは顔を青くした。

そんなの誰でもわかる。昔にも起こった大災害。

「……次元震にともなった次元断層……」

【はいはい、正解です～！景品として、良いこと教えてあげますね～。】

たった今、ジュエルシードが臨界点に到達しました～！】

瞬間、頭上が太陽ができたかのように輝いた。

その膨大な量の魔力に、思わず冷や汗が流れる。

もう何をしても暴走は止められない。

今さらになつて気づいた。あいつは、叶わないとわかつた時点で決めていたんだ。

全員を道連れにして『自爆』する、と。

【さあさあーー私の究極芸術を見せてあげますーー冥土の土産に持つていきなさいーー！】

そして魔力が一瞬だけ弱まり、

【芸術は、『超』、大爆発ですーー！ーー】

破裂するかのように撒き散らされ、海鳴が吹き飛

「ふー」とはなかつた。

side out

side other

新暦65年12月10日、第97管理外世界にて一級捜索指定遺失物『闇の書』の奪還、及び所持者『ルナ＝ベルツ』の逮捕が行われた。

綿密な準備の末、総勢263名の武装局員での攻撃を決行した。

しかし、逮捕が間近に思われた瞬間、容疑者は所持していた残りの全ジユエルシードを使用し、次元断層を起こす規模での自爆を図る。

しかしつゝ

結界内の結界魔導師たちが爆破の直前に強制転移の発動に成功。転送妨害の魔法を寸前で解除し、容疑者をジユエルシードごと軌道上に転送。

間を置かずに、闇の書の暴走に備えて、予め準備されていたアルカンシェルをアースラは発射。

爆破を起こすと同時に空間「」と反応消滅した。

多少の次元震は現地で確認されたものの、次元断層は確認されず、ジユエルシードは容疑者一人とともに消滅したと見られる。

闇の書は無事に奪還、幸い死傷者も出なかつた。

これにより、一ヶ月もの間、世間を騒がせた『闇の書事件』、もしくは首謀者の名前から『ルタルツ L.B 事件』は終了した。

s i d e o u t

魔法剣士負け犬リョウ、始まるぜ！－（前書き）

今回からは負け犬が主人公です。
新しい主人公の視点からストーリー及び『闇の欠片事件』をお楽しみ
ください。

魔法剣士負け犬リョウ、始まるぜー！

ルナが死んだ。

死因は自爆、もしくはアルカンシェルによる消滅。

どちらにしても万に一つも生き残っていないだろう。

これによつて闇の書事件は表向き終了。

残るは壊れた闇の書、いや、夜天の書をどうするかだが。

そこは原作と同じ方法でなんとかなつた。

はやてたちに事前に作戦を説明し、無人世界で完成させた。

原作通り暴走を始めた管制プログラムリインフォースは俺や星を加えた原作メンバーに守護騎士も加わったフルメンバーで取り押さえ、その後、はやは無事に意識を取り戻し、暴走プログラムは俺の零落白夜でコアごと完全に破壊、防衛プログラムは消滅した。

これのおかげかどうかはわからないが、リインフォースはすぐに消滅させる必要がなくなり、その間に彼女の修復の方法を管理局が探すという方針になつた。

それと、ルナが連れていた二人の少女、ルルとナナは管理局の施設を脱走したらしい。ルナの死亡を聞いてからは少し錯乱気味だったらしく、その影響ではないかということだ。現在検索中らしいが……。

何はともあれ、ルナが死んだ途端に状況は全て好転し、俺は転生して初のハッピーエンドを迎えた。誰も死なず、誰も悲しまず（フェイトとアルフは少なからずショックを受けていたが）、誰も不幸にならない。そんな風に思つたんだ。

しかし、俺は気づくべきだったんだ。

リインフォースが生きているという状況。

これではまるで、ゲーム版と同じところになります。

S i d e ? ? ?

「つつかまつえた」

「グッ、貴様、離せえー！」

盾の守護獣の『偽者』が何か言っているけど、そんな言葉聞く耳持たないもんねー！

「いただきます！」

魔力を吸い取り、私の糧にする。

そのためにわざわざ『湖の騎士』とビリビリ金髪まで戦つたんだし、今さら容赦する気なんてさらさらない。もつとも、初めからそんなことするつもりもないけどね

ここは『闇の書の闇』が破壊された無人世界。

この世界ではひつそりと、それでも確實に異常が起つてた。

ふふふ 一回目は負けちゃったけど、今度は負けないもんね！
今度こそ『碎け得ぬ闇』を完成させて、私たちは完全復活するのだ
！！！

【『力』のマテリアル、そちらはどうぞ狩りましたか？】

すると、私の姉弟とも言える子から念話が届いた。

無口なあの子が自分から話しかけてくるなんて、これは高感度アッブの予感！！

【ノープロブレムだよマリス君！お姉さんの手にかかるべ、守りと筋肉しか能がないワンコロなんて敵じゃないのセー！】

【そんなことは聞いていません。私は、あなたがどれだけ欠片を集めたのかを聞いているのです。こんな簡単な会話すらできないとは、あなたの頭は飾りですか？】

【飾りじゃないもん！！私は天才だよー】の頭には人類の叡智が詰まつて 】

【黙れ馬鹿。わざわざ私の質問に答えなさい。姫も先程からライライラしております】

【もうー！マリス君は姫とお姉さんとどっちが大事なのー？】

【あなたが馬鹿である限りは姫です】

【あー！また馬鹿って言った！私は天才で

】

【あ～もひーひるひさいわね！さつさと答えなきこみーさもないと
そのお天気な頭を吹っ飛ばすわよカスー！】

すると、大音量の念話によってマリス君との念話が遮られた。
うるさいのはそっちじゃないかー！

【も～、姫は短気だな～。そんなんだから阿呆って思われるんだよ
！】

【はあ？ 阿呆はアンタ一人で充分よ。そんな当然のことより、どれ
だけ獲物を狩ったのか答えなさい脣】

【うわ～ん！ マリス君、姫が私を脣つて言つたー！ー】

【早くしなさい脣。ドタマ、ぶち抜きますよ？】

すると頭の横をスレスレで魔力弾が通過し、髪の毛が数本持つてい
かれる。

流石に冷や汗が流れた。つていつか、今の狙撃つてマジジやなかつ
た？

【はい！～『湖の騎士』と『金髪の電氣使い』、それと『盾の守護
獣』を倒しました！】

【そうですか。私は『双子の魔導師』と『鉄槌の騎士』を】

【キャハハ！ なら私が一番ねゴ!!ビモー！】

『黒い男の魔導師』と『闇の書の主』、『烈火の将』と、遠田だつたからよく見えなかつたけど『銀髪の男』を倒したわ！】

むむむ！天才で最強の私が追い抜かれた！？
くつそ～！悔しい～！

【ふむ、そうなると我々のオリジナルともう一人が足りませんね】

【あ、闇の書の闇を破壊した剣士！そういうえば見なかつたね】

【え～？そいつらは私も見なかつたけど～？

マリス、アンタ探しなさいよ。そういうの得意でしょ？】

【……少々お待ちを】

そして数秒、マリス君は押し黙つた。

たぶん『目』を使って数キロ範囲で探しているんだろうね。
流石はマリス君、頼りになる～！

【……ふむ、見当たりませんね。

それどころか、例の剣士を除いて魔力の残滓すら見当たりません】

残滓も？とゆーことは……。

【初めからオリジナルはいなかつたってことかな？】

【馬鹿のわりには良くできましたね、その通りです】

やつた～！マリス君に褒められた～！

【そんなお天氣は放つておいて、それじゃあ剣士はどう行つたわけ
?】

【それはわかりかねますが、どこかに転移したと思われます。この
近く、半径十数キロ圏内には感知できませんでした】

【はいはーい！それって、剣士たちの故郷じゃないかなー！お姉さん
の勘がやう言つていいよー】

それに、根拠もある。

ここに現れた『欠片』たちは記憶があやふやな様子だった。
つまり、自分の記憶に従つて行動するならば、自分の知つている場
所に戻るのとする可能性は充分にある。

【どう、この推理！？】

【……あなたはただの馬鹿だと思つていました】

【キャハハ！喜びなさい！

あなたのことを『//肩から//』格上げしてあげるわー】

【うへ、嬉しくないー】

そもそも、それってどう違うの？

肩が抜けただけだし。

【それじゃあ行こつか！】

【ふむ、善は急げと言つますしね】

【キャハハ！ついでに本物ビモモ食つてやるわー】

よーし！それじゃあレッツゴーーー！

そして私たちはその無人世界から転移した。

目的地は…………えーっと、えーっと、…………あ！

海鳴だーー！

side out

12月17日、事件が終了し、一昨日によく家に帰つてこれた。はやてと守護騎士、それとリンクフォースはまだ帰宅できないらしいが、数日後には帰宅が許されるらしい。星となのはも帰宅しているはずだし、フェイトはリンクディさんたちが預かっているはずだ。ジークは……取材でも受けているんじゃないかな？マスコミが今回の事件を騒いでいたらしいし。

ともかく、これで俺の心配事は概ね終了した。

後は10年後のstまでの細かな事件だが、それは俺とジークがいる。

原作知識があれば危険はそういうだろう。なんせ、それを邪魔するルナはもういないのだから。

「結局、決着はつけられねえままだったけどな

それだけは残念だ。あいつは俺がこの手で倒すと決めていただけに、自爆という手段で散ったのだけが今回の事件での心残りだ。まあ、今さら言つても仕方ないけどな。

そんなことより、来週にはクリスマスだ。

原作や前世では大忙しだったが、今回ばかりは楽しむとする。なのはたちはもちろん、はやてたちやアリサたちも誘つて盛大に。

『全員、聞こえるか?』ちらりクロノ。

事件が終わつたばかりで悪いが、緊急事態だ』

その時、クロノからの通信が届いた。

眼前にモニターが浮かび上がり、突然のことだつたからかなり驚いた。

『クロノ君、どうしたの?』

『何か事件でも?』

なのはと星の声もモニターから聞こえる。全員と繋げているのか。

『街中に、結界が発生しているんだ』

『アースラスタッフに調査出動をかけたんだけど……。なのはちゃんたちも注意して』

結界?なんだそれは……!?『んなの、原作にはねえぞ!?

『はい！でも、近くなら私も行って確認します！』

『私も行きましょう』

すると、なのはと星が名乗りを上げた。

二人がいれば並大抵のことは大丈夫だろうが……。

「クロノ、俺も行く。

AAAランクの魔導師が三人もいれば何があつても大丈夫だろ」

『すまない、頼めるか』

『『『了解！』』』

行くぞ、カリバーン！

そして俺は、冬の寒空へと飛び立つた。

そこに何が待ち受けているのかも知らずに。

俺たちの物語はまだまだつ「続かせるかよおおーーー。」

なんだ、何なんだよ、これは！？

クロノから連絡を受け、すぐに星たちと合流した俺たちは結界に突入した。

しかし、結界に突入した俺たちを待ち受けていたのは、俺自身だった。

「……なんだ、お前は？」

すると、俺と瓜二つの外見をしたやつが俺に話しかけてきた。その声も寸分違わず俺と同じもので、星たちも驚いている。しかも、良く見れば持っているデバイスまで同じだ。

「おい、テメエは何なのかって聞いてんだよ。
俺とそつくりな見た目しやがって、何の真似だ？」

【亮、これはいったい……？】

【ふえ～！？亮くんが二人いるよ～！？】

一人が困惑するのも無理ない。現に俺だって混乱している。

俺のクローン？あり得ない。俺が表舞台に立ったのは半年前だぞ？
いくらなんでも早すぎる。

……待てよ、こんな状況に確か覚えがある。

そうか、『星』……

思い出した！これはゲーム版の方の話だ！

確かに、闇の書の残滓が作り出した偽者だったか？

『三人とも、聞こえる？』

すると、ユーノから通信がきた。

それは目の前の『俺の偽者』についてのこと、『闇の欠片』のことだつた。

俺の予想通り、これはゲーム版のことのようだ。

しかし、そうなると疑問が残る。闇の書のマテリアル『星光の殲滅者^{クラクター}』はどうなるのだろうか？本人がここにいるんだし……。駄目だ、全く想像できない。

「ゴチャヤゴチャ話してんじゃねえぞ！！」

すると、俺の偽者が突っ込んできた。俺を模倣しているだけあって、攻撃の仕方も速さも零落白天也も全て同じだ。

だからこそ、その動きは簡単に見切れる。

振り下ろされた剣を受け流し、カウンターで蹴りを叩き込む。思わず反撃を受けた偽者は吹っ飛び、大きく俺たちから引き離される。そのまま警戒するようにこっちを睨みつけている。

今の手応えで確信した。コイツは俺よりも弱い。所詮は偽者だ。本物には及ばない。

【星、なのは、「トイツは俺の見た田をしちゃいるが、俺よりも弱え。一人が手を出すまでもねえぜ】

【……わかりました】

【亮くん、気をつけてね】

一人の念話に片手を上げることで応え、俺は敵に集中する。俺もアイツも全く同じ構え、同じ零落白夜だが、どこか違和感がある。しかし、それはどこか懐かしさを感じるものだ。

……ああ、そうか。こいつは、初めて転生した時の、『前世』の俺だ。

自然とそうわかつた。まだ一合しか剣を合わせていないし、会話だつてしていない。それでもわかつた。

ならば今こそ俺は昔の自分を倒し、この世界を生きるため、ルナへの復讐に燃えていた自分への決別をしよう。この世界で、今度こそ俺は幸せになる。皆を守り、そのために剣を振るおう。

さあ、憎悪で剣を握っていた俺はここで終わりだ。今日、ここで口イツを倒し、俺は自由になる！

「行くべきか迷うべきか迷うべきか迷うべきか……」

そして俺は零落白夜を全開にし、敵に斬りかかった。

そうだ！俺の幸せを求める戦いは、今ここから始まる！！

「そ、うは、い・き・ま・せえええええん！…！」

瞬間、『過去の俺』は上空からもの凄い速度で飛来した謎の人物によつて、頭から股へと両断された。

真つ二つになつた『俺』はそのまま横薙ぎに斬り飛ばされ、十字に斬られた。もともと闇の書の残滓だつたからか、そのまま魔力になつて夜の闇に溶けていく。

「アーッハッハッハ！見た見た～！？今の『偽者』のポカーンとした顔ツ～！ウケる～！…どこまで逃げても無駄なのにさ～！」

そして『過去の俺』を十字斬りにした『そいつ』は、腹を抱えて爆笑している。

『その顔』をしたそいつは『過去の俺』を易々と斬り殺し、あまつさえ、逃げても無駄と言い放つた。

それが俺には、今までの頑張りを全否定されたように思えて、

「う、ああああああああああああああああああああ！」

気がつくと斬りかかっていた。非殺傷設定なんてものは当然なく、全力で相手を殺す一撃だ。零落白夜がカリバーンを白銀に染め上げ、まさに一撃必殺の威力をもつて目の前の亡靈を、『ルナ』を仕留めんと襲い掛かる。

だが、

「大声を上げて攻撃すれば倒せるとでも思つていらっしゃるのですか？」

それは頭上から放たれた藍色の砲撃によつて無理やりに中断された。突然の砲撃に俺はなす術もなく直撃し、地面に向かつて吹つ飛びぶ。

「亮！－」

しかし地面に激突する直前、星がシールドをクッショーン代わりにして守つてくれた。

その間になのは砲撃のチャージを終え、砲撃を放つた敵にディバインバスターをお見舞いする。

「キヤハハハ！こんな豆鉄砲が効くかつてのよゾウリムシ風情が！
！」

しかし、それは濃い紫色のシールドに阻まれた。信じられないことに正面からカートリッジを使つたなのはの砲撃を防ぎきつた。尋常じやない防御力だ。実際、防がれた本人のなのはは啞然としている。

しかし、俺にはそんなことは目に映らなかつた。信じられない光景が広がつていたからだ。前世の地獄のような戦いの記憶が蘇り、思わず手が震える。

そこには三人がいた。

死んだはずの『ルナ』がいた。

白濁したような髪。漆黒のロングコートに身を包み、真紅の瞳で晒つっている。

この世界にはいなはずの『ライア』がいた。藍色の逆立つた髪に、同じく漆黒のロングコートを着こなし、碧眼が俺たちを見下ろしている。

ジュエルシードで吹っ飛んだ『アリス』がいた。紅い髪に赤黒いドレスが映えていて、ラベンダーの瞳は楽しげに歪んでいる。

間違いない。見間違えるはずがない。
そいつらは、紛れもない俺の仇敵たちだった。

「…………『ベルツ』……」

長い夜の始まりだった。

俺たちの物語はまだまだつ「続かせるかよおおおーー」（後書き）

最近になつてstsの方針を再決定しました。

空白期からstsにかけては『転生者祭り』で行こうと思いまやー。こんな能力出してほしいなーというかたは感想へどうぞ！

あ、そりいえばstsは『ベルツ一家』も復活す……ゲエホツ！ゴホツ！失礼、今のオフレコで。

それは都市伝説だつたりの……

「どうこうことだよ……。テメエらは死んだはずだ！」

目の前の信じられない光景に、俺は思わず叫ぶ。星となのはも信じられないものを見たように呆然としている。当然だ。こんなものを見て「はいですか」と納得できる奴なんて、魔法の存在を知る者の中にはいない。

「死んだ～？ なに言つてるのか知らないけど、お姉さんはこの通りピンピンしているよ！」

「馬鹿ですか、あなたは。彼が言つているのは、私たちのオリジナルのことですよ」

「キヤハハ、そんなこともわかんないわけ？ やつぱりアンタは『ミリ屑ね！』

「『ミリ屑じやないし……』

……おかしい。俺の知る『ベルツ』の三人はこんななんだつたか？ それに、姿も言動も少し違うような……？

「もう～、それじゃあ改めて自己紹介だね！」

遠き者は音に聞け！ 近き者は耳にも見よ！ お姉さんこそが最強で天才の完璧超人！ 人類の叡智が詰め込まれた最高の頭脳！ 誰もが羨む美貌！ そして一騎当千の剣技！ そう！ 『力』の構成素体！ 『氷結のジノサイダ』だよ！ …長いからフリー^ズって呼んでね

「『長瀬』よ」

「アイタツ！？」

高らかに宣言すると同時に他の二人に頭を叩かれた。そのせいでお上が台無しになつてゐる。

それにしても、『力』のマテリアルだと!? 確か、ゲーム版だとフエイトがオリジナルの『雷刃の襲撃者』だつたはずだ。クソッ、こんなところで原作乖離が起こつたのかよ!?

「コホン、馬鹿がお騒がせしてしまい申し訳ありません。私は闇の書の『理』の構成素体『惡意の暗殺者』と申します。以後、お見知りおきを」

「キヤハハ！ アンタらみたいな雑種に名乗る名前なんてないわ！ …と言いたいところだけど、特別に教えてあげるわ。感謝して平伏しなさい油虫！ 私は『王』の構成素体『常闇の姫』よ！ 存分に崇めなさい！」

「姫だつて自己紹介長いじゃん！！」

「うつさいわね！ 姉たる私の名乗りが長いのは当然でしょ！」

「ふ~ふ~！ 横暴だ~！」

……騒がしいのは変わらないらしい。

だが、ゲーム版だと闇の書の構成素体はなのはたちと同等の実力だつたはずだ。つまり、こいつらはオリジナルの、『ベルツ』の三人

マテリアル

と同レベルの使に手とこい」とになる。

“うわあ、うわあね……！？”

その時だつた。

『亮！待たせたね！応援だ！』

空中にモニターが開き、ジークが通信をしてきた。それと同時に俺たちの周囲にミッド式の魔方陣が浮き上がる。その数は十。そして、最強の援軍たちが転送してきた。

「はやてにリインフォース！？ヴォルケンリッターたちまで！？」

「フロイトちゃんにアルフさん！ゴーノ君にクロノ君も！」

「おー、ジークー。お前、ヒーローとしてたちの戦闘の許可を取つたんだよー。……何か、無理やり出でてきたんじやー。」

『ハツハツハ、そんなはずないだろ？ 許可ならちゃんと取つてあるよ。闇の書事件に関係しているというのもあるけど、あの『力』の構成素体マテリアルの姿が映像に映つた瞬間に満場一致でゴーサインが出たのさ！』

なるほど。どうやらあの姿を見て寒気がしたのは俺だけじゃなかつ

たらしい。管理局が即席で用意できる最強の戦力を投入してきたのは嬉しい誤算だ。

「亮くんもなのはちやんたちも無事やな？一先ずは間に合つて一安心や」

「はやて、安心するのはまだ早いよ。あの三人をどうにかしなきゃ」「フロイトの言つ通りだ。とりあえず、作戦を話すよ」

『うやうやしく一ノは転送前から作戦を練つてきたりし。頼もしい限りだ。やはり頭脳戦においてアーツの右に出る奴はない』

『僕はそこで戦えるほど強くない。一人で安全な所から見てくる」としかできないけど、どうか頑張つてくれ』

「ジーク、お前……」

不覚にも感動してしまった。

今までたただの厨一病の馬鹿なんじやないかと思つていたが、こいつはれつきとした俺たちの仲間だ！

『（ククク、君が死ねば星も僕の物だ。せいぜい前に出張つて死ねば良いぞ……）』

「ん？ 何か言つたか？」

『いや、別に？ それよりも、今は敵に集中するんだ！』

「お、おうーそうだな！ 行くぞ、お前らー！」

「落ち着け、亮。焦らずに慎重に行くんだ。そんなんじゃ、いざと言つ時にとんでもないミスを

「

「作戦長えよ」

瞬間、クロノが『氷結の虐殺者』に斬り伏せられた。

「よくさー、主人公の変身とか作戦会議とかをわざわざ待つ悪役がいるでしょー？」

そんなの都市伝説だつつの！！

隙あらば殺すのが本当の悪役だとお姉さんは思うんだ！最近の悪役は変身ヒーローのベルト奪つたりするらしいし！」

デバイスをぶんぶん振り回しながら奴が力説する。そんなことを無視してクロノの救出に行きたいが、他の二人が油断なく待機しているため下手に動けない。最悪、撃墜されたクロノ「」と吹っ飛ばされる。

「よつは何が言いたいのかと言つと

そして奴は俺に剣の切つ先を向けて言い放つた。

「さつさと纏めてかかってこいつてことだよーー！」

電子音が響くと同時に奴の剣が一振りに増え、双剣となつた。そのまま俺に突っ込んでくる。

「つりやつりや〜！汚物は消毒だぜヒヤッハ〜！〜！」

まるで世紀末のチンピラのようなことを言いつつフリーズ（長いから採用）が突撃してくるが、

「敵陣のど真ん中に一人で来るとか馬鹿だろー？」

当然ながらヴォルケンリッターも俺に囲まれて形勢は一気に逆転した。左右からはシグナムとヴィータが、背後からはザフィーラが、正面からは俺が襲い掛かる。

しかし、

「彼の言つとおりです。その空っぽの脳みそで少しばかり考えなさい」

「こやーー？」

気がつくとフリーズはその場から消えていて、『惡意の暗殺者』に首根っこを掴まれた状態で元の場所に戻っていた。

「も〜、せつかく良いトコだったのに〜。マリス君はお姉さんを苛めるのがそんなに好きなの？」

「無謀な行為を止めただけです。馬鹿でもあなたは戦力なのですか
ら、簡単に死なれては困ります」

「ええ？ 別に死んでも良いじゃないのよこんな単細胞。むしろ邪
魔だし」

……どうやら、一筋縄ではいかない連中らしい。

戦闘能力は俺たちじゃ個人では歯が立たない。やつぱり三人を分散
させて、集団で叩くのがベストだろう。

【ユーノ、シャマル。お前たちがどれか一人ずつを強制転送させて
分散させてくれ。ユーノには星となのはとアルフが、シャマルには
ハ神家が付くんだ。フェイトは俺と残りをやるぞ】

【】【】【～解】】】】】】】

戦力をなるべく均等になるように分担すると同時に、構成素体の三
人も黙つた。どうやら今度は待つていたらしい。

「おいおい、作戦会議を待つ悪役は都市伝説じゃなかつたのかよ？」

「それはね

」

「強者の余裕というやつよ！ アンタらみたいなおが肩どもが作戦も
なしに来たんじゃ、退屈しのぎにすらならないもの。精々コソコソ
と猪口才な手を使って頑張るのね？」

「むー！ セリフを取らないでよー」

よし、幸か不幸かアイツらは油断している。そこに隙が生まれれば、そこに勝機がある！

「よーしー・フリーズ、目標を駆逐する～」

「さつさと終わらせます」

「キヤハハ！格の違いってやつを魂の體まで刻んであげるわーー！」

そして、戦いの火蓋は切つて落とされた。

それは都市伝説だつたりの……（後書き）

ジークは平和になつたせいで本氣でハーレムの構築に乗り出したようですね。

そう遠くない話で転生者を大量投入します。希望がある方はお早めにどうぞ。

ちなみに決定しているものの例を一つ上げると、某「圧縮圧縮空気を圧縮……」さんです。ちょっと能力を劣化させて出すもつです。

さあ、みんな集まつて！転生者祭りが始まるよー！

そして、戦いの火蓋は切つて落とされた。

この戦いはとことん不利だったが、強力な仲間が駆けつけてきたくれたおかげで戦力は五分くらいには持ち直せたはず。決して有利とは言えないが、皆の力を合わせればきっとなんとかな

「氷裂凍刃滅殺けん！」

「マーダーブレイザー！！」

「シャンクリ・ラ！」

カナダの政治と社会

結語から言おう。

蹴散らされた。

強制転送で分断しようという作戦そのものが実行できず、俺たちはあの三人に翻られ続けた。距離を離せば砲撃と広域殲滅魔法の餌食となり、逆に近づけばフリーズの剣技と爆発に圧倒されっぱなし。かと言つて突撃しようものならば三人の袋叩きに遭い、即効で擊墜される。はやてもリインフォースとユニゾンして応戦したが、それでようやく『常闇の姫』の火力と同等というレベル。

こんな最強の三人がそれぞれの本気を出しつつもちゃんと連携して攻撃してくるんだ。勝てる訳がない。

「あ、あれ？なんか楽勝だつたんだけど……？」これつて何かの罠だよね？死んだフリ！…みたいなノリでお姉さんを騙そうつたって
……お～い

「ふむ、確かに些か不完全燃焼ですね」

「はつ、所詮は全員が全員とも『ジン』だつたつてことよ。あ～あ、時間を無駄にしちゃつたわ。この大罪、どうやって償つつもりなわけ？ねえ！」

「グツ！？」

そして『常闇の姫』は俺の頭を踏みつけた。あまりの強さにコンクリートが陥没する。バリアジャケットを装備していなかつたら頭が割れただろう。

「「こつら、どうしてやろうかしら？魔力を死ぬまで吸い取って糧にするだけじゃ、この怒りは納まらないわ」

「確かに、期待はずれも良いくだつたしね～」

「ふむ、そうですね。死なない程度に蜂の巣にするのはいかがでしょうか？魔力の確保もできますし」

「キヤハハ、一考に値するわね」

「ええ～、意識がなくなるギリギリまで魔力を奪つてから爆破しうよ～。めりと楽しいよ～」

……マズイ、『イシラ本氣だ』。
このうどこのばかり『ベルツ^{オロジナル}』に似なくとも良いじやねえかよ、
チクショウ～！

すると、死屍累々な中で一人、立ち上がる者がいた。そればかりか、魔力弾を放つて三人を俺から引き離す。

「亮から、その足を退けなさい～」

星だ。

彼女は引かずるように身体を動かし、俺の前に立ち塞がった。その姿は見るからに痛々しげ、既に限界であるといふことがわかる。

「退け、ですって？高貴たる私に向かつて命令？何様のつもりよアント？ミジンコのー風情が！」

「ガツ！？」

瞬間、星は大量の魔力弾に吹き飛ばされる。殺さないためか非殺傷設定だが、それでも今の俺たちには大ダメージだ。

「決めたわ、あのミジンコ女を最初に殺すから！魔力なんて他のミジンコから奪えば良いもの。跡形もなく消滅させてやるわ！！」

そしてアイツは星をバインドで空中に吊り上げると、目の前で砲撃のチャージを始めた。さつきの攻撃で既に限界の星はもうまともに動けないらしく、全てを諦めた表情で俺を見つめている。

【亮、すみません。先に逝きます。三人が私に気を取られている隙に一人だけでも脱出を……】

「よせ、やめる……」

そう叫ぶも、『常闇の姫』は楽しそうに笑うばかり。他の二人も俺の悲鳴を楽しむかのように黙っている。

「くそ！テメエ！星に手を出したら絶対に許さねえぞ！絶対にぶつ殺してやる！」

「クククク、キヤハハハハハハハハハ！」

面白いじゃない！是非ともそうしてちょうどいーほらほらー、早く何とかしないといこのミジンコが死ぬわよー？

しかしあイツは全く俺に取り合わず、翳した右手に魔力をどんどんと集めていく。凄まじい魔力を圧縮したその塊は、人間一人をこの

世から消滅せしむるのなんぞ、密陽こぼれのもので、

「アーヴィング・ワーナー」

そして魔力は一気に高まり、

『常闇の姫』の右腕が両断された。

「む、
いけません！」

「せばつー！」

刹那、制御を失った魔力は大爆発を起こし、近くにいた星はもちらんのこと、俺たちまで巻き込むものとなる。しかもあの魔法は殺傷設定だ。巻き込まれれば当然死ぬ。

その時、

一人の少年が俺たちの横を走りぬけ、爆発に飛び込んだ。その少年は爆発を恐れることなく、

右手で殴りつけた。

瞬間、爆発は一瞬で消し飛び、そこには爆発の余波で抉られた地面
があるばかりで、魔力は跡形もなく消えていた。

ギリギリで自信も爆発から助かった『常闇の姫』は、肘から先を失つた右腕を抱え吼える。瞬間、彼女はその場から消え、『惡意の暗殺者』の元に移動していた。

「こりたし、お詫びせ……」

「援軍を、『神』からのな」

するとこいつの間にいたのか、白髪で髪を伸ばした少年が俺の隣に立っていた。その手には長ドスのテバイスが握られている。

「やうこつことだ。俺たちはお前を救ってくれって神に頼まれて転生してきたんだよ。ま、この世界『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生させてくれって頼んだのは俺たち自身だけだな」

すると、爆発を消し飛ばしたシンシンと黒髪を立てた少年が俺に手を差し伸べてきた。

新しい転生者だと！？そつこいえば、こいつらの容姿はビックリでしか見たことがあるものだ。おそらく貰った特典に関係しているんだと思つが。

「こひの！私を！無視するなああああああああああああああ！」

すると、『常闇の姫』は無茶苦茶に砲撃をばら撒き始めた。見ると、切断された腕から魔力がキラキラと流れ落ち、少しずつだが肩へと上つていいくのがわかる。消滅が始まっているのだ。

「姫、これ以上は危険です！」

「やうだよー死んじやうよー！」

「黙れえええええええええええええええええええええええええええ！」

仲間の言葉もまるで聞いてない。理性が振り切れているようだ。

「マズイぞー俺たちは何とかなつても、なのはたちが！」

「問題ないぞ。俺が斬る」

そして、白髪の少年の姿が搔き消えた。そして次の瞬間、

気がつくと『常闇の姫』の胸を長ドスのデバイスが貫いていた。

「……あ？」

「もう、眠れ」

そして少年はそのまま一気にデバイスで彼女を両断した。そのまま空氣に霧散するように彼女は消滅していく。

「ツー？」

「え、姫！？」

すると、他の一人は今になつて気がついたように反応する。まさか、これは！？

「さう、これが俺の特典の一つ『ねらりひょんの孫』の『明鏡止水』

そして、戦況は一変し始めたのだった。

わあ～みんな集まつてー転生者祭りが始まるとーー（後書き）

ええ、祭りはまだ始まつたばかりです。これからも能力の授付はしますので、ド・シ・ド・シ感想に書き込んでください！

帰ってきた外道たち

s.i.d.eナナ

い、胃が痛い。極度の緊張状態になると胃がキリキリするって聞いたことがあるけど、あんなのは都市伝説だと思つていました。そこまで緊張することなんて人生ではそうないだろ？って。

私はそう思つていた自分を恨めしく思つ。

あ、皆さん初めまして。ナナ＝ベルツと申します。

普段は無口、といふか話すのが苦手なキャラですが、考へることは普通なのです。

管理局の施設をルルと一緒に脱走した私が今、いつたいどこで何をしているのかといふと、

「月牙天衝！！」

「イノケンティウス！？」

闇の書のまてりある？の一人と戦つている転生者さんたちを近くのビルの屋上から見ています。さつきから続々と新しい転生者が集まつてきます。

転生者についてあの人から初めて聞いた時は驚いたけど、おかげで

だいたいの事情は理解しました。どうして最近になるまで話してくれなかつたのかと聞くと、最近になつてルールが変更になつたとか何とか。よくわかりませんが。

「……ナナ、顔色が悪いよ？ 大丈夫？」

「……う……ん、……たぶ……ん」

ルルが心配してくるけど、そう言うルルも顔色が悪いです。でも、当然だと思う。この状況で平然としていたら、その人は異常なのが、よっぽどの超人です。

後ろの人たちみたいに……。

「……あ～、神に貢つた強さでブイブイやりやがつてよ。腹立つわあ～。あいつら全員ここで殺そつぜ」

「同感。オリエントREEEEEは時代遅れ。死ねば良い」

「仕方ないでしょ。きつと転生したばかりで気分がハイになつてるのはよ。許してあげなさいって。確かに腹は立つけど」

「でも、その方が殺しがいもあるよ！ 今まで最強だと信じていた自分の能力が全然通じないとわかつた時の表情！ 見てみたいなあ～！」

「あ、それわかつますー。せつとーの世の終わりみたいな顔するんで
しょうね！」

「キュックーー！」

「あ、あの、皆さん、もう少し静かにした方が……」

うん、普通じゃない！

あの天変地異みたいな戦場を見てそんな感想が出てくるなんて絶対におかしい！私たちと同じ年くらいにしか見えないのに！まるで歴戦の猛者みたい！私やルルなんて完全に恐れおののいてるのに……。え？私たちがおかしいの？

そう思つた時、転生者さんたちを見るのに飽きたのか、後ろの人たちの視線が私たちに移つたのを感じました。ルルもわかつたのか、肩をビクッと震わせます。

は、話しかけられたらどうしよう！？

「おこ」

「「ひいーーー！」」

男の人が話しかけてきたので、思わず悲鳴を上げてしまします。ま、マズイです！声をかけられただけなのに悲鳴を上げるなんて失礼なことをしてしまうとは！

思わず振り返つて謝りひとつしますが、

「おいおこ、声をかけただけで驚くなよお」

いつの間にか詰め寄られていきました。田線がバツチリ合図てしまします。

「…………」

意識が暗転しました。

side out

side out

ナナと男の子の目が合った瞬間、ナナが気絶した。崩れ落ちるナナをギリギリで受け止める。

「ナナ、ナナ！大丈夫！？」

「キュー……」

め、田を回してる！？ いつたい何事！？

「お、おい、大丈夫かそいつ？」

「ち、近寄らないでよー。」

アンタのせいでしょ！

ナナを抱えて思わず叫ぶけど、この恐い人にそんなのが通じるとは思えない。きっと氣を抜いたら殺されるんだ！ そうに違いない！

「え？ お、おい……」

「ひつ、それ以上近づいたら焼き殺すよ！」

ナナを抱えるのを左腕だけにして、右手で炎熱変換した魔力弾を構える。くつ、デバイスがあればもう少し違ったのに…

「…………なあ、俺ってそんなに丑つき悪いか？」

「最悪。双子の私より悪い」

「だ、大丈夫ですよ！ ライアさんと会つ人は皆が通る道です！ 人は見かけによらないって言つじゃないですか！ 私だって身をもつて経験したことですし！」

「……キヤロ、止めを刺してどつするの」

「え？ ……あ～…」めんなれこじめんなれこじ…

「……整形しようかな～、特に田元とかわあ

「そんなことしなくともライアさんは格好良いですよ！ 私が保証します！」

「キユク～！」

「あはははははははー！ライアカツコ悪いー！」

あ、あれ?なんか凹ませちゃつた?

屋上の端での『の時を書き始める』が恐い人

「はあ、なんか恐がらせたみたいで悪いわね。アイツ、あれでも良い奴だから許してあげて」

「は、
はる」

とてもじゃないけど信じられない！

か恐い口語の用ひを良い行かぬいと言力

『テメエ、ぶち殺すぞ!』

『落ち着いてくださいマスター』

良い人だなんて、

『テメエ、爆死してみるか！？』

『落ち着いてくださいマスター』

いる、訳が

『キヒヒヒヒ、死ね死ね死ねええええええええ！』

『ゲームで興奮しないでくださいマスター』

8

「そうだね！いるかもしないね！そういう人も！」

「う、うん…？でしょ？（なんかあつさり納得したわね）」

うん、そうだよ！人は見かけによらないもんね！

具体的な例を言つるのはプライバシーの保護のために控えさせてもうけどね！

その時、

「あ？終わったみてえだな」

爆音や衝撃音などが消え、街が突然静かになった。どうやら戦闘が終わったみたいだね。結果はもちろん転生者たちの勝ち。あれから何人も増援が来てたし、当然かな？

ということは、

「お待たせしました」

『あの人』が帰ってきた！

「『お兄ちゃん』、お帰りーー！」

月明かりに煌く白銀の髪、空のような蒼い瞳、見間違えるはずがな

い！

『ルナ』お兄ちゃんだ！

世間では死んだことになつてこるけどねー！

「はいはいただいまー、って、ナナー？なんで氣絶してるんですか
？！？」

「うそ、あの男の子と田が合つたりキコ~つになつて」

「俺のせいか！？」

「ああ～、そういうことですか～。駄田でしょ～う～ライア。あなた
の田つあなびつ見てもマフライアかヤクザなんですか～」

「ナウだよライアー！」これはもう整形しかないと！だつて恐いもん
！？」

「……そつだな。やつぱ整形を……」

「早まつちやダメーーー！」

「遊ぶなーほら、ルナの用が終わつたならもう帰るわよ

「賛成。眠い」

「あ、あの、それはこつもの」とは？

なんか一気に賑やかになつた。そつか、これが、お兄ちゃんが育つ
た場所か。

「そうですね～。帰りましょう～」

そして私たちは新たな拠点へと転送魔法で移動した。

side out

sideルナ

ここはミッドチルダの首都『クラナガン』にある高級マンション。多くの人が寝静まつた深夜の時間帯、私たちはそこにいました。

「はいはい、ルルとナナは寝ましたね？それでは、作戦会議と現状説明会を開始します」

現在、このマンションのリビングには『前世のベルツ』の全員が集まっています。それぞれが思い思いの場所で聞いていますが。

「それじゃあ、そちらからお願ひできますか？」

そう、実はなぜライアたちがこの世界にいるのか、私は全く知りません。さつき会つたばかりなのです。

「あ～、それはだな、ルナ、お前が原因だ」

「はい？」

私ですか？何か反則でもしましたか？

「お前の特典だ。それはチートすぎだって他の神から因縁付けられたらんだよ」

「因縁つて、今さらですか？」転生する前に言えば良かつたじやないですか。基準レベルまで劣化もさせてますし」

「それが、そもそもいかないのよ。あなたは能力を応用してライアとアリスを擬似的にとはいへこいつに呼び出した。それを責められたの」

「……はあ～？」

そんなの向こうの不手際じゃないですか。可能性で言えばそれは充分あり得たはずです。

「それでね！向こうが新しく転生者を増やさせろって要求してきたんだ！だからそれを利用して、教授も新しくルールを取り付けたの！」

「それがあなたたちが来た理由ですか？」

「そうです。新ルールはいくつあります。

一つ、転生者は教授以外、何人にも増やせる」

「え、えっと、でも、一つの世界に同時に転生できるのは十人まで

「うしろので」

「あ、なんだ、そうですか~」

び、びっくりした。

あれ?でも、それでも充分なくらいに不利ですよね?

「一つ、転生者について現地の人物に話すのを許可する。これはルナさんのために教授が新設してくれたルールです」

ああ、ルルとナナを戦力に加えろってことですね。元よりそのつもりです。

そのために施設から連れ出したんですし。

「三つ、私たちを全員こいつらに転生させる。年齢は全員が主人公たちと同年代とする。

この全員というのは、教授を除いたベルツのメンバーです

なるほど、だからキャロとアリシアたちとの年齢差がなくなつてなつているんですね。

……それと、このルールを見て激怒する相手の神の様子が目に浮かびます。きっと教授に口ハハ丁で言い負かされたんでしょうね。

「四つ、自陣の転生者が全滅、及び敵対の意思がなくなつた場合も終了とする。

これで関係ないとこりに転生して永遠に勝負が終わらないといつことを防ぎます」

なるほど、お互いに敵対する限りは戦い続けるということですね。まあ、sttsには全員が強制参加なので、その時に風潰しにしてい

けば良いのですが。

「五つ、転生者の容姿は自由に設定できるものとする。

「これは教授の案です。これで多少は私たちを有利にするハンデとして寄越したものらしいですよ。表向きは転生者の第二の人生に対するサービスと銘打つてありますけど」

へえ～。教授も味なことをしますね。

「冗談などいりませんわね。後はとにかく変わりません」

「了解しました」

うわあ、不利だ。劣勢もここまで来れば清々しいですね。

ん
ん
?

……ちよつと待つてください。あなたたちは特典は～？」

「ねえよ」「ない」「ないわ」「ないよー」「ありませんね」「す、すみません」

「え、なんでですか！？」

「悪いが、デバイスの持ち込みが精一杯だった。能力はそのままだ」

「そんなこんなで能力はなしよ」

「不平等」

「も、申し訳あつません」

「……いえ、わかりました~」

「、これで転生者と戦うんですか?
そんなんで転生者を倒せるほど甘くは……、

あれ?別に問題ないかも?
前回はそれで充分でしたし。

「それで?テメエはなんで生きてるんだよ?」

「自爆してたよね!」

「私たちは生きているとしか聞いていないわ。どうやったの?」

「ああ、あれですか?。簡単ですよ~」

回想に入ります。

マンションを脱出した私とアリスは結界の頂上まで来ました。

「よし、リリオでは作戦通りです。プラン2ですが」

後はジュエルシードを自爆させねばフイニッシュです！

「アリス、それでは～」

「うん、じゃあね」

すると、アリスの身体が虚空に消え、三つのジュエルシードが残りました。

「ライアを構成していた三つの内、二つが持つて行かれたのは痛いですね～」

『ですが、自爆のための量には充分です』

その通りです。

二、三個でも次元断層を起こすのは充分なんですから、これだけあれば！

すると、マンションから負け犬たちが出てきました。
これは急がないと。

念話で時間稼ぎをしつつ、ジュエルシードを発動せます。

そして今、ジュエルシードが臨海に到達しました。

「さあ、管理局の腕の見せ所ですよ～～」

もうこれでどうにかするには封印するか、爆発の瞬間をアルカンシ

エルで消滅させる以外にありません！封印は時間的に無理…つまりは！

『転送魔法によって軌道上に強制転送、アルカンシェルで消滅』

「イエース！そのために結界の転送妨害の機能を解くはずです…！」

すると、結界の機能が変わり始めました。『田』を使っている私は丸見えです！

【さあさあ…！私の究極芸術を見せてあげます…！冥土の土産に持つていきなさい…！】

これで周囲に「これから自爆しますよ」とアピールします。タイミングが命ですからね。サポート班、ガンバ！

【芸術は、『超』、大爆発です…！…】

瞬間、転送が来ました。

結界も機能の書き換えが完了してしています。よし…！

「転送…！」

『了解です…！』

予め準備していた転送魔法を発動し、強制転送が発動する寸前に私だけ転送します。ジュエルシードはそのまま軌道上に移動させます。これで私が生き残つてると思う人はいないでしょう。ギリギリまで見張っていても、ジュエルシードの影響で私を見失つたでしょうし、転送反応もジュエルシードの余波で探知できないでしょう。

「これで逃走完了だー！」

「ついて感じです～」

「……スッゲ

いやですね～、褒めても何も出ませんよ～。

「テメエが生き残ってる理由はわかった。で、これからどうする？..」

「ふふ～ん それはもう考えてあります～」

さつきのルール説明を聞いているうちに考きました。これで私たちの勝利は目前です。この作戦は行けるぞおおおおーー！

「それに、戦闘面でも問題ありません～」

「随分な自信だな。まあ、その特典じゃ仕方ねえか？」

「チートの極み」

「確かにやったね。このルールの中では最強よね

「能力のインフレだよー！」

「その能力の原作でもチートでしたからね」

「か、勝てませんよ」

ふつふつふ、そうでしょう？

劣化して体质系はコピーできないとはいって、この能力に勝てる転生者は存在しませんよ。

「この『完成』にはね～！～」

ピロリロリーン、ルナハ新タナ能力ヲ手二入レタ。

- ・明鏡止水
- ・虚化
- ・月牙天衝
- ・ゴーレム創成^{クリエイテ}『イノケンティウス』

解析八終了シマシタガ、アノ魔法無効化能力ハ体质系ノ能力ダツタ

タメ『△』—♪キヤマセントシタ。

s i d e o u t

帰ってきた外道たち（後書き）

転生者枠はまだ四人余っています。
さて、どんな転生者がくるんかな〜？

さんね〜ん！それは夢『墮』ちだ！！

s i d e ? ? ?

「行け、イノケンティウス！」

その一言によつて『魔女狩りの王』^{イノケンティウス}は目の前にいる巨大なムカデのような生物を一瞬で蒸発させた。爆炎が夜空を照らし、まるで昼のようなる明るさになる。調べた限りでは、この巨大生物はA Aランク指定の危険種らしい。それをこつもアッサリと殺してしまつとは…！

「素晴らしい……！ 素晴らしいぞ、私の力！！」

しかし今の爆音に釣られてやつてきたのか、同種の生物がワラワラと集まつてきた。

問題ない。

「新しい力を試すにはもつてこいだな」

そして私は手を顔に添える。

すると、私の顔に突如として恐ろしげな赤い模様が浮かぶ仮面が現れた。

「ククク、凄いぞ！ 力が漲つてくる！」

そして私は特典で貰つた刀型デバイス『しちりん』を展開し、そい

つらに襲い掛かつた。
結果は当然、秒殺だ。

「ククク、馬鹿どもめ！せつかくの転生をしたのに主人公たちを助けるためにわざわざ危険に飛び込むとはな！」

私のように賢くならんと生きていけんよ？

数日前、私はこの『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生した。どうやら他の転生者どもは神が頼んだ通りに主人公たちを助けに行つたようだが、私を含めた数人の賢い者はそんな頼みを一蹴した。

なぜ、わざわざ転生したのに自由に動いてはいけないのか？

そして私はこの世界に転生し、理想の姿をもつて顕現した。将来は美男子になること間違いなしの容姿、黒い髪に紅い瞳といった、某悪魔の執事に瓜二つの容貌だ。これはサービスなため特典には含まれないらしい。年齢はルールに従い主人公と同じ年齢だ。

「つぐづく馬鹿ばかりだな。私ほど賢い者もそうはないだろうが」

なにせ、能力が能力だ。

私が神に望んだ特典は最強だ。一つはデバイス、もう一つは魔力量（これはAAAまでしか与えられないらしいが）。ここまでなら普通の奴でも思いつくかもしれないが、ここからは私しかいないだろ。

「さうーこの『見稽古』に敵う能力などいはしないさー！」

これこそが、私が神に望んだ最強の能力だ！ルールのせいでも多少は劣化してしまい、四つまでしか技をストックすることができなくなつてしまつたが、それでも最強の能力であることに変わりはない！

数日前、あの転生者が集まつた戦闘で、私は他の転生者の能力をこの『見稽古』で習得して回つた。あの馬鹿どもが調子に乗つて能力を使いまくつてくれたおかげで、随分と使える能力が集まつた！

「これで、私に敵う奴などいない！邪悪な管理局を崩壊させた暁には、私が全てのヒロインを貰い受けよう！」

それが誰もが最も幸せで平和な願いだと思わんかね？下劣な他の転生者などと一緒にいるのよりも、この私と添い遂げる方が幸せに決まつてゐる。

「くふふふ、まずは誰を物にするか……。まだ純粹な新人メンバーが良いか？だとすれば、強気なティアナ辺りが良いだろう。クックツク、なあに、時間はたっぷりある。その間に、スバルも、キャロも私好みに調教してやろう！」

「うわっ、キモ……なにコイツ本当にキモいんだけどーー？」

その時、私しかいないはずのこの世界に少女の声が響き渡つた。
馬鹿なー？ここは無人世界のはずだ！それなのに私以外の人間がいるはずが……！？

勢い良く振り返ると、数メートル離れた茂みによく見知った少女がいた。月明かりのよすに透き通つた金髪ツインテールに血のような紅い瞳。

フェイド＝テスタークロッサだった。

「……何者だ？」

しかし、こんな所にフェイドがいるはずもない。彼女のクローンが他にいると聞いたこともない。つまり、この少女は私と同じ転生者のうちの一入だ。

「むつふつふ 人に名前を聞く時は、まず自分から名乗るのが礼儀だよ！！」

『マスター、あなたはそれを聞いたかっただけでしょ？』

『……随分と舐めた口を利いてくれる。しかし、礼儀に反するといつのも事実だらう。ここは余裕をもって返さねば。』

「これは失礼した。

私の名前は……そうだな、ヴァロンと『そんのはそういう良いよー』

自分で聞いておきながら……！

「私はね、あなたが危険な能力を持つようだつたら闇討ちして殺してこいつて言われているんだ！あなたつてこの前の騒動でコソコソしていた転生者でしょ？何か変な能力を持っているだらうから見張

つてたんだけど……」「

そう言うと彼女は『バイスを展開した。

それは漆黒の大鎌で、柄も、刃も全てが黒い。少女の身の丈ほどもある。バリアジャケットはフェイドに似ているが露出は多くなく、普通の黒いワンピースに黒いマントだ。

彼女は軽々と『バイスを振り回し、私に突きつけた。

「うん、思ったよりショボイね！ 楽に殺せそうだよー闇討ちする価値なし！！」

最強の私に向かってそう言い放った。

私は一瞬、何を言われているのかわからなかつた。

『見稽古』を、ショボイだと？ 私が思いつく中でも最強の能力の一つだぞ！ ？ 虚化しているとはいえ、あらゆる能力と身体能力を習得できるのだぞ！ ？

「……随分と自信があるようだな、貴様。私の能力のどこがショボイと言うのかね？」

「さあ？ 自分で考えなよ、自称賢い人（笑）さん！」

「殺す！ ！」

瞬間、私はイノケンティウスを『コーレム創成^{クコロム・クレイト}』で作り出し、虚化の仮面を付けた。そして『しちりん』を振り上げ、

「月牙、天衝！！」

私の魔力光である橙色の月牙天衝を放つた。

彼女は咄嗟に横に避け、そのまま私に突撃してきた。馬鹿め！

「いちらにはイノケンティウスがいるぞ！」

雄叫びを上げ、イノケンティウスが彼女に突進する。しかし彼女は飛行魔法で上空に飛び上がり、大量の魔力弾を作り出した。イノケンティウスはその特性上、飛行することができない。ならば、私が飛べば良いだけのこと！

「行けえー!! ラージュシューター！」

『Shoot』

大量の魔力弾が発射されるが、そんな物は私には無意味だ！

「明鏡止水」

すると、シユーテーは明らかにその勢いを減衰させた。当てるべきのが消えたのだ。これでは攻撃のしようがない。

「えつー? ビ、ビに消えたの! ?」

「後ろで、お嬢さん」

彼女の背後に回りこんだ私は、そのまま月牙天衝をその背中に叩き込む。割と本気で攻撃したからか、それとも彼が貧弱だったからか、悲鳴を上げることもなく彼女は地面に叩きつけられる。

「ぐつ、ううー。」

『マスターーーー』

「勝負あつたよつだね。口ほどこにもない」

這い蹲る彼女の横に降り立つた私は、デバイスを掴んでいる彼女の腕を踏みつけた。

「これで私の勝ちだ。君の命は私が握っているのだよ。この意味はわかるね？」

「ど、どうこうの意味ー！？」

「君をどうしようとも、私の自由とこいつじゃ。殺すも、犯すもね」

「ひつ

私の言葉に顔を恐怖に染めた彼女は、思わずといった様子でデバイスを捨てて逃げようとする。

「逃がしはしないや。チーンバインド

「ややー。」

バインドによつて足を絡め取られ、彼女はその場に転倒した。そのままバインドが彼女の四肢を拘束する。これで逃げることも、抵抗するのもできない。

「まあ、どうしてあがむか」

「や、やめられ」

「それを決めるのは私だ」

そして、動けない彼女に一步一歩近づく。彼女はバインドから逃れようとは死にもがいていたが、無駄な抵抗だ。

「こや、こやだよー来なーいでよーおー」

「ククク、あー…楽しめてもいいつか?」

そして私は彼女の衣服に手を掛けた。

「こやああああああああああああああああああああああああああああ

「ジャスト一分！　夢は見れたかな？」

「……は？」

気がつくと、私は地面に寝転がっていた。

全くの突然だった。私は確かに彼女の服に手をかけ、剥ぎ取ろううとしたところだったというのに、一瞬で今の状況になっていた。

「いつたい、何が？」

「わあ？ 暮でも見てたんじゃなこいの？」

その言葉に私はハツとなり、咄嗟に立ち上がろうとするが、手足に全く力が入らない。

「あ、何をしても無駄だよー？今、あなたの手足は完全に脊髄とのリンクを失っているからね！脳からの指令は一切届かないよー。」

「なつ！？」

そんなことが！？しかし、甘い！？

「イノケンティウス！！」

私がそう呼びかけると、少女の背後にイノケンティウスが創成され、
彼女に摂氏3000度の豪腕を叩きつける。

しかし、

「だから、無駄だつて」

そして彼女は私をデバイスで小突いた。

瞬間

「うーん、おまえのやつは、あんまりいい感じじゃないな。」

激痛が全身を襲つた。痛いというレベルを既に超越している。全身の神経を鏟で削られているようだ。

すると、私の意識が完全に逸れたからか、イノケンティウスはその場で動きを止め、虚空に溶けるように消え去った。

「……」
「…………」

一
ぐ
ああ、
「ううう」

一瞬で痛みは完全に引いたものの、全身を襲っていた痛みの余波のせいか身体が痺れる。応えることなんてできなかつた。

「ふんふん？ 強烈すぎて天国に迷子になってしまった？ 二階堂 萌恵たゞ

誰もそんなことは言っていない！

「そういえば、ロキ！」のマゾの能力つて『見稽古』だつたよね？あれって確か、目で見た能力とか技を一瞬で自分のものにできるんだっけ？」

『あなたの記憶しておつます』

へえ、ふうん、ほおう

すると彼女は突然ニヤニヤと笑い出し、這い蹲る私を見下ろしてき
た。

「ねえ、あなたって死にたくない？それとも一思いに死にたい？」

「……ぐ、何を……！？」

「応えて」

彼女はデバイスを突き出し、私を再び小突りにしてくる。

「し、死にたくないに決まっているだらつー。」

「だよねー！それじゃあ、下座して私にお願いしてよー。『どうか殺さないでください』ってさーほら、もう動けるようにしてあげたからー。」

「や、貴様ー調子に……！」

「はいはーい！そんな素直なあなたには、地獄への片道切符を進呈します！」

「ま、待てー待ってくれーわかったーするからー。」

こんなことはプライドにかけて拒否したいが、命には代えられない。これは必要なことなんだ。それに、この女が油断した瞬間に虚化すれば、まだ勝機はあるー。

「……どうか、殺さないでください」

「ん~？なに~？聞こえな~い

「ぐ……！」

「どうかー殺さないでくださいー！お願いしますー！」

恥も外聞も捨てて私は頬み込んだ。この女！絶対に許さん……

「そっか～！じゃあ、あなたのことは殺さないであげる！」

すると彼女はデバイスを引っ込めた。

今だ！！

その瞬間、私は立ち上がり、近くに転がっているデバイスを取りうとしが、

「……ツ！？う、動けない！？」

そう、土下座の体勢から動けないので。手足が固まつたように動かない。

「え？何か動く必要でもあつたの？」

それとも、私の油断した瞬間を突こうとしたの？」

クソッ！顔を上げなくてもわかる。絶対にこの女は笑いながら私を見下ろしている！

「あ～あ？せつかく助けてあげようと思ったのに～？約束を破るよつには罰が必要だよね～？」

そして彼女は一歩一歩、ゆっくりと近づいてきた。まるでさつきの夢の私のよう。

「それじゃあ……」

そして、彼女が片腕を振り上げたのが影でわかつた。

「罰ゲーム！？」

彼女が腕を振り下ろす瞬間、私は思わず目を瞑った。この恐ろしい少女の下す罰を正面から受けるなど、到底できそうになかった。

しかし、

「はい、終わり！」

そう言って彼女は唐突に去っていった。辺りには、もう風の音しかない。

「た、助かった、のか？」

手足の様子を確認すると、問題なく動くのがわかつた。どうやら、去り際に開放していつたらしい。

「.....」

命拾いをした。九死に一生を得たと言つても良い。

「クソ！クソクソクソ！あの小娘め！クンガキ！」

思わず悪態をついた。よつともよつて見逃されるとはーこんな屈辱はない！

「あの女、許さん！次に会つた時には犯しつくして、散々な死に方

をさせてやる……」

そつと決まれば他の転生者の能力で使えそうなのを片っ端から口ペー
ーしてやるーそして、いざれはあるの女にーー

憎悪を胸に私は立ち上がり、腹立たしげに近くの木を蹴飛ばそうと
して、その時になつてようやく気づいた。

どうして辺りはこんなに暗いんだ？

確かにさつきまでは夜だったが、辺りに散った火の粉のおかげで多
少は明るかつたはずだ。
どうにも納得できなかつたが、気を取り直して魔力弾で周囲を照ら
すことにした。

しかし、それでも周囲は暗いままだった。

「…………は、ははっ、ははははははははははははーー」

「…………来て、ようやくあの女の『罰ゲーム』がわかつた。

私は、視力を奪われていた。

s.i.d.eアリシア

「むつふつふ〜 セつかくの凄い能力も、使用不可能なら意味ないよね〜？私つて頭良い〜！！」

『今頃、あの転生者は焦っているでしょうね。もはや戦闘はおろか、日常生活すら困難でしょう』

「だよね〜 あはは！
でも、死んだら新しく転生者が来るんでしょう？」

『その通りです、マスター』

「う〜ん、だつたらあのマゾにも生きててほしいよね！戦力にもならないのに頭数には入ってるんだもん！」

『そうですね。彼には強く生きてほしいのです』

そして私たちは帰路についた。

さあ、今日の晩御飯は何か〜？

s.i.d.e.out

s.i.d.e.out

『次のニュースです。昨夜、第35無人世界で身元不明の男の子の死体が発見されました。死因は持っていた剣型デバイスによる自殺と思われ』

「こらー！誰も観ないならばテレビは消しなさいー！まったくもうー！」

そして、テレビの電源が無造作に切られた。

side out

さんね～ん！それは夢『廻』ちだ！！（後書き）

転生者の募集はまだまだ続きます！能力だけじゃなくて性格も受け付けます！

ちなみに一般の転生者ルールでは、転生できる最高年齢は主人公の年齢までで、最低でもヒリオやキャラの一歳下までになっています。

圧縮圧縮空氣を圧縮!!（前書き）

今日はついでに『あれ』の転生者が登場!
さあ、皆も一緒に叫ぼう!

[圧縮]圧縮空氣を[圧縮]～!!

圧縮圧縮空気を圧縮！！

うーん？さつそく転生者が一人退場^{リタクア}したらしいですね。ザコい能力者だったら捕まえて生かしておくんですけどね。『見稽古』は流石に生かしておくには面倒すぎます。何かの拍子に暴れられたら面倒ですしね。

あ、皆さんこんこちは。ルナ＝ベルツです。

現在、転生者たちについての情報を整理していく必要があります。

……あれ？

そういうえば、この主人公視点とも言えるものに私が出したのってかなり久々なのでは？

お、おおーよく考えればそうじやないですかー！

「クックック！これはめでたいですー！これはもうトランションに任せて転生者を乱獲するしかないのですー！？」

『落ち着いてくださいマスター。そんなことをしても新しい転生者が来るだけです。また情報を集めるのも面倒でしょう？』

「……それもそうですねー」

アルテミスの言つ通りです。冷静になりなさい、私ー！

「そうですねー。私が愚かでしたー」

『わかつていただけたよつで何よりです』

「殺すなうばー斎に監殺しないと後が面倒ですね~」
「殺すなうばー斎に監殺しないと後が面倒ですね~」
アルテミスはいつ言いたいのですよ~!

『その通りですマスター』

はあ、そりですよ。どうやら熱くなりすぎていたようです。しつかづしなこと。今や私は『ベルツ』を教授から預かっている状態なのですから。

それに、私には頼れる仲間だっていますー皆で力を合わせればきっと……!!

「見て見てみんなー!『W.i.p』買つてきたからやうつねー!!ルもやる?」

「やめやめ……!」

皆で力を合わせればきっと……!!

「…………この低反発枕は神。この枕の会社、良い仕事をしてこ~る

「本当に寝具には妥協しないよな、お前」

力を合わせれば……！

「あ、ちょっとキヤロ。買い物に行くついでにタバコ買つてきて。私って一日に最低一箱は吸わないと落ち着かないのよ。銘柄はいつもので」

「……イデアさん、禁煙するつて先月言つていたじゃないですか。『コレシトで我慢してください』。つていうか、今は未成年なんですから自重してください。それじゃあ行つてきま～す」

「……はあ、私が間違つていました。

「仲間なんてただの記号です～！友情なんて金で買え～！どうせ昨日の敵は今日も明日も敵です～～！」

「だ、大丈夫ですよ、ルナさん。わ、私とナナさんは味方ですから

……！」

「…………お～…………、お～…………！」

味方をしてくれるのは嬉しいですが、よりもよつて頼れるのはこの口下手コンビですか！？『ミニコニケーション能力が乏しすぎます。伝言ゲームもできないんじゃないですか、この二人。

「……信じられるのは自分だけですね～。アルテミス、私は頑張ります～」

あ～、憂鬱ですね。先が思いやられます。

「それじゃあ、氣を取り直して報告会を始めます。現在、生き残っているのがわかつている転生者は四人です～」

「あ、あの海鳴で見た人たちです、か？」

「その通りです～。え～っと、名前は覚えるのが面倒なので、ウニ頭を『説教』、白髪を『妖怪』、炎の『ゴーレム』操っていたのを『バー』『ード』、虚化していたのを『オレンジ』で」

え、なんでこんな名前なのかですか？これら的能力を使っていた原作キャラの姿と全員が一致しているからです。詳しくはググりましょ～。さすれば汝の求めるものを『えん、たぶん。

「つ……強……そつ……！」

「え？ そ、そうですか？ け、結構チョロそうに、感じます、けど？」

……なんでそれだけの会話でこんなに時間がかかるんですかーもう、本当にこの一人が揃うと話が進みません！！

「まあ、何であれ殺すのに変わりはないんですけどね～。これはあくまで殺しやすくするための情報ですから～」

しかし、何事にも例外はあります。もし、転生者の中に負け犬のような馬鹿ではない転生者がいたとしたら、その時は、

「手厚くもてなしてさしあげましょうかね～」

「そっと、あの自称賢い転生者（笑）を見た感じでは期待できませんが。

「そうそう、それからもう一つ、悪い報せがあります。どうやら管理局はリインフォースの修復に成功したらしくです~」

「え！？そ、それは本当ですか！？」

「はー、かなり信憑性は高いですね~」

「そ、これが今回で最も悪い報せでしょうね。これでsttではりインフォース^{ツウアイ}?が製作されない代わりに、リインフォースが物語に加わることになります。融合騎としてはかなり優秀なんですね、彼女。アギトなんか田じやありません。」

今回の情報でめぼしこものはこれくらいでしょうか。うわ~、転生者の情報少ねえ~。こいつなつたら原作キャラの身内とかもまた探すべきで

「…………おお~？」

「…………~ど~した、の？」

「あ、ナナはわかりませんか。ルルもわかつていませんね。
『W.i.e』に熱中しています。一緒にしていたアリシアはわかつて
いるようですね。動きが止まりました。」

「……へえ、これは流石に予想外でした~」

瞬間、マンションが巨大な光に包まれて消滅しました。

s.i.d.e.???

「ぐ、へへーやつたぜーこれで絶対に死んだ！」

能力によって一瞬で倒壊したマンションを見て思わず笑ってしまう。まだこの技は使ったことがなかったから近くのビルから見ていたが、アニメとは全然違った迫力がある。この能力さえあれば、俺に勝てる生物なんてこの世には存在しないだろう。

神だか何だか知らねえが、アイツらを殺せと俺たち転生者は言っている。正直、最初はどうでもいいから無視しようと思っていたが、最近になって事情が少し変わった。俺の能力を見込み、奴らを殺す依頼をしてきた転生者が来たからだ。そいつの話によると、奴らは転生者を乱獲する可能性があるらしい。つまり、最強の俺にそいつらを倒してほしいって訳だ。

まあ、最強とまで言われたら受けのもの答かじやねえけどな。

【おい、言われた通りに殺したぜ。これで文句ねエだろ】

【すいいね。マンション一瞬で消すなんて、流石だよ】

【けつ、どうやって俺の能力を知ったのかは知らねエが、こうなるのは当然だろ？俺の能力にかかるば造作もねエ】

【それもそうだね。ああ、そういうえば一 つ報告があるんだけど】

【ああ?】

【彼ら、死んでないよ】

【……なに?】

【おーおー、あれで死んでいないだと?逃げた様子もなかつたんだ。流石にそれは信じられない。】

【おー、出鱈田もたいがいにしろ。まさか、それで難癖つける気か!?

テメエ、報酬を払わねエ氣だろ!-】

【ボクは本当のことを言つているだけなのになあ。ほり、もう少こに迫つてくるよ。早く逃げた方が……】

【つるせエーー今度はテメエを殺して】

「あ、見~つけた!-」

すると、背後から楽しげな声。

そこには奴らがいた。間違いない。あの女に聞かされた特徴に全員が一致している。一人足りねエが。

「まさか、いきなり拠点を襲撃されるとは思いませんでした。これは転生者を舐めていたとしか言えません。お見事です~」

「だがよ、お前はもうこれで逃げられねえ訳だ。大人しく死ぬか植物人間になるか選びな」

「私たちとしては植物人間を推奨」

……チツー・コイツー、本当に生きていたゞिंかピンピンしてやがる。

【だから言つたろ？ほら、君が本気になれば逃げ出すことだってできるはずさ】

【うむせエー俺が逃げるだと？あり得ねエー全員ここで殺す！】

俺は身を低く構え、いつでも連中に突撃できるようにする。「コイツらはまだ俺の能力を知らないはず。それならば、俺が負ける要素はどこにもねえ。

「一撃で殺す！？」

side out

うわ～お、デバイスも持たずに突進してきましたよ。

いえ、良く見れば首に付けているチョーカー、あれがデバイスのようです。

しかし、この転生者は阿呆なんですかね？どうも私たちが彼の能力を知らないことを前提に攻撃してきている感じです。一撃で殺す

とか言つていますし。こんな姿を見れば一目瞭然なのですが。

『Rejection』

普通に防御魔法で防ぐと、思つた以上の威力が防御を軋ませます。

「チツ、やるな！だつたら！」

すると、転生者は一旦下がります。

そして今度は足裏を爆発させたかと思うと、もの凄い速さでまた突進してきます。っていうか、もうこの時点でわかる人にはわかるでしょう。

今度は障壁を張らずに普通に避けます。すると私が今までいた場所に腕が叩きつけられ、そのまま床を粉碎、階下までぶち抜きました。

「テメヒら、やつから守つてばっかりじゃねエか。ちゃんと戦え！それともびびつてんのか？へへッ、聞いていたほど大したことねエな！」

……これは挑発のつもりなんでしょうか？こんな子供みたいな挑発に引っかかる奴なんていませんよ。明らかにカウンター狙いでしょうし。

「……ルナ、コイツ馬鹿なんじゃねえか？」

「同感」

「きつと鏡を見たことがないのよ」

「そ、だね」

「だ、だつて、あの見た目ですしね」

ルルとナナ以外は全員わかつているようだ。それでは、あの転生者の容姿を説明しましょう。まず、髪は白髪です。目は赤いです。ヒョロヒョロです。ライアほどではありませんが、目つきが悪いです。

大抵の人は白髪でわかつたのではないでしょうか？

「どうみても一方通行ですよね」アクセラレータ

「ツー？ どうしてわかつた！？」

「いや、そんなの見ればわかるでしょ！」

つまり、彼の能力は『ベクトル変換』ですね。

ここでの、ルナさんの能力解説コーナー！

『ベクトル変換』とは？

なんと、運動量・熱量・光量・電気量など、体表面に触れたあらゆる力の向きを自由に操作する能力なのです。しかも、通常状態では生活に必要最低限のもの（酸素とか重力とか）以外は反射するように設定されているらしいです。つまり、理論上はどんな攻撃も通用しないということですね。まあ、裏技として酸素を奪うなどの手もありますけど。

つまり、彼は人間に触れた瞬間に血流を逆流させるなどをして、相手を即死させることができます。うわー、チートだー。最強の

攻撃力と最硬の防御力を併せ持つた能力。あらゆる敵を一撃で倒し、どんな攻撃も反射して無効化する。それが『ベクトル変換』です。一応コピ―できますが、演算量が半端ないので使えません。

あ、そつかーあのデバイスは演算補助のための物ですかーうわー、きつと魔力のベクトルにも対応可能になつてゐんだろうなー。

「テメエら、バレたからにはもう手加減しねエぞー！」

すると彼は両手を上げ、意識を集中させています。
おおー？もしやこれは有名なアレですか！

「くかきけーかかきくけきこかかきくーじーへけけけーきくかくけ
けこかくけきかこけきくーくーききかきくーじーへくけくかきくこけく
けくきくきくーきこかかか　　ツー！」

そして上空に光り輝くプラズマの塊がツー！

「うおーー！スッゲーですーー！リアルであんなのを言つなんて！
下手に必殺技の名称を叫ぶのより恥ずかしいのにー！」

「キャラをリスペクトするつてのも大変だな」

「ニーニーハ動画だつたら弾幕出そひ

「うつわー、恥づかしいー！」

「アリシア、そういう」とさわや馳田よ。これは一方通行にかけられた呪いみたいなものなのよ、きっと」

「で、でも、使つていない時も……あつた？ような」

「…………」

ルルとナナはこの光景に呆然としています。下手に理解できる分、この現象が信じられないのでしょうか。

「お、おに、お兄ちゃん！たたた大変だよ！ふら、プラズマがッ！人間が一人でプラズマ作つてるよ！？しかもあんなに大きいの…死ぬ！死ぬってこんななの！」

「…………（諦観）」

「え～？ルル、炎だつてプラズマの一種なんですよ～。こんなの別に恐くないですって。ナナ、諦めたらそこで試合終了です～。安西監督も言つてこますよ～」

「じゃ、じゃあ！何か作戦があるんだ～流石はお兄ちゃん～」

「や、す……が！」

「え？あつませんけど～？」

何を言つてゐんですか？私にあんな反則級を破る手段なんてあるは

チート

「うわああああああんーー私たちこーで死ぬんだーもう助からないんだあーお兄ちゃん！内緒にしてたけど、今までずっと好きでしたーこれからも好きですー結婚してくださいー」

「年齢的に無理ですねー。十年早いですー。それと、あなたが私を好きなのは嫌になるほど知っていますー」

「…………（テメエなに余裕ぶつこいてんだよ逃げるよふざけんなよ諦めんなよなんで全員笑つてられんだよ頭おかしくなったのか病院行けよ全員精神科行けよ呆けんなよどりつでもいいから逃げるよーーー」

「……なんか、今ナナから無言の圧力が来たんですねー。無言なのに田力だけで意思が伝わってきますー」

「…………なんとか、田つきが尋常じやないくらいに凄いことになつてしまーーこれ、ライアよりも眼力あるんじやないですかーー？」

「[圧縮]圧縮空気を[圧縮]！風のベクトルを使えばこんなことは造作もねエー！俺は無敵だー！」

「ふつ、無敵ー？そんものはあり得ませー。厨ーつて好きですよねー、無敵設定。きっと授業中にノートに書き殴つていたんでしょうー」

「あー、いるいるそうこう奴。きっと邪氣眼設定を練りこんでんだろおな」

「お前なんて保健室登校がお似合い」

「つていうか家に籠つてなさいよ。社会に迷惑だから」

「か・え・れ！か・え・れ！」

「あ、アリシアさん、帰れ」ホールは流石にかわいそうですよ

「うるせー！ テメーらは死ぬのが恐くねーのか！」

「…………」「下みたいなセリフだな」

「…………（わけがわからぬ）」

ルルとナナは既にパニックに陥っています。

未熟ですね。こういう時ほどリラックスが必要ですよ。

「大丈夫ですよ。『ベクトル変換』は確かに強力ですが、無敵ではありません」。それをお見せします

「で、でも、もう手立てはないんでしょう？あ、管理局の到着を待つとか！？」

「いえいえ、そんな必要はありません。つていうか、そんなことをしたら私たちも捕まりますよ~」

「アーティストの心がここにある。」

「ルル、ナナ、皆で正義の味方を呼ぶんです！私に続けてくださいね～！」

「え？」

「行きますよ～！せ～の！」

そして私は大きく息を吸い込み、

「助けて～！キャロえも～ん！」

そう叫びました。のつてくれたのはアリシアだけでした。

圧縮圧縮空気を圧縮！！（後書き）

次回、キヤロえもんが買い物の旅から帰つてくる！彼女は状況を開できるのか！？

木原神拳奥義！！（前書き）

助けて～！キヤ口えも～ん！！

木原神拳奥義！！

「助けてー！ キヤ口えもーん！」

返事は返つてきませんでした。

「…………お、お兄ちゃん？」

「……………あれ? どうしたの?」

「…………（ああ、私の人生って何だつたのかなあ。お兄ちゃん、今までありがとうございました）」

ルルは完全にパニックを起こし、ナナはもう走馬灯でも見ていそう
な感じでした。

「どうすんだあ？俺は転送魔法で逃げれるけどよお」

「私は防げるし」

「私は強引にスピードで逃げられるわ」

「私も『ライドインパルス』で振り切れます。リリス、私とヨニゾンしましょうね~」

「は、はい！ ニーヴン、イン！ 」

これで私たちは準備完了、ルルとナナも引っ張つていけば良いでしょう。

「…………え？ 私には無理だよー。どうにもできないよー？ 死ぬよこのままじゃー！」

「……未熟ですね」

死ねエエエ！！

そして彼、一方通行の転生者はプラズマを使おうとして

もう駄目だああああああああああああああ

セイギとほー転してアリシアとルルが絶叫し、

「ま、結界張れば良いんですけど～」

封鎖結界がビルを覆いました。

これによって空間^{ベクトル}と周囲を隔絶したため、風の流れは完全に途絶えます。それにより、一瞬でプラズマは消え去りました。

「……な、なんだとオ！？」

「ヴァ～力！！そんな自然現象を頼りにするような攻撃なんて、結界一つで簡単に攻略できるんですよ～！お手軽です～！」

実は、これがわかつっていたために皆は余裕だったのです。アリシアはわかつていなかつたようですが。この方法ならば、ある程度の魔力さえあれば誰でも防げます。

「さてさて～、どうしますか～？もしあなたの必殺技は封じましたよ～？」

「舐めんなア！俺の能力が無敵なのは変わらねエ！テメエらは俺に傷一つつけられねエんだよオ！」

そう言ってまた突進してきました。確かに、それはそうなんですか

どねえ。

「ライア～、この人面倒なので、衛星軌道上に転送してしまいます」

「お、それ良いな！名案だぜ！」

「賛成」

「右に同じよ」

「そうだね～」

一方通行の人を防護魔法であしらいながら適当に会議をします。もうこの転生者は殺しにくいし捕まえにくいくせにクソ弱いので、適当に殺すということになりました。流石の『ベクトル変換』も、酸素がなくては無意味でしょ～うし。

「させるかよオ～！」

すると彼はどこからベクトルを持ってきたのか防護魔法を力尽くでぶち破り、私に突撃してきました。勢いもそのままです。これはダンプカーとぶつかるのより痛そうです。

な・の・で、

「『木原神拳』奥義～！」

私は腕を振り上げ、

「超絶力ウンター！！！」

肘を顔面にお見舞いしました。

「ぐふウ あアア！？」

そして盛大に吹っ飛ぶ『マニア』さん。
え、なんで『マニア』のかつて？だつて口調すら一方通行に似せ
ているなんてマニア以外の何でもないでしょ？

「て、テメエ！なんでその技を……！？」

「簡単です。さつきの防御魔法で『ベクトル変換』が働く領域は
理解しました。なので、あとは簡単です。あなたの行動とタイ
ミングと領域に合わせて攻撃を通した、これだけです！」

お忘れですか？私はベルツにおいてのキャロと並んで格闘戦最強で
すよ？この程度の動き、簡単にできます。

すると、

「すみません！遅れました！」

ようやくキャロが戻ってきました。遅い！

「ビリしたの、キヤ口？ 随分と遅かつたじゃない！」

「すみません、スーパーが特売日だったので騒ぎに気づかなくて。それに私って飛行適正が低いので、ここまで走ってきたんですよ。フリーードに乗るのはマズイですし」

「キユク」

ありやりや、特売日ならば仕方ありません。あれつて近所のおばちゃんたちが白熱するんですね。

「うー、うーー（ううううーー）のせがれや 締めだぬーー！」

「さて」と、キャロも来ましたし、そろそろ地獄を始めましょうか？」

既にケリュケイオンに反射領域のデータは転送済みです。これで二人で彼をサンドバックにできますね。そして私たちはツカツカと彼に近づき、

「オーラー、どうやつてこの拠点を掴んだのか吐きなさい。」

一人でヤクザキックの嵐をお見舞いしました。腹、顔、胸と、満遍なく蹴り飛ばします。本当は構わずに殺しても良いのですが、せつかくの機会なので情報を得ることにしました。

マニアさんの能力では、どうやっても私たちの拠点を掴むことなんてできません。しかし、偶然で済むほど簡単に拠点を探すことでも

きません。つまり、彼の仲間に探知系がそれに準ずる能力を持つた者、おそらく転生者がいるはずです。

「ぐふ、グツ、『アアアー！？』

「なんですか、吐かない氣ですか～？それならばもつと跳ぶしかな
いですね～」

「は、話す、はな、ガツ」

「あははーなんか跳るのが楽しくなつてきました～！」

今度は顔面を重点的に……！

「ちよ、ルナさんー話すつて言つてこますよー～跳るのやめひー！」

「おつとつと、つこやつてしまこました～」

私としたことが、殺すのはまだ早いことにいつに樂しくて。

「それで～？誰に聞いたんですか～？」

「グツ、それは

「

「ボクだよ」

背後からの中性的な声に思わず振り返ります。

が、

「……誰もいないですよ～？」

「わっしづじやないよ。君の足元を」

そして足元を見ると、

なんか白くて猫だか犬だか狸だかわからない謎の生物がツ～！？

「ぬおおおおおー？何ですか～この白いのは～！？」

「確かにボクは白いけど、ちゃんとした名前があるんだよ

「しゃ、喋つてますよ～この生物～！？」

未知との遭遇です～ふしげ発見です～

「そりゃあ喋るさ。ボクは列記とした人間だからね。～この身体は通信機みたいなものさ」

「あ、な～んだ。それなら納得です～」

本当の身体ではないなら、喋つても驚きはしません。何かの魔法か
使い魔みたいなものでしょう。

「それで、このマニアさんを私たちの下へ送り込んだのはあなた
というのは本当なのですか？」

「事実だよ。彼は能力だけなら最も最強に近いものだ。だから刺客
として放つてみたんだけど」

「それならば残念ですが、彼では力不足ですよ。能力はともかく、
経験がまるで足りません。能力に振り回されています」

「それは君たちとの戦闘を見ていてボクも感じたよ。少し時期尚早
だった。でも、君たちがどれほどの力を持っているのかも把握でき
たし、成果としては充分だよ」

「おやおや～？あれくらいが全力だと思われているならば、甚だ不
服ですね～」

「そうかい、それは失礼したね。次の刺客は、もっと強い転生者に
頼むとするよ。例えば、管理局にいる六人とかに、ね」

「へえ～、なるほど～。ならば、さらに彼らには頑張っていただか
なければなりませんね～。あの程度の転生者では九人揃えても無駄
足ですから～」

「……肝に銘じておくよ」

空気が軋むほど のフレッシャーがこの小型生物と私から撒き散らさ
れます が、お互いに平氣の平左です。これは、予想以上に大物が出
てきましたね。

そして、彼(?)は踵を返してビルから立ち去ります。

「あ、ちょっと待つてください」

「ん? なんだい?」

その時には既に、この場を支配していたプレッシャーは消え去っていました。ルルとナナがぜえぜえと呼吸しています。そんなに緊張してたんですか?

「一つ聞き忘れていたことがありますた」

これを聞くないと戦いは始まりませんからね。

「失礼ですが、お名前は〜?」

「名前、か。そうだね、流石に本名を名乗る訳にはいかないから…」

そして彼(?)は少し悩み、

「ボクのことは、『キユウベえ』って呼んでくれ」

「承知しました、キユウベえ。あなたの次の挑戦を、心からお待ちしています」

そしてキユウベえは去っていきました。残されたのはボロ雑巾のようになつた『マニア』さん一人。

「……クククククク、ふふふふふふふふ、あはははははははははは
ははははーー！」

「る、ルナさん！？ビーツしたんですかーー？」

「そつとしどけ、キャロ。期待以上の大物が出てきたから喜んでん
だよ」

「武者震い」

「確かに、なかなか肝の大きい奴だつたわね。転生者には珍しい策
略型よ。しかも他人を動かすタイプの。こんなのは教授くらいしか
聞いたことがないわ」

「すつゞくすつゞかつたよね！」

『えつと、只ならぬつて感じでしたあ』

ええ、ええ！ そうですとも！ これは凄い！ とてつもなく凄い！ 表で
は負け犬たちが何も知らずに私を追い、裏ではキュウベえなる謎の
人物が私たちを攻め続ける！ こんなにワクワクしたのは初めてです
！ 負け犬は確かに強いですが、キュウベえは巧いです。これだから
人生つて楽しいんですよ！

「クッククク、ようやく私たちの戦いは始まりました。負け犬？
厨二？ あんなのは『ミです』。『説教』さんも『妖怪』さんも『バ
ー『ード』さんも『オレンジ』さんも原作キャラすらもキュウベ
と私たちの駒です』

そう、これは将棋と一緒にです。駒をお互いに自由に使い、そして王手をかける。マニアさんはせいぜい『歩』です。

「ほーら、キュウべえ。もつと強い駒を見つけて、数を揃えないどめですよーー！」今まで期待させたのですから、」

そして、『歩』風情は成らない限りは雑兵、死兵です。なので、

「私を楽しませてくださいねー？」

この駒は用済みです。」古勞様。

そして私はマニアさんの頭を踏み碎きました。もちろん、木原神拳でですよ？

s.i.d.e.?/?

「ふう、なかなか手強そつな相手だったよ。流石は天使ってところかな？」

『そのようですね。戦闘能力だけでなく、頭も回るようですね』

ボクの独り言に、女性の電子音が応えた。まあ、傍から見たら完全な独り言だらうけど、あいにくここにはボクと彼女しかいない。

「うそ、どうやら簡単には倒されてくれそうもないね」

『しかしマスター、時間は有り余っています。そう焦る必要はあり

ません』

「わかつてゐるよ、『ジブリール』」

そう、何も焦る必要はない。時間が経てば経つほどにボクの駒は増え続け、そして強くなつていぐ。なくなつてもまた勝手に増えるんだ。いくらでも使い潰すことができる。

「ボクはもつと強い駒を揃えるだけさ。最強の手札になつたら戦えば良い」

『仰る通りです』

今回は様子を見るつもりで切り札の一つを切らせてもらつたけど。まあ、それだけの成果はあつたし、無駄じやなかつた。

「ルナ＝ベルツだったっけ？ 彼女、いや、彼だったかな？ 相手としては不足はないよ」

存分に楽しませてあげるつもりだけど、絶対にわかっていないだろうね。

「勝つのはボクさ」

side out

粉碎！玉碎！大喝采！！（前書き）

一週間も空けてしまい申し訳ありません。

粉碎！玉碎！大喝采！！

「行け！青眼の白龍よ！滅びのバーストストリーム！！」

「フリーデー返り討ちにして。プラストレイン。」

二騎の竜の放つブレスにより辺りに光と爆音が撒き散らされます。
その攻撃はまさに今、拮抗している！

ところとせなぐ。

一瞬でフリードのブレスに押し切られ、ブルーアイズの首と、頭に乗っていた召喚師の転生者、通称『シャチヨさん』が吹き飛びました。フリードの極大ブレスと拮抗したかつたら、せめて究極龍の方を持つてこないと話になりませんよ。フリードはジュエルシードの力により、生物として一ランク上の存在に進化しています。もうヴォルテールとだつてタメを張れるくらいです。でかいし強いし何より格好良いし。

「ルナさん、終わりました！乗つていってください」

「はい、了解です」

さてと、今回も転生者を返り討ちです。最近しつこいんですね。

あ、皆さんには。ルナ＝ベルツです。

ここにとこり住居を構えた矢先に転生者の襲撃が来るといつぱーんになつてきました。

おかげで各地を転々としています。

そんなんある日のことです。

「……見張られてますね～」

あれから拠点を変えて数週間経ったのですが、どうやら向こうの監視は続いているらしく、ライアと私の『田』にはしっかりと魔力反応が映っています。それも一つや二つではなく百くらい。

「いい加減に全部潰すとか効率の悪い作戦はやめませんか～？」

「ああ？ 監視されるのがわかつてんのにじつとしてられつかよ

そんなことを言われても。

私とライアは見張りとなつているあの白い生物を全滅させるということを何度も行つてているのですが、排除しても排除してもワラワラと湧いて来るので。もつ一人で軽く千匹くらいは殺しますよ？

「そんなこと言つても、殺された死体を食べて魔力を回復されるんじゃ無限に続きますよ～？」

そうなんです。おまけに、キュウベえは死んだ個体を別の個体が食

「う」とによつて魔力を回復しているよつなのです。これでは見張りを全滅させるなんてことは不可能でしょ。」

「……チツーじゃあぢりすんだよー。」

「放つておきましょ。どうせプライベートまでは覗いている訳ではないみたいですし、敵が来たら返り討ちにして拠点を変えれば良いんです。」

ひょっとすると、それが向こうの目的かもしませんけど。こういう作戦は地味にダメージが来ますからね。資金面とか精神面とか。あ、もう少しど離れよつかな。

「まあ、そんなことよりも重大な問題があるのですが。」

「重大だあ？」

「あれです。」

私が指差す方向の先にいるのは、

「くふふふふふふふ、もう少しで全アイテムをコンプできるよ。……。うふふふふ、お兄ちゃん、ネットで最強のキャラにしてあげるからね……（カチカチカチ）」

「…………（あ、ダルい。つか禁書は文字数が多くて読みにくいんだよ。）」

私そつくりのアバターでネトゲに埋没するルルと、氣だるげにソファーでラノベを読むナナでした。

「お、おい。何があつたんだよ、あれ……」

「どうやら最近の忙しさのせいで心が荒んでしまったみたいなのです。何か気分転換をさせてあげたいのですが~」

ぶつちやけ、そんな余裕がないのも事実です。キコウベえは落ち着いた頃に転生者を送りますからね。前の場所も来てから結構な速さで襲撃されていますし。

「気分転換ねえ。やつぱりかに遊びに行くとかか?」

「うーん、人目の多い場所はちょっと遠慮したいですね~。私ってあの事件もせいで有名になってしまったので~」

「変身魔法は?」

「そういう施設のほとんどは犯罪防止のために厳重な検査を行つものですね~。ばれたら逮捕ですね~」

うーんと一人で頭を悩ませます。つていうか、野郎が一人で頭を悩ませても女性を喜ばせる方法なんて思いつきますかね?

「それなら、何かプレゼントでもあげたり?」

そこにイデアの姉さんが登場!なるほどーその手は思いつきませんでした!

「つかよおイデア、聞いてたんなら初めから言えよ。なんだ?混ざんのが恥ずかったのかあ?」

「モツ、そんな訳ないでしょ！あまりふざけた」と言つてると頭力
チ割るわよ！」

「ま～ま～、参考になる意見が聞けたんですから良いじゃないです
か～」

しかし、プレゼントですか。何が良いのでしょうか？
よ～し！女性陣に聞いてみましょ～！」

ケース1 アリシア

「プレゼント？う～ん、そうだな～。

あっ！激戦区を見つけてほしいな！みんなで一狩り行こうよ～。」

「モン　ンみてえに言つてんじやねえ！」

「女子らしさが微塵も感じられませんね～」

ケース2 キヤロ

「プレゼントですか？そうですね。

ライアさんと二人で住める大きな家で白い大きな犬と子供を三入く
らいとか……！～！」

「お～いキヤロ、戻つて来～い」

「女子らしさと言えばらしさですけど参考にはなりませんね～」

ケース3 リリス

「ふ、プレゼント、ですか？え、えっと、えっと。
その、バッサリ言つと、敵が襲つてこない拠点が欲しいです、すみ
ません」

「……そりだな」

「うひ、なんか心が痛いです〜」

こんな感じで、どれも参考にはなりませんでした。一考に値するの
はリリスの意見ですが。

「はあ〜、じうしましょつか〜」

そういえば、冷静に考えると今つてsttsの九年前ですから何のイ
ベントもないんですね。来年になつたら戦闘機人事件とかなのは
さん撃墜事件とかがあるんですけどね〜。

「前世だとスカリエットティと接触したりしてたけどな。今回もそ
すんのか？」

「別にそれでも良いんですけど、それだと前回と同じすぎて負け犬に
パターンを読まれます〜」

ワンパターン戦法は裏をかかれやすくなつてしまします。どんなに
強力な戦法でもです。

「…………お~、一つ妙案を思いつきました~」

「妙案だあ？」

「はい~。もはやこの世界は原作とは大きく乖離しているので、ぶつちやけ原作通りに進むとは誰も思っていません~」

「だらおな。特に厨一は何を仕出かすかわかりやしねえ。アイツの手にかかりや、原作なんて破られるためにあるようなもんだりつよ」

「はい~。なので、じこまーつ、じからアプローチを仕掛けようと思いまーす~」

「……へえ、どんなのだ?」

「はい~、ルルとナナには復活を兼ねて仕事をしてもらいます~」

その内容とは、

「一人にデバイスを与えて、スカリエットイー味を抹殺してもらいましょう~」

粉碎！玉碎！大喝采！！（後書き）

『シャチョさん』 『遊戯王』の海馬瀬人の転生者

特典はデバイス（デュエルディスクみたいなもの）と青眼の白龍の使
役と魔力量AAAです。

久々にエネコンのMADを見たので取り入れました。

これが、『美少女補完計画』だ！！（前書き）

このタイトルの時点で今回の主役がわかつたと思います。

今日は大活躍ですよ。

これが、『美少女補完計画』だ！！

「という訳で、二人にはスカリエッティ討伐に参加してもらいます」

「どういう訳で…? ていうかこ…」

「……（オロオロ）」

あ、皆さんこんばんは。ルナ＝ベルツです。
時刻は深夜。天気は曇っていて月明かりもなく、絶好の襲撃日和となっています。

ここはスカリエッティの現在の拠点の近くの森です。現在、ここにはベルツファミリーが勢揃いしていますが、万が一の場合に備えているからです。

そして周囲には小型の結界も張っています。キュウベえ避けの封鎖結界です。探知魔法の防御もしているので、スカリエッティにも見つかりませんよ？

「でもよお、なんでスカリエッティを殺すんだよ？」ここで殺したらst^st^sが潰れるぜ？」

「同感。百害あって一利なし」

「チツチツチ～ それは後ででも何とかなります～。リリス、現在判明している転生者は何人ですか～」

「え、えと、キュウベえさんを入れれば七人です」

「Y e s ! ! そして、残りの三人はキュウベえが勝手に送つてきて
くれます）。私たちはそれをひつ捕まえて監禁しとけば良いのです
）。残つた六人は逮捕に来た瞬間を返り討ちにすれば良いのですか
ら～」

「でも、それだと肝心のキュウベえ本人は見つからないんじやない
？ アイツは後ろで頭を使うタイプでしょ？」

「隠れられたら見つからないよー」

「ノープロフレム～、そのことは少しですが目処が立つてきたので
」

状況次第ですが、キュウベえを引きずり出す方法は存在します。

「それで？ 結局彼らを襲つ理由は何なんですか？」

「ちゃんと意味のあることなんでしょうな？」

「拠点ですか？」

その言葉に皆はハッとしてます。

そう、拠点です。このままではキュウベえにずっと見張られながら
生活することになります。それでは成功する作戦も成功しなくなり
ますし、何よりルルとナナが……。

「なので、今回の作戦は『スカリエッティを殺して持つている拠点を全部奪つてついでに戦闘機人プラントも奪つて戦闘機人とガジェットも奪っちゃおう大作戦』です！」

戦闘機人を生かして捕らえることによつて、戦力の強化を図つといつ魂胆です。前期組はアリシアに頼んで記憶と命令系統を変更すれば万事解決です。キュウベえ？あんなのはガジェットを大量生産してあの白いのが湧いてくる場所を辿つていけば終わりです。

別に、スカリエッティが惜しくなつたならばナンバーズが体内に残したコピーを使えば良いのですし、私に損はありません。

「より正確に言つならば、スカリエッティは殺さずに凍結封印で捕まえて永久保存します。そのままナンバーズは私たちに従つ操り人形となり、ガジェットすら手に入るという完璧な作戦なのです！…」

天才的な作戦でしょうか？

「…………（あの、それじゃあ私たちがデバイスを貰つた意味がないんじや）」

「ナナ、言いたいことはわかります～」

「えー？わかるのー？今何も言つてなかつたよね！？」

ふつ、長年の付き合いが生み出した以心伝心といつやつです。

「ルルとナナの二人には、出て来るであろうガジェットの相手をしてほしいのです。ウジャウジャ湧いてくるのでお願ひしますね～」

「……ねえお兄ちゃん、私たちって初めての実戦で初めてのデバイスで初めてのガジェットなんだけど！」

「そうですね～。それがどうかしましたか～？」

駄目だコイツ！という顔をするルル。たかが機械相手にそんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。

「それじゃあ、行きましょうか～」

さあーいざ出陣です！！

「やあ、ルナじやないか！歓迎するよ。こんな所で会うなんて、実に奇遇だね。おや？後ろにいるレディーたちは誰だい？ああ、彼女たちが君の仲間の子たちなんだね？美人ばかりじゃないか。羨ましいことこの上ないよ。レディーの皆さん初めまして。僕の名前はジークフリート＝ゾ＝神凪。ルナの友人でもあり転生者もあるんだ。そういうえば、ルルちゃんとナナちゃんには一度会つていたね。おつと、だからといって今すぐに君たちと戦おうという気はないよ？僕が本気を出せばこんな研究所くらいは軽く吹き飛ばせるくらいの力を出せるんだ。そんなことをすれば僕自身も危険だからね。だからここはお互に剣を引いて一緒にお茶でもどうかな？」

拠点に踏み込んで早々、ガジェットや戦闘機人、ましてやスカリエ

ツティではなく、なぜか厨一が現れました。つていうか、ライアの存在を無視していますね。

偽者ではありません。あの厨一オーラを出せる人物なんてこの世界には存在しないでしょう。長い話、自分に酔った様子、おまけに髪を掻き揚げる仕草まで完全に同一人物です。もし誰かが成り代わっているのだとしたら、私はその人に拍手を送ります。

「おや？逃げるなんて酷いじゃないか。君たちは大事なお客様だ、せめて持て成しきらいはさせてくれよ（キラン）」

キラン　は私の予想です。私たちは全速力で入り口に走っていますから。

状況は最悪です。ベルツのメンバーが厨一に乗っ取られる。これが私が想定していた最悪の事態ですが、今まさにそれが現実に起きそうになっています。なので私たちは厨一のスマイルを完全に無視してひた走ります。

しかし入り口の方からナンバーズの面子が現れ、入り口を塞いできました。メンバーはトーレ、チンク、ディエチです。くつ、そういうえばこの時期には前期組に加えてセインとディエチが稼動しているんでしたね。クアットロとセインは様子を窺っているのですか。

「くつ、なぜあなたがここに〜〜？」

「ふふふ、キュウべえにここを案内してもらつてね。sttsではナンバーズを彼の指示通りに動かす代わりに彼女たちをハーレムに加えさせてもらつたのや」

な、N A N D E S U T O ! ? つまり、ナンバーズは既に厨二のニコポとナデポに陥落したということですか！？

「す、スカリエッティはどうしたのですか～！？まさか、もう殺してしまったのですか～？」

「まさか。彼には後期のナンバーズを生み出してもらわないといけないからね。急いで他のナンバーズの生産に着手してもらっているよ。

なに、彼の計画と僕の計画は、お互いに害になることが何一つないんだ。彼は管理局内部の情報を僕から受け取れる、僕は計画の成就に近づく。ギブ＆テイクさ」

「け、計画ですか～？」

厨二の計画う～？碌なものじゃないんでしょうね、きっと。

「そう、計画だ！この世の遍く美少女を僕の力で魅了し、世界最強のハーレムを作り出すのさ！」

君の仲間の少女たちも！なのはたちも！新人フォワードたちも！ヴィヴィオも！ナンバーズも！イクスモ！ViViDの子たちもフックバインの女もモブも全部だ！そして僕は彼女たちに囲まれて一生を過ごすのだ！

これが僕の『美少女補完計画』だ！！！」

「「「「「「「「「」」」」」」」」

開いた口が塞がりません。まさか、そんな凄まじい計画を考えていたとは……。

でも、それが本当にできてしまつのがコイツですからね。

「今日ここに君たちに出会ったのは偶然だが、きっとこれは運命だ！神が僕に君たちを倒せと命じているんだよ！ここで君を倒し、君の仲間をハーレムのメンバーに加えれば、僕はこの世界で無敵の存在となる！」

さあ、トーレ、チングク、デイエチ！彼女たちを倒すんだ！！

うがー！－最悪です！－「厨」はスマイル一つで勝利確定！対して私たちは厨二を相手に背を向けて逃げなければなりません！つまりそれは、ナンバーズに背を向けるということです……。勝てるか！このの！

「I.S.発動、『ライドインパルス』！！」

「IS発動、『ヘヴィバーレル』」

「IS発動、『ランブルデトネイター』！！」

「ライア！！集中攻撃！！女性陣は防御を！」

「わかつてらあ——！」

こうなつたら男一人で厨二を殺すしかありません。私は氷のダガーを、ライアは魔力弾を厨二に撃ち込みますが、

「ふつ、その程度は想定済みさ」

厨一の姿が搔き消えました。幻影！？クアットロの『シルバーカーテン』！あ～もう！AMFのせいでの『田』は使いにくいですし、もう最悪です！

その時、ライアの足元の地面から腕が伸び、数本のダガーを置いてまた地中へと潜ります。セインの『ディープダイバー』ですか！

「やばつー！？」

「『ランブルデトネイター』……」

そしてダガーが爆発しました。

s.i.d eジーク

「は～っは～っは～…まさか、あのルナを翻弄できる日が来るとは思わなかつたよ！」

「そうですねえ。あのルナ＝ベルジが本当に生きていたのは驚きでしたけども、このAMFに満ちた空間内では無力ですぅ」

クアットロが僕の腕に抱きつきながら賛同する。くくく、原作では散々な悪役ぶりだったが、懐かせれば奴隸のように従順に従う。素晴らしい！

ここはさつきの場所から少し離れた場所だ。ここから僕とクアット

口は随時に指示を出している。

「おや？今の爆発を耐え切つたのか？流石はルナ…………と言いたいけどね。クアットロ！」

「了解ですう！今ある機械兵器を全て投入！AMFも全開！」

そしてモニターに映る戦場は苛烈さを増した。閉鎖空間内を高速でルナとトーレが飛び交い、誰かが撃つた砲撃が壁を吹き飛ばし、爆発が設備を蹂躪し、紫電が迸り、紅蓮が舞い、魔力弾が地面を抉る。

「それにしてもお、AMFを全開にしているのに勝てないなんてえ、チングちゃんたちったら何をしているんだか」

「それも仕方ないよ。彼らは世界最強と言つても過言ぢゃない集団さ。まあ、それも今日ここで終わりだけね」

クッククック、ルナ、僕は知つているんだよ？

あの眠たげな彼女は広域殲滅型、つまり閉鎖空間内では充分に力を発揮できない。そしてルルちゃんとナナちゃんは新米。幻術重視のアリシアは正面勝負自体が得意ではない。

つまり、まともな戦力は君と銃使いの『男』、それと斧使いの『少女』、そして近接戦もできるキャロのそつくりさんのみ。これにAMF空間でのナンバーズとの戦力は互角^{イフン}。さらにこっちにはガジェットという物量作戦もある。負ける要素は、ない！！

全部キュウべえの言つた通りじゃないか！！

「クックク、これで全ての勢力が僕の元に集まるー僕の魅力で計画は成就し、僕の理想の世界が出来上がる！」

「おめでとうございます、ご主人様」

そう、後は僕が直接彼女たちをニコポで落とせば勝ちだ。どうやらルナは僕の魔力に恐れをなしていたようだが、それは僕の本当の力ではない。戦闘中、だらうといつだらうとスマイル一つで女性を僕の支配下に置ける！それが僕の能力だ！

「ふふふ、このままでも勝てるだらうけど、僕が直接出向いて勝負をつけるとしよう。クアットロ、手伝ってくれるかい？」

「勿論ですぅーどこまでもお供いたしますぅー」

さあ、僕のSUSUランクの魔力の前に頭を垂れるが良い！

これが、『美少女補完計画』だ！！（後書き）

ルナたちは電脳経由で、キュウべえは物量で拠点を探しきりました。

お前はそれでも悪の組織か！！

『ライドインパルス』。それは加速の理論を突き詰めた最速の能力でもあり、同時に人間の反応速度を遥かに上回った超人の技でもあります。つまるところ、いくら優秀とはいえ人間の範囲に収まっている私では自身の移動速度に反応ができないのです。

しかし、そこで役立つのがライアの『プロヴィデンス・ヴィジョン』です。

この『田』は脳の伝達速度を人外のレベルまで引き上げることが可能です。これのおかげで私は戦闘機人のトーレと同じ、いえ、それ以上の速度を出しても自由に動き回れるのです。そのはずなのに、

「どうしてあなたは付いてこれるんですか～！？」

私が現在出している速度は、以前私が見た彼女の最高速度を大きく上回っています。ざつと1・5倍くらい。

だというのに、彼女は平然とそれに付いてくるジコウが、さらに加速する様子すら見せます。これはどういうことですか～？

あ、皆さんこんばんは。ルナ＝ベルツです。

ただいまトーレとの高速戦闘中です。つていうかマジで速っ！

「ふつ、愚問だな。ただの戦闘の道具だった私に、ジーク様は『愛』というものを教えてくださった！あの方のために強くなることは当然だ！貴様は私についての情報を知っているようだが、その時の私と今の私と同じだと思うな～！」

あ、愛いいいいいいいいいいいいいいいいい！？

……ええ～、この人つて悪の組織のメンバーですよね？なんか、めつちや良い」と言つてるんですけど……。

「あ、愛や恋なんて幻です～！精神病の一種、脳に出るバグでしかありません～！」

あ、ちなみにこれは前世のトーレの談ですからね？

「馬鹿め！貴様のような愛もわからん愚か者に、私が負けるものかあ！！！」

ええええええええええええええええええええええええええええええ～！？
ちょ～洗脳されすぎっしょ！！人格まで汚染されているんじゃないですか！？

「戦闘機人トーレ、この身はドクターの下に、されど、心はジーク様の下に！いざ、覚悟おおおおお～…」

そしてさらにも加速するトーレ。その速度は今までの倍ほど、つまりは前世の最高速度の三倍近く…どれだけ厨一のことを愛してゐるんですか！？

「うわ～、重い愛は嫌われますよ～」

『最大加速』

この速さ馬鹿が！返り討ちにして差し上げます！～

「～でやああああああああああああああああああああああああ～」

一合、二合、三合と打ち合い、お互に距離を取ります。なんか洒落にならないくらい強いし速いんですけど……！

「貴様、これほどの強さを持ちながら……！貴様は仲間を、いや、家族を愛しいとは思わんのか！」

「はあ！？」

「貴様は強いから仲間や家族を守るのか！違つはずだ！守るために力を手に入れたのだろう！」

「説教こいてんじやねえですよ～～～！」

しかもそれって某説教將軍の言葉ですし。詳しく述べると魔の禁目録の一巻をチェック！

「この愚か者め！力の使い所をわからぬ者に、力を使う資格はない！」

お前は少年漫画の主人公か！！

「使い所など決まっているでしょう？敵は抹殺、邪魔者は滅殺、障害物は粉碎、以上終わりです～～～！」

そして突進、高速戦闘の再開です。飛び回れる空間はかなり少ないので、お互いに空戦の専門家、複雑な軌道を描きながら激突を繰り返します。

「私の愛と忠誠の前に果てる！」

「死にやがりなさい、このサイボーグ女～！～」

お互に譲らぬ、気を抜けば命くらい軽く置き去りにされるような
高速戦が繰り広げられ、

「貴様のような者がいるからー。」

「機械人形がーほざいてんじゃねえです～！」

トーレが懇親の一撃と思える刺突を繰り出し、それに対しても私は
。

sideルル

『Load Cartridge』

「紫電、いつせえええつん！～」

飛び上がった私は炎に包まれた大剣を振り下ろす。

銀色の機械兵器（ガジェット？型とか言つてた）はアームを交差させて防ごうとするけど、それを一瞬で両断し、そのままボディーと叩き斬る。

それだけじゃなく、斬線の先にいる物にも紅蓮が進り、次々と破壊していく。

「うん、絶好調！～バイスの有る無しでこんなに変わるんだね、驚
きー。」

『お役に立てて光榮です、マスター』

「にゅふ マスターだなんてえ」

慣れない呼ばれ方をされたから少し照れる。

これが私のデバイスの『ウルカヌス』！2メートル近くある幅広の刀身が凄く格好良い！カラーは全体的に黒！コアの部分は柄にあって赤黒い。

バリアジャケットもお洒落で、漆黒のマントに手足の軽い鎧といった感じという、まさに『闇の騎士^{ダークナイト}』って感じ！超格好良い！私好み！お兄ちゃんとのペアルックとかも捨てがたいけどね！

「ルル、大…丈夫？」

む、どうやらナナを心配させてしまったみたい。まあ、さつきから近接戦での爆発攻撃ばかりだしね。

「だ…いじょうぶ…ナナこそ大丈夫？」

「ん……だい、じょぶ」

ナナのバリアジャケットは……魔女？頭には先が垂れたとんがり帽子、少しゴスロリ風なミニスカートの衣装にゴテゴテとしたチーンが巻かれている。お兄ちゃんはこういうのが趣味なのかな？デバイスはやっぱ黒い杖で、三日月みたいなフレームの中に青黒い宝石が収まっている。

「ん~、でもさ、ガジェットって結構大したことないかもね」

「で、でも……油断は、しかば、駄目。『フンリル』……お願ひ」

『Hue Da bang』

そしていくつもの氷の短剣を作り出し、私以上にガジヒットを躊躇していく。私よりも余裕そうじやん！

「ウルカヌス！」

『Storm Blane』

「いけええええええええ！」

再び刃に炎を纏わせた私は、それを一気に振りぬいた。瞬間、爆風が私の周囲に吹き荒れ、私たちを囮つていたガジヒットたちが一気に吹っ飛ぶ。

「ふふん まだまだ負けないよー」

「…………（イラ）…………」

『Eternal Coffin』

するとお返しとばかりに残りのガジヒットが地面から凍りつき、次々と砕け散つていった。ってちょ！私も凍るー！

「へえ、やるじやん！だったら何機倒したか勝負だよー」

「…………（上等だし、吠え面かかせてやんよー）」

……何か今、すつしに」と言われた気がするんだけど。

しかしその時、

「ふふふ、盛り上がりにいろいろ悪いけど、ここで終わりさ」

あの気持ち悪い人が現れた。うげ。

side out

「……水を刺されましたね~」

せっかくトレーニングの一撃を捌ききってカウンターをお見舞いしたのに……。非常に止めを刺しにくくなってしましました。その隙に彼女は厨二の下へと飛び退き、彼を守るように立ち塞がりました。隣にはクアットロが控えています。

「ナンバーズの皆を戦わせているのに僕が戦わないというのも主人公らしくないからね。ここからは僕がお相手しよう。もっとも、何秒もつかは知らないけどね」

それってあなたが何秒で死ぬかってことですか？

「今まで、僕は一度も本気を出したことがない」

ええ～？本気出す前に瞬殺されていたってことじゃないんですか～？

「それは勿論、君と初めて戦つた時もそうだ」

戦うつていうか翻られていただけですよね、あなた。

「これから、僕の全力をお見せしよう！これが管理局の技術の結晶、超最新型のデバイスだ！『ゼウス』セエエエット、アアアアア

「隙あり～！ナナ！構わずに殺りなさい～！アレを使うんです～！」

Γ (ΔΙΚΑΙΟ)

Ice Dagger

私が叫ぶや否や、ナナは一瞬でアイスダガーを十本近く作り出すと、そのまま厨二に向かつて撃ち出しました。

「『やせんかああああああああああ』」

するとトーレとチンクが超反応を示し、ダガーを打ち落としに、あるいは撃ち落としにかかりました。

トーレはインパルスブレードで半数以上を叩き落し、残りはチンクがダガーで撃ち落とします。しかし、幸運なことにアイスダガーは一本だけ攻撃をすり抜け、厨二の顔面に向かつて飛来します。

ベルツのメンバーの数名の叫びが施設に木靈します。厨一はポカンとしていて避ける素振りを見せません。勝ちましたね、これは。

「ジーグ様！」

咄嗟にクアットロが身を挺して厨一を庇おうとしますが一歩足らず、ダガーは厨一に当たる

と云ふことはない。

「「「「「は、外れたあああああああ！」？」

そう、顔面ストレスを飛び去り、頬に傷を作るだけに終わりました。

「は、ははは！驚かせてくれるじゃないか！でも、運が悪かつたね！やはり運命は僕の味方だったんだ！」

「ジーク様!」「ご無事で何よりです!」「ああ、頬に傷が…」

今の一瞬で勝ちを確信した厨二とナンバーズから喜びの声が上がり
ます。

しかし。

「ゲエフッ！…………あ？」

厨二は突然胸を押さえ、苦しげに顔を歪めます。そのまま吐血しながら膝を突き、その場に倒れ伏してしまいました。

「…………ジーク様！？」

ナンバーズが厨二に走り寄りますが、

「無駄ですよ～？胴体をぶち抜かれたんですから～」

私の宣言どおり厨二の胸元は貫通し、ドクドクと血が流れ出でます。

「ふふふふふふ、あははははははははは……！
どうですか！訳もわからず死ぬ気分は！ええ！？厨二いいいいい……！」

「あ、がはっ、ああ、な、何が……！？」

「教えるかヴァ～カ！！テメエは何もわからず死ねば良いんですねよ～！」

あはは～！これこそがナナにしかできない唯一オリジナル！不可視の攻撃です！殺傷方法すら相手に悟らせずに殺す、私が教え込んだ必殺魔法の内の一つなのです！ちなみに私もできますが、かなり難易度の高い技なので使いません。

「あ、ああああああああああ～！僕の！僕のハーレムがッ～！美少女がッ～！願いがあああああああ～！」

「あはははは！ ヴァ～カヴァ～カ！ お前みたいなキモい厨二病患者なんかニコポがなければ誰も寄つてなんてきませんよ～。その面白い形をした顔と厨二丸出しのお田めがあればモテるとでも思いましたああああああ？ ヴァ～カ、キモいだけだつづ～の…」

「ぐつ、あああああ、どうして、どうして…」

「お前がノコノコと出てきてくれたおかげで殺しに行く手間が省けましたあああああ、どうも、ありがとうございます～、ヴァ～カ！」

「ああ、ハーレム、ハーレム、が……」

そして厨二はパタリと動かなくなりました。

「ジーク様、そんな……！」 「ジーク様、目を開けてください～！」
「ジーク様ああああああ～！」

そして泣き崩れるナンバーズたち。あはは、ドクターが死ぬのよりも悲しんでるんじゃないですか？ 幸せ者ですね、厨二は。死ぬまでハーレムとか言つてましたけど。

「さあ、これでナンバーズは晴れて私の傘下になる訳ですね～」

「疲れたわあ、たかが厨二病の分際で梃子擂らせやがつて」

「同感、厨二は浴室でアニメでも観ていれば良い」

「まったくね、社会不適合者はすつこんでなさいよ」

「あはは、永遠に黒歴史ノートでも書いてれば良いんだよ」

「はあ、」それだから厨一病はＫＹとか言わせて教室でまつちになるんですよ」

「で、でも厨一病患者は『ふつ、俺は孤独な一匹狼さ……』とか言つて調子に乗るの、では?すみません」

「そうそう、それで便所飯とかしてる人でしょ？」

「.....(そのまま水でも掛けられれば良いのに)」

そして、各自が厨二をボロクソに言つた時、それは聞こえてきまし
た。

『マスターの生命活動の停止を確認。蘇生の様子はなし。よつて、これよりマスターの体内に残る魔力を使用、エンドモードに入り、このデバイスは自爆します』

この場の全員の言葉でした？自爆？え、なにそれ恐い。つていうか、厨二の魔力つて確かSSSDだつたような……。え、丸々残つてませんか！？

「……ツ、クアットロ、ディエチ・ジッとしていろー。」

「チソク姉！」

「やばつ！？ルル、ナナ！掘まつてください～！」

「キャロ、動くんじやねえぞ！」

「最大防御、『聖王の鎧』全開」

「逃げるから後はよろしくお願ひするわ！～！」

「だ、誰か助けてえええええええ～！～！」

『カウントゼロ、自爆します』

その日、ミッドチルダ郊外で質量兵器もかくやという大爆発が起こり、翌日の朝刊の一面を独占することになりました。犯人は不明と報じられていましたが、まあ、あの様子だと骨ぞろいか細胞の一片すら残っていないでしょうねえ。

お前はそれでも悪の組織か！－（後書き）

厨一が死んで良かったと思つた人は感想の良かつた点にござりまあまああああああああああ！－と書き込んでやつてください。

悪事、千里の外のか世界を駆けめぐらします

「えへ、コホン。ではこれより、厨二死亡」記念パーティーを開催します。歯せりん、カンパ～イ！！」

『カンパ～イ！』

はへ、やつぱり良いことをした後の食事は最高ですね！

あ、歯せりんには。ルナ＝ベルツです。
あれから数日後、クラナガン某所のアジトにて、私たちは記念パーティを開いていました。

本当はすぐにでもやりたかったのですが、合流するのに手間取ってしまいまして。

「いやへ、彼は本当に死んでくれて良かつたです。世界の害悪が具現化したような存在でしたからね～」

「厨二は頭の中だけにしてほしにもんだぜ」

まったくです。ライア、偶には良いこと言こますね。

「それにしても、最後のあの自爆は何だったのかしらね？管理局があんなの作るとは思えないし、厨二にそんな技術があるよひにも見えなかつたし……」

「んへ、案外キュウべえさんが仕掛けたんじゃないですか？なんか、裏でコソコソしていたみたいですし」

確かに、それはありますね。となると、キュウベえはここ一年でそのような技術を身につけたことになります。転生前にこの世界に住んでいたのならば話は別ですが。

「ま、まあまあ、今はそれは良いじゃないですか。ほら、テレビでも観て気分転換しましようよ」

アウトフレームを開いたリリスがリモコンを操作し、テレビの電源を入れました。はあ、局とかだとこれが空間モニターだったりするんですから便利ですよね。未来未来します。

「ん、あーお兄ちゃん見て見てーーー」の前の変態がニュースに出てるよーさっすが有名人！」

むむむ、本當です。行方不明扱いになっていますね。なるほど、どうやら「厨」はスカリエットエイと裏で通じていたことを誰にも話していなかつたのでしょうか。話していたならば負け犬辺りが誤魔化しているでしょうし。

「……もう、事件は、迷宮入り」

ですね。死体は木つ端微塵、行き先は不明、目撃者はなし、見つかる要素がありません。

「さあさ、あんな人類の汚点の顔写真なんて見たくなりません。ちやつちやとチャンネルを変えてし

その時です。画面に突然ノイズが走り、ニュースが途切れました。そしてしばらくノイズ塗れの画が続いた後、そこには見慣れた白いぬいぐるみが……。

『やあ、突然だけど、放送はボクがジャックさせてもらつたよ。このテレビ局だけじゃない、全ての番組は今、この映像が流れているよ』

「ふはっ！」

思わず飲んでいたジュースを噴き出します。

『初めまして、ボクの名前はキュウベえ。顔は見せられないからこの姿で失礼するよ』

『きゅ、キュウベえ！？あなた何してんですか！？まさかのテレビビュー！？』

『さてと、ボクが今日、みんなのお茶の間を占拠したのは、あることを報せるためなんだ』

『…………おい、ルナ。これってマズイんじゃないか？』

『…………ですね。どうしましょ～～』

『さつき放送していたジークフリート＝ジョ＝神凪くん。行方不明になってしまった彼はボクの友達であり、同時に英雄だった。闇の書事件を解決し、管理局に新たな風を吹かせた偉大な人物だとボクは思っている』

「新たな風～？ハリケーンか台風の間違いだつて～！」

『そんな彼がいなくなつた。そして、ボクはその真相を知つてゐる』

「ルナ、これはヤバイわ」

『彼は殺されたんだ。あの、稀代の大犯罪者によつて』

「……おこおじおこおこおこおこおこ……」

『誰かつて？君たちも知つてゐるはずだよ。かつて、闇の書を悪用し、クラナガンを恐怖に陥れた、あの少年を』

「いやつて聞くと大物みたいに聞こえる」

「……それつてどういふ意味ですか～？」

『もつわかつただらう？・さう、ルナ＝ベルツだよ』

『言つちやつたああああああああああ！～！』

ちょーせつかく秘密裏に済んだことなのに！なに抉つてくれてんですか！

『彼は死んだといつのは誤りだつたのさ。証拠もある。数日前、彼が死の直前に送つてきたと思われる映像があるんだ。それを今から見せるよ』

そして映像が切り替わり、どこかで見たような設備などが映し出されます。間違いありません、数日前のスカリエツティの違法研究所です。

『ふふふふふふ、あははははははははは…！

どうですか！訳もわからず死ぬ気分は！ええ！？厨一いいいいい！…』

『あ、がはつ、ああ、な、何が……！？』

『教えるかヴァ～カ！！テメエは何もわからず死ねば良いんですよ～！』

『あ、ああああああああああ～！僕の！僕の ザーザー がツ～！ ザーザー がツ～！願いがああああああ～！…』

『あはははは～！ヴァ～カヴァ～カ！お前みたいなキモい厨二病患者なんか ザーザー がなければ誰も寄つてなんてきませんよ～。その面白い形をした顔と厨一丸出しのお目めがあればモテるとでも思いましたあああああ～！ヴァ～カ、キモいだけだつ～の～』

『ぐつ、あああああ、どうして、どうして……』

『お前がノコノコと出てくれたおかげで殺しに行く手間が省けましたあああああ、どうもお、ありがとお～ござりますうう、ヴァ～力！』

『ああ、 ザーザーザーザー ザー ザー が……』

うおおおおおおおおおおおおいー！

キュウベえの奴、大事なところをノイズで消し去ってくれやがりました！これじゃあ厨二が良い奴みたい、っていうか、私が厨二に嫉妬しているみたいじゃないですか！

『今の映像を見てわかるとおり、ルナ＝ベルツは生きていた。そして、ジークは彼に殺されたんだ』

ちょー全部事実ですけど絶対に世間様では誤解されますって！

『ボクは絶対にルナ＝ベルツを許さない。今日、ボクが顔を出せない理由は彼らに殺されるのを防ぐためだよ。これからもボクは彼らを追い続ける。管理局員だけじゃない。彼を許せないと思つ同志は立ち上がってくれ。ボクに、力を貸してほしい』

「J、Jの野郎！こりんことをペラペラとー！」

『彼はきっとこれからも人を殺し続ける。これはジークくんの弔い合戦だけじゃない！この次元世界の平和を守る戦いでもあるんだ！』

「Jのぬいぐるみが！ぶつ殺してやりますー！腸抉り出して！脳を引き扯り出して！それからそれからあああああーーー！」

「お兄ちゃん落ち着いてー！」

「J、これは、テレビ……だから……ー！」

「ルナ、気持ちはわかるけど落ち着きなさいー！」

ルルとナナとイデアが私を押さえつけますが、こればっかりは許せません。

アイツ、私の名前を使つて管理局を、世界を味方に付けやがりました！悪名高い私の名前はそりやあネームバリュー抜群でしょう！

『ボクはここに、ルナ＝ベルツの逮捕、及び彼の捜査を管理局に嘆願する！』

「 る、ルナさん！発信元がわかりました、すみません！」

「リリス超ナイスです～！で、どこですか～！？」

「そ、それが、管理局の通信管理センターです、すみません」

「……はあ！？」

あそこはマイナーな部署とは言え、列記とした管理局の施設ですよ！？それが占拠された！？

「おいおい、一人で乗つ取つたつてのかよキュウべえの奴」

「ねむるわね」

「い、いえ、どうやら内部に何か仕掛けられたみたいです。制御が一時的に奪われています、すみません」

ちつ、本人はいやがりませんか。でも、

「こまま余計なことを話されるのも面倒です。アルテミス！」

『Set up・Bow form』

ここから施設を狙撃、破壊します！もつ私が生きているのはバレてしまつたのですし、多少の強硬手段は止む無しです！

狙撃のためにベランダに出ると、近くのショッピングモールの大画面でも流れています。うわー、もう外を出歩けないんじゃないですか、私。

「魔力圧縮、超長距離狙撃です～！」

『Yes , my master』

「リリス、施設の座標を出してください～！」

「は、はい～！」

私はアルテミスの弦を引き絞り、リリスが座標をアルテミスに転送します。

『彼のような犯罪者が、罪を償つ』ともなく世界を闊歩しても良いのだろうか？否、断じて否～。』

「黙りやがりなさい～！」

『Silent Owl』

そして発射。

『ボクは今も喉元を搔つ切つてやりたいほど彼を恨んでる。でも、ボクは彼が罪を認めて、贖罪をして、更正して』

そこで映像は途切れました。一瞬でノイズ塗れの画になり、そのまま復興の兆はありません。

「はっ、ザマ～！好き勝手喋つてくれやがりましたね～。あかげでこっちの風評はボロボロですよ～」

思つてもいなことを全世界に振りまいてくれましたね。お前にとつて厨一はちよづき良い捨て駒でしきつたぶん、あの自爆システムもキュウベえのものです。こんな都合良く映像が手に入るなんて、何か細工をしていたとしか思えません。

「で、どうすんだ？今の狙撃でこっちの居所はバレたぜ？」

「せっかくキュウベえも振り切つっていたのに

「はあ、もう最悪ね」

「えへーまたお引越ししなの～？」

「引越しの最短記録ですね」

「え、えと、荷造りしてきますね、すみません」

「これじゃあ前と変わんない～」

「…………（もうテントでも張つた方がいいんじゃないかな）」

「うう、申し訳ありません」

今回は完全に私のミスです。キュウベえが厨一の死まで予期しているのは想定外でした。まさか記録が残っているとは……。

とはいって、収穫もありました。

今回のテレビジャック、これは内部犯の可能性が高いです。なぜなら、細工が上手くいきすぎているからです。侵入、そして細工してから脱出なんて芸当、ウチのアリシアでもないと不可能でしょう。

つまり、キュウベえは管理局内部にいる人物です。

「クッククック、少しですが、テメエに近づきましたよ、キュウベえ？」

さてと、考察が終わつたところでそろそろ引っ越さないと。キュウベえに捕捉されてしまします。一いつ瞬に数匹の個体が向かってきていますからね。

「さてと、もつ//シードにはいられませんね~」

『人の目が多くると思われます。管理局外世界への移動を推奨します』

「そうですね~。でも、管理局外は情報を入手しにくいんですよ~」

嫌だな~、と思いつつ、それでも選択肢は少ないので、それ以外はありません。

「はあ～、次にミッションに来るのは来年ですね～」

戦闘機人事件、それまではミッションともおせいばです。

「それでは皆さん御機嫌よ～」

悪事、千里^{ミリ}の世界を駆けめぐらす（後書き）

「」の放送を見た時の男性回員の反応

「あ、そんな！？ルナ＝ベルツが生きていたなんて……！」

「悪夢の再来だあ！」

「でもよ……」

「ああ」

「　　「　ジーグの肩を殺したのはナイス！」　」

「ふはははっ！」「つて、おま、最高~~~~」

「良いぞ、もひとつやれ~~~~」

「ルナ＝ベルツ、アンタ男だよ……！」

意外と好評なのでした……。

返事がない、ただの屍のようだ（前書き）

今回はルナたちは出ません。負け犬が主な登場人物になります。

返事がない、ただの屍のよつだ

side other

『転生者』

それは人間としてこの世界に生まれ落ちる存在もあれば、異世界よりの渡航者、通称『トリッパー』として現れることも、特殊なパターングで現れることがある。そして今日、ここに新たな転生者が発生した。

「んん~！」『あの有名な『魔法少女リリカルなのは』の世界か。確か、ミッドチルダのビニがなんだよね、じいじって』

現れたのは少女。ルールの中では最年長、つまり主人公たちと同じ年齢である。瞳は周囲を興味深げに見回しており、とても愛嬌がある。彼女が周囲を見回す度にボニー・テールの髪がピョコピョコ揺れた。

「さてと、これからどうしようかな。もう無印もA-sも終わっちゃってるっていうし」

『それはマスターにとつて関係ないのでは？』

少女の眩きに答える声があった。彼女の腕にあるブレスレットが電子音を奏でたのだ。

「ま、それもそっか。私の目的は原作ブレイクでもキャラ狙いでもないし」

『それならば、とりあえず首都のクラナガンを手に持るのは如何でしょうか？あそこならば多少なりとも情報を集められると思いますが』

「情報か～。でも、私って伝とかもないからな～」

ま、良いや、と彼女は呟く。実際、彼女にとってはどうでも良いことだった。物が必要ならば奪えれば良いし、情報が必要ならば吐かせれば良い。それだけの『力』が彼女にはあった。

「それじゃあ、さっそく行こうか。いつまでもここに居ても意味ないし」

『承知しました。クラナガンへ移動します』

刹那、空間が裂けた。

少女はそれに驚きもせずに歩を進め、その亀裂に足を踏み入れる。そして彼女がその亀裂に完全に入り込む。すると亀裂は自然と閉じ、そこには何も残らなかつた。

時はジークが死ぬ日の数日前。

この世界に発生してから僅か四分、キュウベえが捕捉する間もないほどの短い時間のことだった。

s i d e o u t

s i d e 亮

ジークの葬儀はミッドチルダにて大々的に行われた。管理局の海の局員が多かつたが、同時に地上の局員も多く参加する大掛かりなものだった。

……なぜか大半が女性だったが。

「う、うう、ジークくん……！」

「そんな、嘘だ、ジークが死んだなんてえ……！」

葬儀の場は空気が重々しく、そこいら中からアイツの死を悼む声が聞こえてくる。

……重ね重ね、なぜか大半が女性だったが。

葬儀は海鳴でもう一度行われる。向こうにもアイツと仲が良かつた連中は多かつたからな。アイツが引っ越してきてたつたの一年の間だったが、それでもアイツの人望は厚かつた。

……しつこいかもしれないが、なぜか大半が女性だったが。

「……ジークの奴、俺たちに黙つて逝つちまいやがって」

そう洩らすのは『上条 当麻』だ。いや、本当にこの名前で通している。見た目も能力も一緒だ。

「ああ、アイツは最後まで生き残ると思つてたんだけどな」

それに答えるのが『篠原 修司』。コイツは『黒崎 一護』の見た目で、デバイスも能力もそつくりだ。

「いや、これは戦いだ。誰が死んでもおかしくなかつたさ

そう皮肉げに呟くのは『藤原 彰』だ。コイツのモデルは『奴良リクオ』な、夜の方の。

「まあ、魔力だけで勝つた氣でいた時点で敗色濃厚だったと思つけど」

コイツは『上田 将』。『スタイル=マグヌス』の能力と見た目を持つ転生者だ。

こうして、葬儀は素々と進んでいくのだった。

葬儀が終了し、地球に戻ってきた俺たちはそこで解散となり、俺は一人、帰路についていた。季節は秋、段々と日も短くなつていき、まだ五時だというのにもう辺りは暗くなり始めていた。周囲に入気はなく、それがいつそう寒さを意識させる。

「……ちくしょう、俺は、また、守れなかつた……！」

当麻たちにルナが生きていることは聞いていたのに、それでも仲間を死なせてしまった。新たな仲間が増え、それで何とかなると油断してしまった。アイツらの能力を持つたマテリアルを倒せたのだから大丈夫だと。

しかし、現実は甘くなかった。ルナは集団で個人を襲うという卑怯な戦法で攻めてきた。きっとジークを呼び出したところを袋叩きにしたに違いない。

「あの卑怯者ども……！絶対に許さねえ！」

ルナは許せない。今度こそ決着をつける。そのためには残り数人いる転生者を集め、準備を万端にしないといけない。

そう考えていた時だつた。

「誰が許せないの？」

何かを引きずるような音と共に、少女の声が静まりかえった住宅地に響いた。振り返ると、ちょうど曲がり角から同じ年くらいの少女が現れた。

血まみれで。

死体だつた。人間の子供一人分の血まみれの死体を引きずりながら、少女は何事もないかのように声をかけてきた。

「な、な……ッ……！」

「あれ？ てっきり私のことを言つてるんだと思ったのに。結構手際よく殺したのになんてバレたんだろうって思つてたんだけど。なんだく、人違いか」

そして彼女はその死体をこちらに放り投げた。

街灯に照らされたそれは、見慣れた白髪で長髪の少年と、やはり見

慣れた赤い長髪の少年で……。

「彰ー？ それに将……！？」

「返事がない、ただの屍のようだ。実際に屍だけど」

そう言つて少女はケラケラと笑つた。

「テメエ、なんでこんなことを……！」

「え？ それを聞いたやうの？ たぶん言つてもわからんないと思つよ？ 生まれ変わつても管理局なんかに入っちゃつてるあなたには」

肩を竦めながら少女は笑つた。

「……そつか、テメエ転生者か！」

「アツタリ～！ でも、あなたたちと違つて勝ち負けには拘つてないんだ。私はね、とりあえず面白ければOKなの。それでさ、せつかく凄い能力ちからを手に入れたのに、それを使わないのは勿体無いと思つわけ」

だから、

「だからコイツらを殺したつてのか！？」

「そつ。強い人と戦うのが今の私の目的。原作キャラよりも転生者が強そうだからとりあえず戦つてるんだけど」

「……そんな理由で、彰たちを！」

「良いじゃん別に。転生して能力貰つたのに碌に使いこなせていいんだもん。期待はずれも良いトコだつたし」

本当に呆れたように少女は呟いた。

間違いない、コイツはベルツ寄りの思想の転生者だ。自分の目的のためならば、他人の命など簡単に切り捨てる。いや、そもそも眼中がない。

「……一応言つておぐぜ。今ならまだ自首すれば罪が軽くなる」

「それ、今日でもつい二回目だよ」

「そうかよッ！！カリバーン！」

Standby, ready, setup

何年も行つてきた動作だ。展開は一瞬で終わる。そして展開と同時に零落白夜を刃に纏わせ、俺は駆け出した。

- - - - -

すると少女は何かを小さく呟き、後ろに飛び退いた。

「へつ、威勢の割りには逃げ腰じやねえか……ツ何だ！？」

しかし次の瞬間、俺の足はコンクリートに沈み込んでしまった。さ

つき歩いた時はただのコンクリートだったのに、今の一瞬で水のようになんている。

俺の足はそのまま膝まで道路に沈み込み、そのまま元の固さに戻ってしまった。

「コイツッ、動けねえ！」

「あ～あ、みんな同じだよね。突っ込んできたと思ったら次の瞬間ににはそうなるの。能力なんて使い方しだいでいくらでも強くなるんだよ？」

そう言つて彼女はこすりに指一本で銃の形を作り向けてきた。そしてその指先に魔力が集まり、弾丸のようなものが形成されていく。

「あなたは原作キャラとか他の転生者を釣るための餌にするから、安心して成仏してね」

『Crystalline meltdown』

戦い始めてからたつたの一分で、勝負は完全に決まってしまった。

「それじゃ、さよなら」

side out

返事がない、ただの屍のよつだ（後書き）

「」今までで新しい転生者の能力がわかつたら凄いかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1407w/>

第二の人生はゲームらしいです～

2011年11月23日19時49分発行